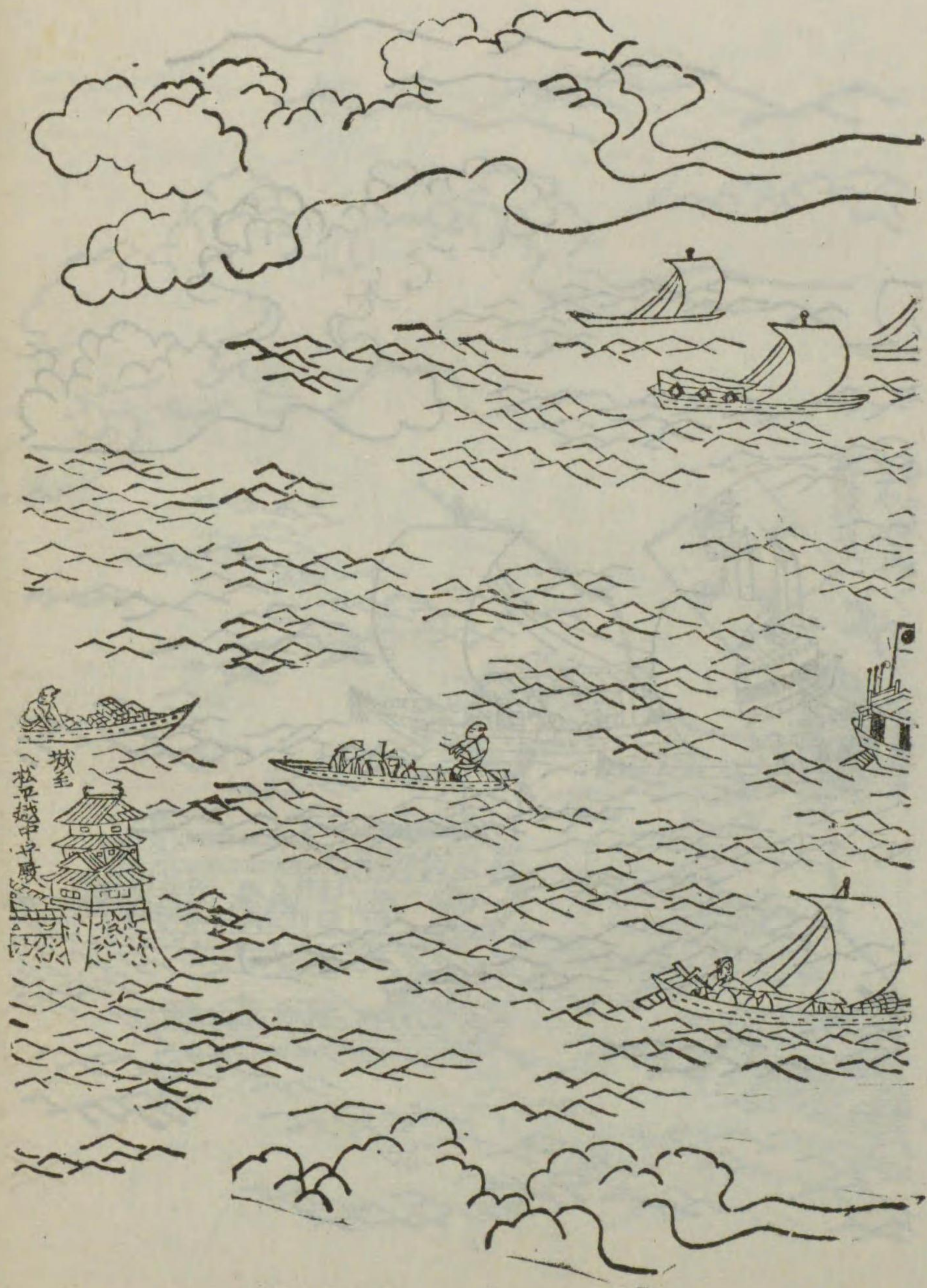
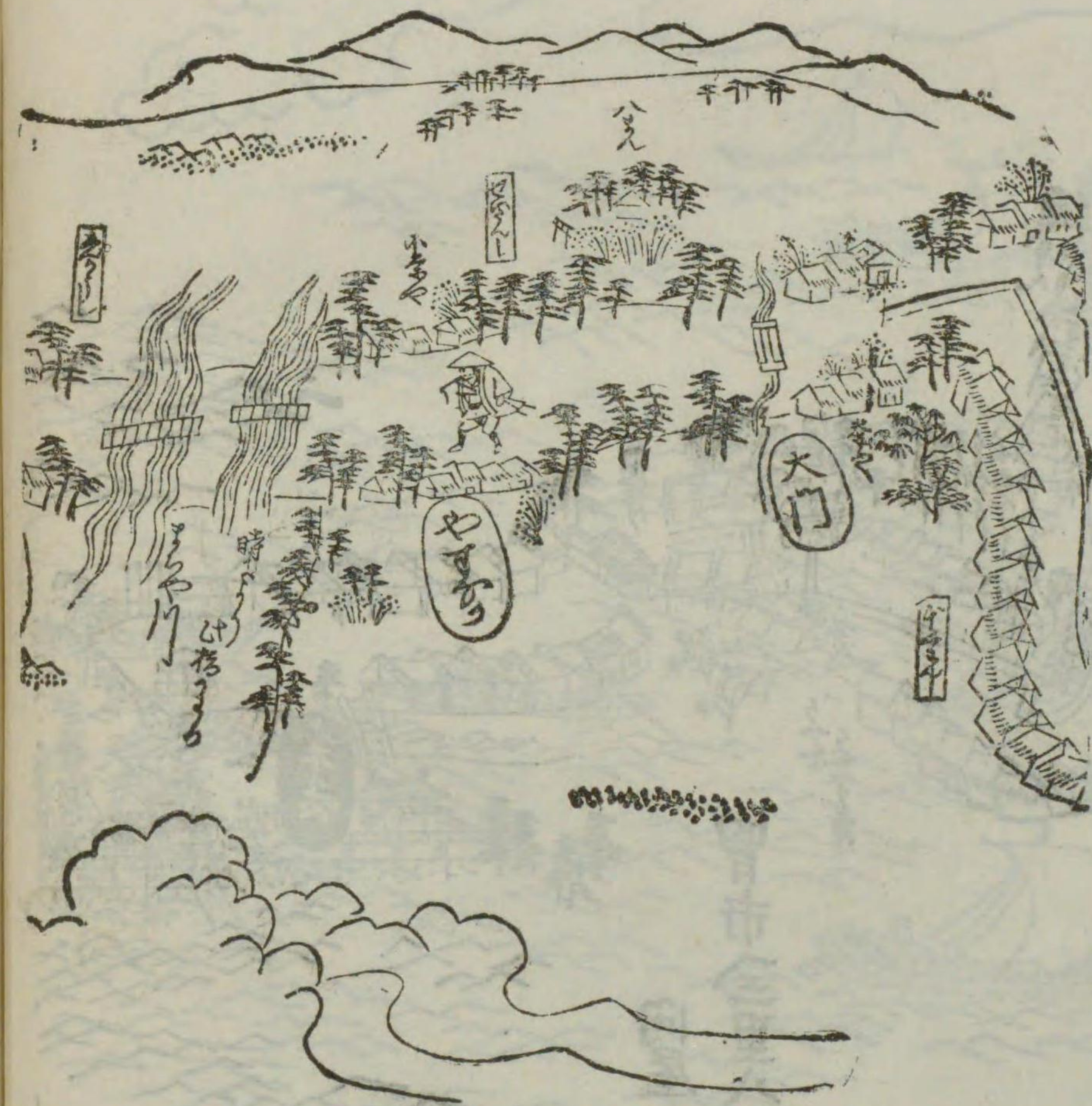
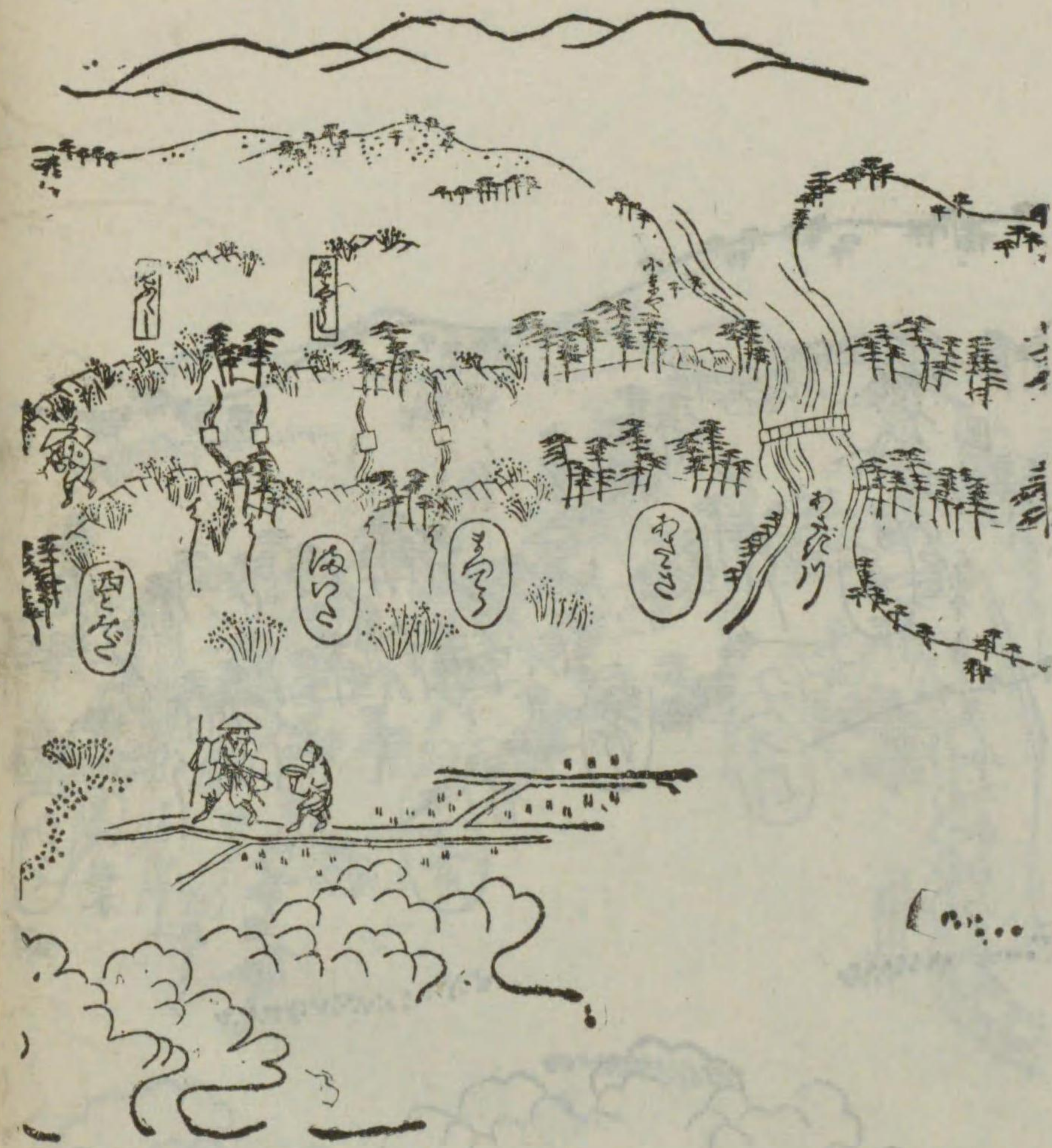


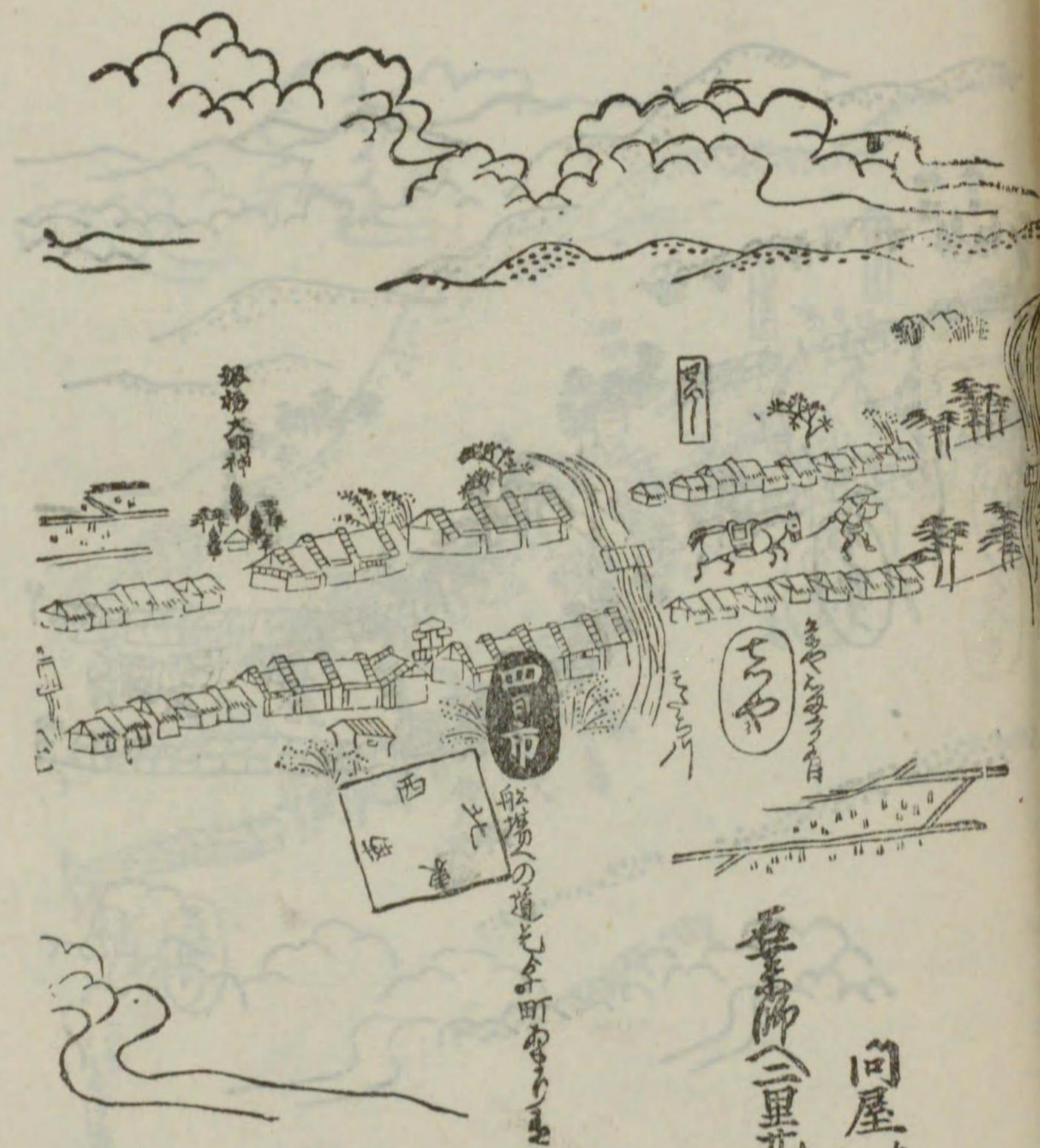
問屋 新三木  
 在平次  
 留市 三里八町



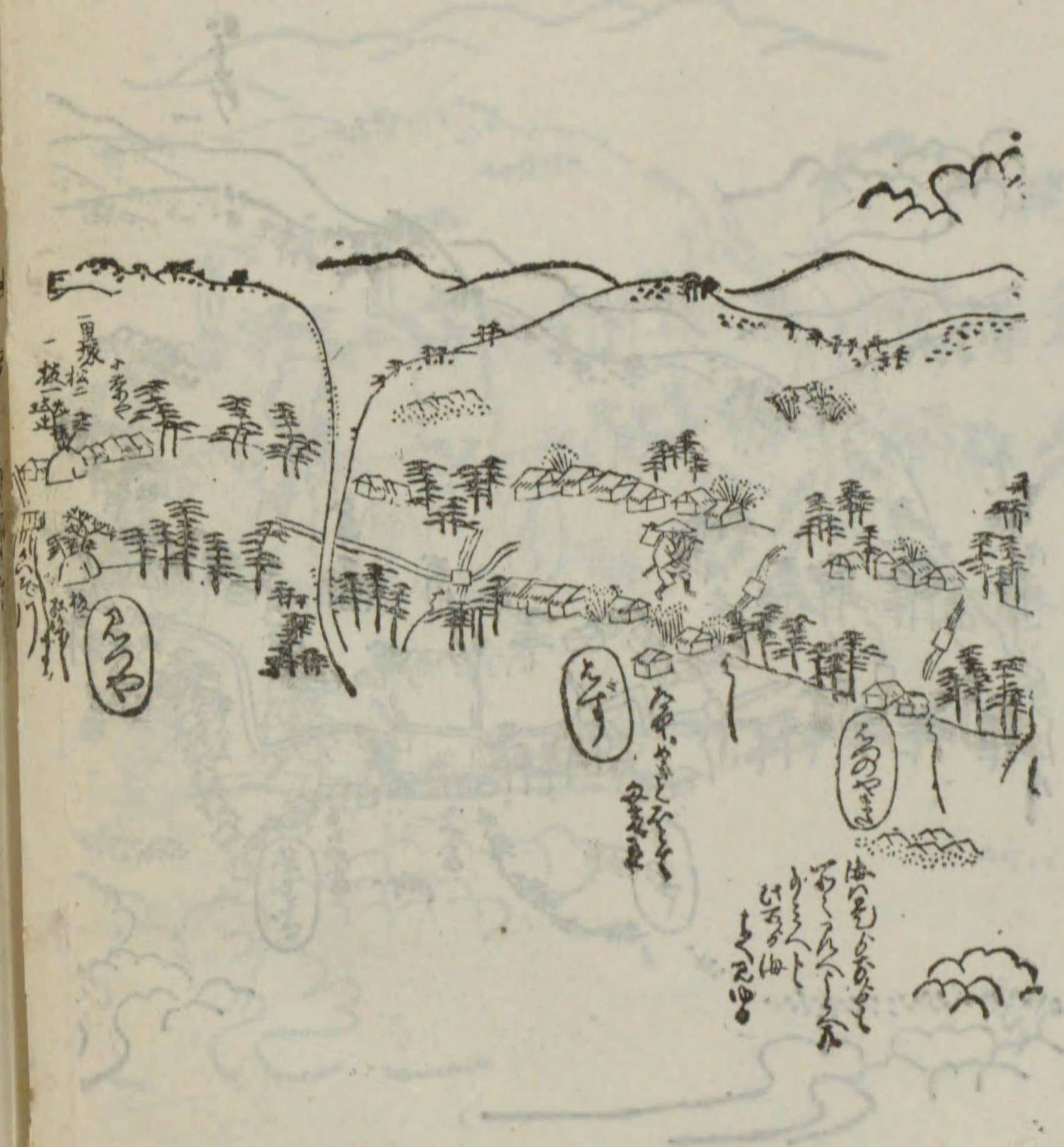
城  
 一  
 新三木  
 在平次

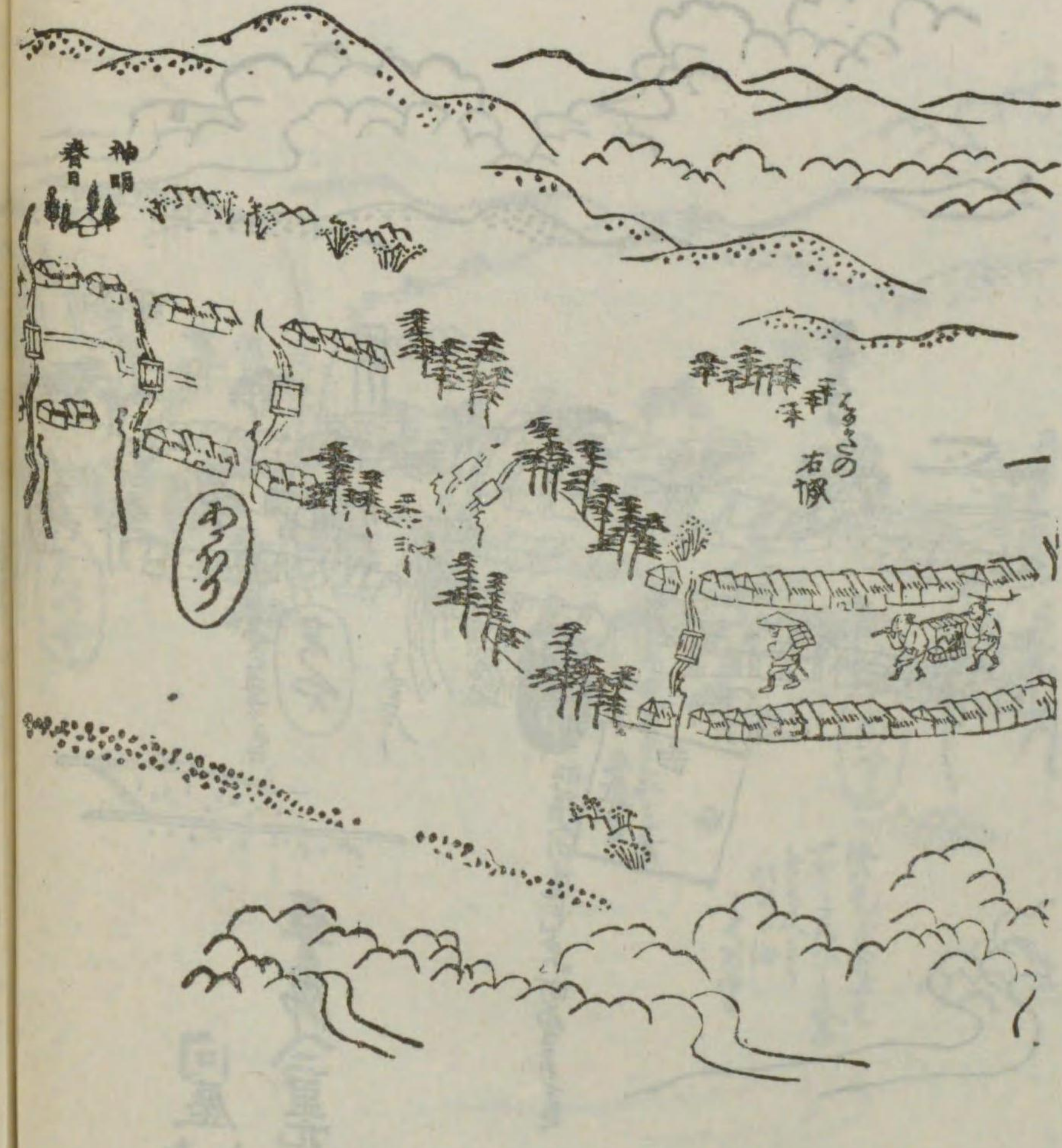
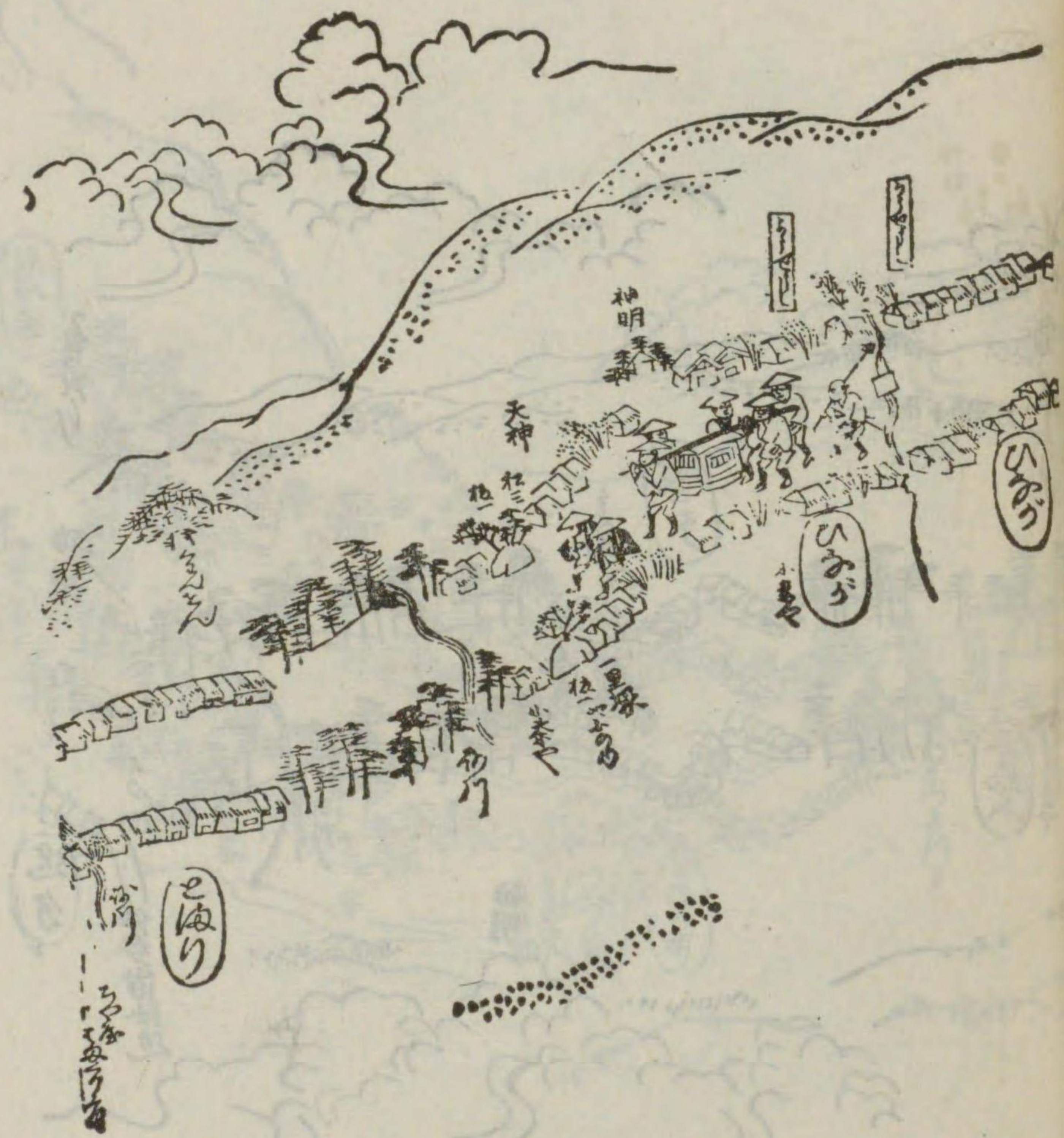


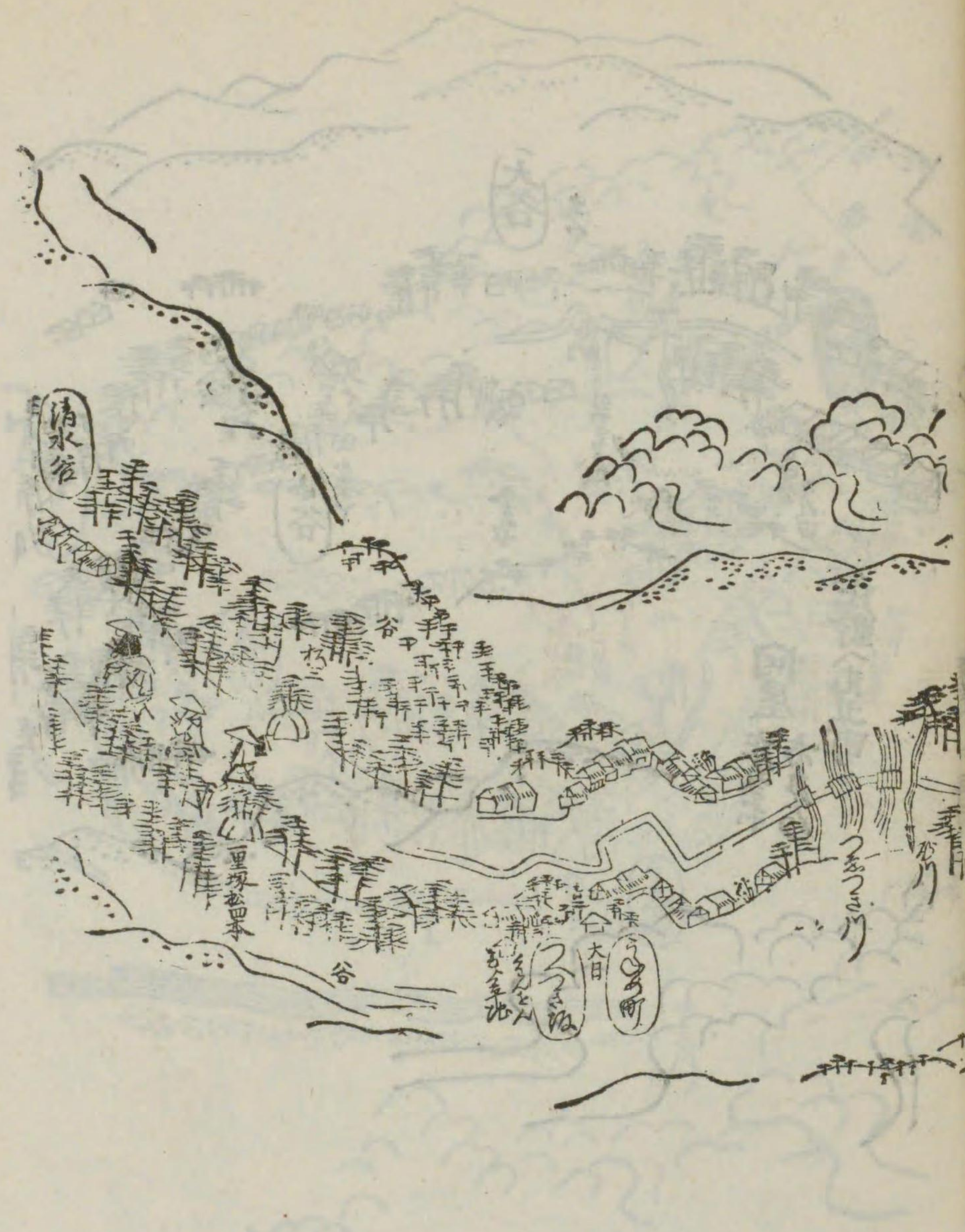




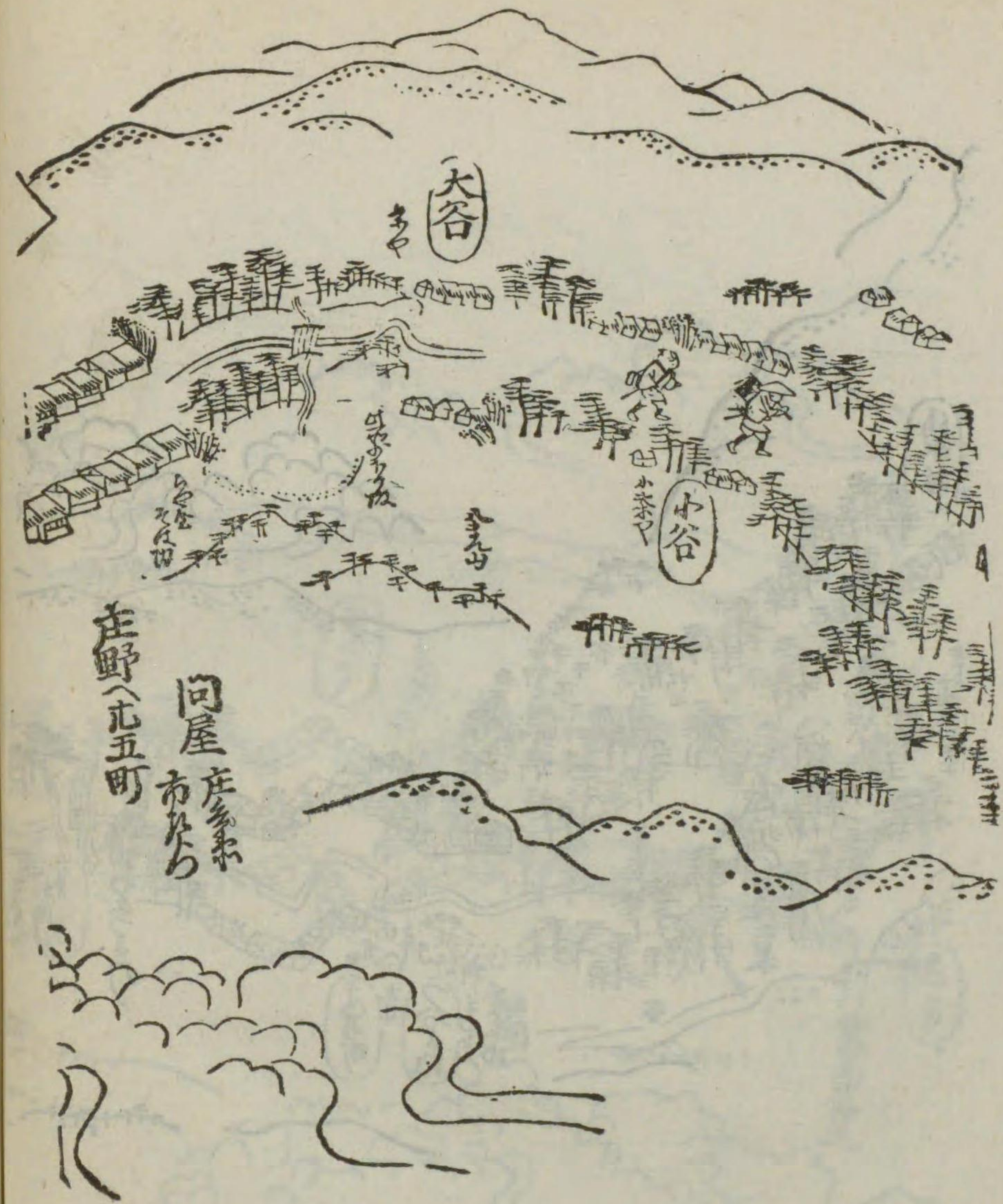
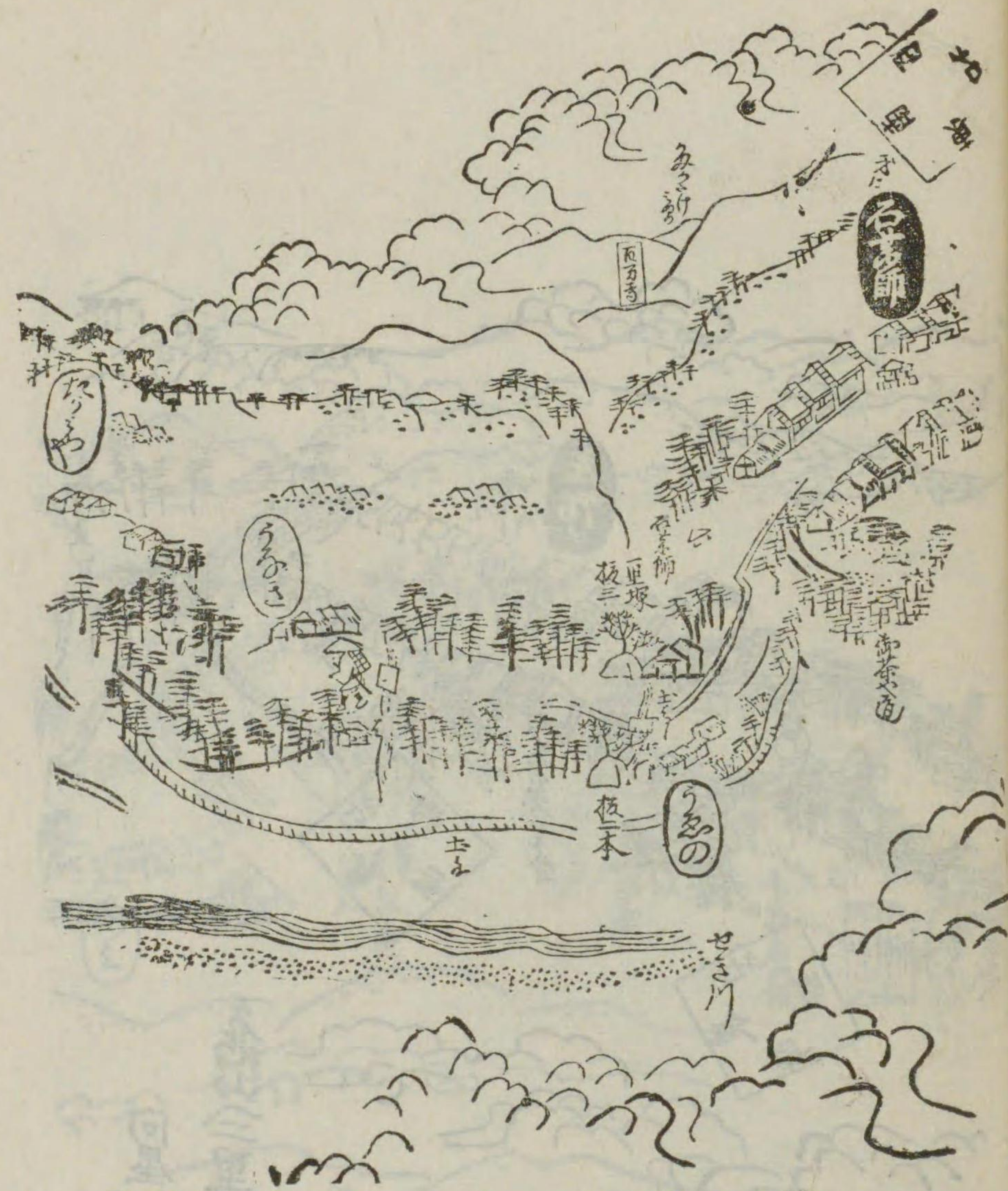
向屋 角丸  
 小石巻  
 三里九五町

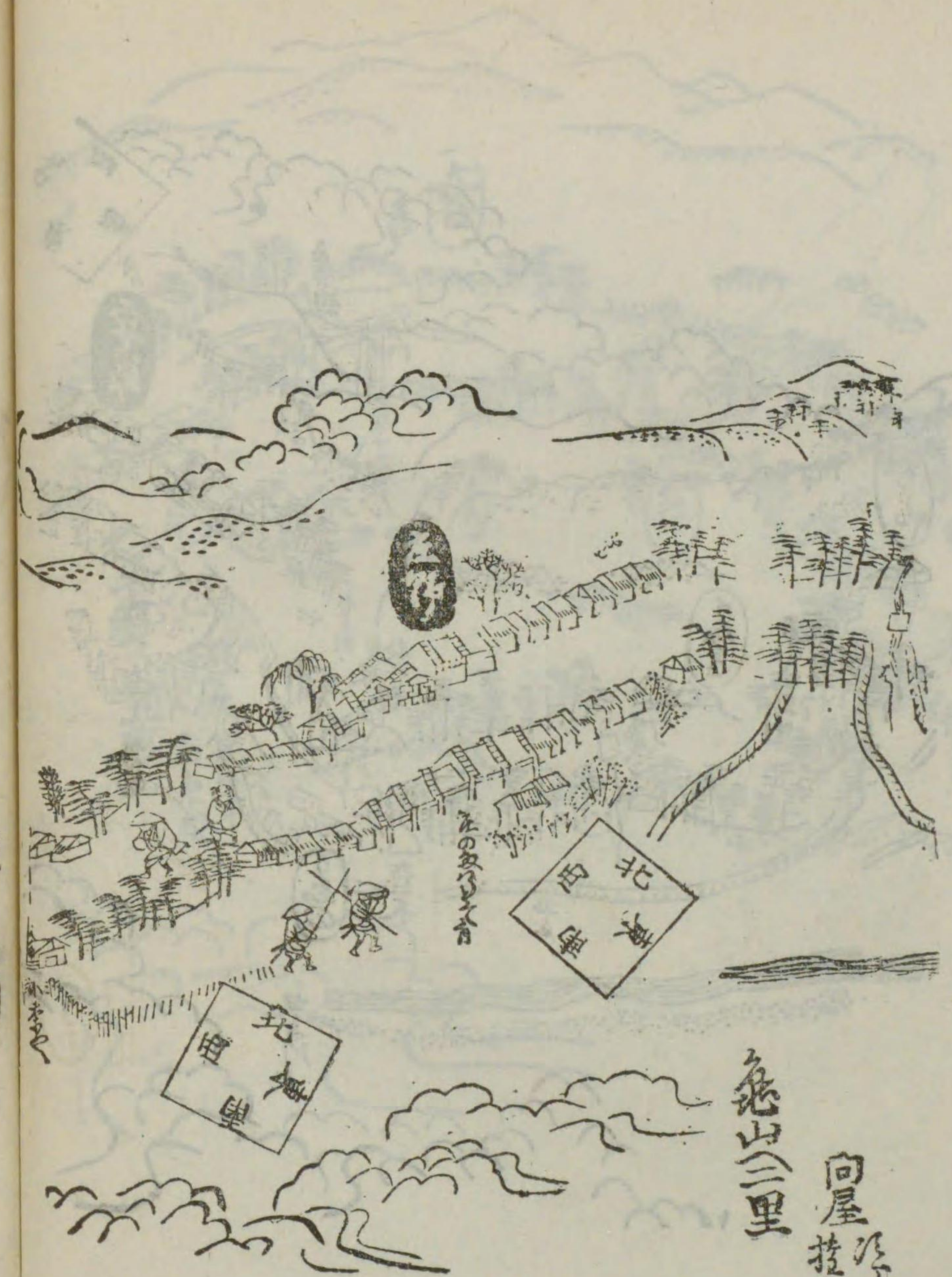
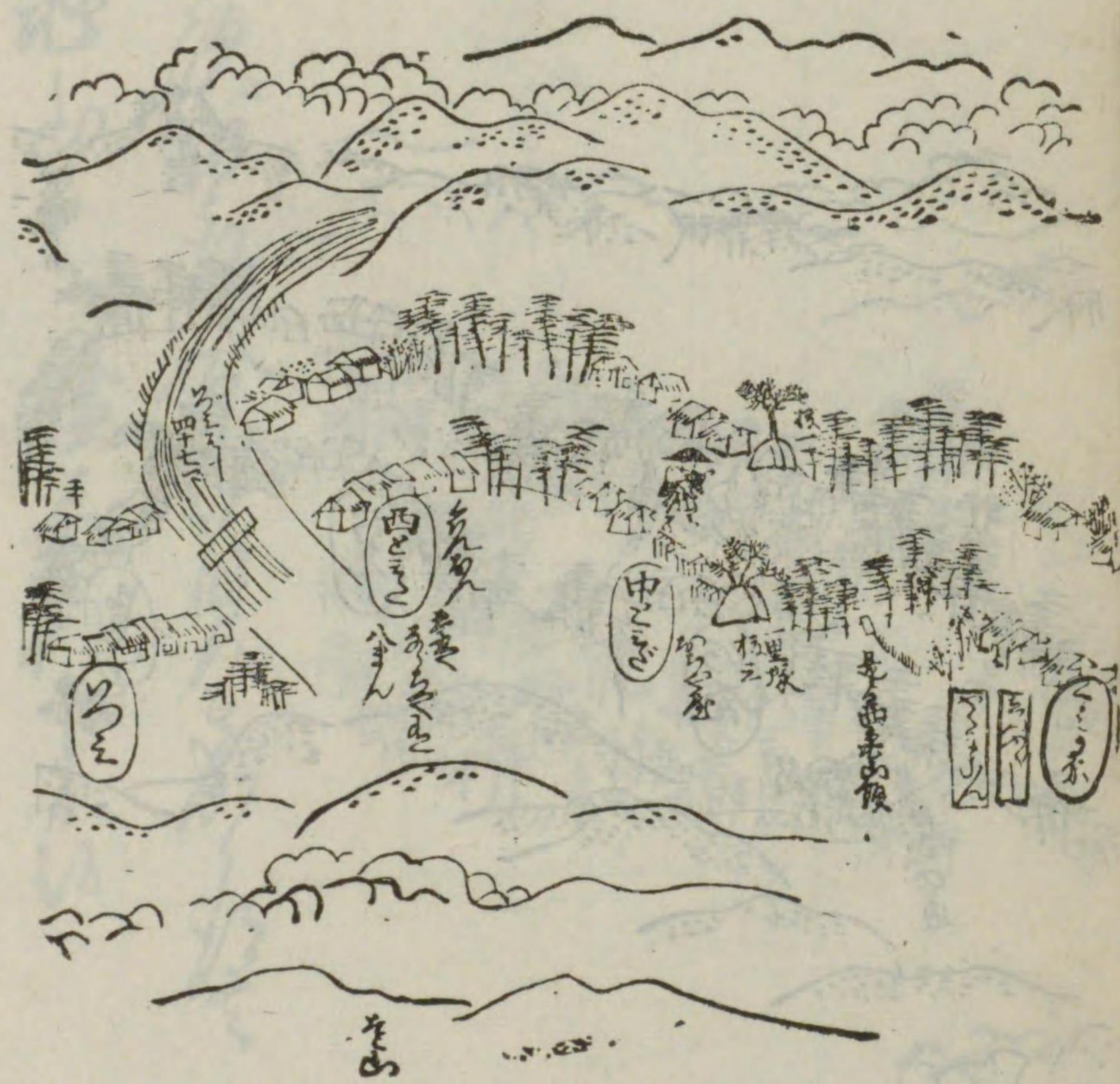








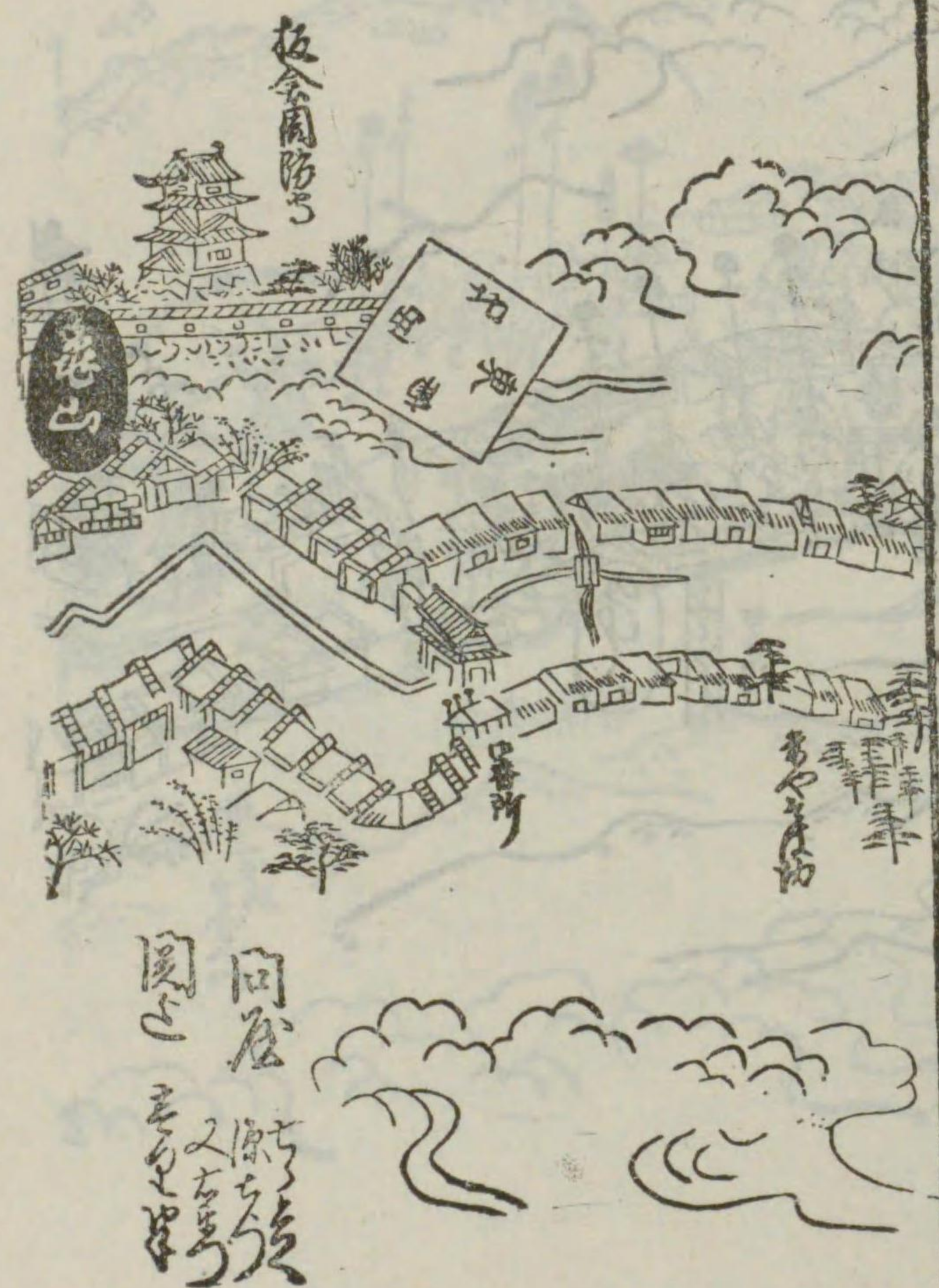




向屋  
挂之文  
龜山三里

急山之嶺ありしは  
 山溪以て今も昔も  
 常なる如し

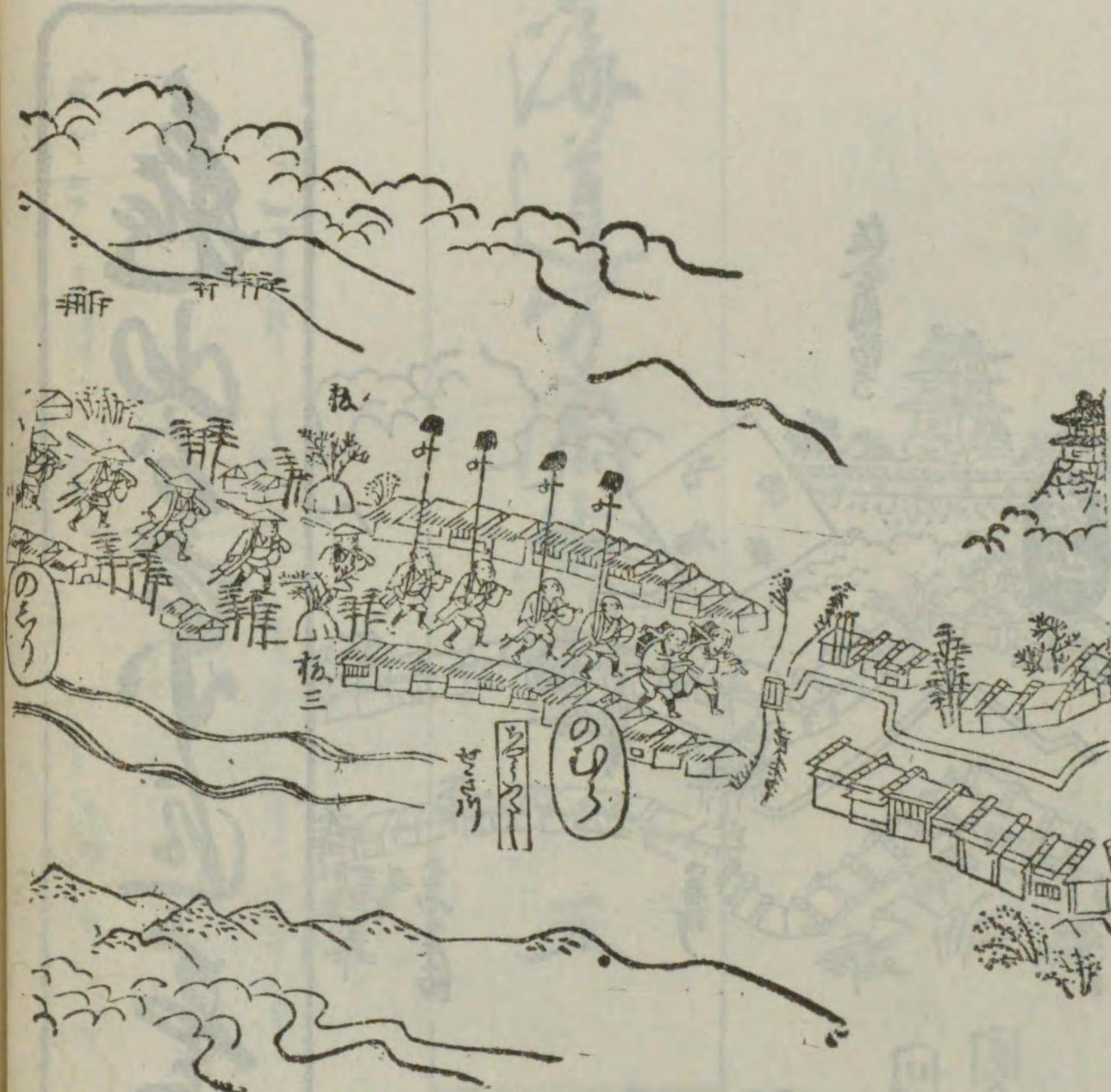


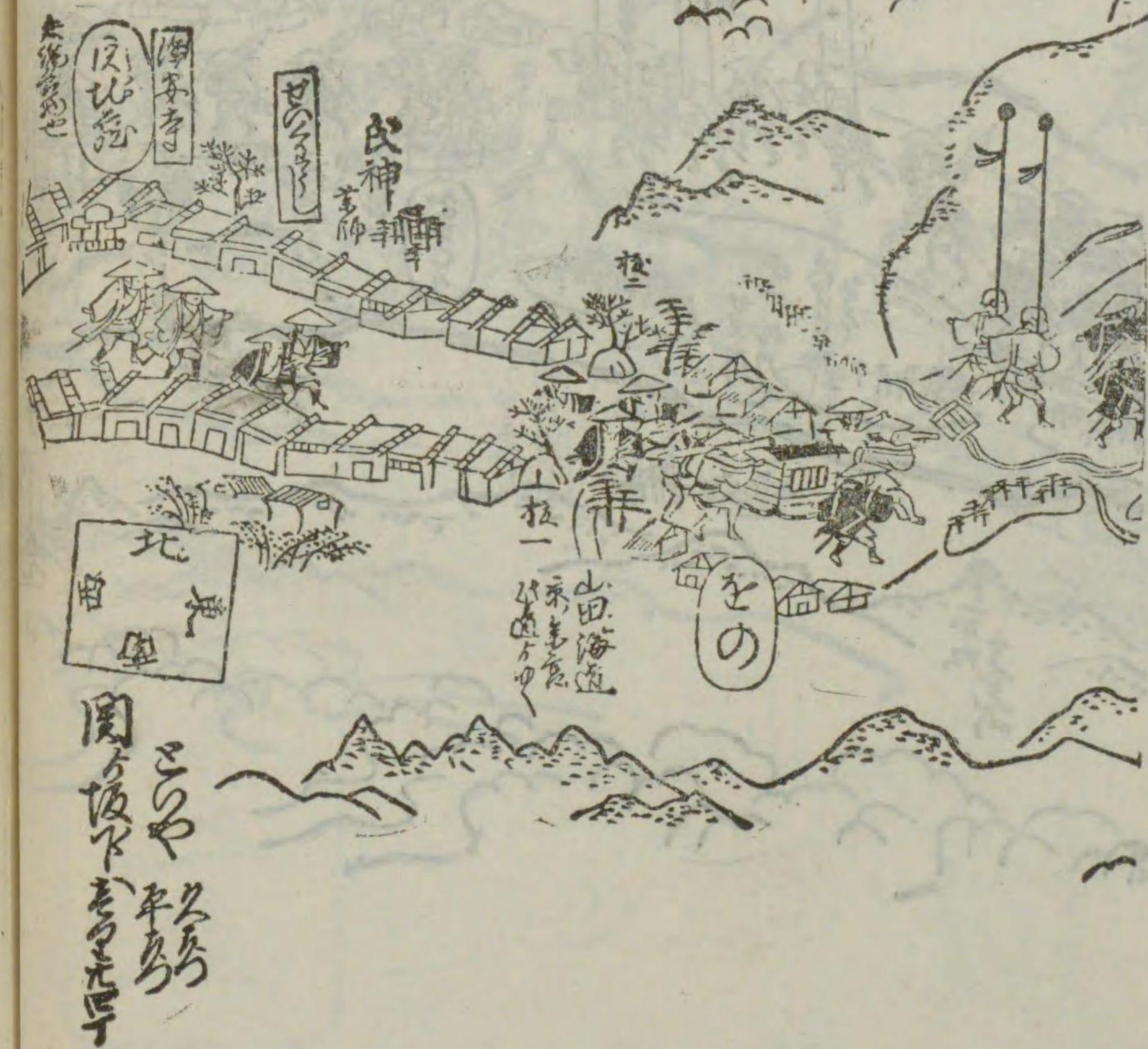
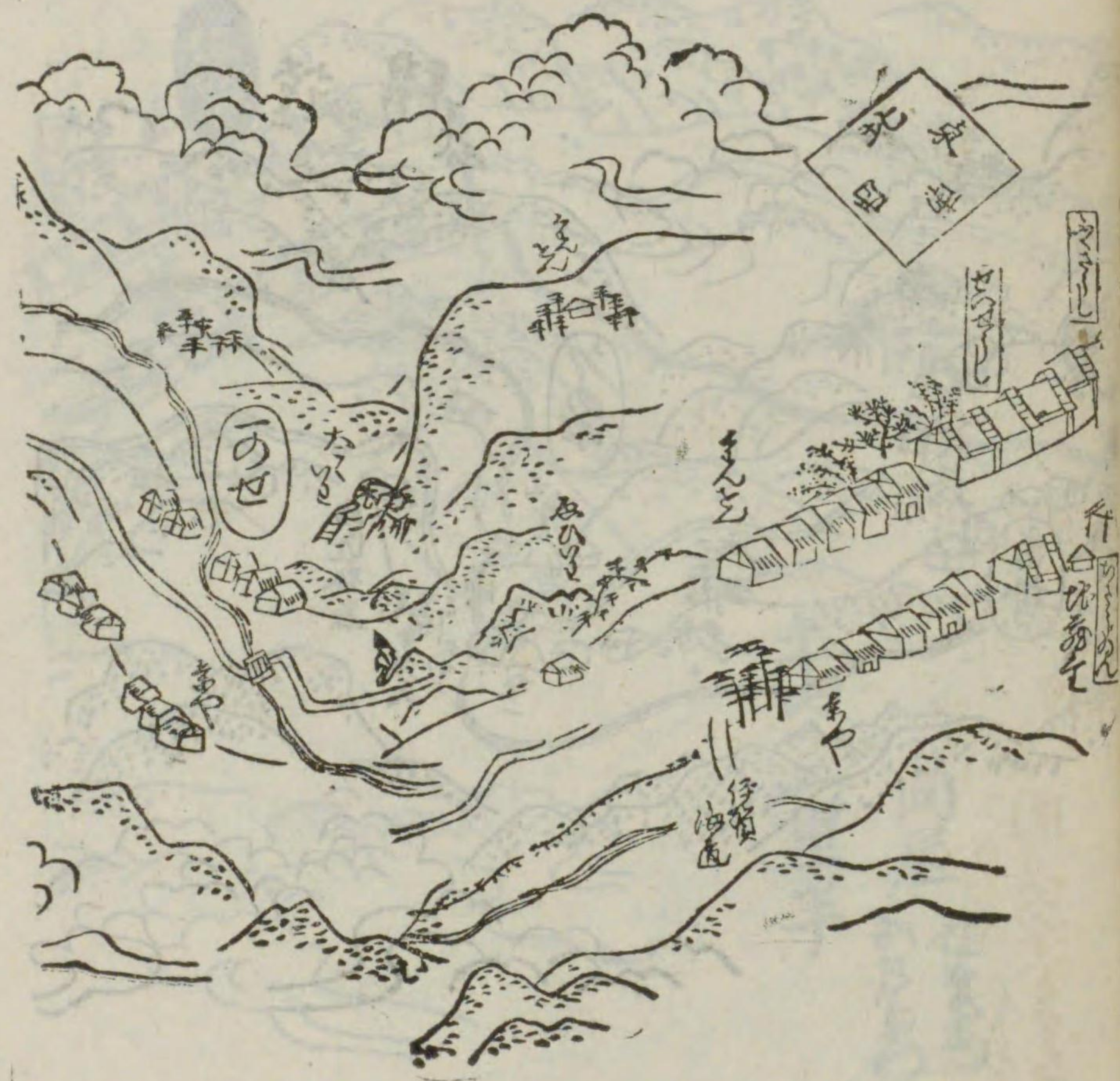


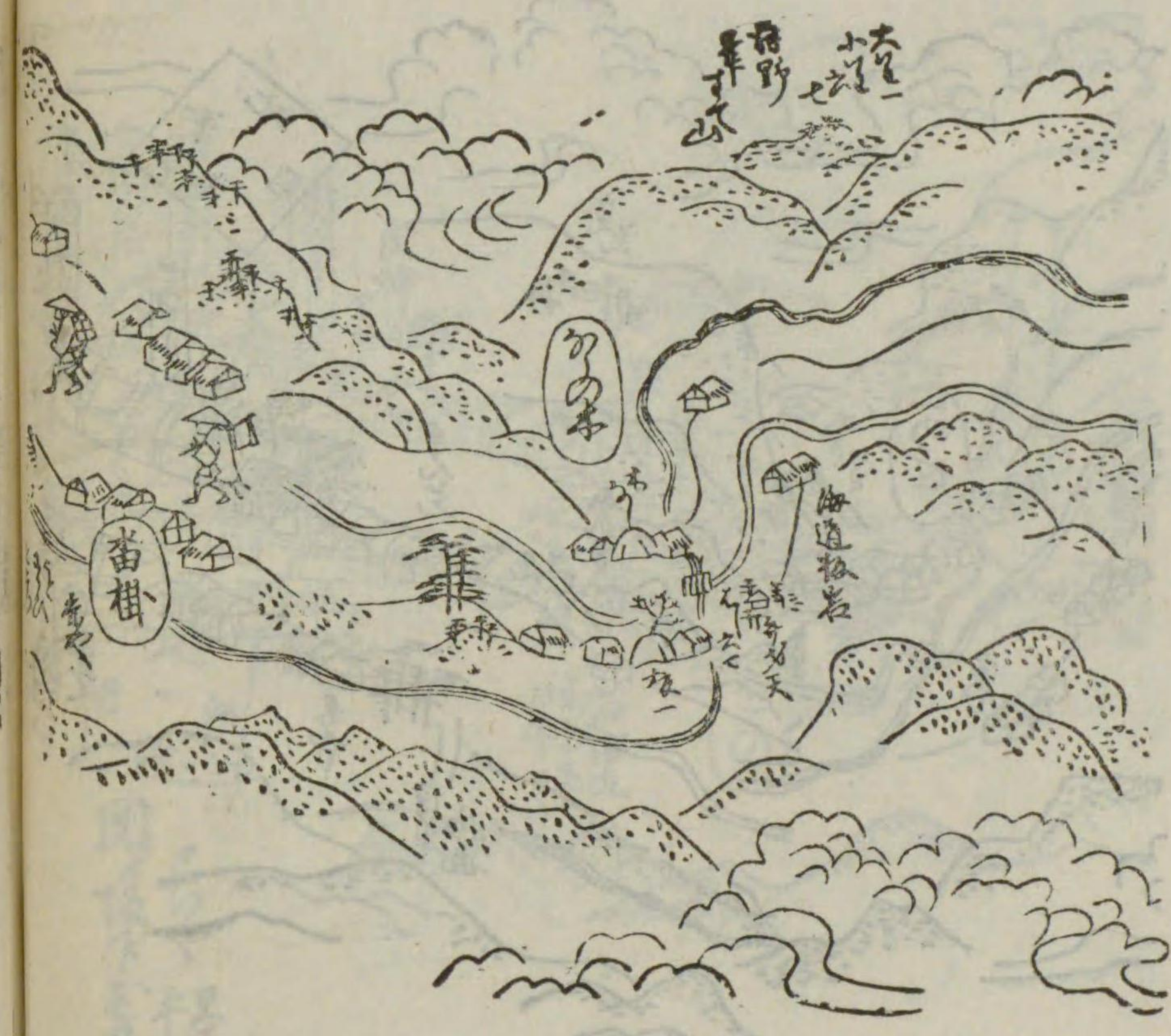
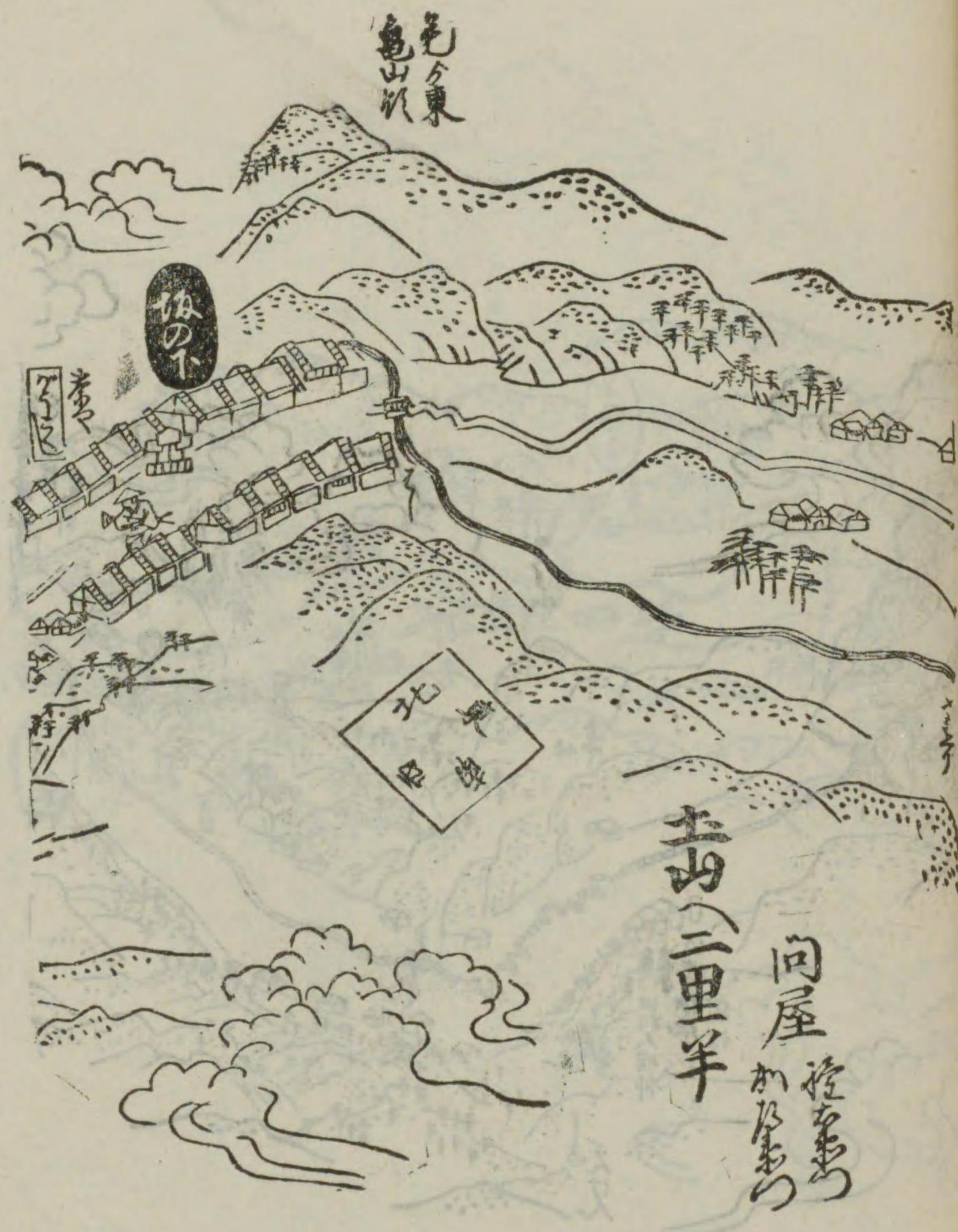
五之卷 東海道間繪圖

東海道間繪圖

五

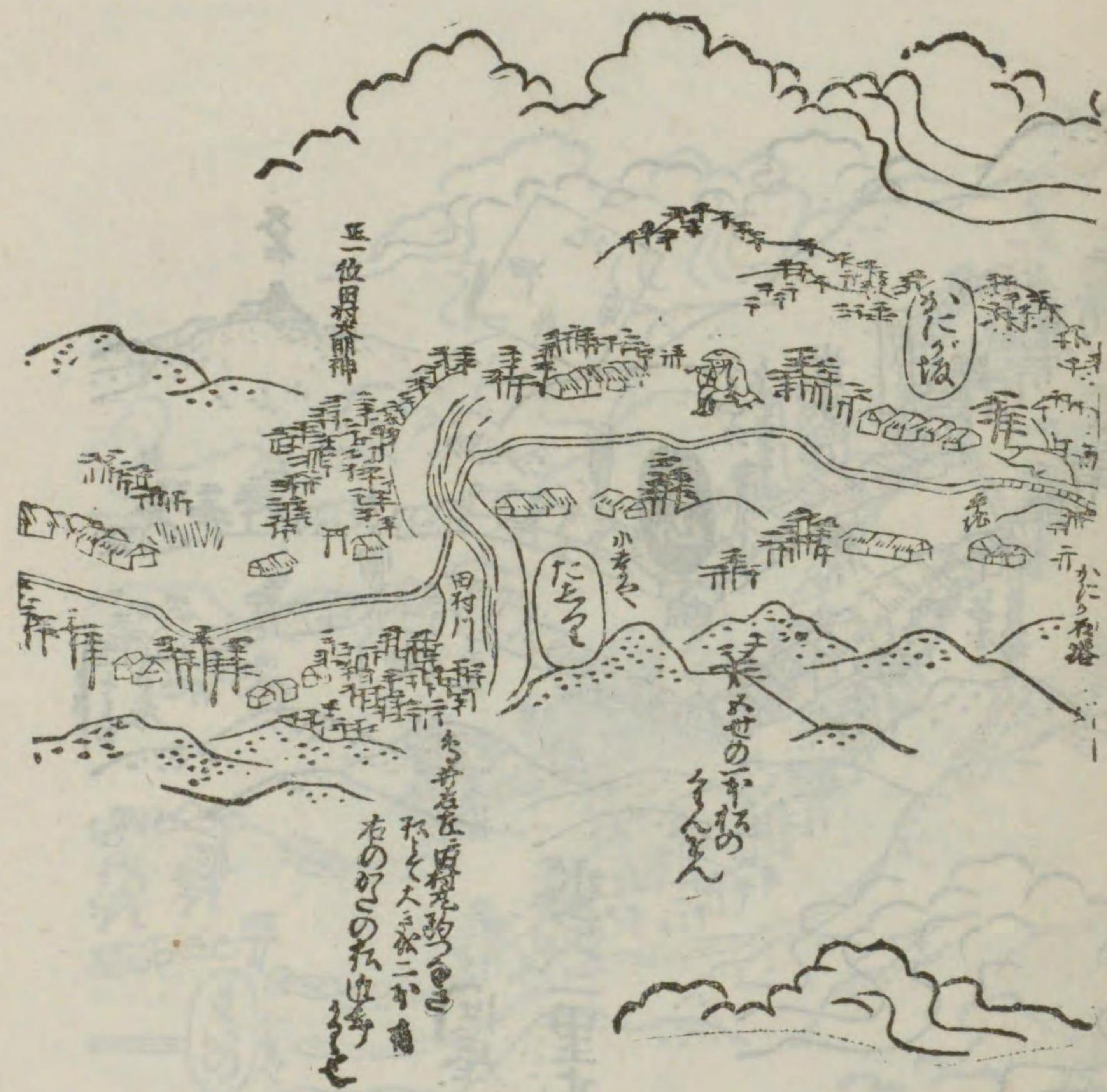


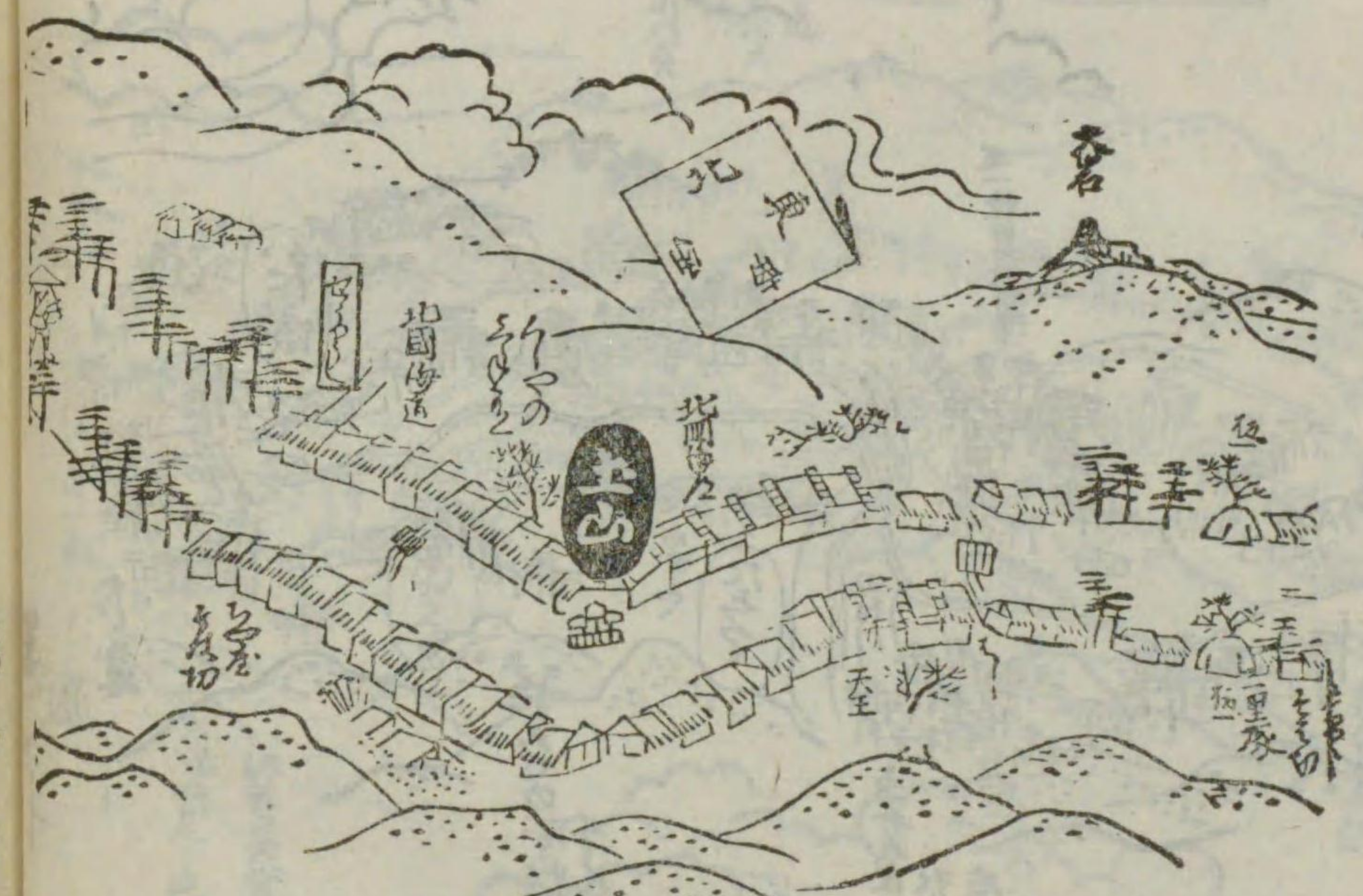
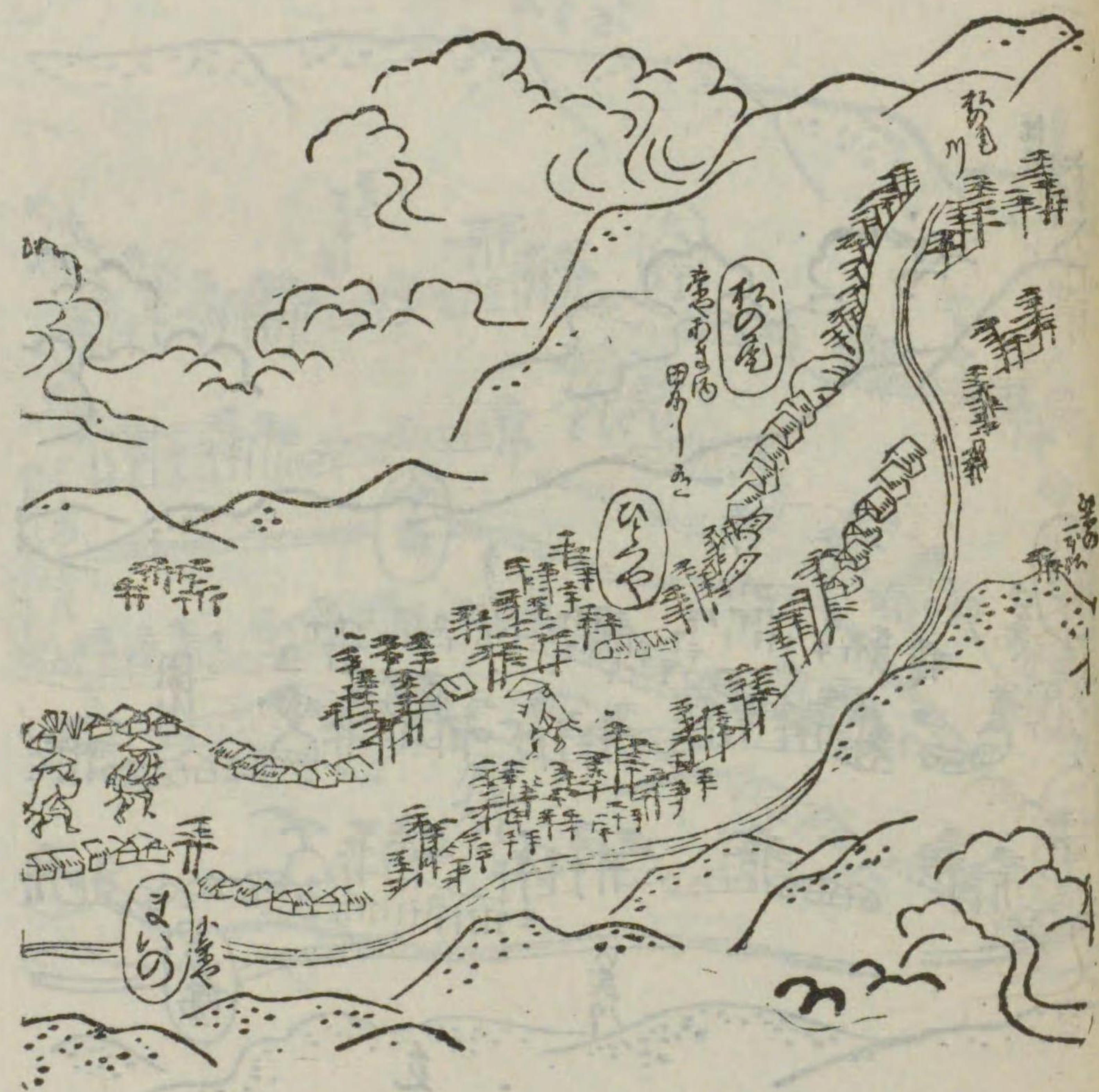




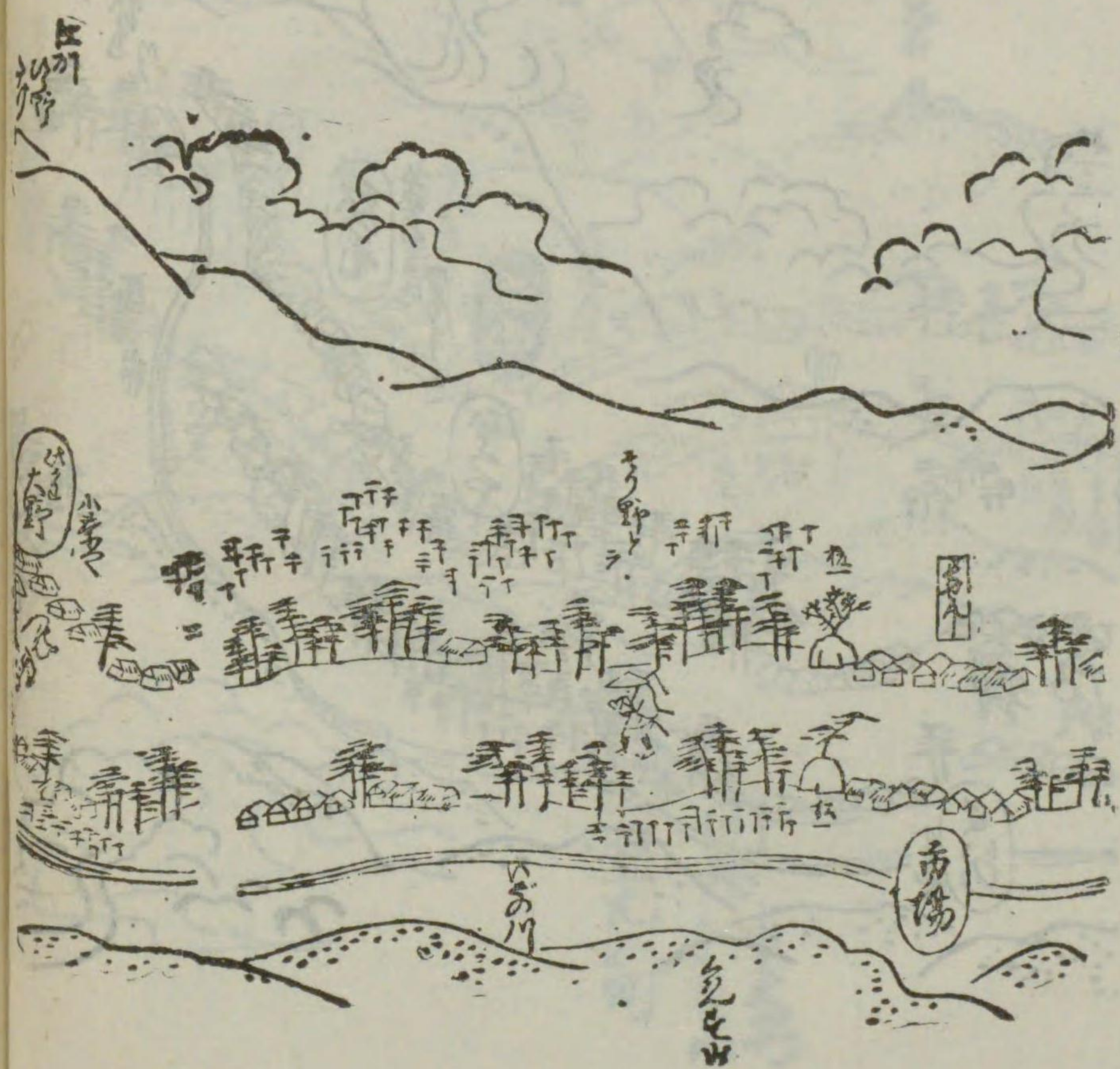
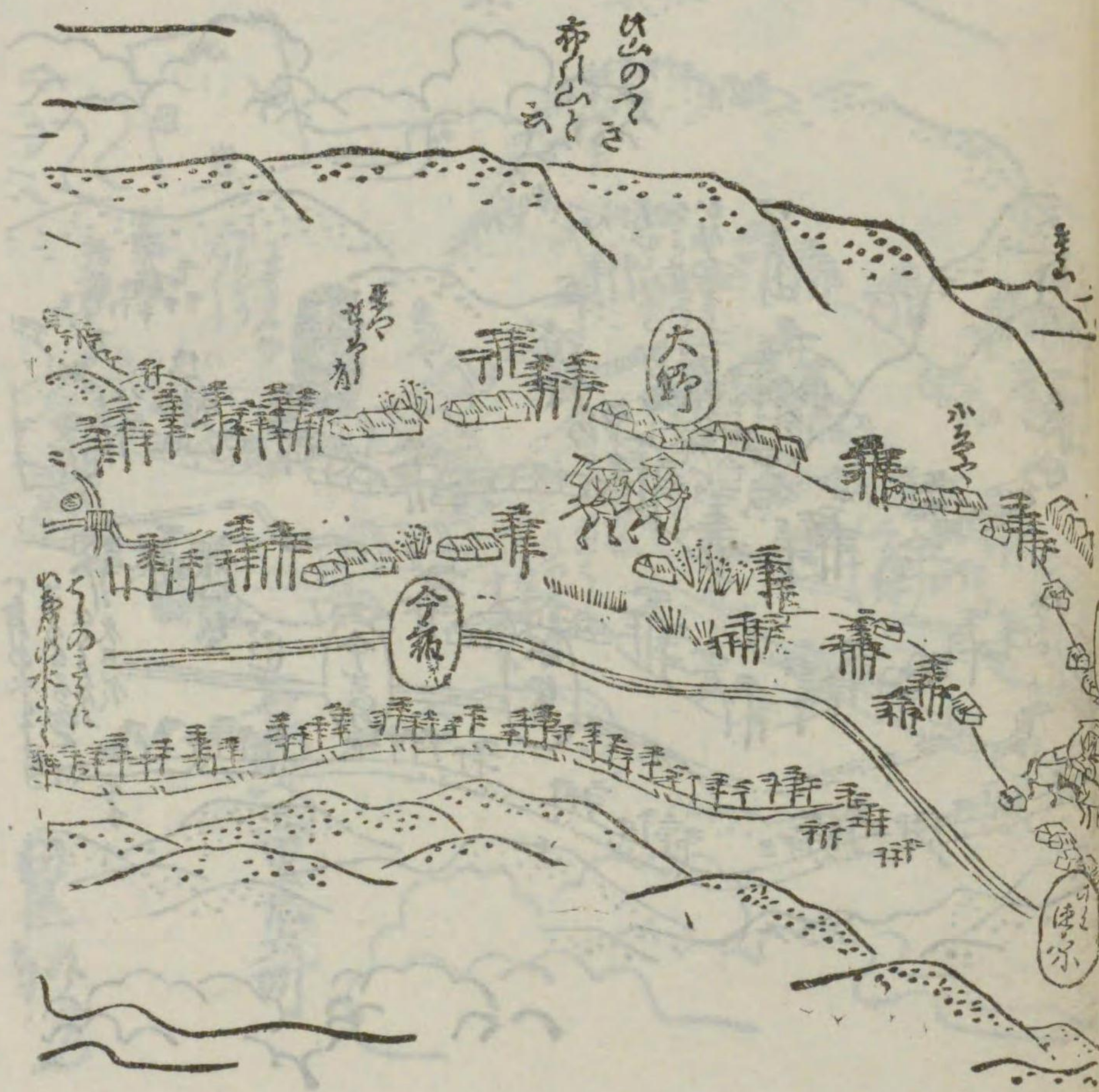


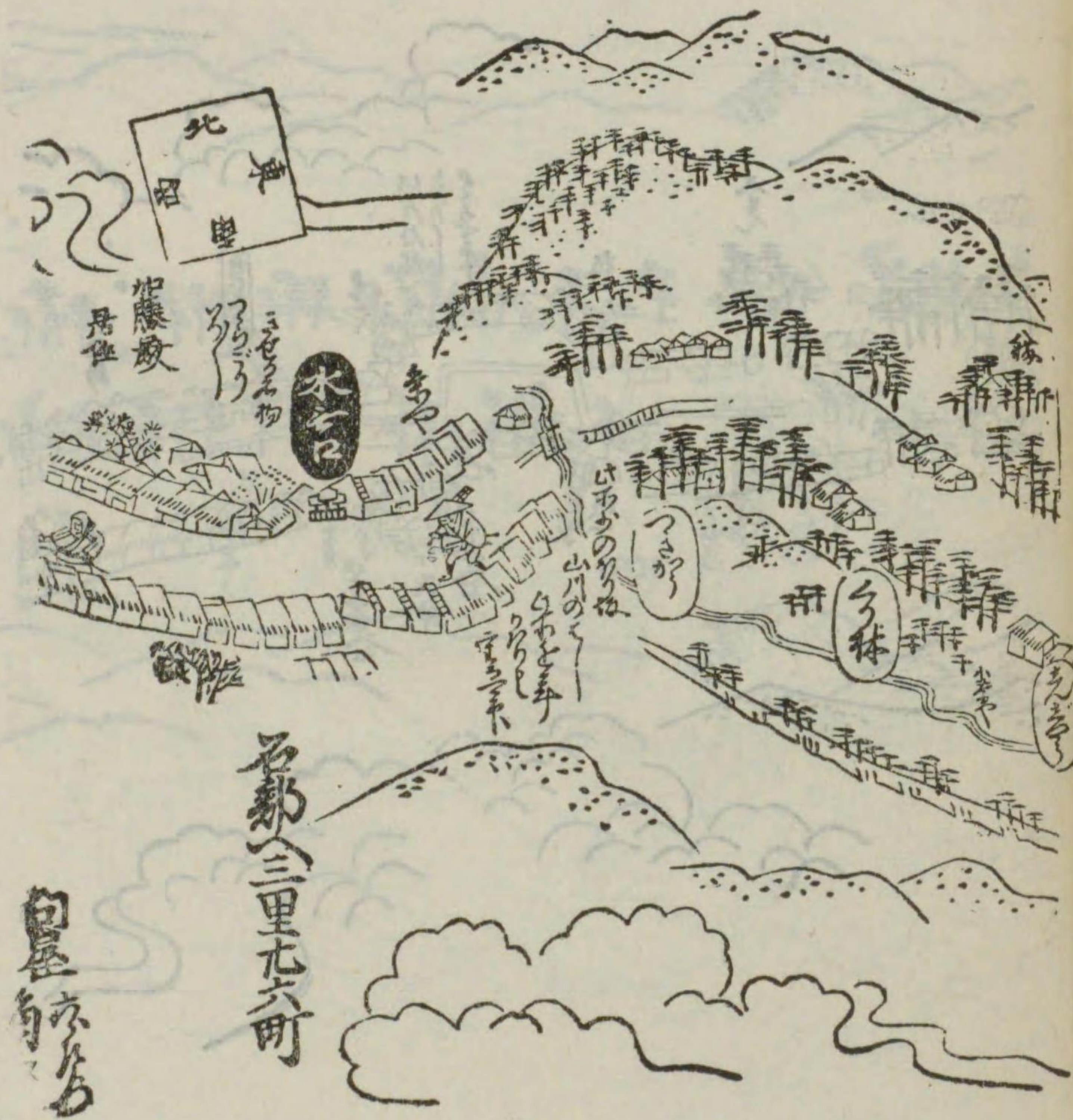






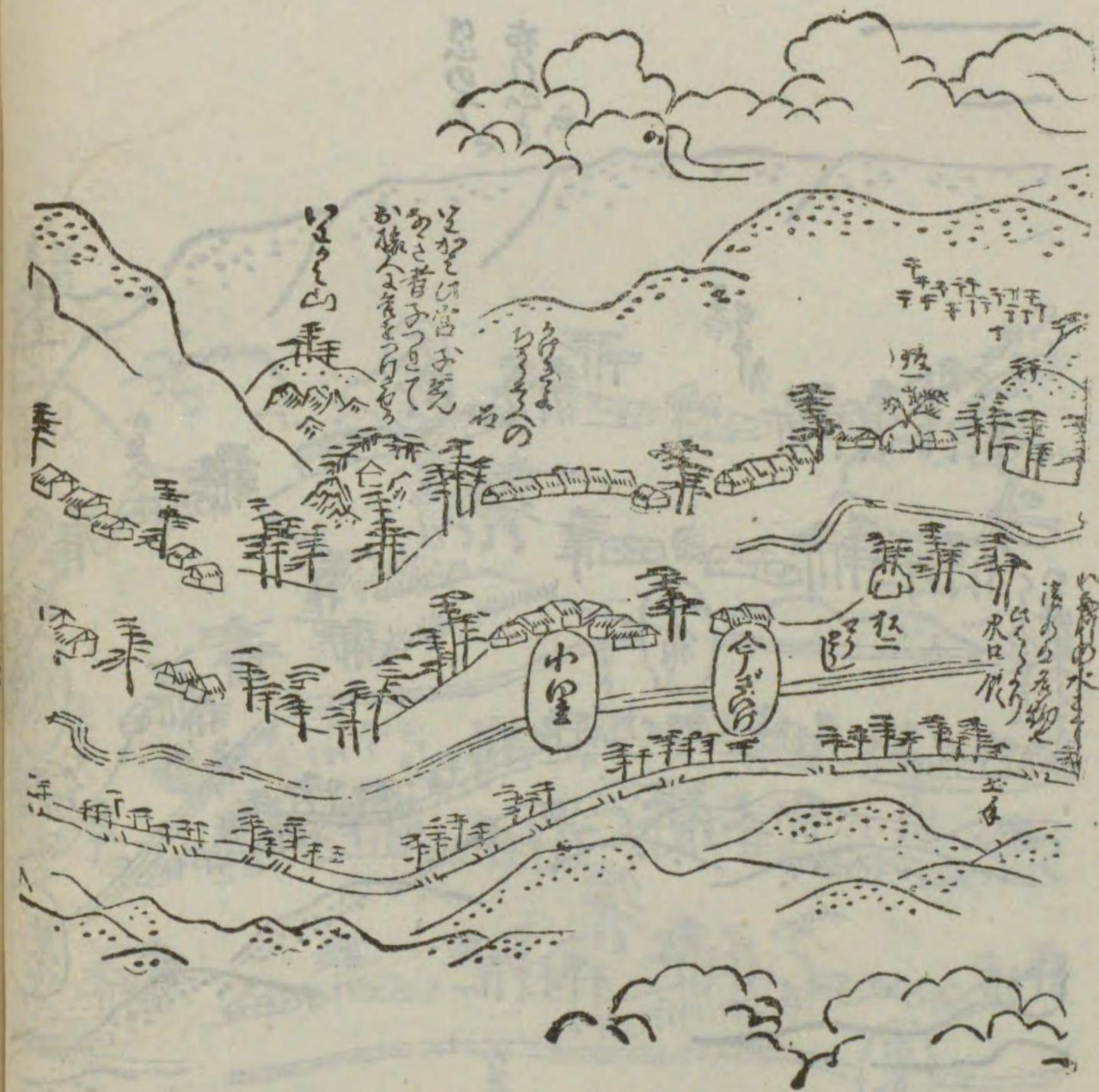
水口三里九奇  
 回屋  
 中  
 合

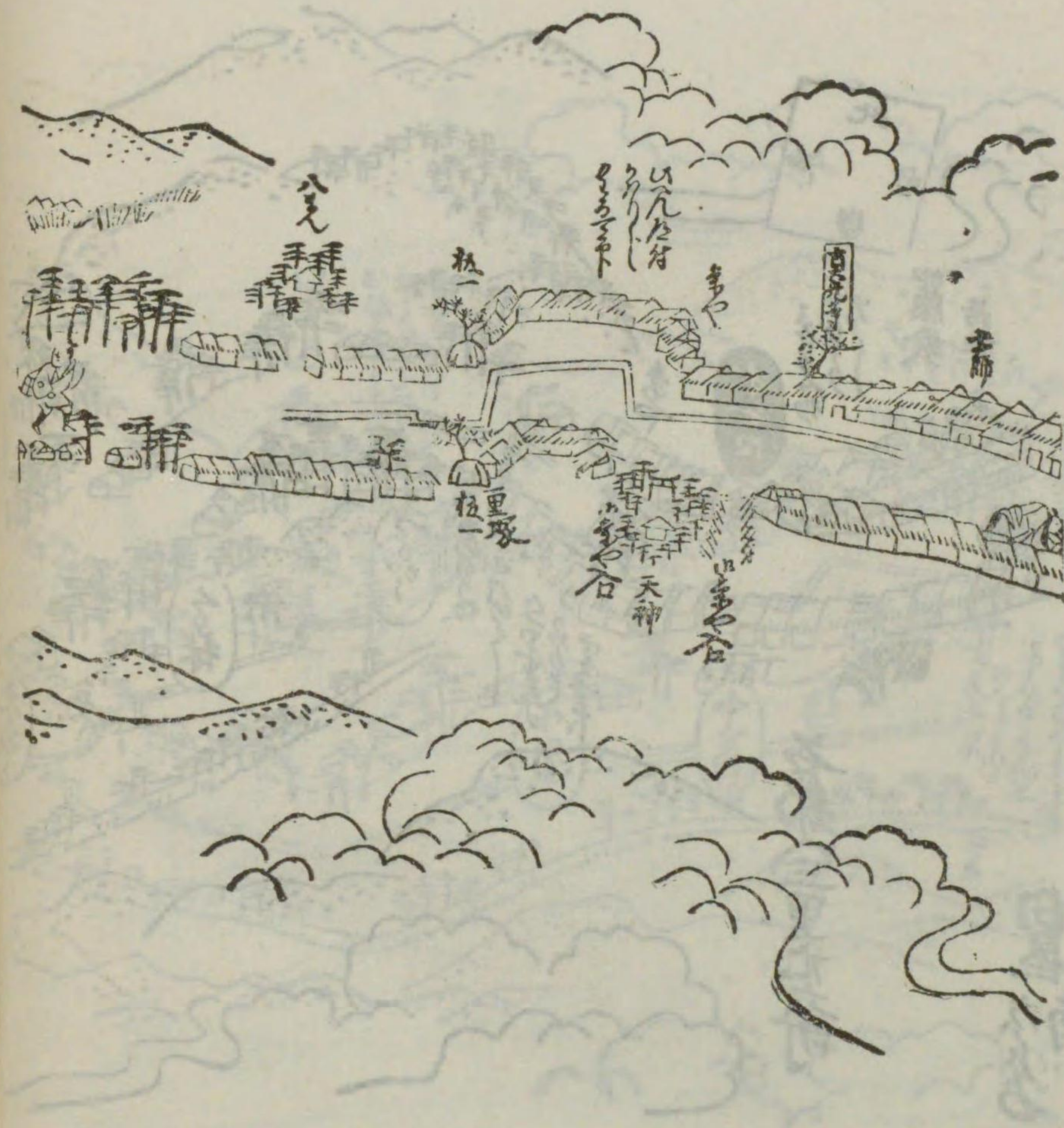
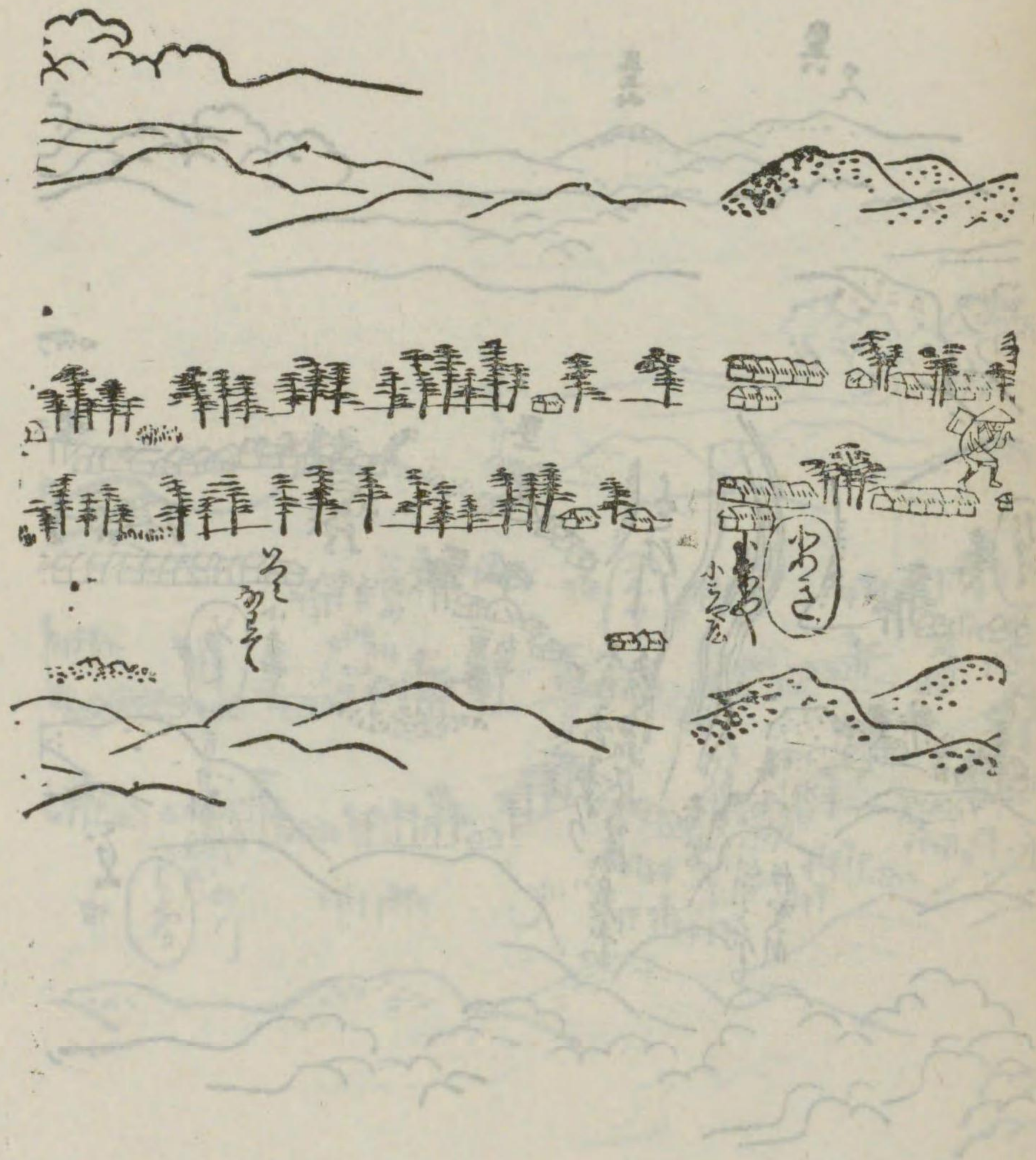


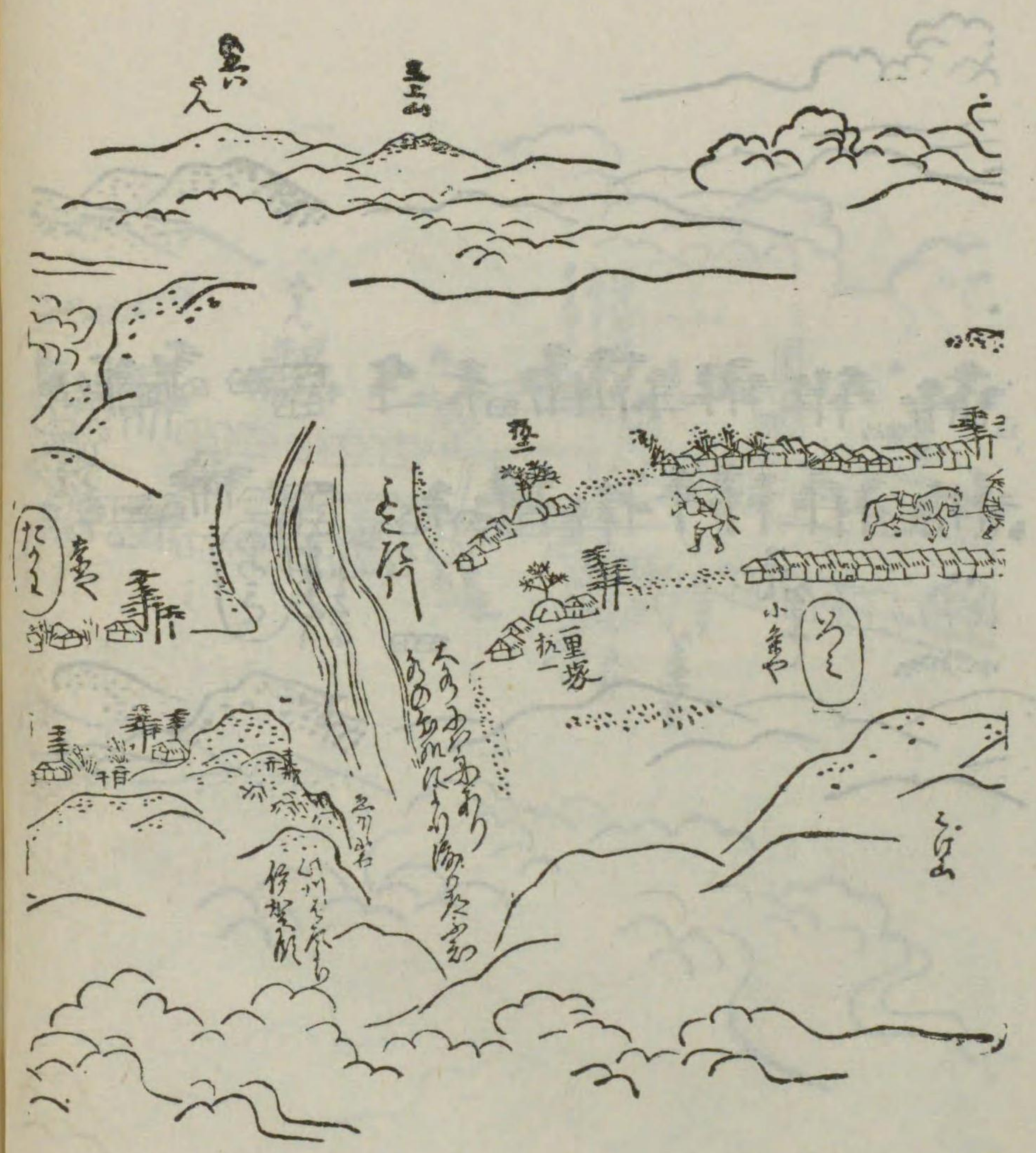
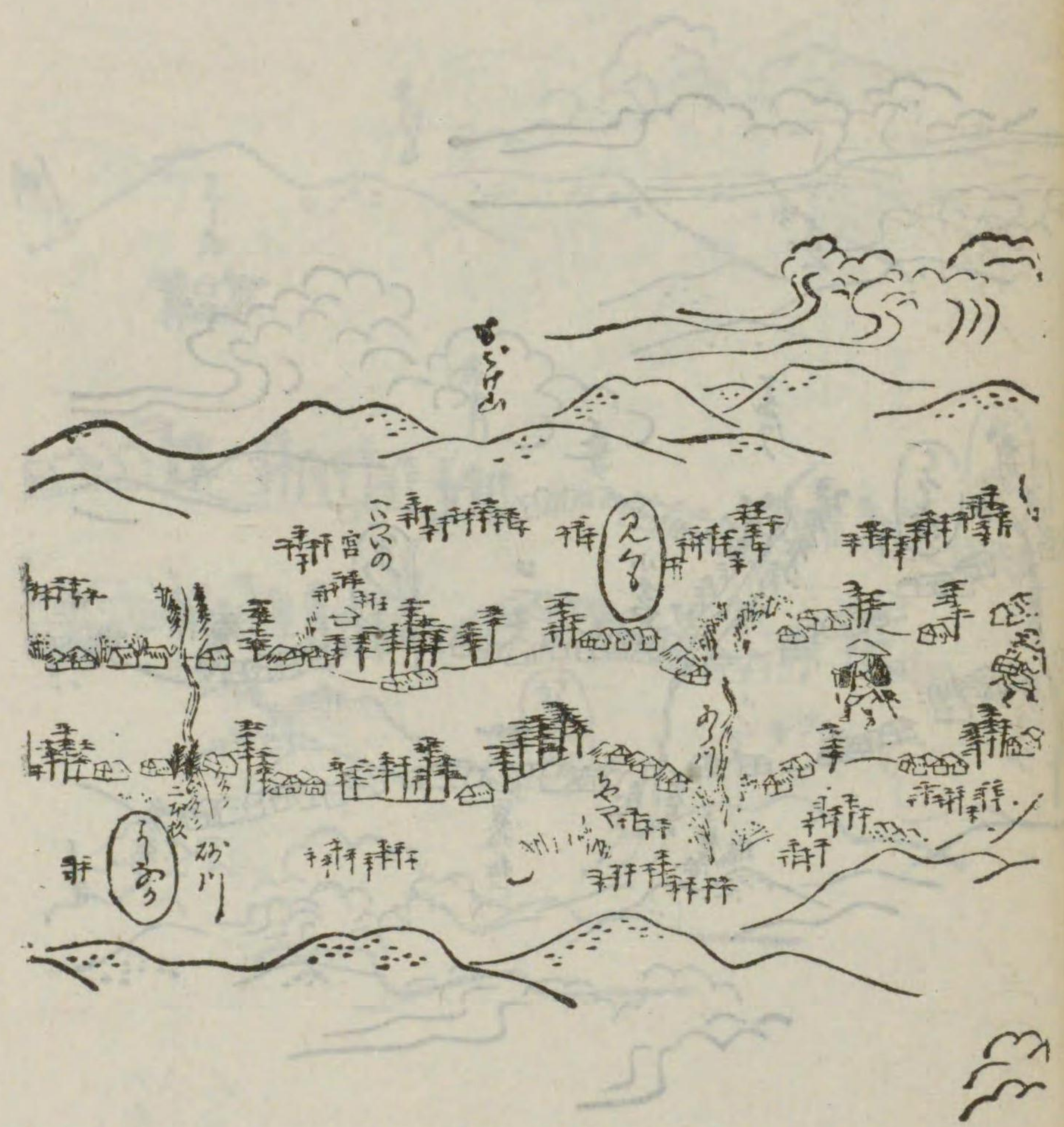


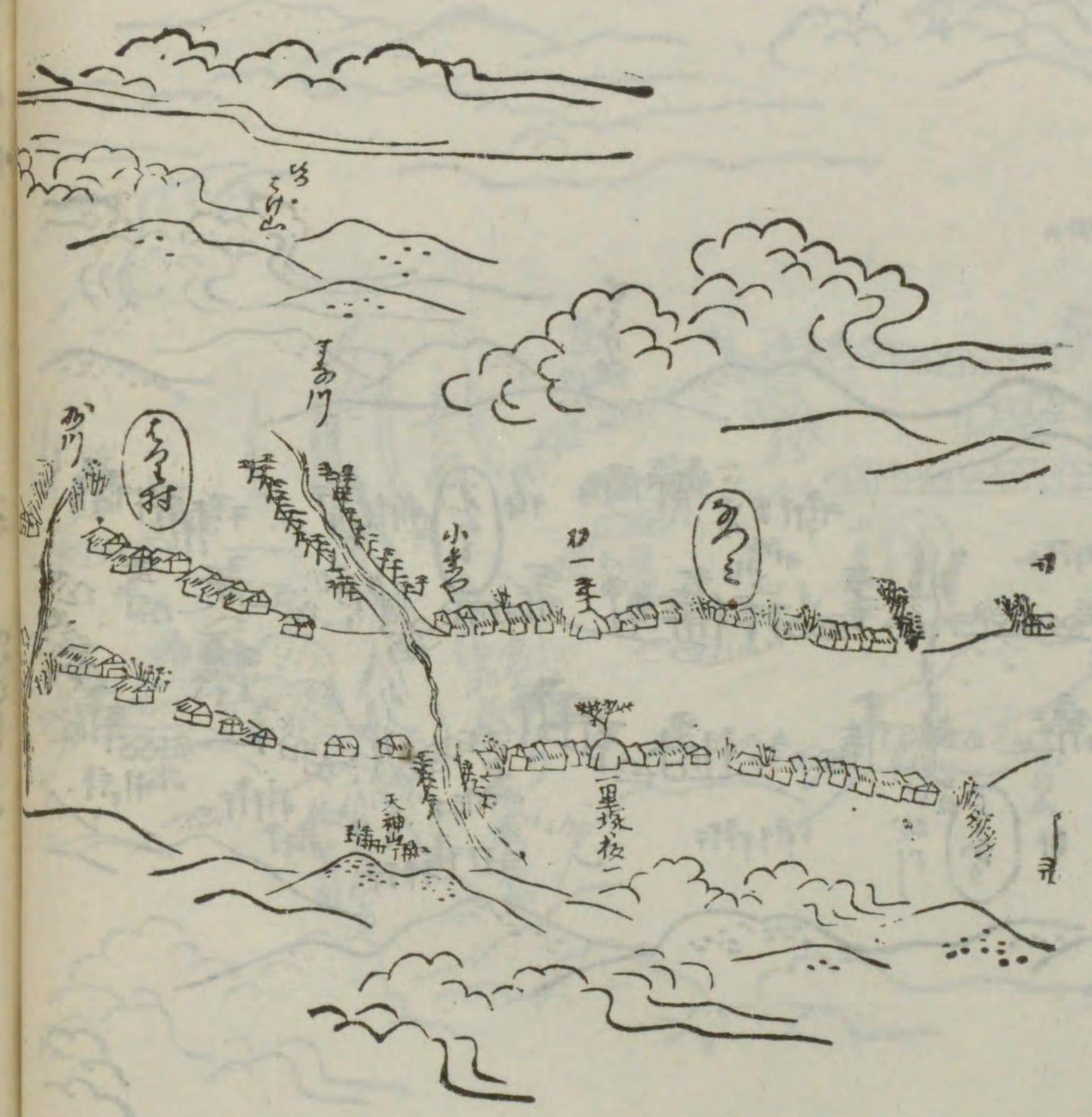
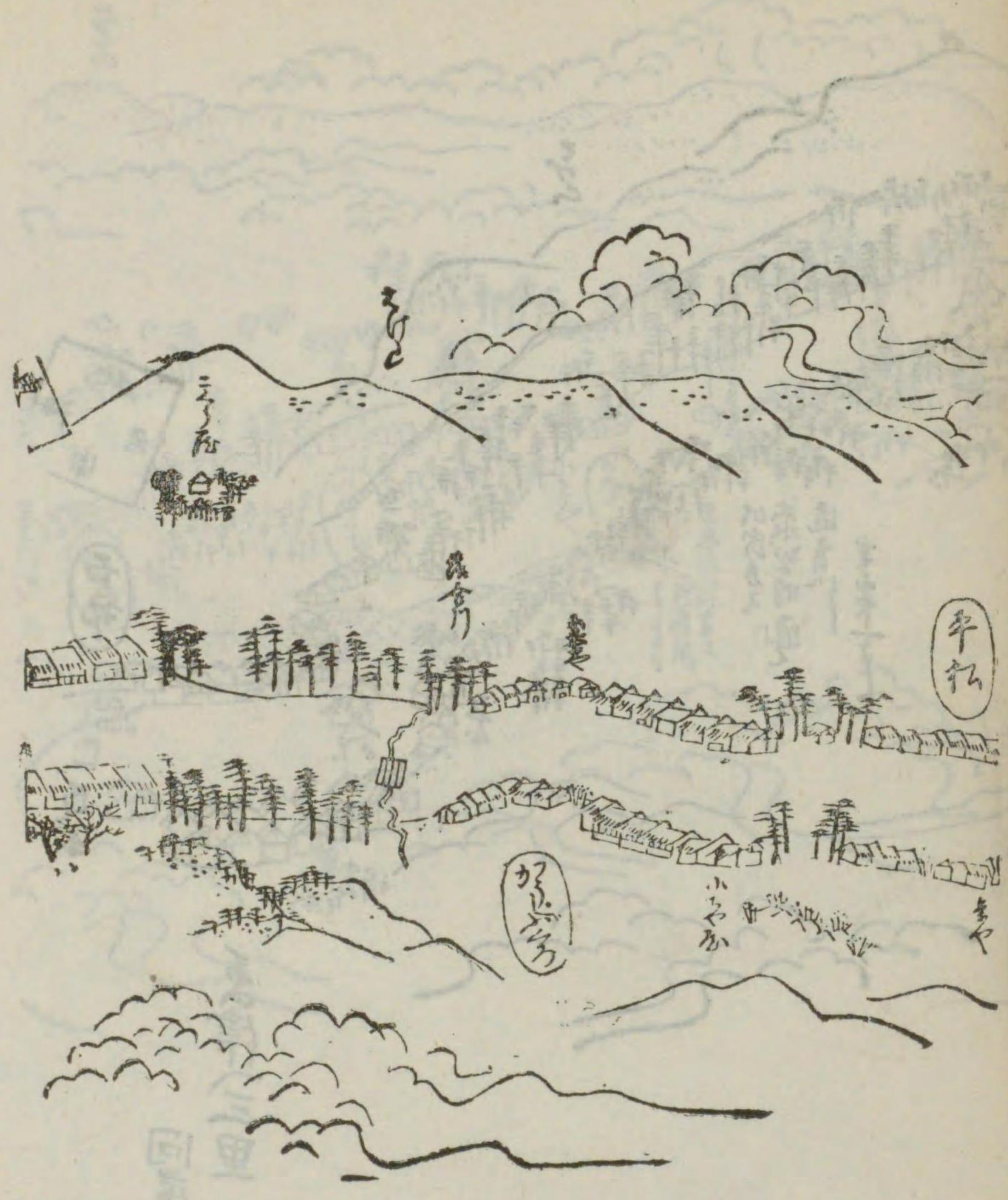
皇

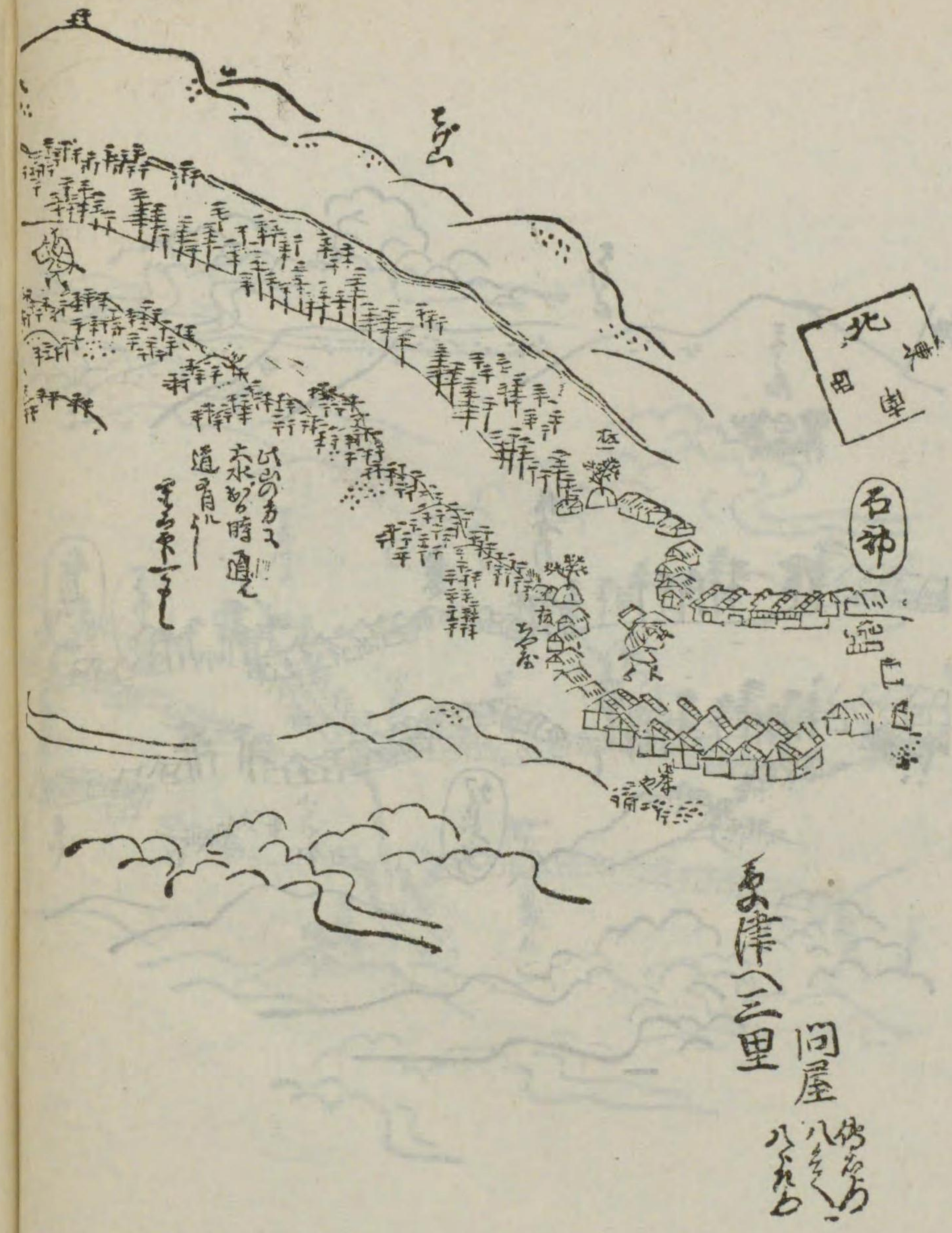
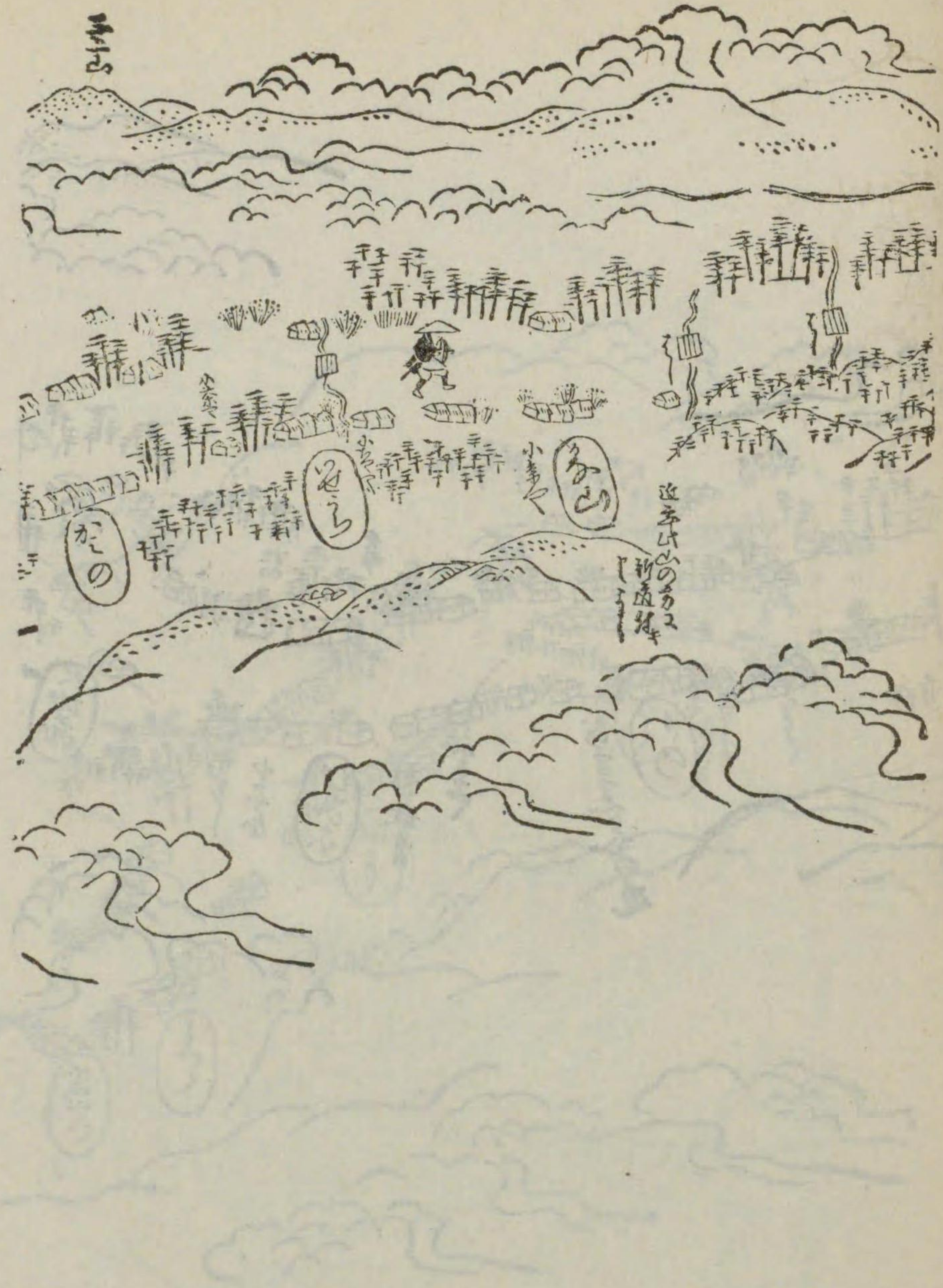
三里九六町





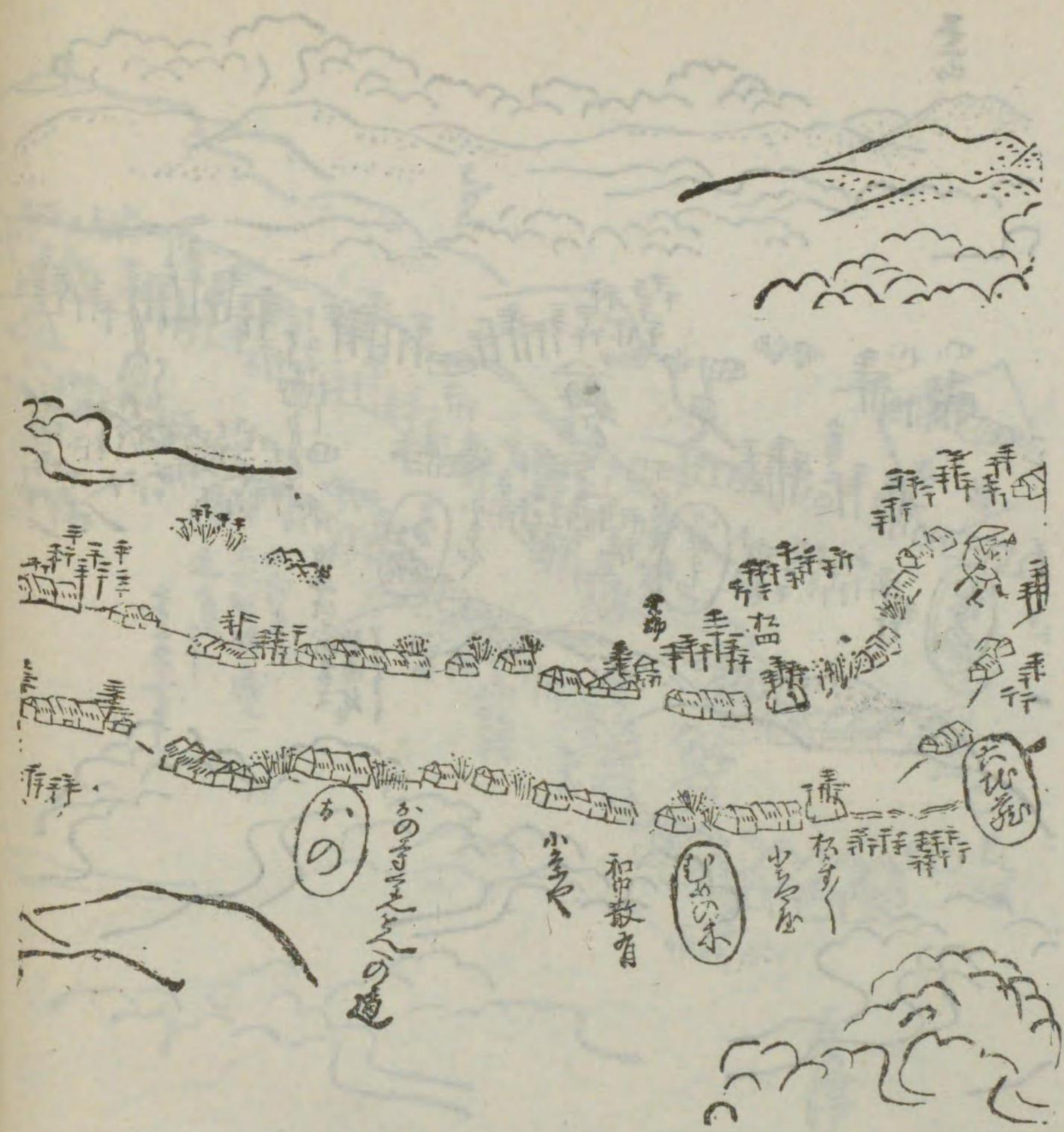


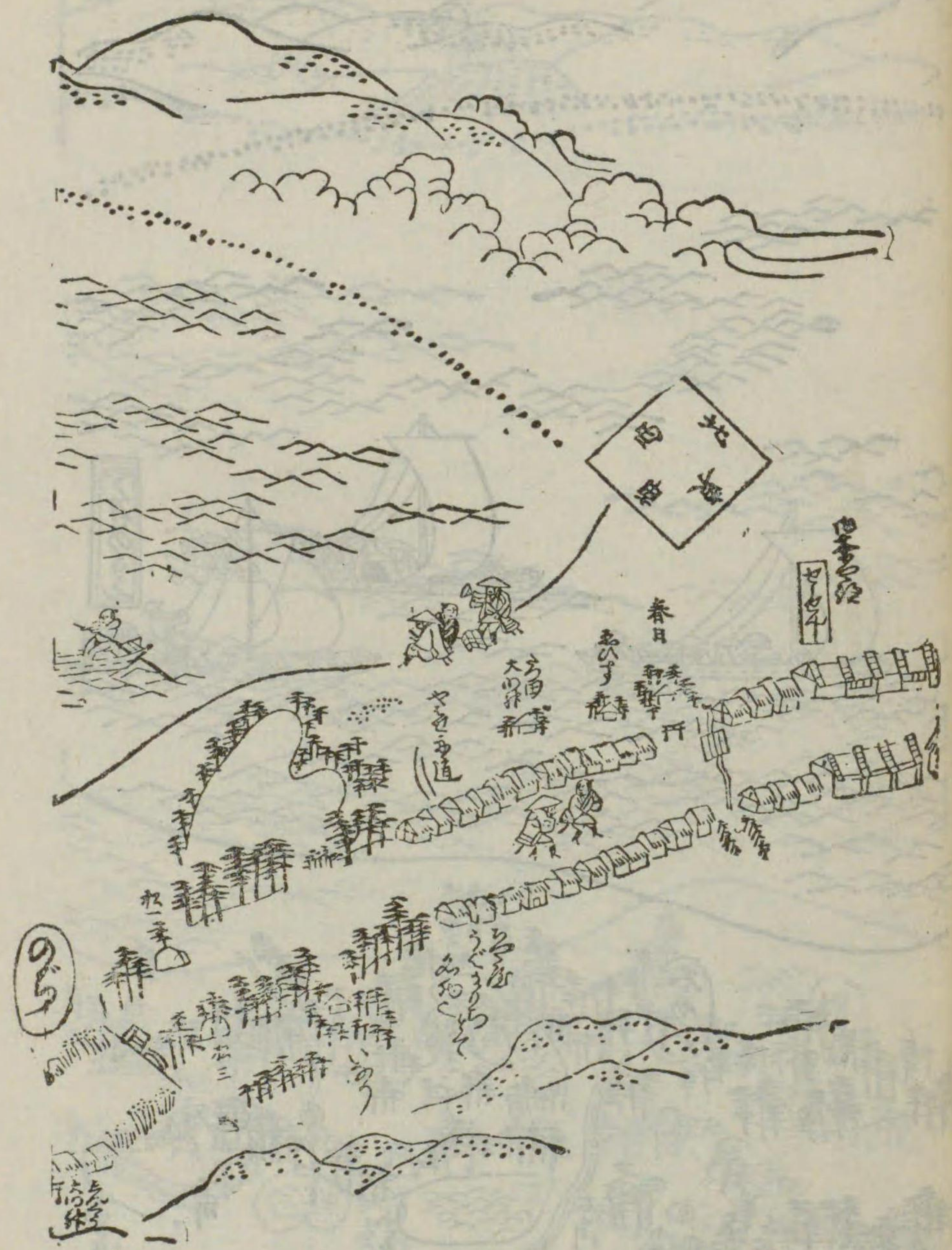




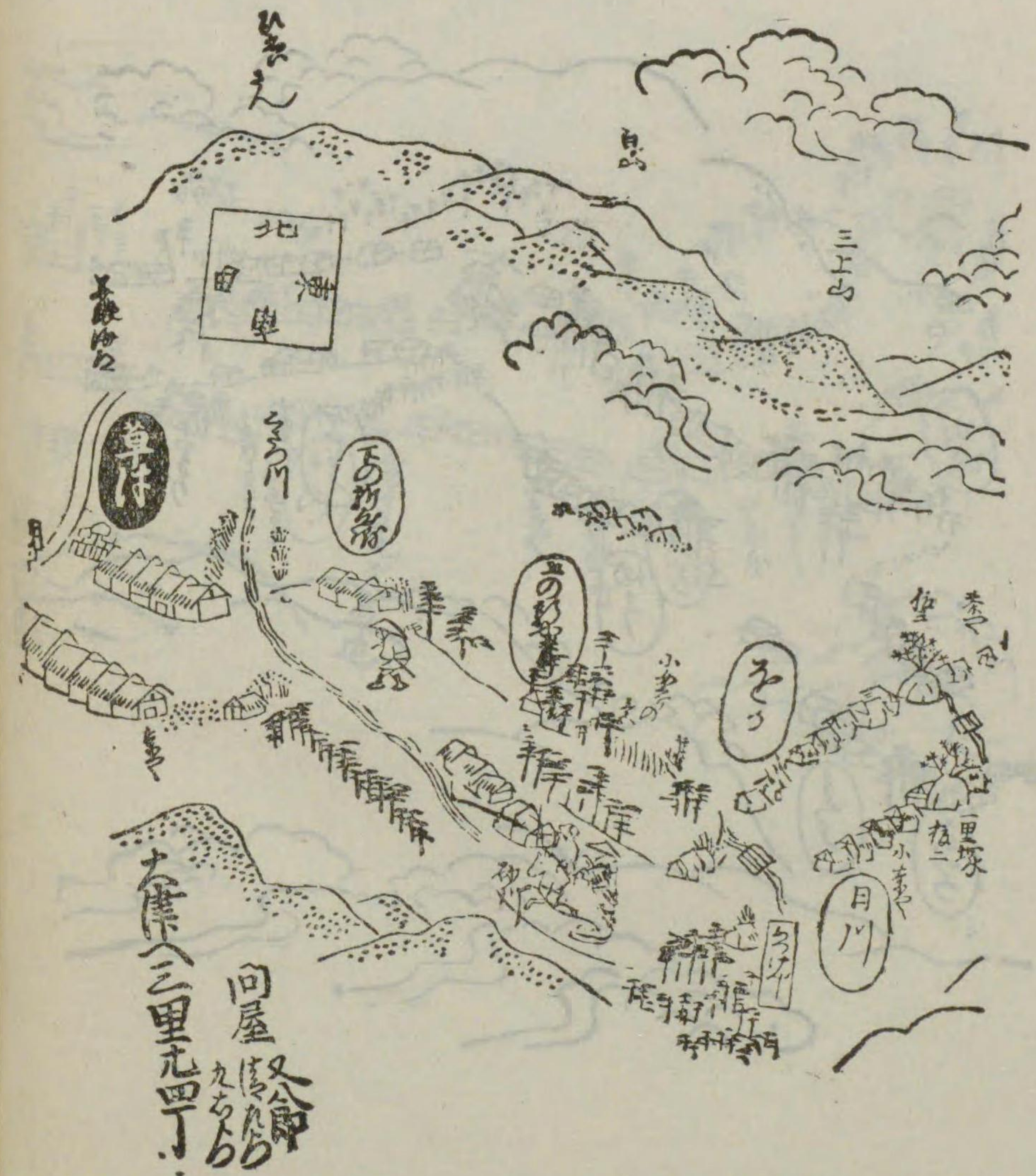
長津八三里  
同屋  
八三里



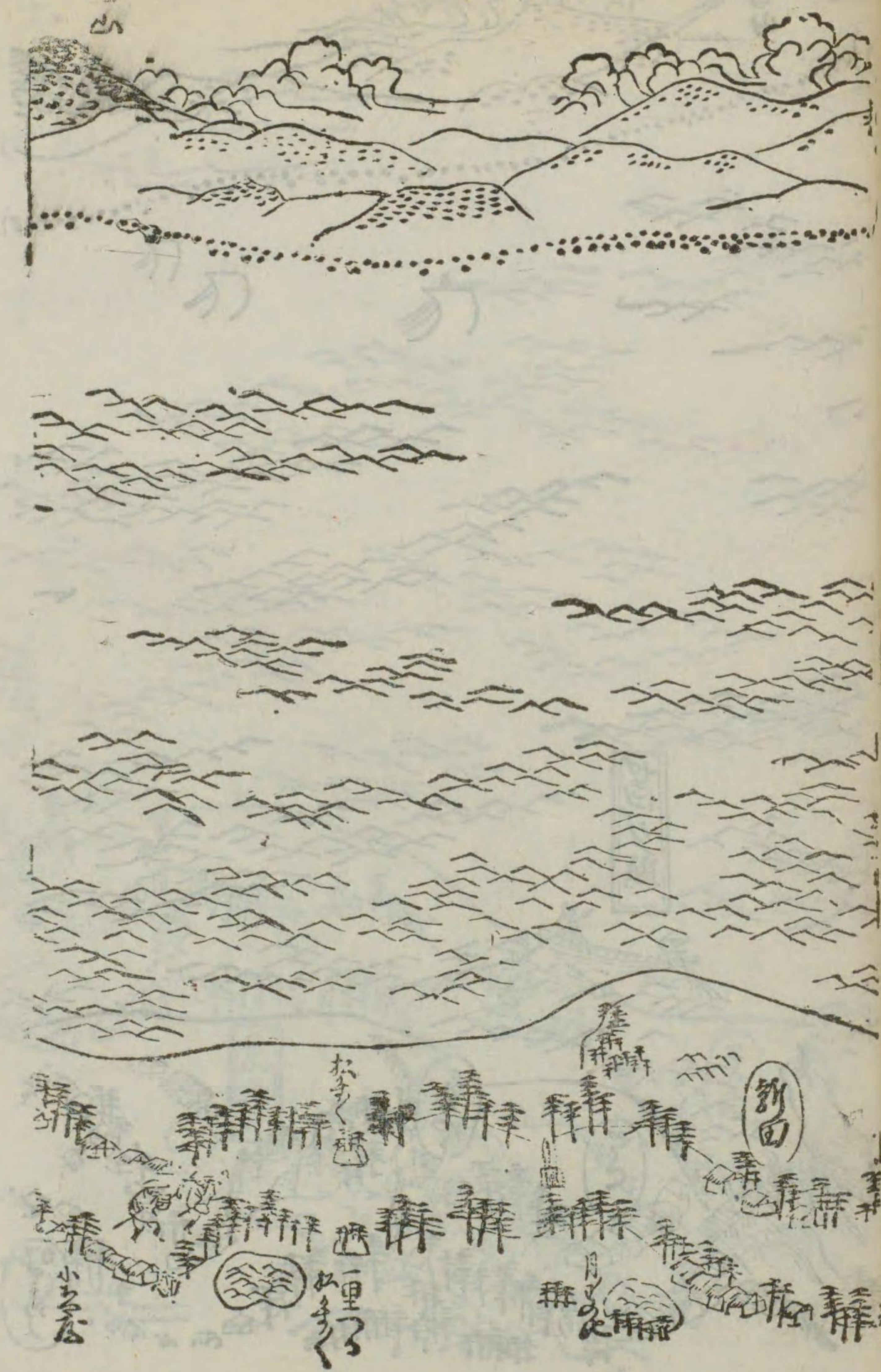


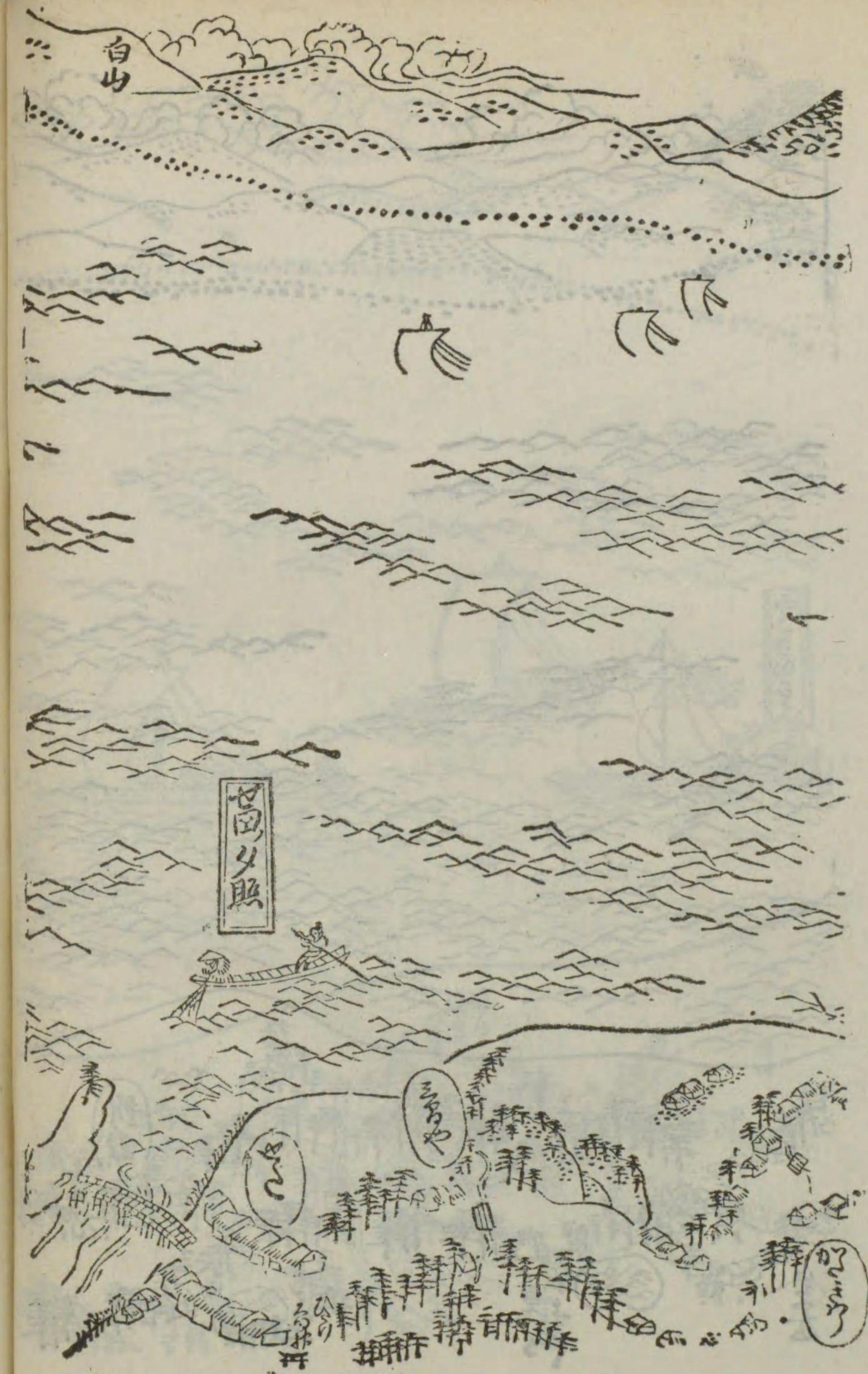
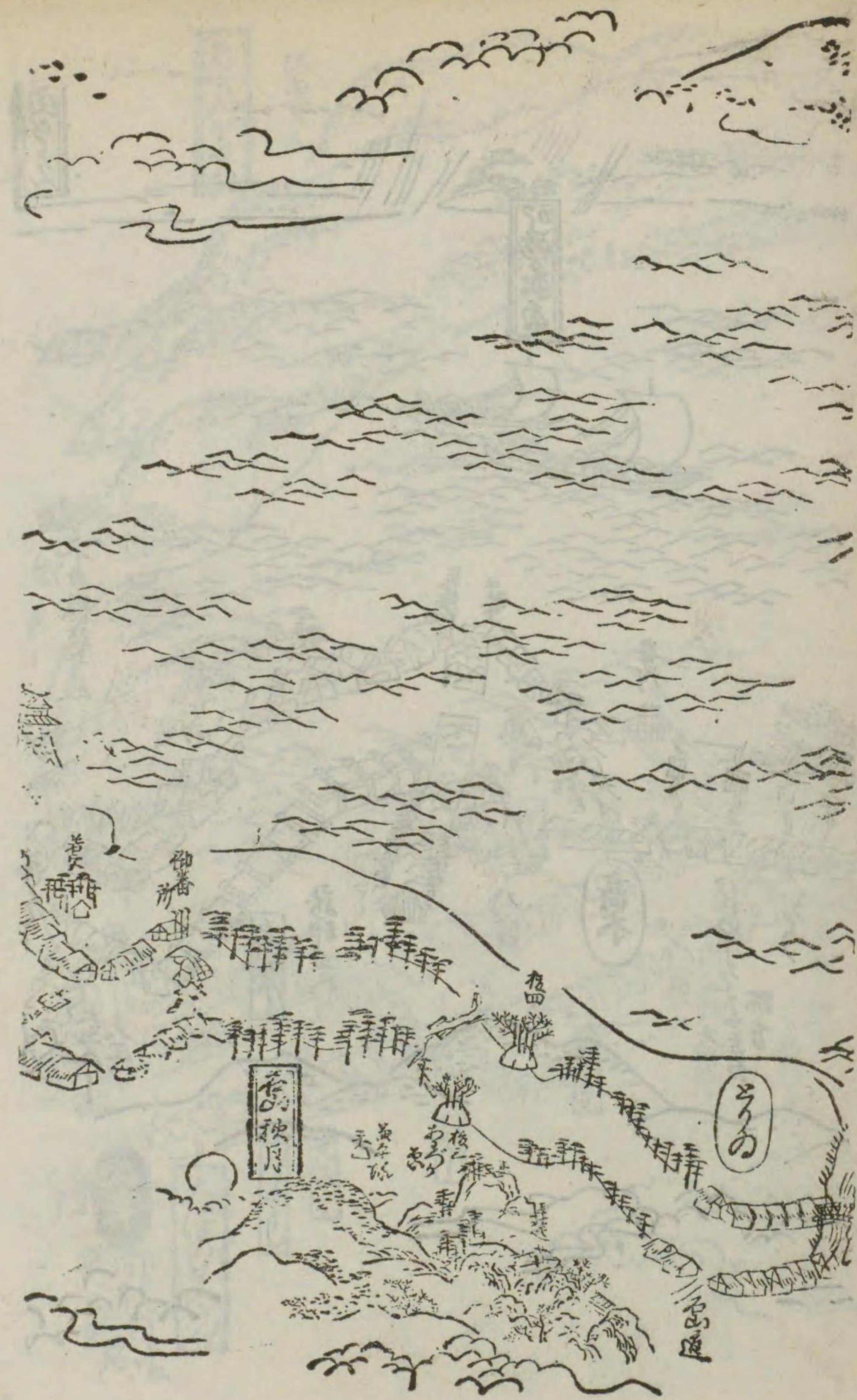


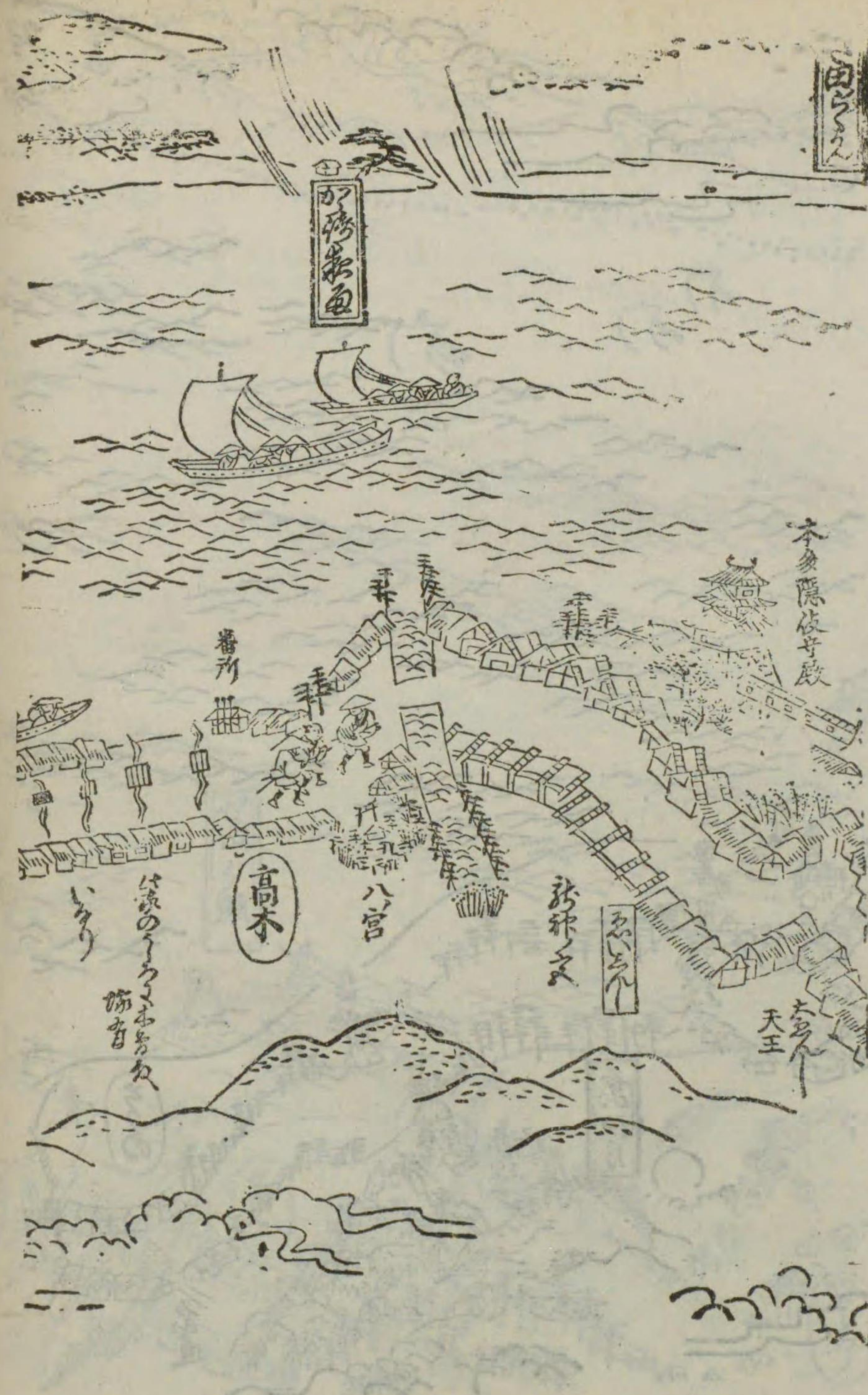
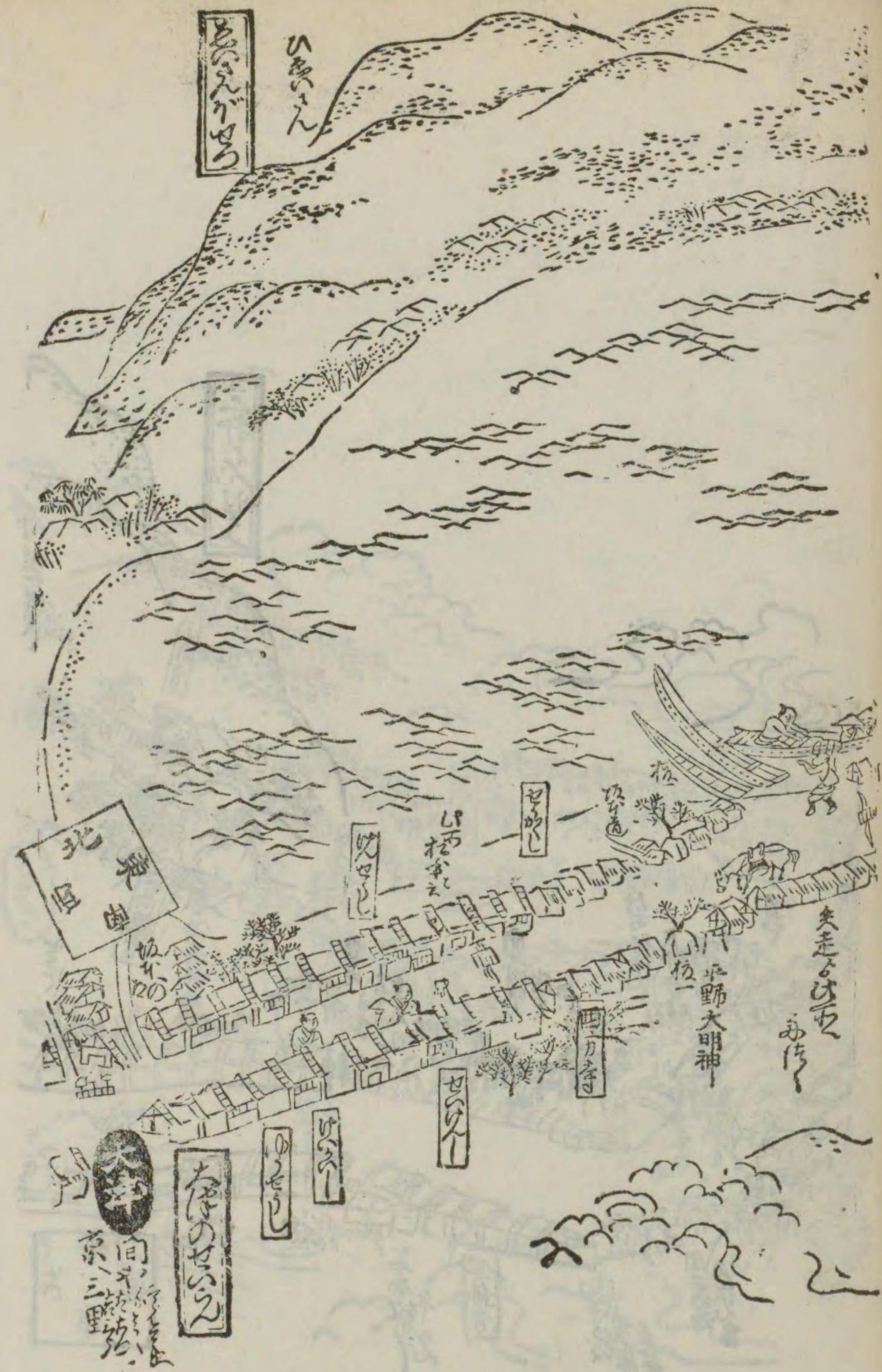
(七十三百二) 五之卷圖繪間分道海東

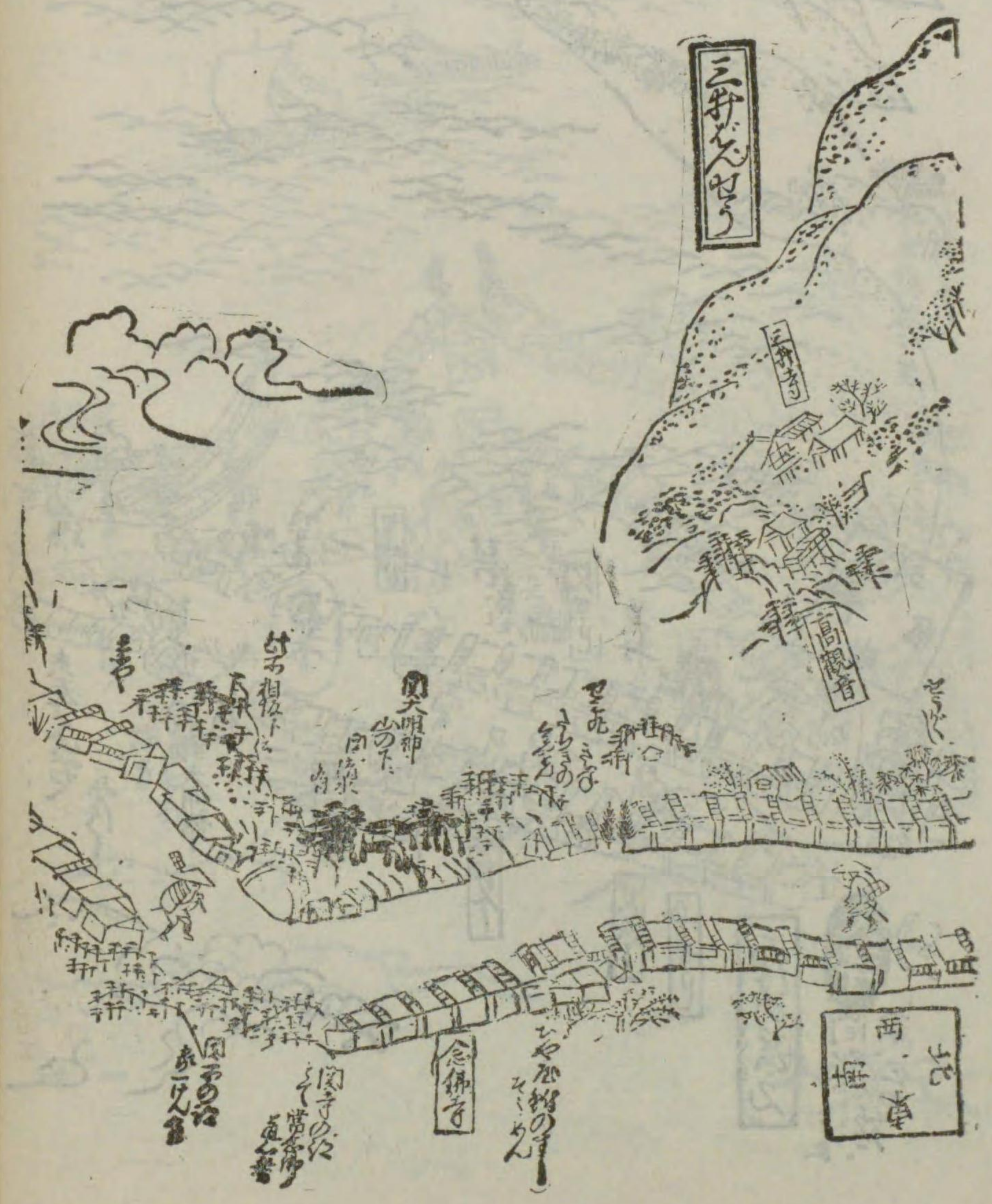
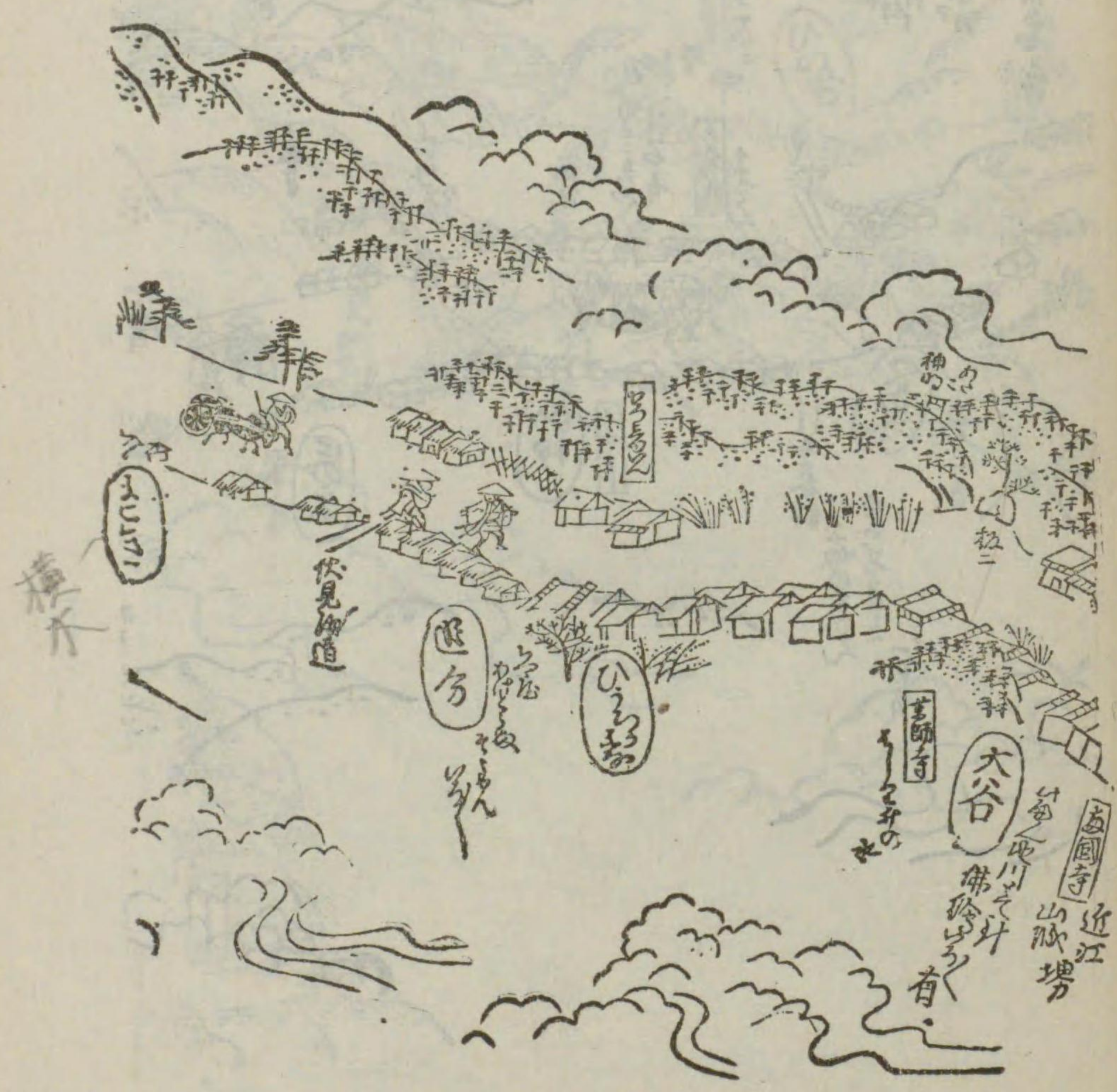


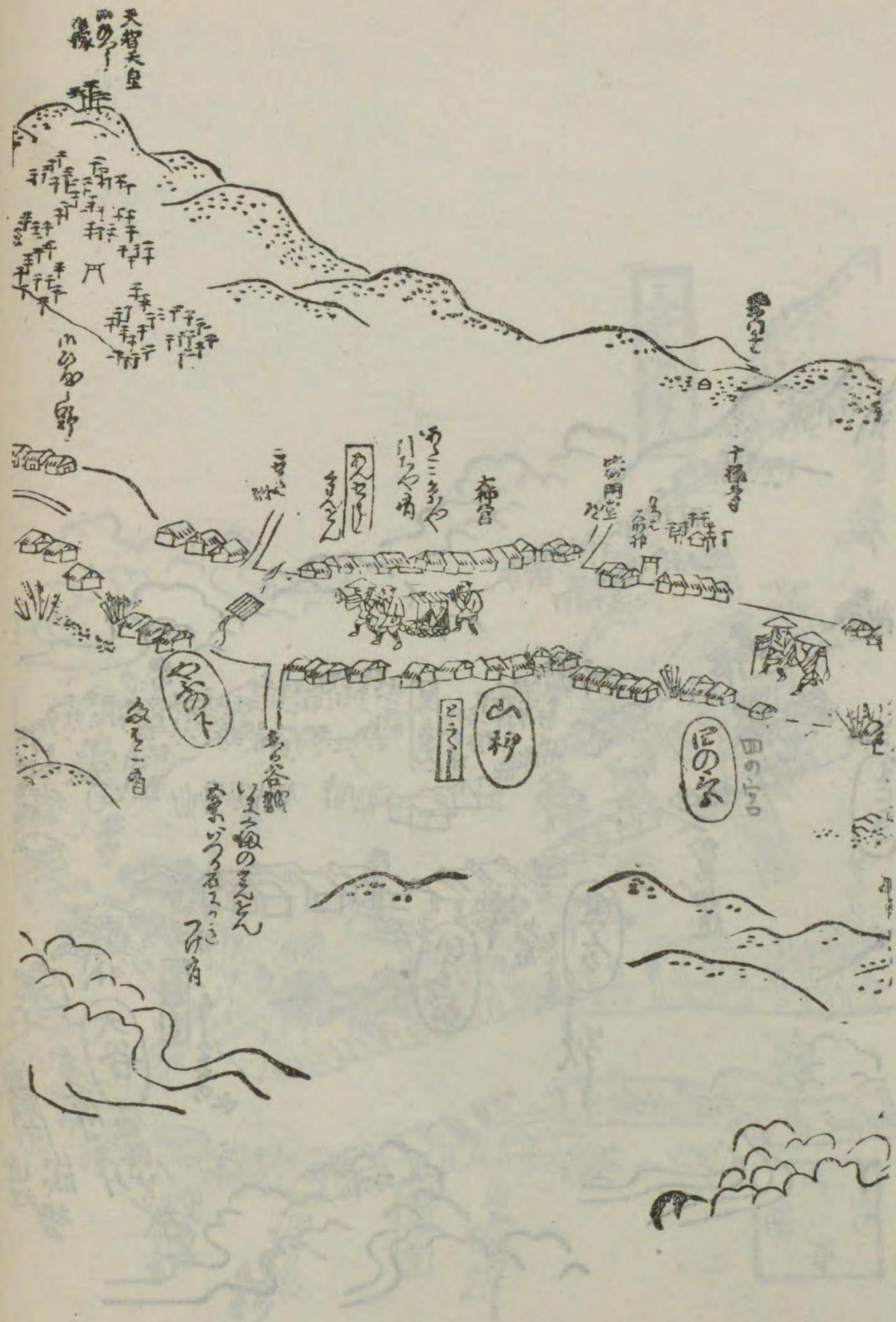
五之卷圖繪間分道海東 (六十三百二)







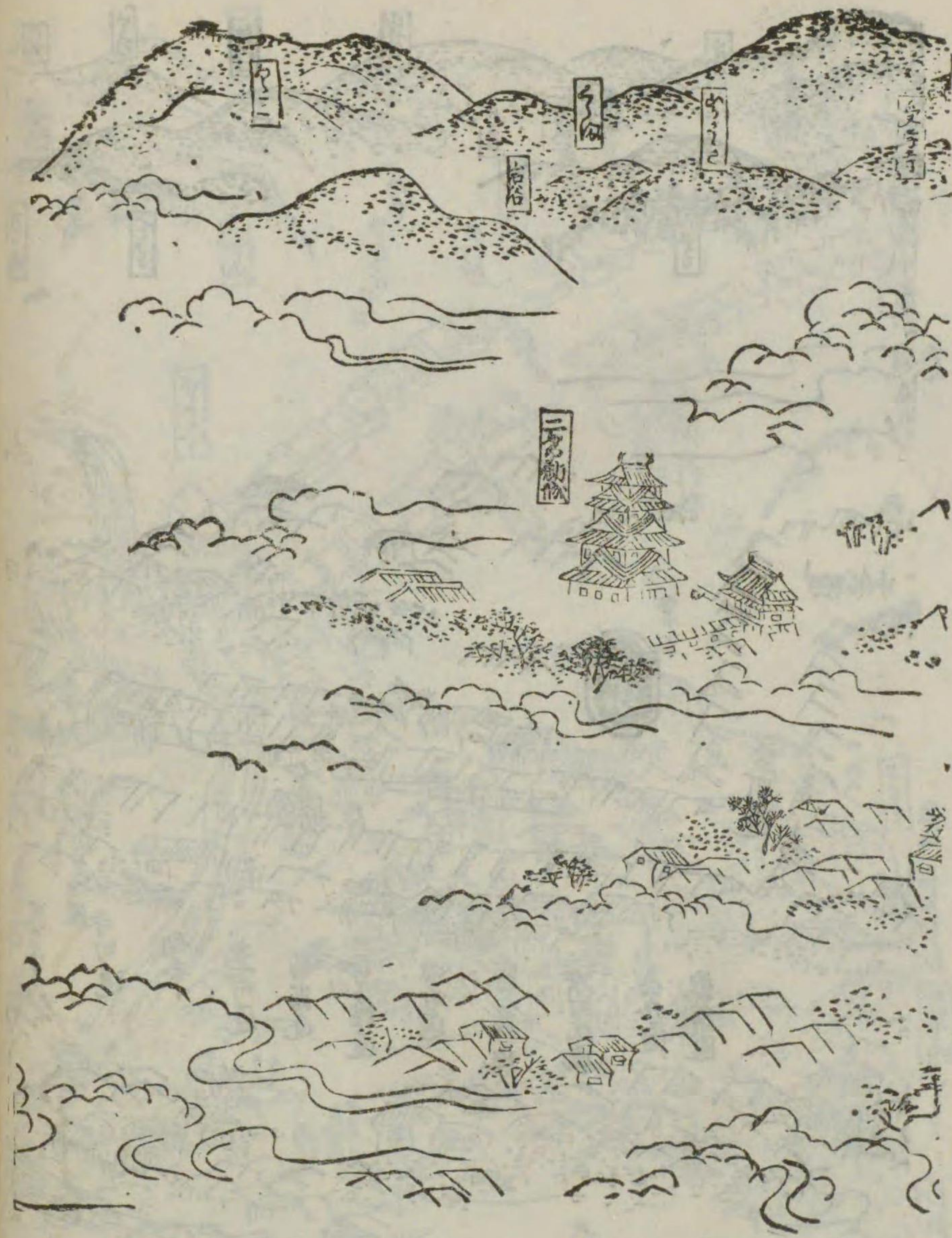








名をいし畫圖送印くそ書き廣  
 野くい候きく行る曲曲く正事  
 不道もまなみ推お書師畫く聖  
 かのこののて懸くは山形のとくゆりかえ  
 ありとも張らのあくに男補して様也  
 にもまの氣言りて書師と書書  
 後文のそ見うはるは海をすくみさ南  
 けた方には方々ゆきて是ふ流きま  
 合をまて家と流水の書は流る有





は無名隨筆の前身)

「訓蒙圖彙」には、蒔繪師源三郎筆とある所から、同書の繪と西鶴本の挿繪に同じ畫風のものがあるのを見て、之れを類推して源三郎の繪なりと判断したのは誤つた考へではなく、たしかに其一部分には「訓蒙圖彙」と同じ筆意と認めらるゝものがある。しかし「訓蒙圖彙」も全編同一の筆とは思はれぬ。畫風は二様に分れて、源三郎一人で書いたものでない事は明白である。此事は更に後に述べる事にするが、西鶴本中、蒔繪師源三郎が書いたものがあるとしても其全部でない事はいふまでもない。

と云ひ、西鶴本の繪が三四人の手になつたとせられ、先づ三通の畫風ありとし第一は、一代男、二代男、諸國咄、鬮隱者(以上西鶴自畫)第二、一代女、五人女、廿不孝、三代男、大鑑、傳來記、懷硯、永代藏、義理物語、新可笑記、櫻陰比事(以上を吉田半兵衛とす)第三、胸算用、置土産、織留、俗つれく、萬文古(以上蒔繪師源三郎か)と論及し、さて

しかし蒔繪師源三郎の筆意といふはどんなものを指すか。之は吉田半兵衛の繪を鑑別するより一層困難である。半兵衛に好色、女用の兩「訓蒙圖彙」もあり。「山路の露」の如き、好例證があるけれども、源三郎の繪と確認すべきものは未見である。之は見聞の狭い故である事勿論であるが、「類考」の提供してをる「人倫訓蒙圖彙」に就ても、實は其筆者に不明な點があつて、自信がないのである。原來此書を源三郎の繪と稱するのは、三の巻の終りに「蒔繪師源三郎筆」と刻してあるに起因してゐる事はいふまでもない

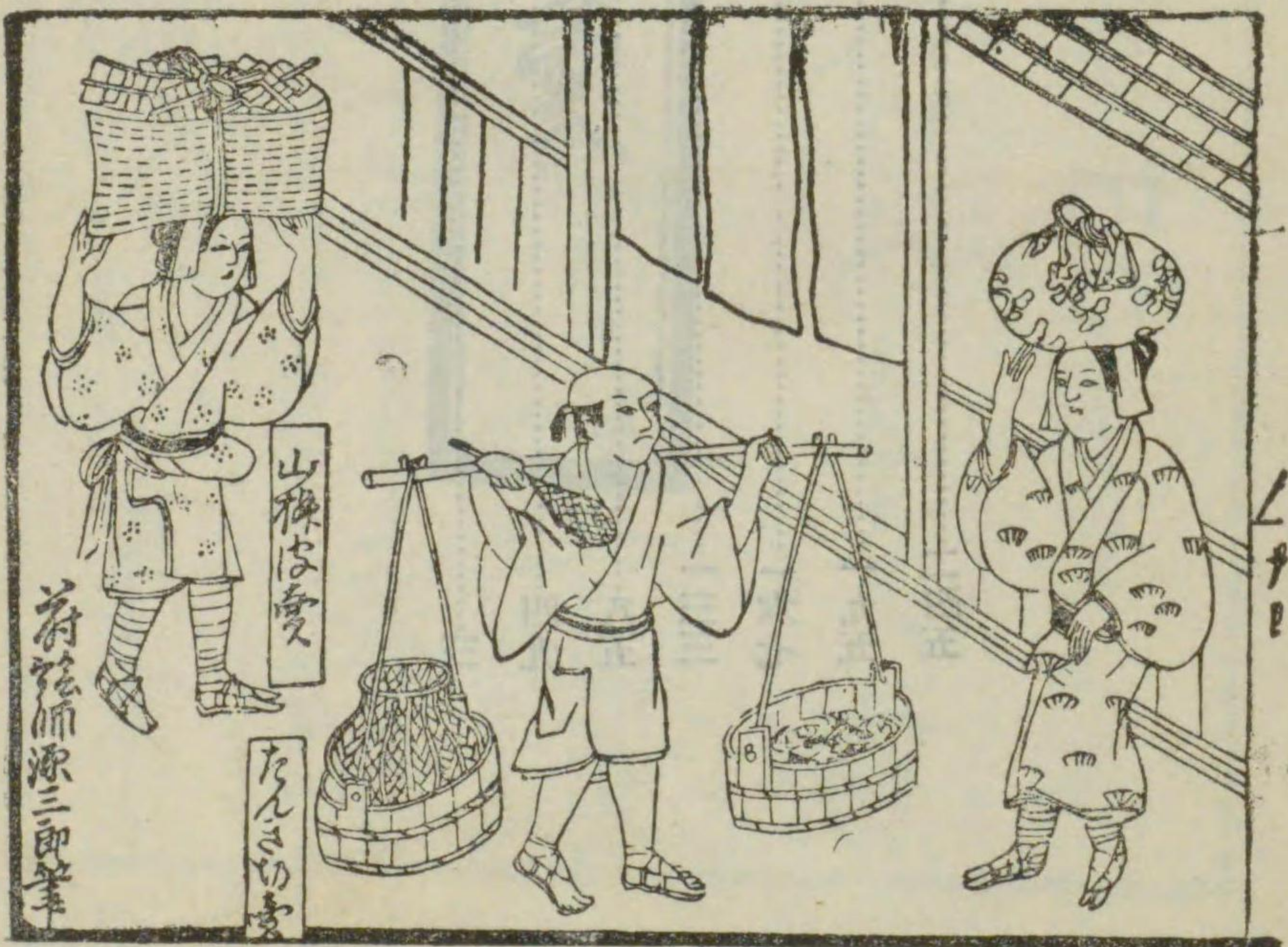
が、同書の繪は、一二の巻二冊と三四五六の巻四冊とは、全然筆意が異なつてをり、どうしても二人の畫工によつて畫かれたものである事が窺はれる。然れば源三郎はどちらの方を畫いたかといふに、當然名の刻してある三の巻以下を畫いてをるやうに思はれるけれど事實は之に反し、一二の巻の方が源三郎の筆で、三四以下は別人であると思はれる。然れば何故に二の巻の終りに源三郎の名を入れなかつたのか、又何故に他人の畫いた三の巻にわざと源三郎の名を入れたか、斯う穿鑿立をして來るといよく迷宮に入るばかりである。或は「人倫訓蒙圖彙」には、源三郎の名のないものがあつて、名のあるものは後摺でないかといふ説もあるが、流布本は大概在名のもので、其原版本といふものをまだ見たことがないから、其疑ひを解く事が出來ぬ。しかし同書中源三郎が畫いたものありとすれば、「類考」はじめ一二の巻の繪を源三郎の筆と認める人が多いやうであるから、こゝには其説に従つて一二の巻を源三郎の筆意と假定する。云々と云つてをられる。蒔繪師源三郎に就ては私は少しも知識が無いが、卷三の署名に就ては著者が署名するならば初めか終かに爲すべく思はれるが(現代から考へて)妙な所へ落款を一處加へたものである。全部繪が出来上つてから何等かの必要有つて落款を加へたとすると彼の三卷の處にしか落款を加ふべき處が七冊中何處にも無い。之は私は水谷氏の論を見ぬ先から考へてゐて、此落款には疑問を存してゐる。と云ふのは此本は水谷氏はまだ見ぬと云はれた無款本が即ち帝國圖書館に在り、此底本とした。又京都帝國大學附屬圖書館に收藏せられて有る。一見初摺のやうな心地のする本である。然すると同氏の云はるゝ源三郎の在名のもの

は後摺と云ふ或人の説は正しい説かと思はれる。さすると彼の落款は何かの必要上で後に加へたものかと考へられる。後から加へたとすると彼の處以外は加ふべき餘地が七卷を通じて無い事は前述の通りである。然し其以上其繪に對して何れを源三郎と定むるかに就ては後日の研究を待つ外は無い。又外に云ふべき知識もないから、水谷氏の説に賛否を表する事は出来ぬ。落款の木理を調べて見たら或は後より入れたか如何の點は知り得るかも知れぬが今落款のある原本を見る事を得ぬから何ともする事を得ぬ。只落款は後に加へたものらしいと云ふ事と、初摺本と見ゆる本に無落款の物が現存してゐると云ふ點を述べて置くのみである。此複製本は帝國圖書館本に據つた事は前述の如くである。同館の厚意を感謝する。猶又參考の爲に卷三の落款の有る處を稀書複製會本によつてこゝに掲げた。

此複製本は帝國圖書館本に據つた事は前述の如くである。同館の厚意を感謝する。猶又參考の爲に卷三の落款の有る處を稀書複製會本によつてこゝに掲げた。

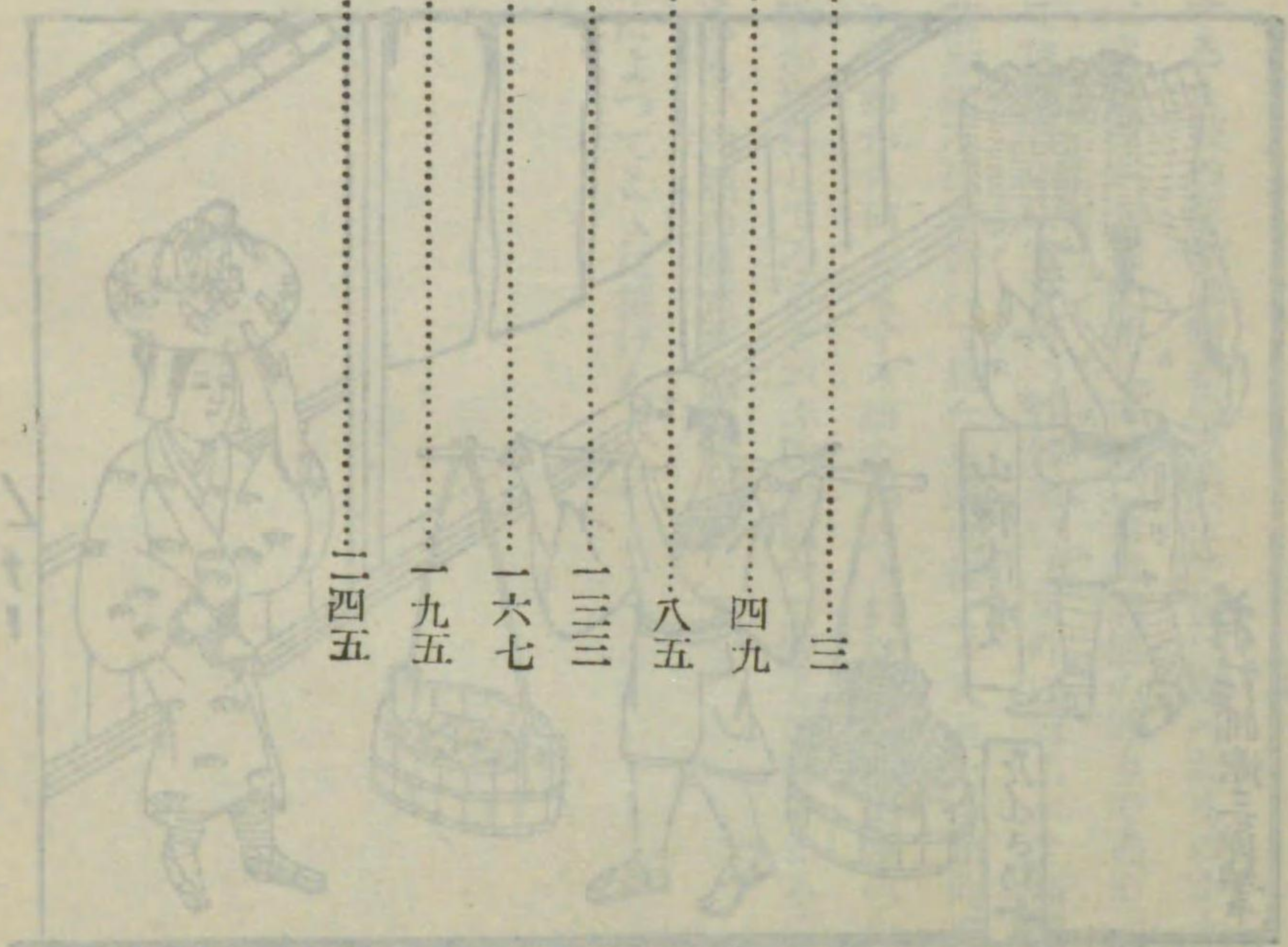
人倫訓蒙圖彙目次

- 一 (前入巻)
- 二 (前入巻)
- 三 (前入巻)
- 四 (前入巻)
- 五 (前入巻)
- 六 (前入巻)
- 七 (前入巻)
- 八 (前入巻)
- 九 (前入巻)
- 十 (前入巻)
- 十一 (前入巻)
- 十二 (前入巻)
- 十三 (前入巻)
- 十四 (前入巻)
- 十五 (前入巻)
- 十六 (前入巻)
- 十七 (前入巻)
- 十八 (前入巻)
- 十九 (前入巻)
- 二十 (前入巻)

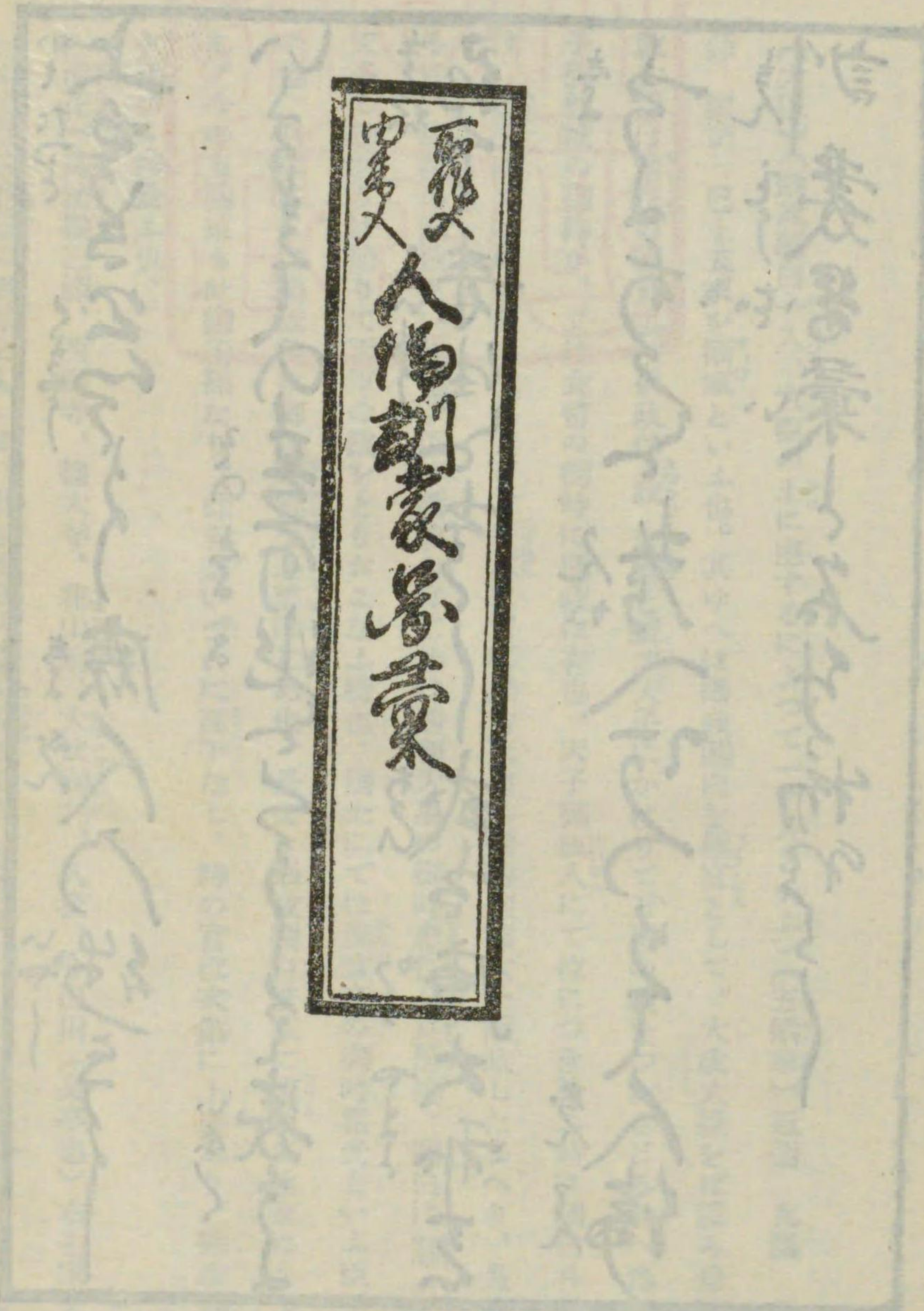


人倫訓蒙圖彙目次

一 ..... 三  
二 (能藝部) ..... 四九  
三 (作業部) ..... 八五  
四 (商人部) ..... 一三三  
五 (細工人部) ..... 一六七  
六 (職之部) ..... 一九五  
七 (勸進餉部) ..... 二四五



人倫訓蒙圖彙





右の外に大臣家といふ家有。三條、西三條、中院是也。惣じて大臣にいたる家十五家有也。委は職原諸抄に見へたり。

【卿】(大納言、中納言家は羽林、名家)羽林家といふは先祖より近衛司を經、少將中將より昇て中納言大納言にいたり、三儀を極として武官を兼て劍笏を帶する家也。大納言にいたりぬれば大臣の與奪によりて節會、官奏、叙位、除目以下の公事を行也。

【羽林家】四辻、中山、飛鳥井、冷泉、六條、阿野、清水谷、小倉、橋本、松木、姉小路、綾小路、庭田、持明院、川鱒、滋野井、水無瀬、園、難波、白川、四條、鷲尾、山科、西大路、油小路、已上二十五家也。名家先祖より文章をたしなみ、手跡をみがき、儒道をまなび、弁官を經て節會等之職事を兼る家也。此ゆへに才名をもつて家を立る也。

【名家】日野、廣橋、烏丸、柳原、甘露寺、葉室、万里小路、勸修寺、中御門、清閑寺、小川坊城、竹屋、已上十二家也。

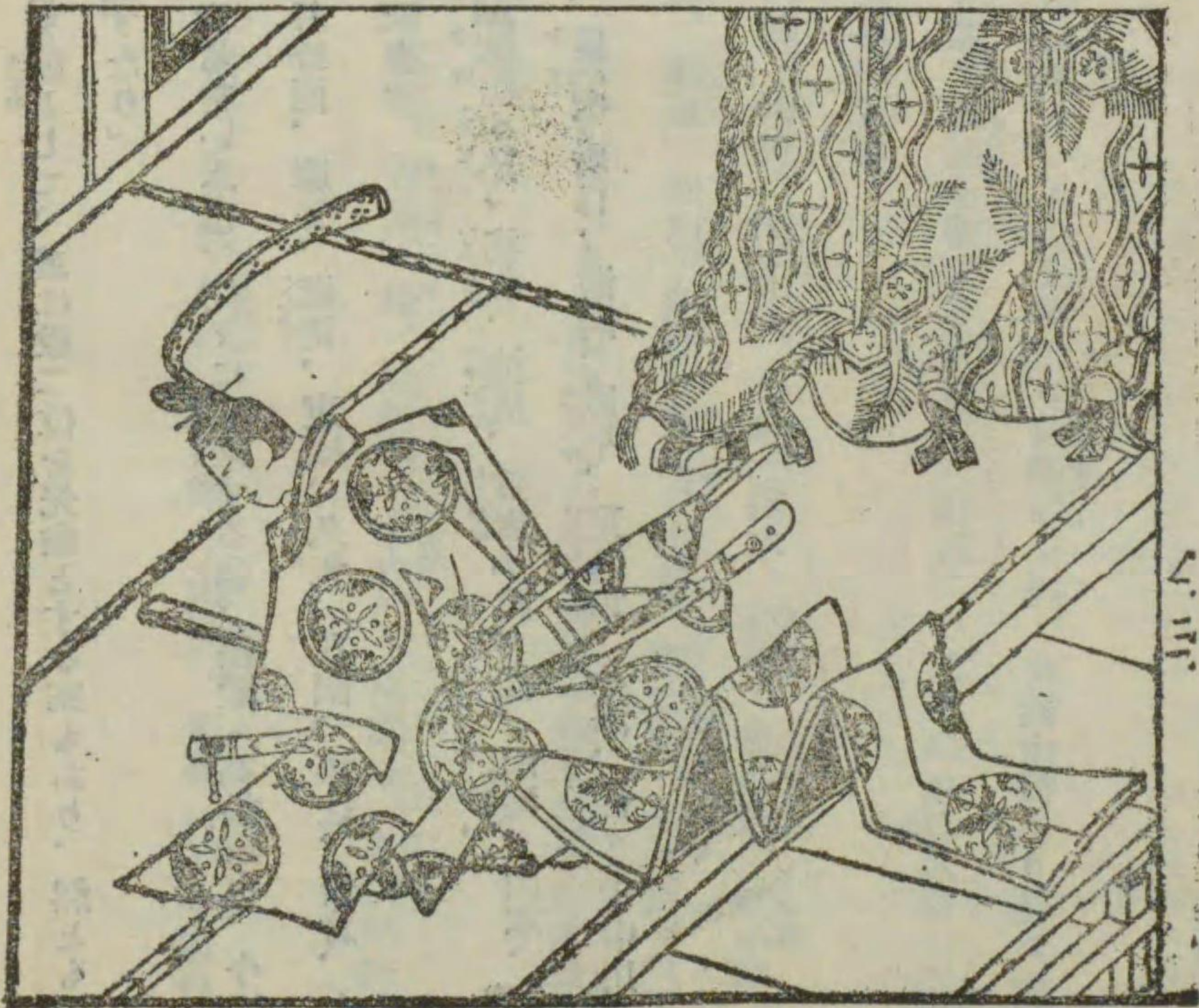
【羽林名家之外】高倉、高辻、五條、坊城、唐橋、五辻、竹内、富小路、土御門、舟橋、已上十家也。

此中にも名家同し家もあり、又は大中納言を極として、或は散二位を先途とする家もあり、然とも少中將弁官を經ざる輩は暫名家羽林之外に記すなり。

【新家】といふ家あり。本家より分て家を立るをいふ也。代々に出來する也。松殿(高松家也、今はなし)藪内、堀川、樋口、平松、下冷泉、日野西、藤谷、櫛司、東園、久世、花園、裏辻、岩倉、七條、梅園、千種、鹽小路、倉橋、已上十九家也。

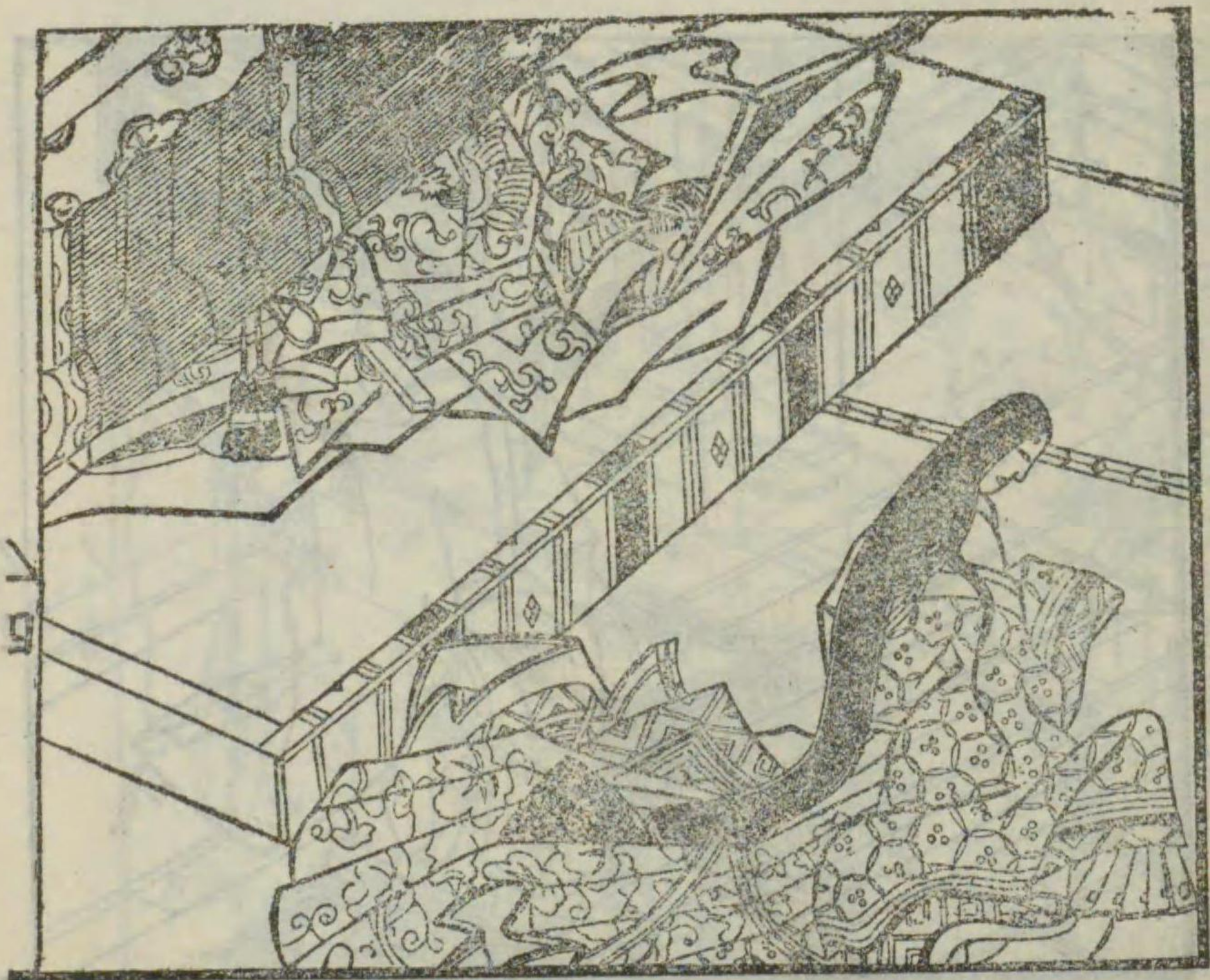
【又】野宮、大宮、伏原、押小路、裏松、勘解由小路、梅谷、池尻、武者小路、桂、田向、山本、交野、蘭池、芝山、長谷、町尻、若江、龜谷、愛宕、町口、滋岡、風早、東久世、小澤、佐々木、中川、細野、葛岡、已上二十九家也。

【内侍司】尙侍此間二人有。位相當從三位也。禁中諸事内證にて御門へ奏聞申事、又は下へ仰出さるゝ事をつかさどり、其外禁中の禮式命婦等をえらぶ役也。内侍の第一を勾當内侍といふ也。長橋の局に居するゆへに、長橋の局とも申也。勾當内侍勅奉りて書出す文を女奉書といふ。出家醫師等の官位は大形内侍の取次にて上卿へ申傳る也。此外典侍四人、掌侍四人是もつかさどる事内侍に同じ、しかれども御門へ奏聞申事、又勅をうけて申出す事をばせざる也。是内侍におとれり。上藤、小上藤、中藤、下藤の品あり。上藤は二位三位



典侍をいふ也。是は御門の御陪膳にまいらるるなり。小上藤公卿の女をば善悪をえらばず小上藤といふ也。中藤内侍の外、織物類を着せざる也。侍従女已下也。諸大夫良家より下醫陰道の女を中藤といふなり。八幡別當のむすめ凡一切者多くは中藤の品也。下藤は諸侍、賀茂、日吉等の社司等が女なり。凡女房は上藤、小上藤、内侍の外、夜御殿にいらす。朝餉の内いらす。只中藤は朝餉の縁をわたる。下藤はわたらす。御服に手をふれず。

【女嬬】式法百人あり。職原抄御所中の掃除、さし油等の役也。其外得選、采女、刀自、雑





仕、上童、下仕等さまぐの女官の品々職原抄に詳也。こゝに略す。

【奥様】御方様、公家の内室家務様といふ也。

【御前様】武家大名の内室【若君】若殿、

公家、武家、共に幼少より家督をうけとらるるまでをいふ。

【御見】公家の子息十五よりうちをいふ。【姫君】公家、武家同じ。

【御料人】諸侍の娘を云。

【御乳人】公家には名をつけてよぶ也。たとへば久御乳人、誰御乳人などよぶ也。【妾】平人。

【御左進】公家、武家同じ。

【茶小性】公家、武家同じ。

【御腰元】公家、武家、平人とも通じていふ也。

【御物師】公家、武家同じ。

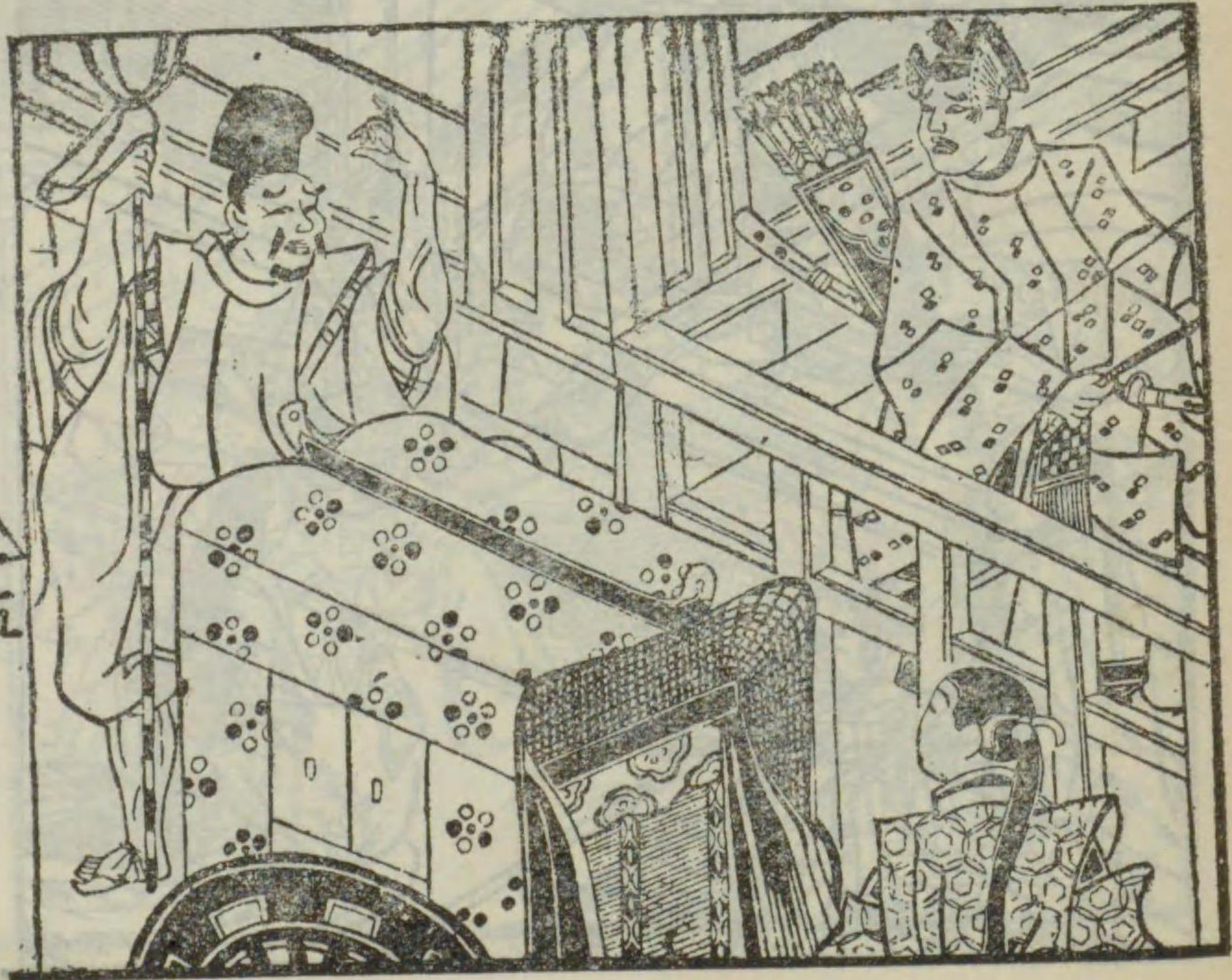
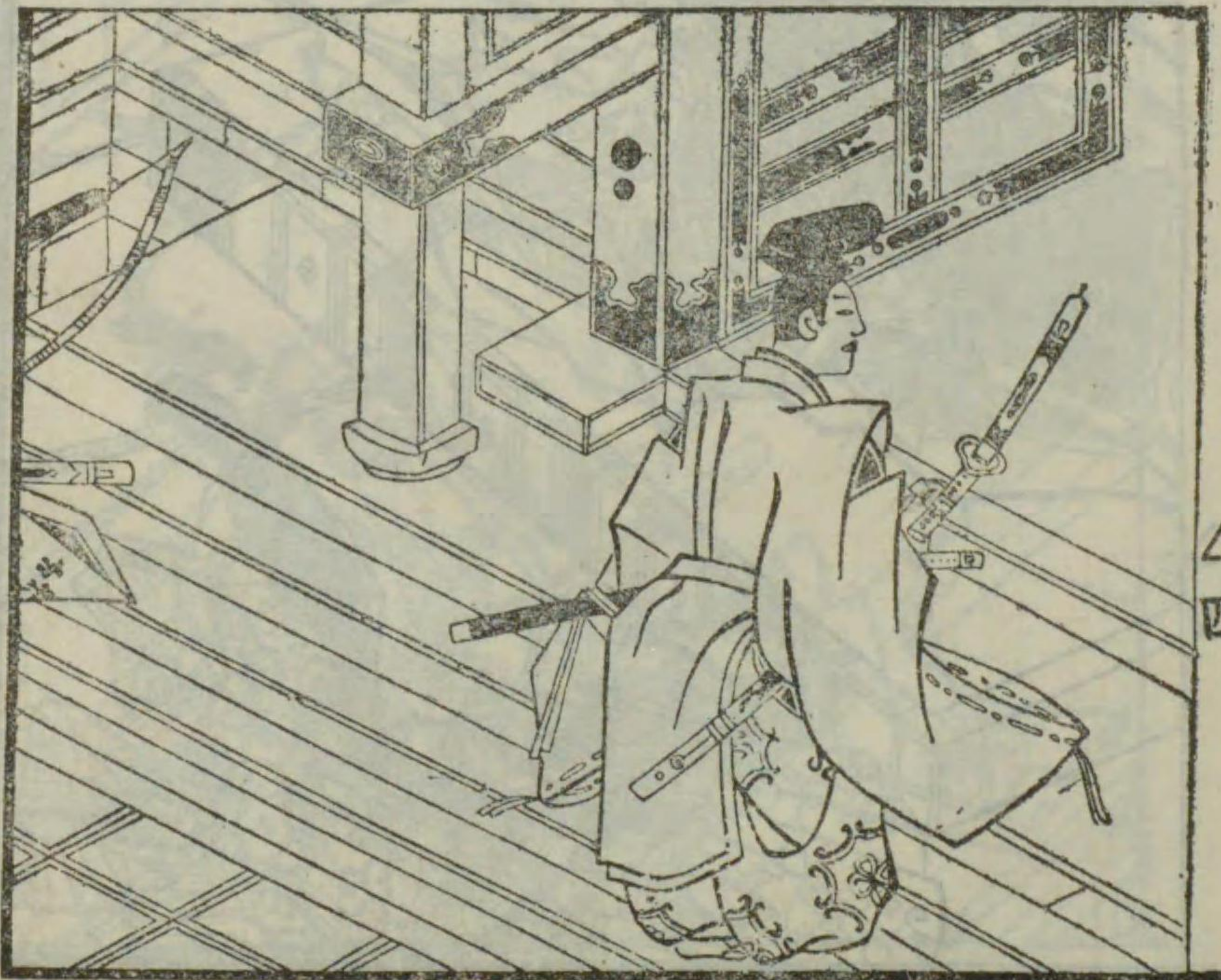
【物縫】平人、おいま同。

【茶間】公家、武家同じ。

中どをり、御すゑ、御はした、公家、武家同じ。

【下女】平人、はす葉、京、大坂問屋の召任下女也。

女道具略す。女用訓蒙圖彙にみえたり。



【小兒】みどりこ、やま、

【嫗】うば、姑、隱居、

【祖父】翁、舅、

【御父】里の親なり、

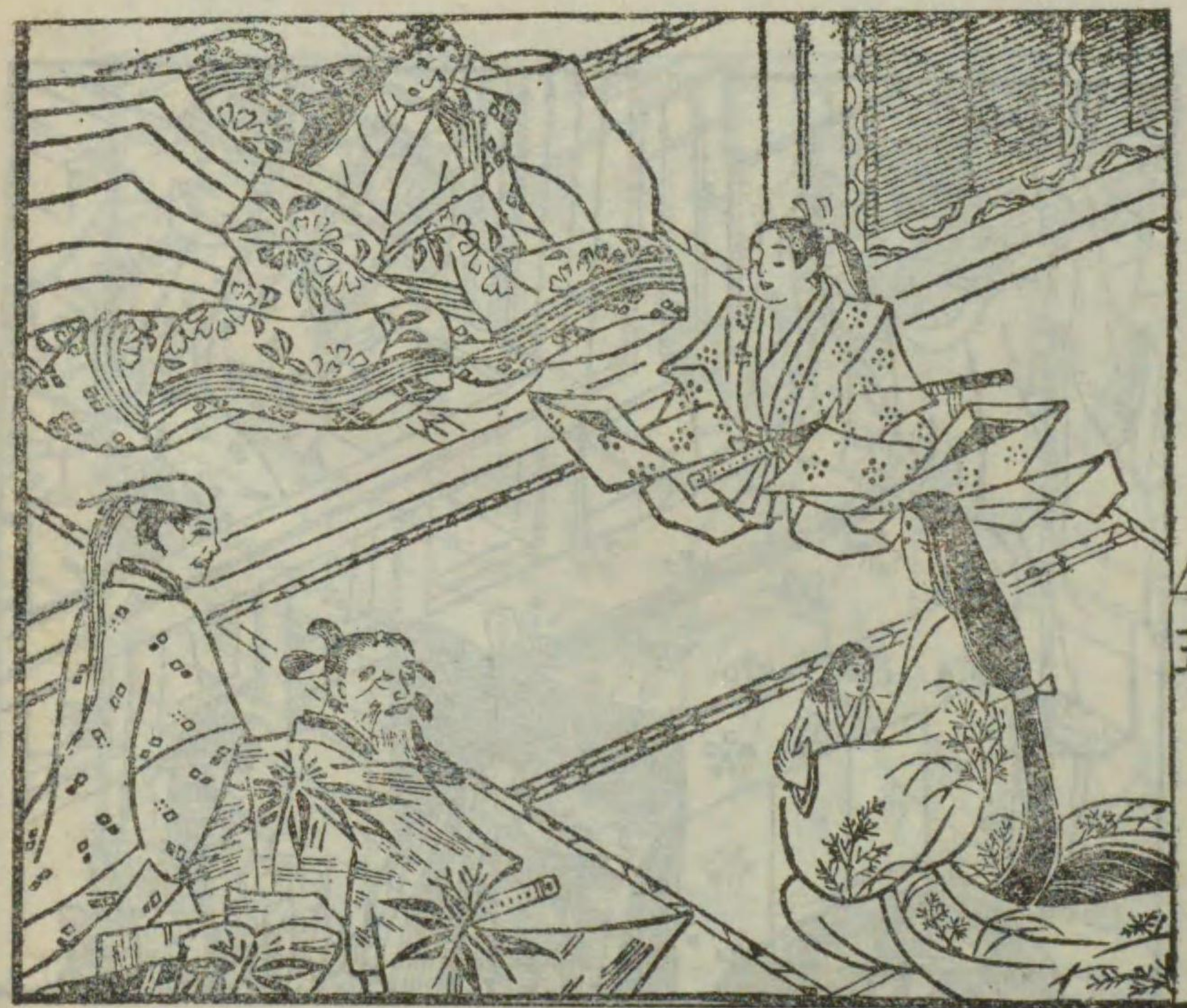
【乳人】乳主、

【烏帽子親】名付親、

【鐘付親】筆親、

【師匠】師の坊、むかしは山寺などへ學問に上る事法也。それによつて片出舎にては俗の師匠をも師の坊共いふ也、

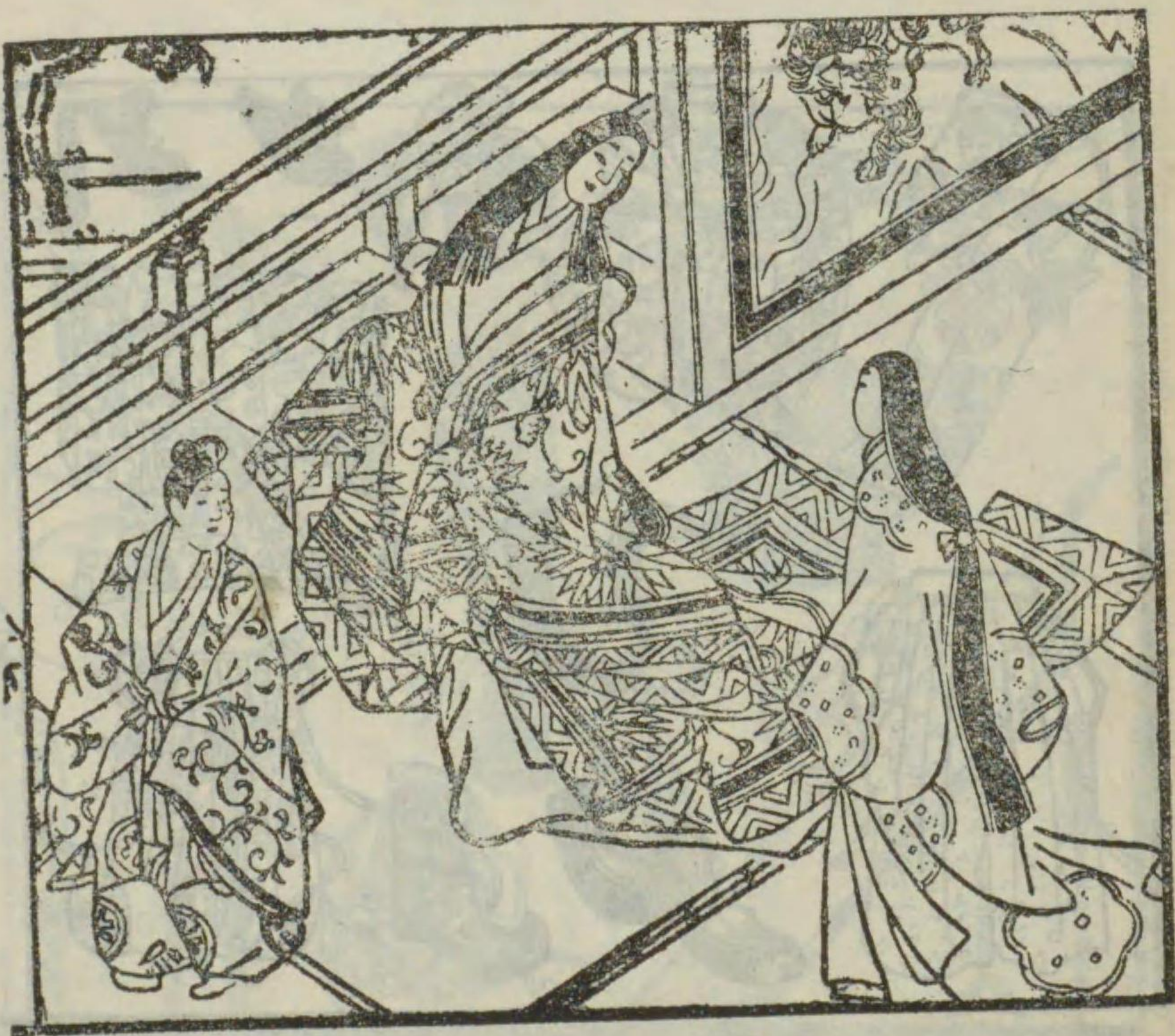
【道具】公家、武士、僧の部におゐて其道具を圖にあらはす。并に是をつくるもの職人の



部にをゐて是を除、其意はこゝにあらはすをもつて也。【冠】薄額、厚額といふ事あり。淺

官と若年の人はうす額をもちゆ。但十六已後も薄額をもちゆる事故實也とかや。厚額は大臣の時着す。【烏帽子】にはもろ額などいふ式法あり。惣じて公家所用の法式は有織の秘事など有事なればあさはかにいはぬ事なるゆへ大概をしるして略の事あり、

【袍】地は志々良の綾也。色は黒し。但五位、少將、中將は緋の色なり。宿老の人は屐目の綾をする也。織文は丁子の丸杏葉たすき也。攝政關白のは雲立浦、大閤の召は雲に鶴なり、



【下襲】袍の下に着する物なり。表は白綾紋に  
さまざまの事あり、白粉張にしてみがきたる  
もの也。うらも綾にて色は黒し。黒色に品々  
有。織紋は遠菱也。是も豎菱、横菱の子細あ  
り。此外に半臂、袖、單、大帷、赤、大口な  
ど百装束なり。委記がたし。

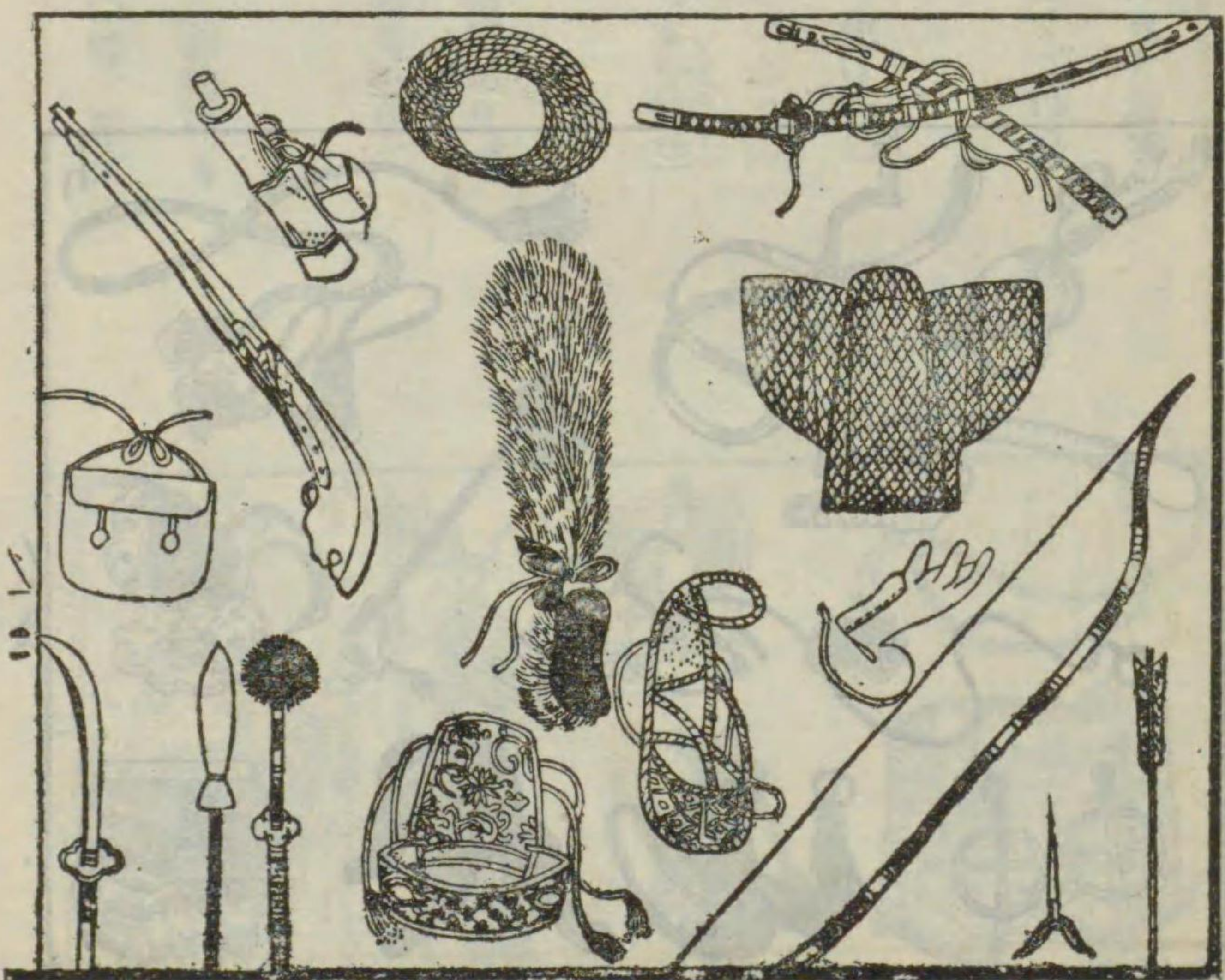
【裾】下襲のうしろの裾也。むかしはつゞけ  
たるが着するに、きにくきゆへにきりはなし  
て、うしろより腰にあてたるもの也。表裏地  
紋一ツとして下襲にかはる事なし。長短のか  
はりは高官程長し。【表袴】色は白く縮線綾紋  
にさまざまあり。大納言、大臣等の大將を兼



二二

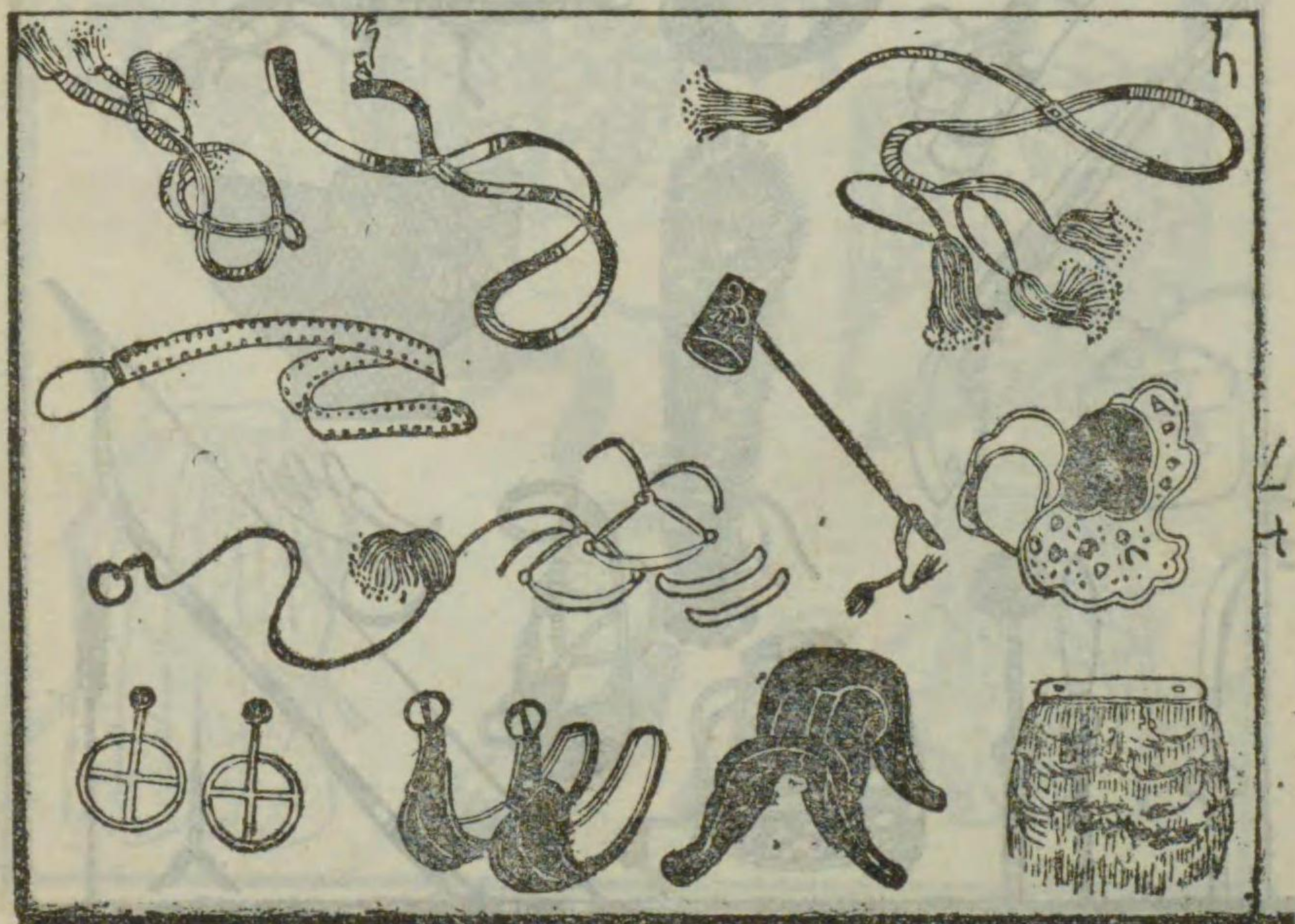
ざるときは豎紋の藤丸を着す。裏は絹、色は  
紅なり。【襪】練貫の小袖を着する時は練貫  
をもちゆ。宿老の人は平絹の練張たるをもち  
ゆるなりと云々。

【履】鼻切沓、浅沓等の品あり。靴是を俗に  
は靴の沓といふ。赤地の錦にてつくり、帯は  
塗皮をもてつくり、黄金の金物あり。是を深  
沓といふ也。節會の弁或は御幸供奉の時是を  
もちゐらるゝと也。【笏】木にて作る。象牙に  
ても作る。忘れましきと思ふ事は笏に書付る  
事故實なり。【太刀】鞘にさまざまあり。或は  
蒔繪、或は螺鈿、或は枕紫檀にもする也。其



二三

拵こしらへやうによつて名かはれり。委くましるしがたし。【平緒ひらなご】太刀を帶たいするとき前につくる也。色にさまあり、帶する所の太刀によりてかはり有。縦たてば蒔繪まきゑの太刀には紺地こんぢよろしきといへり。螺鈿らでんのときは紫を用る也。外に品々有中にも鈍色にじいろは凶服の時用る也。諒闇りやうあんのとき鈍色の平緒ひらなごなり。【石帶いしのおび】記録には只帶ただおびと斗たうしるせり。有文巡方帶うもんじゆんほうのおび、無文巡方帶むぶんじゆんほうのおび、有文丸鞆帶うもんまるたものおび、無文丸鞆帶むぶんまるたものおびなど、てかはりあり。是も帶たいする處の太刀によつてかはれり。【指貫さしぬき】紋は藤丸、色は紫、又は萌木色淺黄をも着する也。又下袴したのよかと云ものあり。略す。【直衣ただい】浮紋織物にうら有物也。色はさまざまあり。烏帽子くわぼうしに直衣ただいを着する。大納言以上院に参らるゝ時の装束也。但勅許ちやくきょなくては是を着せずとかや。内證うちしょうにては子細なし。



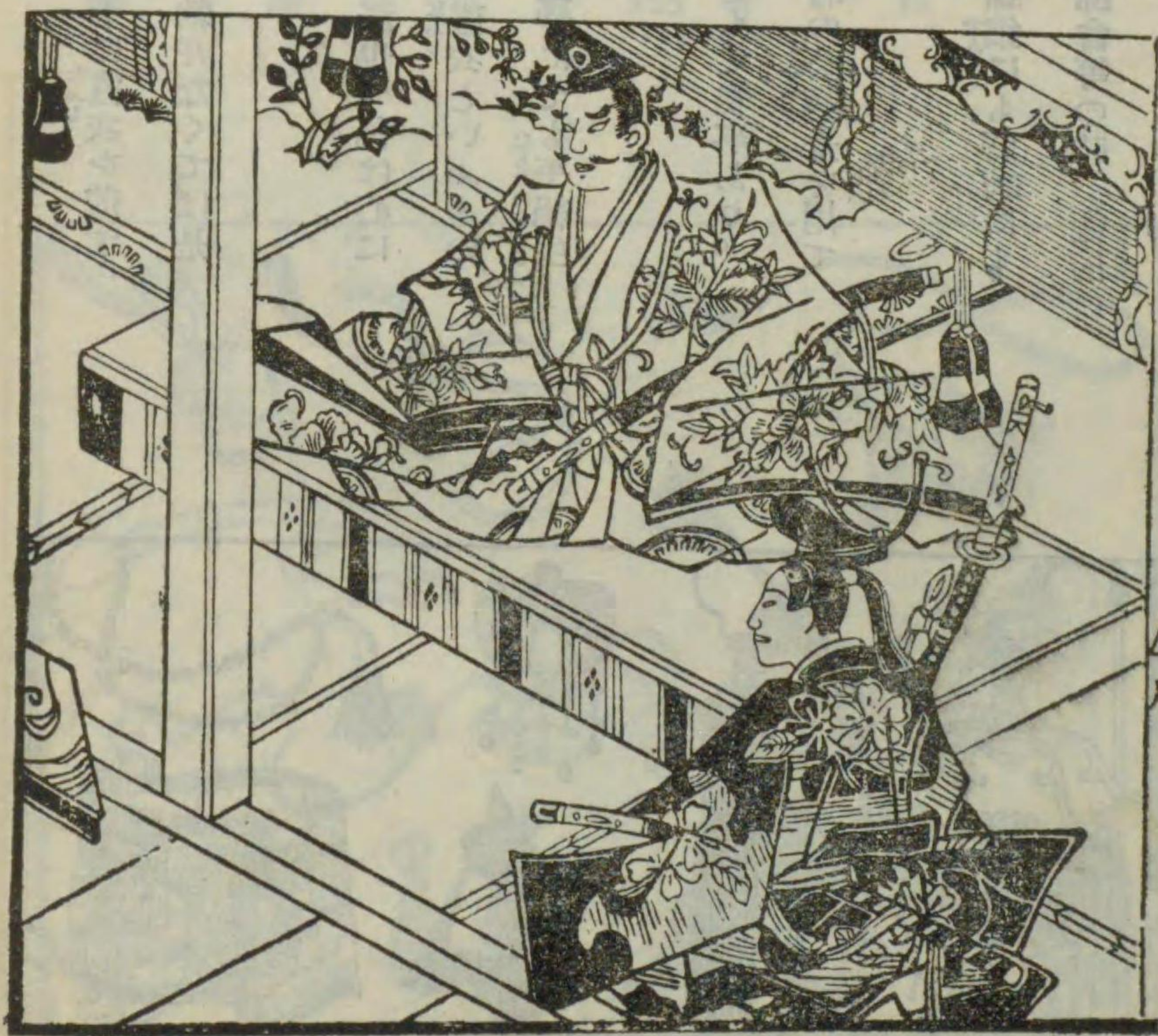
【狩衣かりぎぬ】浮紋の織物、裏は表の色を用る事故法也。色は心に任す。若年の人は紅梅崩木をも着ず、又狩衣直衣かりぎぬただいといふものあり。是を小直衣こななせともいふ也。略す。【水干すみかん】紗さらにても平絹生ひらぬまぎにてもする。色も何色にもするなり。

【弓ゆみ】蒔繪まきゑにする若年の人は紅梅の相紙あひしをもて卷事あり。宿老の人は白紙はくしをもちゆ。行幸ぎやうきやうの時は衛府ゑいふの公卿くみきやう是を用て供奉する也。

【胡籙こだく】平胡籙ひらこだく、壺胡籙つぼこだくあり。木ま地ぢにもし螺鈿らでんにも蒔繪まきゑにもする也。行幸ぎやうきやうの時是を用ゆ。壺胡籙つぼこだくは讓位じやうい節會せつゑ等の時、衛府ゑいふ



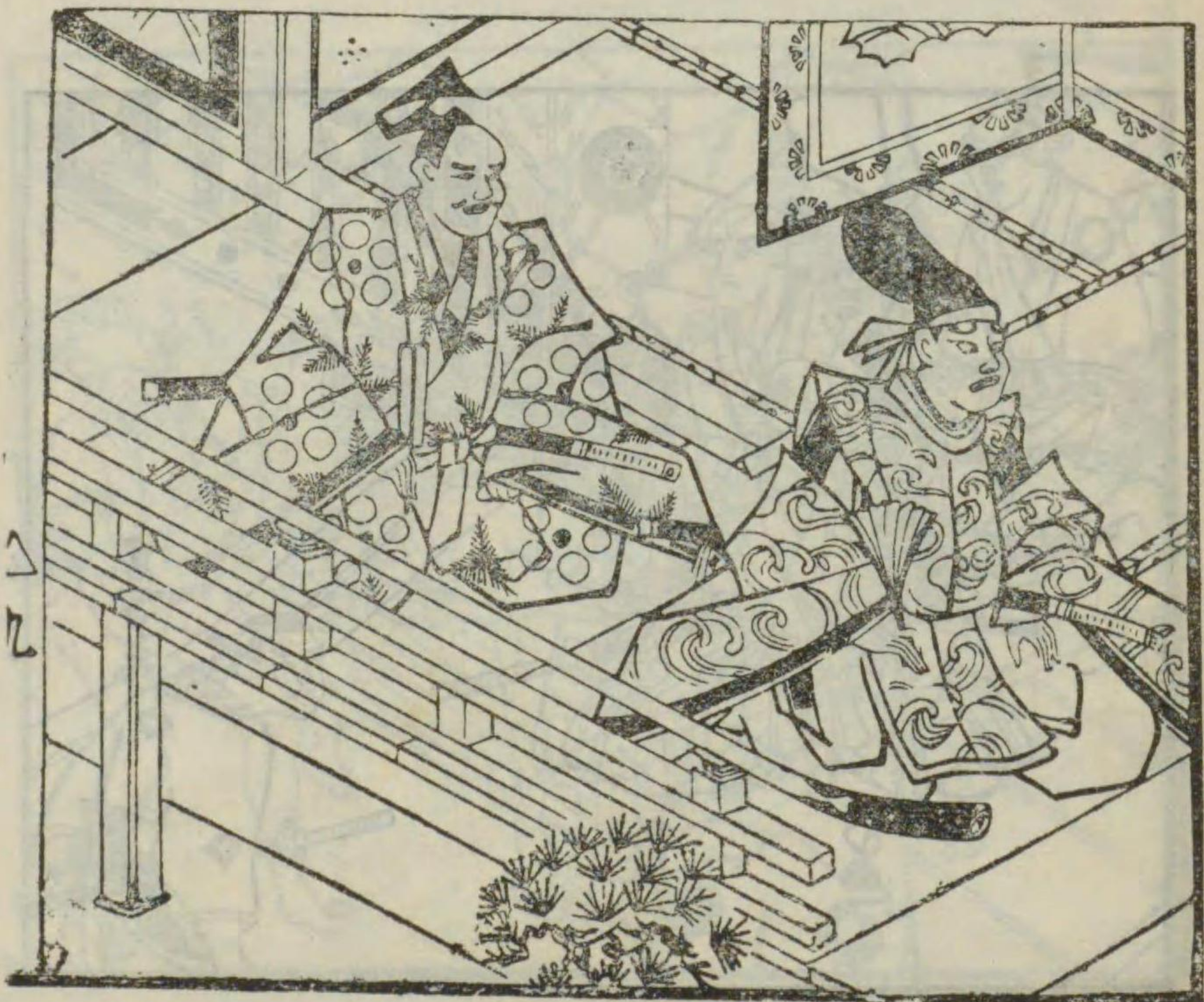
の公卿帯せらるゝ也。



【箭】や 管さきを水精すいしやうにし鷹の羽をもつてする也。

紅梅の紙、又は白紙を以て巻なり。箭の數平  
胡錄には廿一筋、壺胡錄には七筋なり。

【車】くるま 檳榔毛車、檳榔扇指、唐庇、半蒨、網  
代等の名あり。皆高下有事也。小八葉、大八  
葉といふ事もあり。車のかざりによつて名あ  
り。車の簾錦縁、紫織物蘇芳末濃縷細端の  
帖たみなど、乗人の束帶きたいの品によつて車にも高下  
あり。簾は小簾、下簾等有。四緒、五緒、七  
緒などゝて簾に付たる具あり。委記がたし。  
右の道具圖彙にあれば略す。



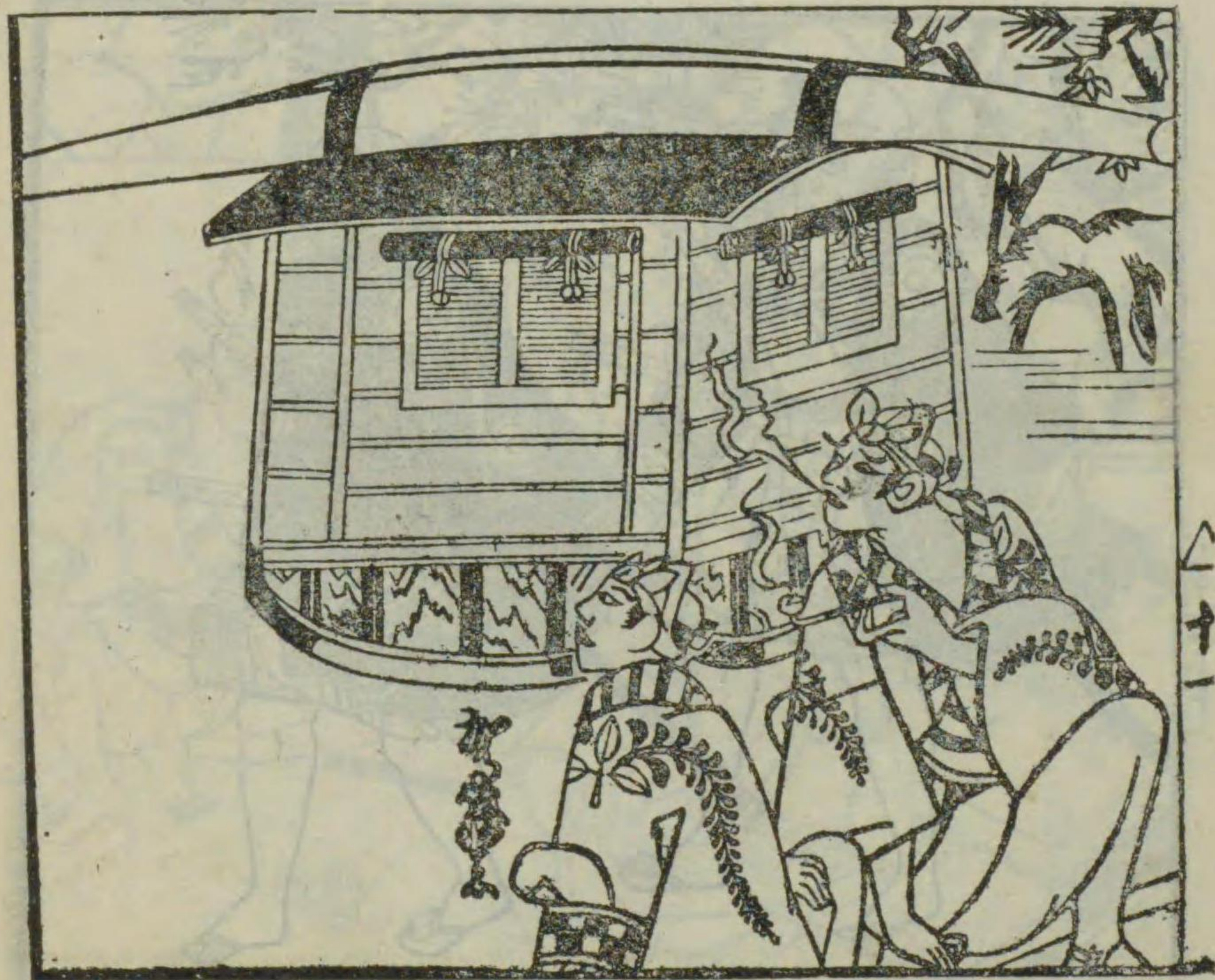




して所務をおさむる也。是第一慈悲にして無欲成を上とす。私欲をかまへ賄にふけり依怙をかまへ民を貪れば主君をして悪名の主となし民つかれ國やぶるゝもとる也。

【横目】(めつけとも)天命をわきまへ理非分明成をよしとす。横目たる道は少き國法に背とも人に害なく、主君のためにあしからぬ事をば大めにみなし、人の告事を用ざるを上とす。頭を大横目と號す。

【使者役】は公界に出す第一の面道具なれば其器量をえらび、發明にして弁舌あざやかにて禮式をしり、文字をしりて片言をいはざる



を上とすべし、奏者又同じ。

【使者役】は公界に出す第一の面道具なれば其器量をえらび、發明にして弁舌あざやかにて禮式をしり、文字をしりて片言をいはざる





【大小性】大形使者やくをする也。依て器量を撰なり。禮式には長袴を着するなり。家中主君へ目見の時取次役は大小性なり。但家によりて替有歟【中小性】あながち器量をえらはず時によりて此内より使者役をする事も有。兒小性上りの中小性は風俗かくれなし。

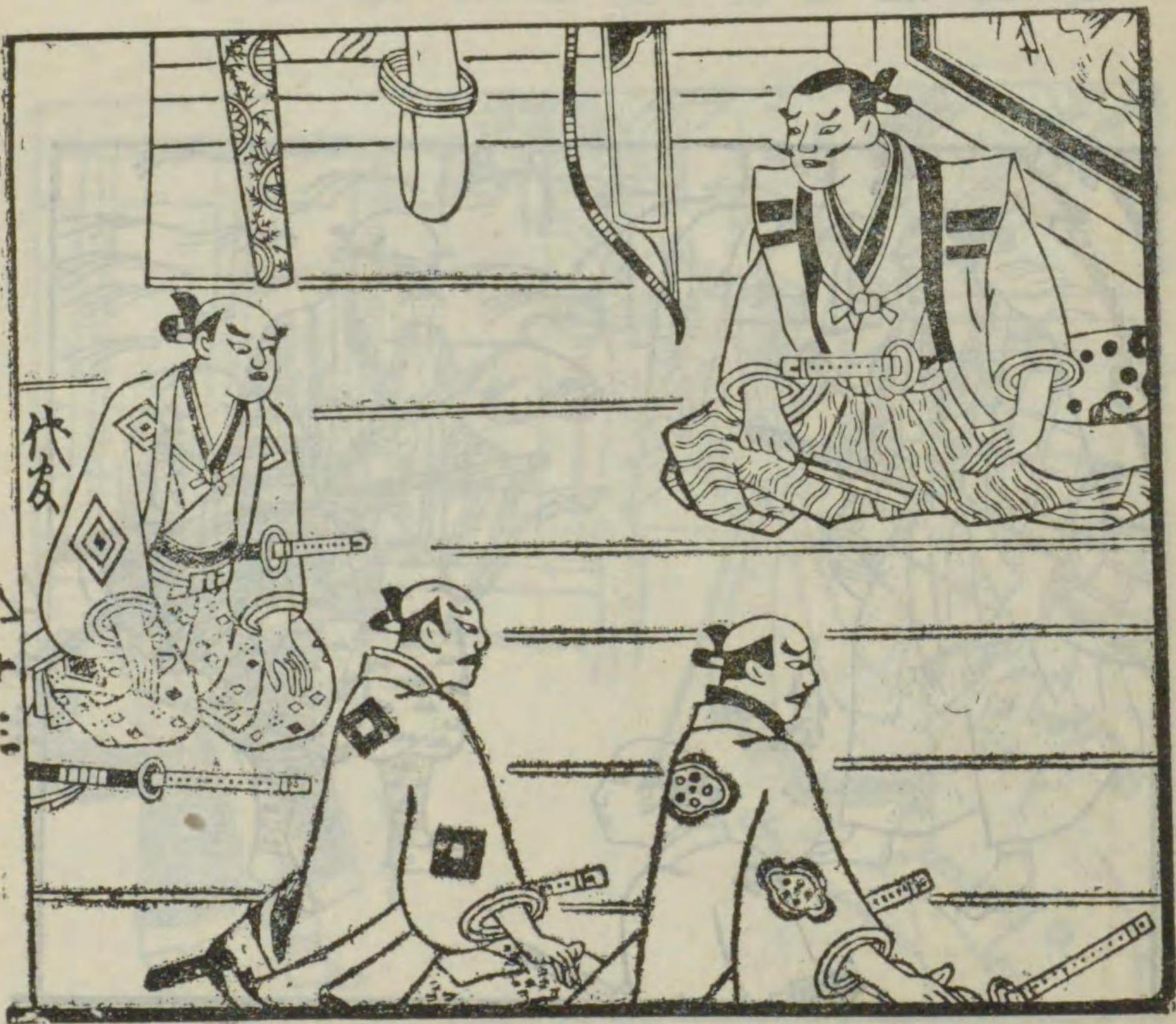
【兒小性】能人のひざもとにて召仕事主人たる人には上中下にしたがいて兒小性有。まして大將たる人にはなくてかなはず。

【馬廻】主君騎馬のまはりをかこむの謂なり。平世は使者取次役にはあたらす、番役を



二四  
二二

なし諸事奉行役又は郡奉行代官等の職、馬廻の中よりつとむるなり。



二五

【歩行者】供奉を第一とする役也。普代の侍筋も撰も有、渡侍をかゝゆる主人もあり、供前の押立なれば背高く、大男をよしとす。惣じては糸鬘に長羽織備て有一力身いづれかくれなき風俗ぞかし。【茶堂】茶は君子のもてあそびとして漢家本朝にあり、中世にいたりて其法式定りて家々の傳あり、尤わきまへしるを茶堂の道とす。第一たしなむべきは爪はづれ衣類の麁相はさもあらばあれ、垢つかずして清きをたしなみとす。【別當】馬あづか



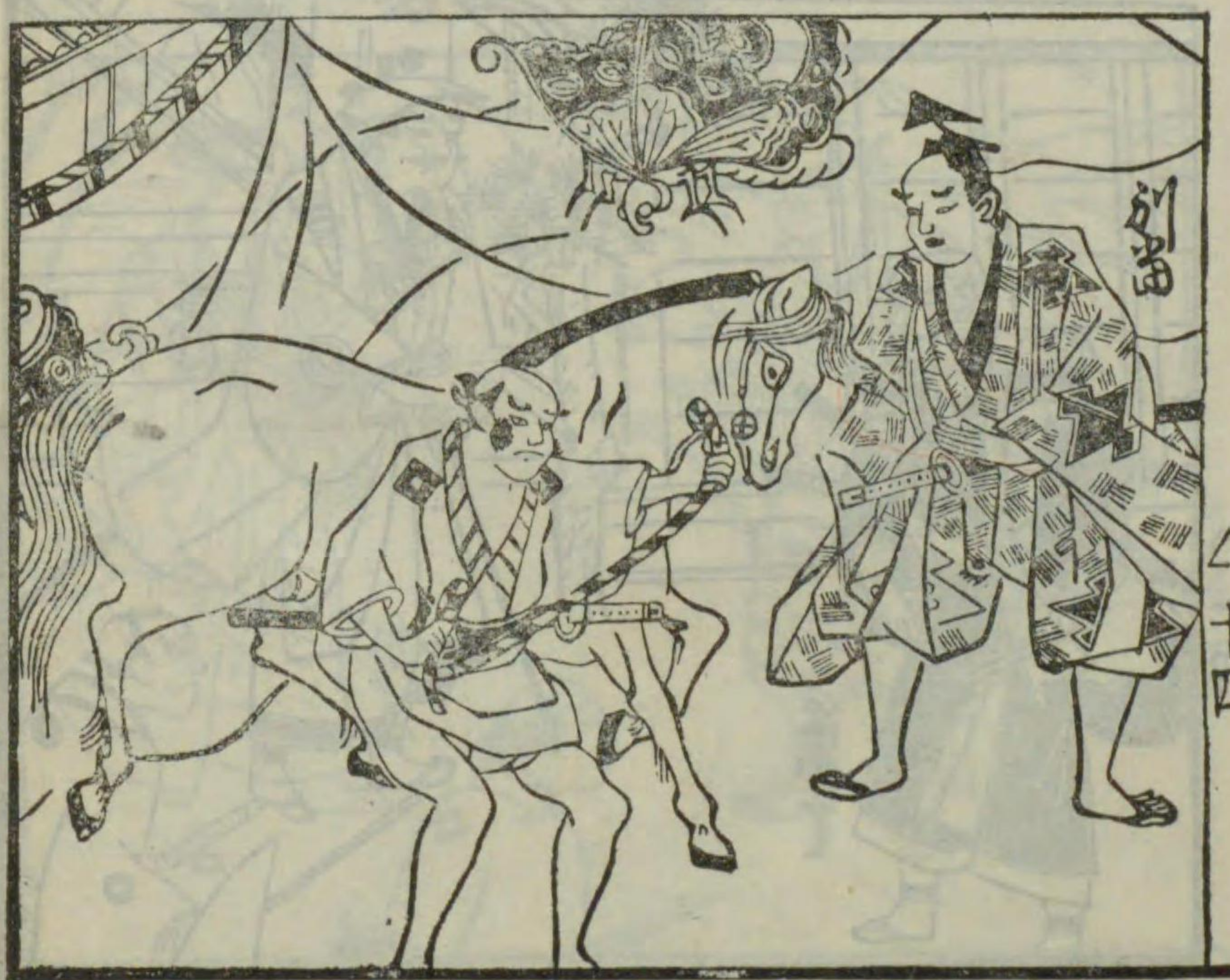
り也。并馬執の惣大將なり。多くの馬をあづかるゆへに馬草、糖菓、薪をはじめ一切馬にもちゆる程の物をば主人より別當の方へ請こむなり。然ば此役も私欲虚妄をつゝしみ、晝夜に馬の安非を心かけて能養を道とす。【弓者】鉄炮者つねは番所の番をつとむ。これを持筒といふ。其躰白衣に木綿羽織をきる、主人の家風によりて羽織は主人よりきする也。其頭五百石、千石までの侍、或は弓二十人鉄炮十人などゝあづかるゆへ、羽織には其頭の紋をつける家法も有。又大將の下にあつかりあり。是を小頭といふ。是は其中にて久功



の者をえらびて此役になすなり。

【駕籠者】京六尺をよしとす。上のかき手といふは茶碗に水をいれて駕籠に入置きまゝのかきやうをつくすに、其水少もうごかぬ程腰肩のすはりたるを上の搔手とす。六尺といふは乗物の棒六尺の寸法ゆへにいふとかや。

【挟箱持】しつとふり出すより足取の諸拍子、臂肩腰のすえやうあり。下馬さきのすへおろしは一拍子にして少もおとのせぬを上とす。下の挟箱といふは山伏の札くぼりの供、藪醫者の下人、草履取と二役をするたぐひはかたげる一種の思爲なり。



二八  
駕籠

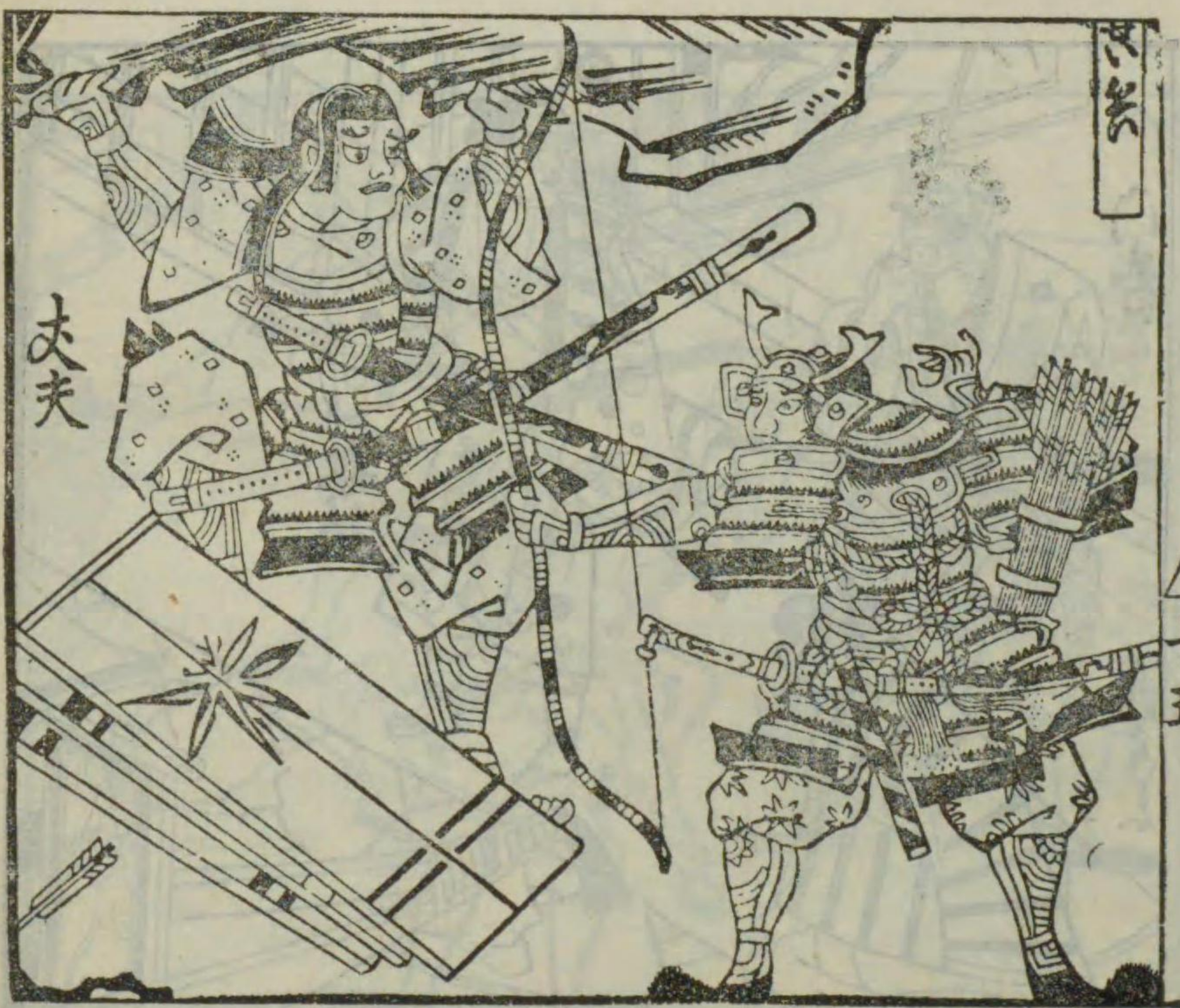
【藪醫者】山伏の札くぼりの供、藪醫者の下人、草履取と二役をするたぐひはかたげる一種の思爲なり。



二九  
門番

【鑓持】大鳥毛、對の道具、かゝり第一の者なれば、大男にしくはなく、もみ鬚に毛巾着、足拍子一風あり。何も丈夫のたぐい達者を第一とする、道中におゐて鑓かたげて馬に乗たるは面目もなき次第なる。【草履採】小草履採、藁笠草履採、あゆむにうしろへ手をそらし、ひげを重寶せらるゝ。小草履とり主人ちかくめしつかわるゝもあれど、白めなるものま黒き半糸り風俗ばしなり草履なをす品々あるよし。

【立笠臺笠】もみひげに大男、尻の大きなを上とす。もちやうにさまぐのならひあるよし。

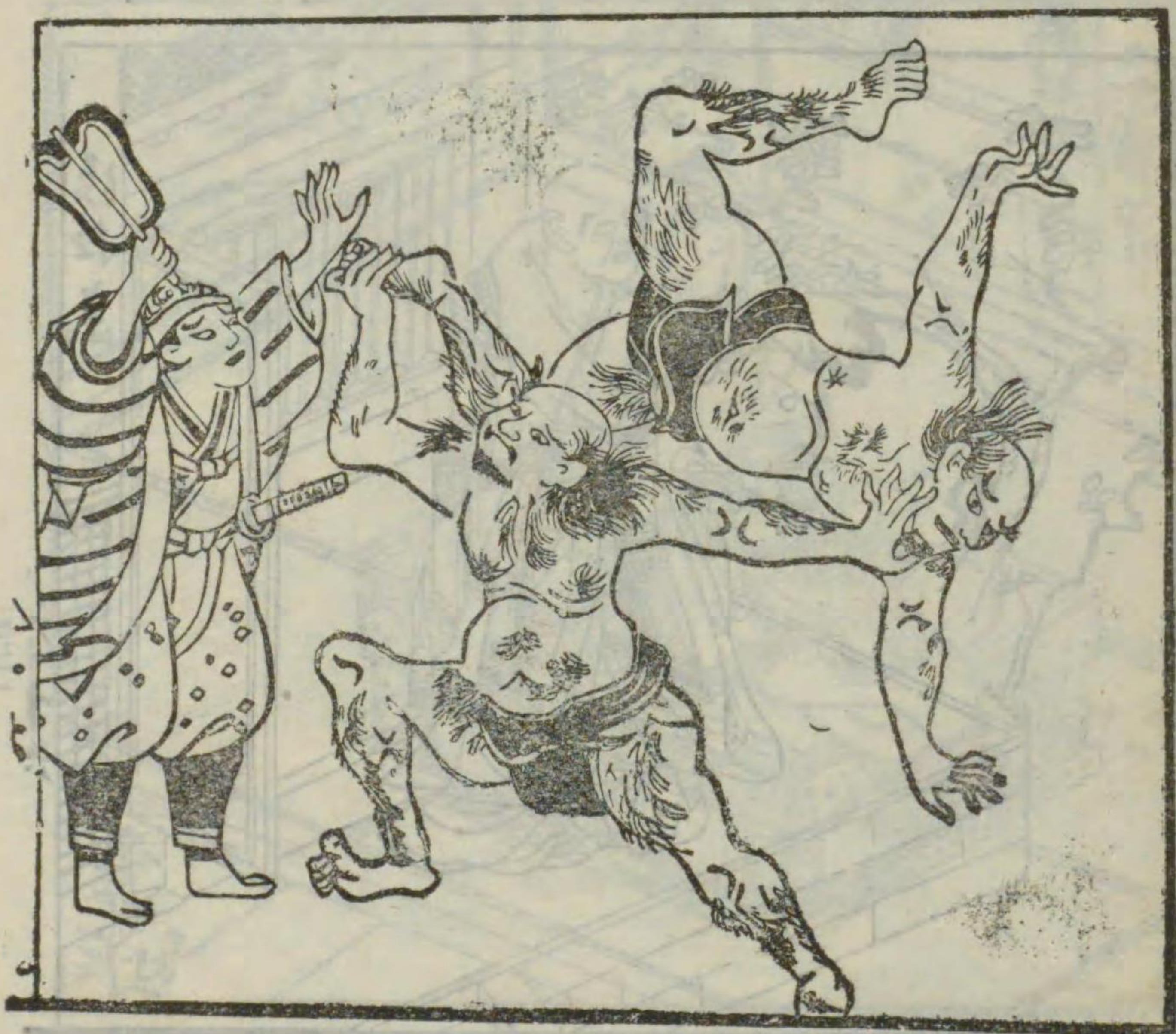


よし。

【水手者】家によつて立髪、半髪風儀さまざまあり。こゑよくして歌にかんあるをよしとす。大將は船大將、其下に小頭あり。【門番】夜悟にして目のよきを第一とす。【丈夫】力量の人なり。ますら男とも。

【勢兵】強弓引をいふ也。

【相撲】すまふは天竺よりはじまり摩阿陀國の切利首と婆羅門生といふもの御門ゑめしてとらせらるゝ也。本朝にては垂仁天皇七年はじめて有之。聖武天皇神龜三年に諸國すもふをめされ大和國關東と出雲の野見の宿禰と帝

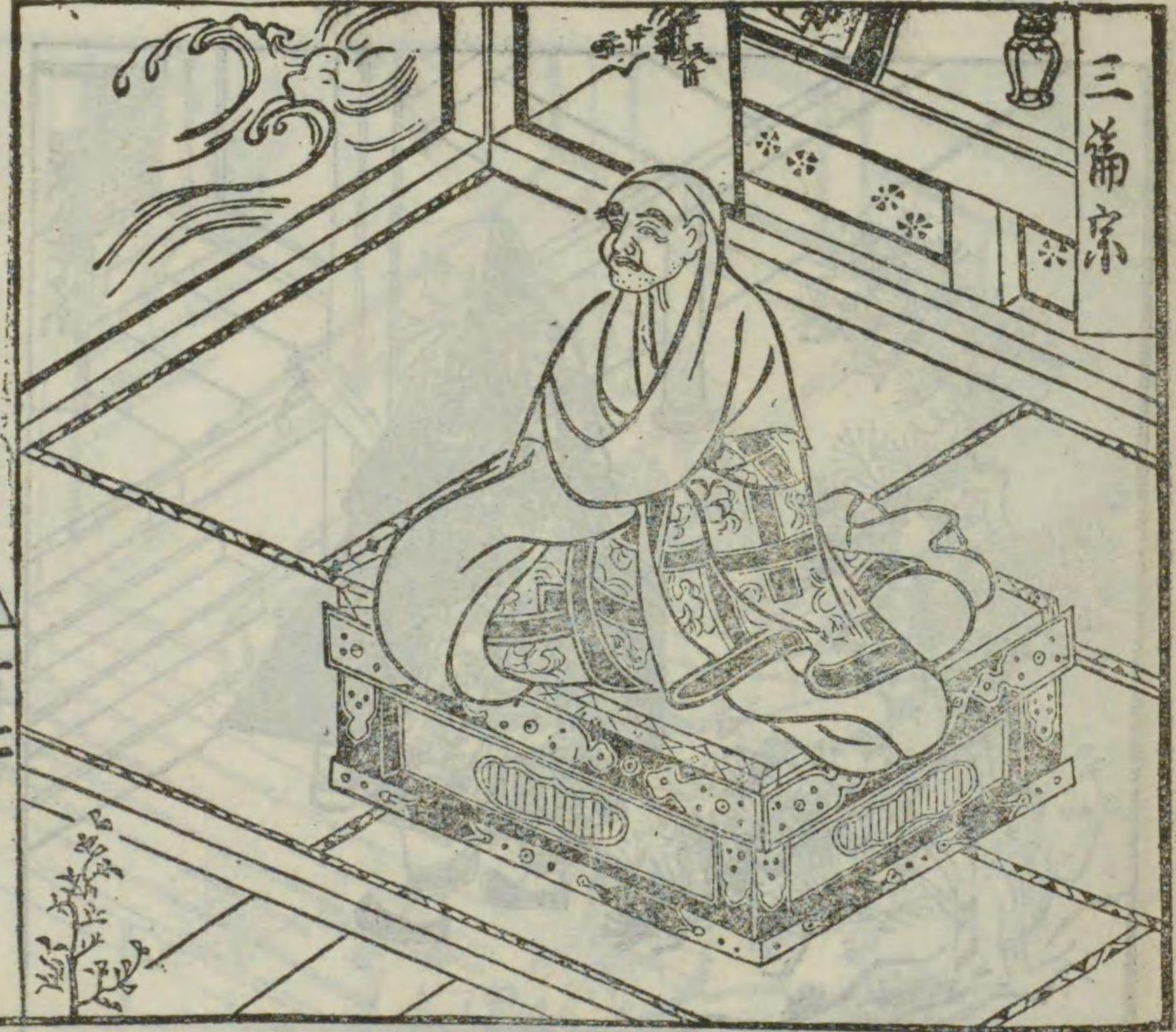


あめし、とらしめたまふ。拔手と申はそのうち  
の上手をすくり、御詠覽あるによりいふ。  
すまふの節會七月廿五日より廿九日まであり  
しなり。今はなし。



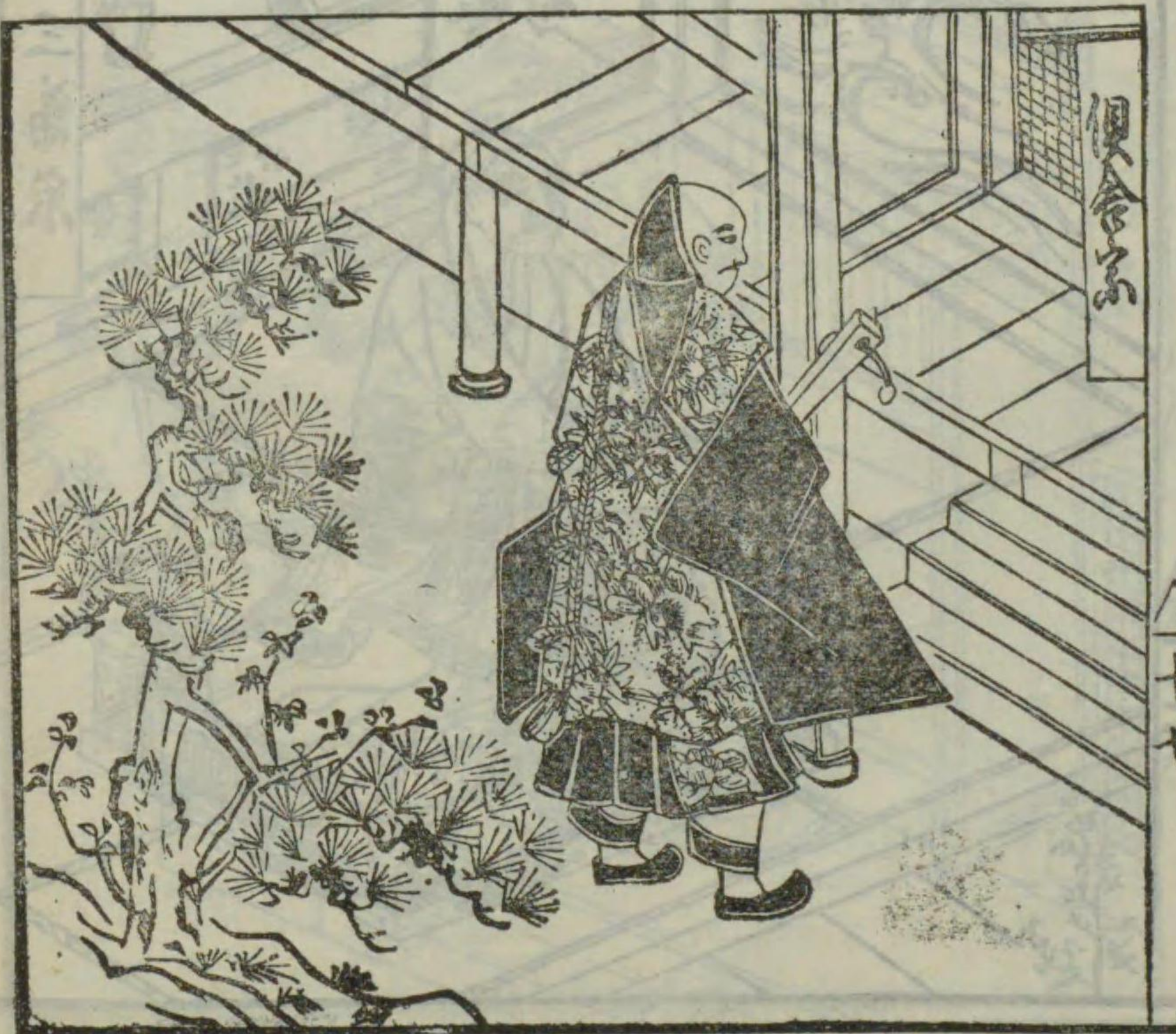
法お宗

【僧】出家、沙門共に別名也。出家とは親屬  
にはなれ世事をすつる故、恩愛の家を出るの  
義なり。僧官の事、大僧正、僧正、權僧正、  
法印、僧都、法眼、新發意、小僧、坊主、入  
道等の稱名あり。新發意はあたらしく弟子と  
なりて法のみちに入たるの義也。小僧にかぎ  
らず、年たけても道心おこしたるをば新發意  
と云也。多田滿中公老年に入道ありしを、多



三備宗

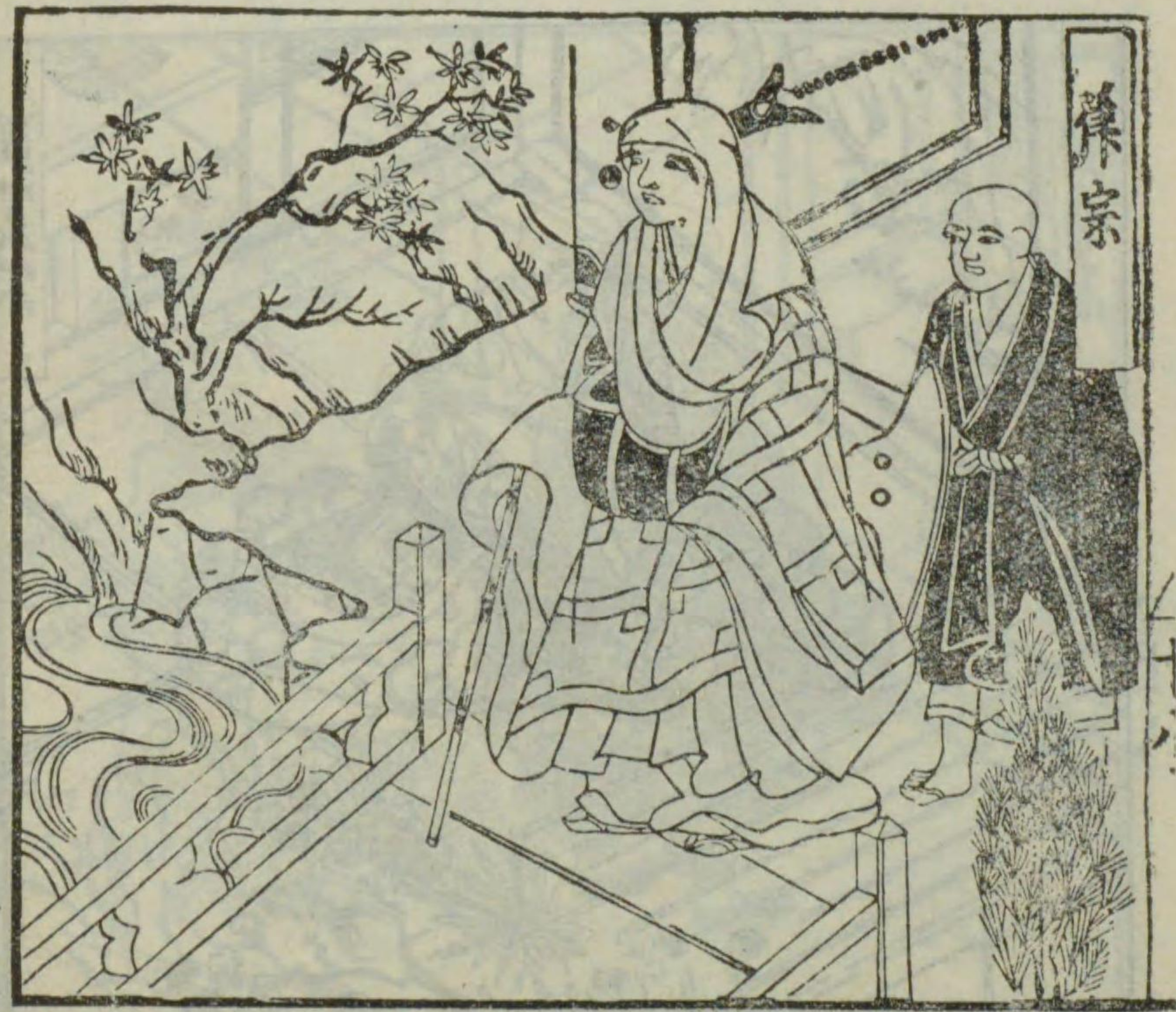
田新渡意といひし事有。坊主とは其住居を坊といふ也。是に住故に坊の主といふぎ也。入道は俗人はじめて道に入刺髪したるをいふ也。僧宗旨によりて稱號のかはりあり。上人、浄土、日蓮宗。和尚、禪宗、浄土宗。比丘、律宗。東堂、禪の曹洞宗、時宗。西堂、禪。西家、長老、禪、浄土同じ。法印、阿闍梨、天台、眞言。【法相宗】天竺護法并にはじまる。外にさまざまの説あり。日本にては玄昉僧正入唐して渡す也。人皇四十代天武天皇白鳳廿年庚辰に諸宗一番にわたる也。もちゆる經は解深密經、大品經等也。論は喩伽論、唯識



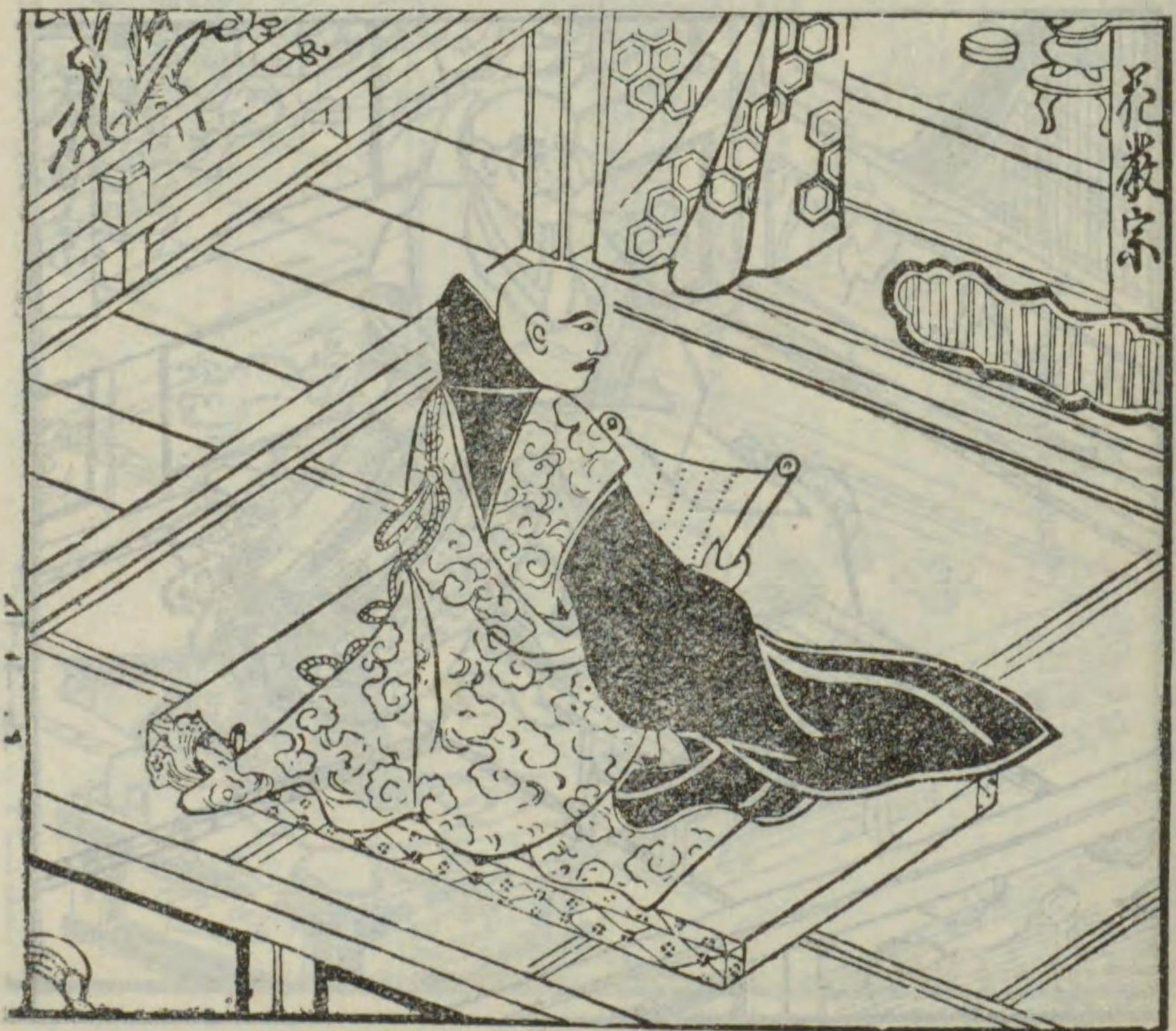
論なり。寺は興福寺也。【三論宗】天竺青弁井の所立也。人皇四十一代持統天皇の大長元年壬辰二番にわたる也。用る所。中論、百論、十二門論を以て立る也。【俱舍宗】天竺世親井の所立也。人皇四十二代文武天皇の大長九年三番に渡る也。立る所俱舍論也。



天竺跋摩三藏の所立也。人皇四十  
三代元明天皇和銅三年に四番にわたる。小乘  
の宗旨也。【律宗】天竺菊多三藏の所立也。人  
皇四十四代元正天皇の養老元年丁巳に五番に  
わたる也。律に大乘小乘あり。用る所律三大  
部四分律五分律等なり。



【成實宗】天竺跋摩三藏の所立也。人皇四十  
三代元明天皇和銅三年に四番にわたる。小乘  
の宗旨也。【律宗】天竺菊多三藏の所立也。人  
皇四十四代元正天皇の養老元年丁巳に五番に  
わたる也。律に大乘小乘あり。用る所律三大  
部四分律五分律等なり。



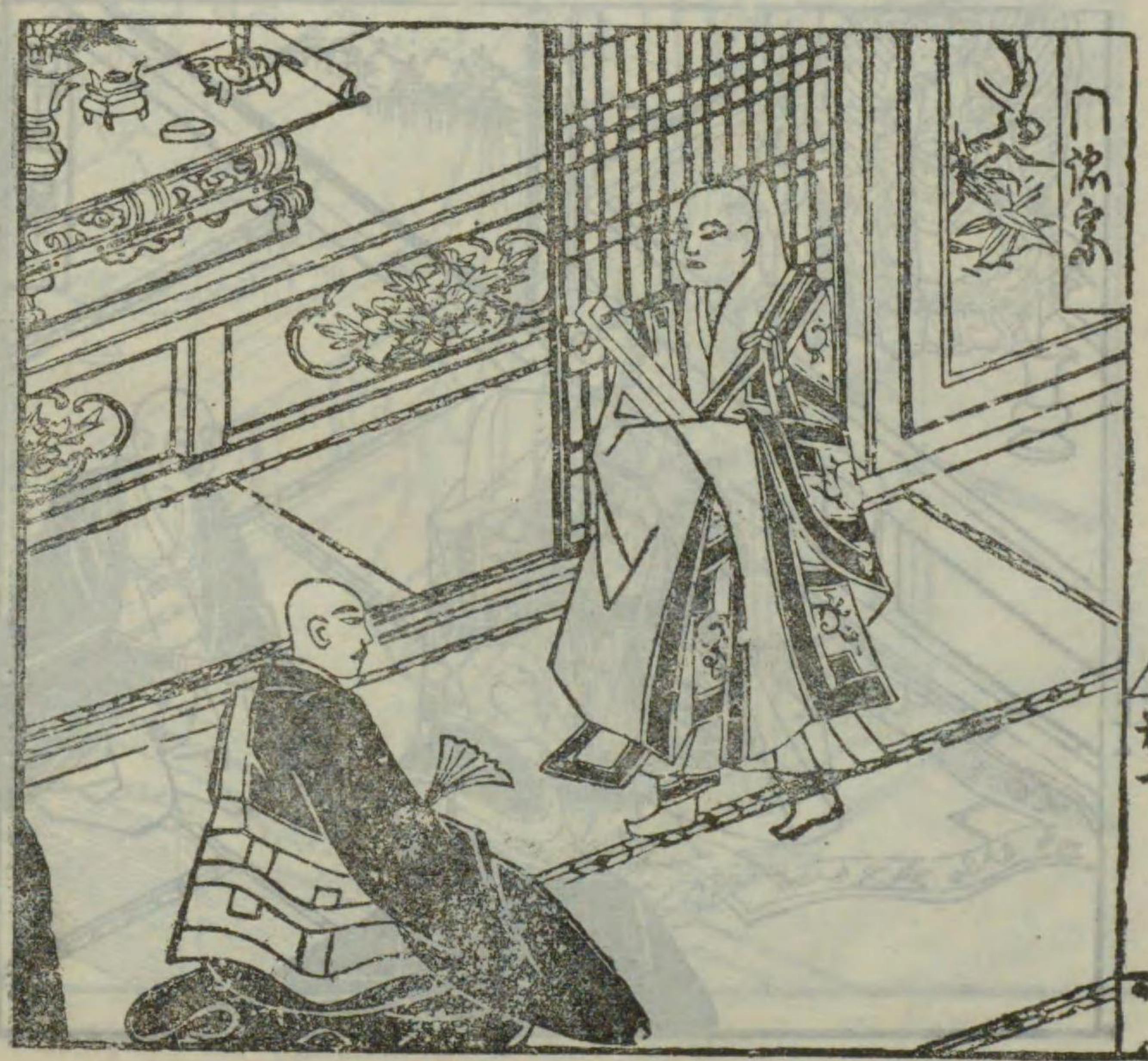






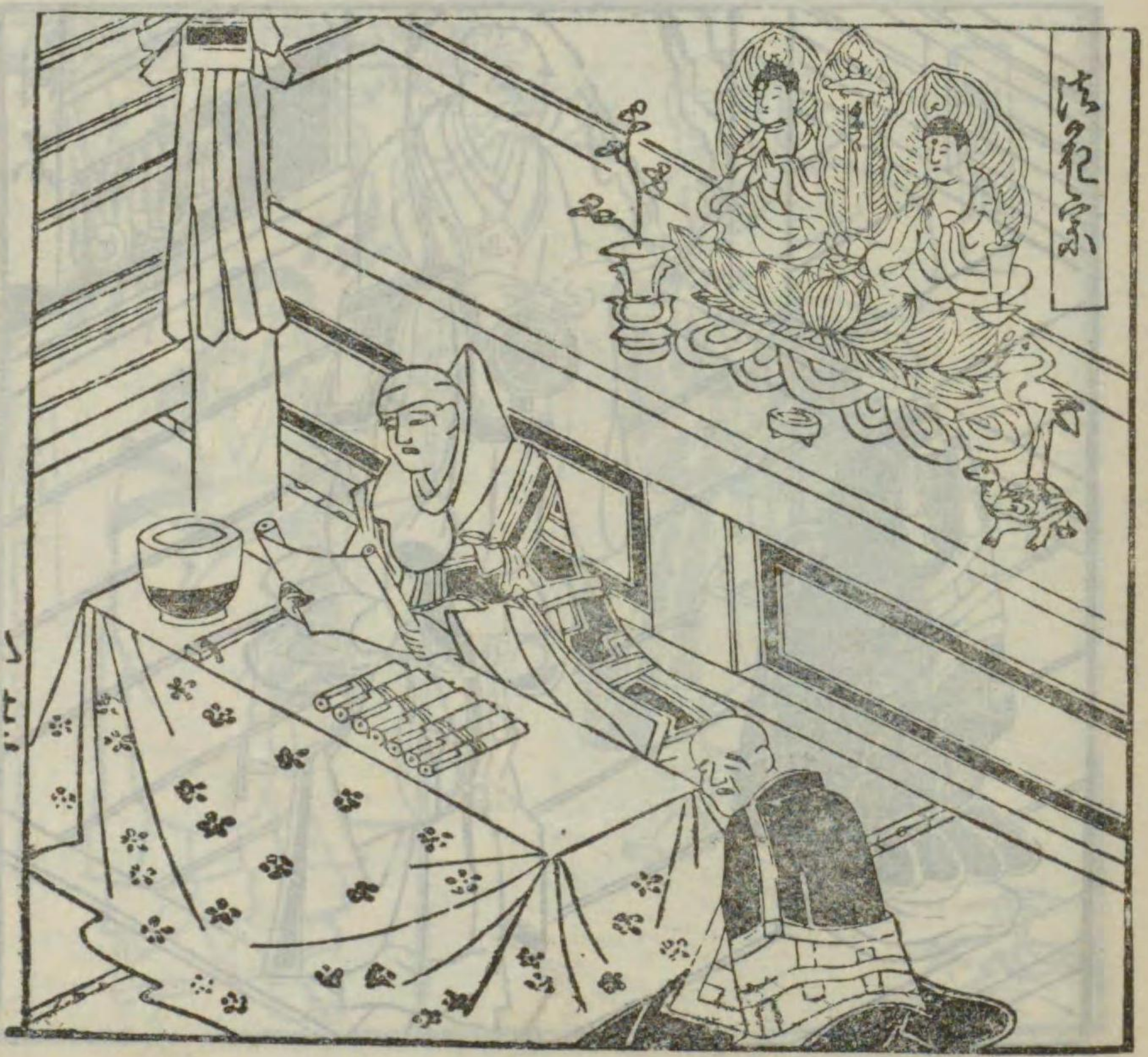
日蓮上人所立也。用る經釋天台に同じ。一家  
におゐて其法語數書あり。御書と號す。人皇  
八十九代後深草院建長五年三月廿八日あさ日  
にむかひてよりひろめたまひしなり。

【時宗】一遍上人の所立也。熊野權現の神勅  
によつて廻國の修行一處不住の掟也。依經淨  
土に同じ。【沙彌】いまだいたらざる若坊主を  
沙彌といふはあやまり也。沙彌に十戒有、律  
宗にてもちゆることば也。【沙彌尼】あまの沙  
彌をいふ。  
【比丘】律にてもちゆる也。五戒、八齊戒よ  
り二百五十戒にいたるを比丘といふなり。【比



四二

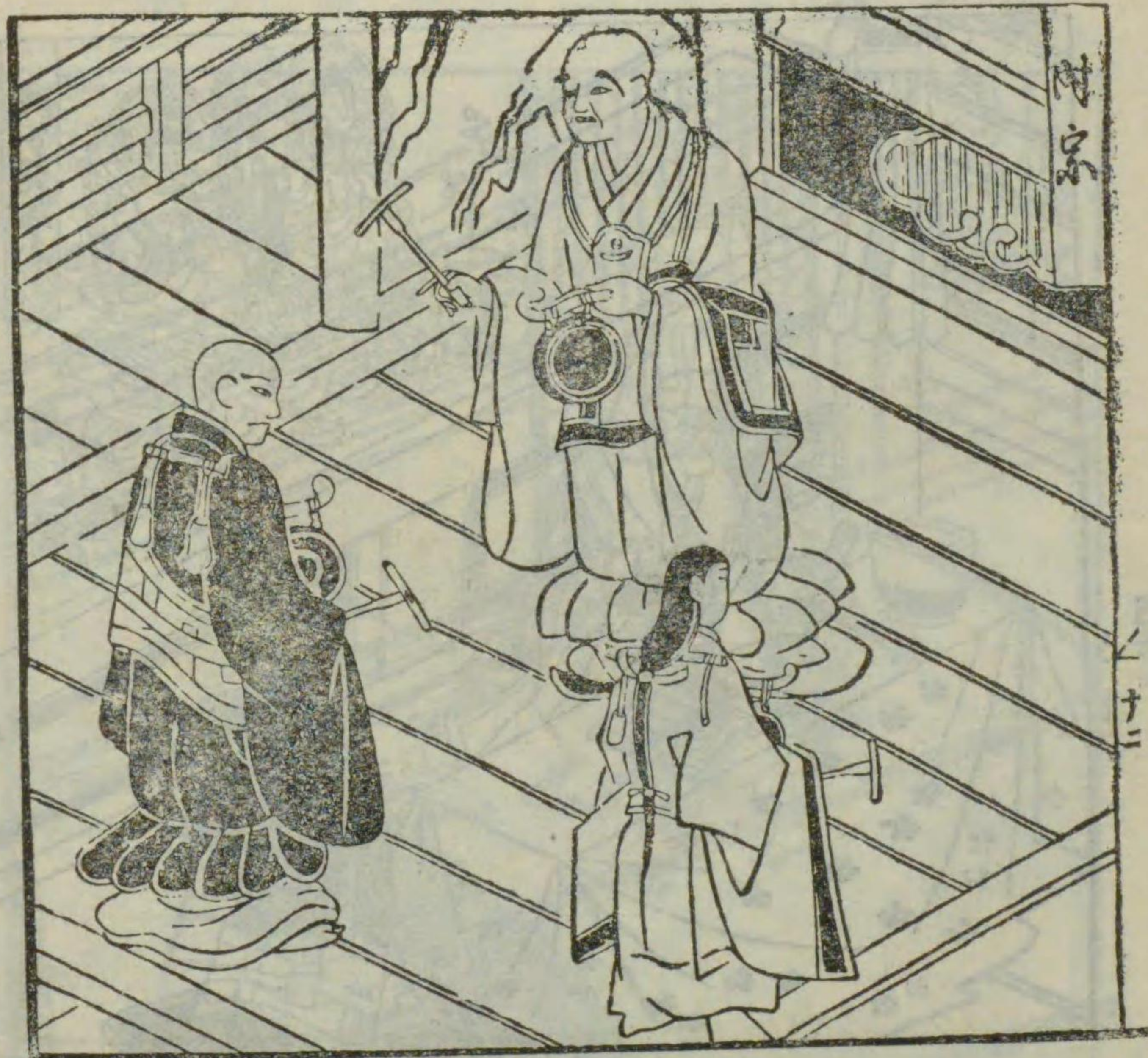
【時宗】一遍上人の所立也。熊野權現の神勅  
によつて廻國の修行一處不住の掟也。依經淨  
土に同じ。【沙彌】いまだいたらざる若坊主を  
沙彌といふはあやまり也。沙彌に十戒有、律  
宗にてもちゆることば也。【沙彌尼】あまの沙  
彌をいふ。  
【比丘】律にてもちゆる也。五戒、八齊戒よ  
り二百五十戒にいたるを比丘といふなり。【比



四三

丘尼<sup>くじ</sup> 律戒の尼をいふ也。【優婆塞<sup>うはさく</sup>】俗の戒を  
たもち佛道に入るをいふ也。

【比丘尼】  
【優婆塞】  
【居士】  
【能化】  
【諸化】  
【平僧】  
【破戒僧】



四四  
ナニ

【優婆夷<sup>うははい</sup>】

俗の女戒をたもちて佛道にいるをいふ也。

【居士<sup>こじ</sup>】俗戒にして佛道に入精進潔齋するを  
いふ。

【能化<sup>のふけ</sup>】諸宗に有。學寮の司にして、諸化に  
教僧也。博學多才をいふ也。

【諸化<sup>しよけ</sup>】學問僧をいふ也。

【平僧<sup>へいそう</sup>】無學の僧なり。または芋堀ともい  
ふ。

【破戒僧<sup>はいかいそう</sup>】學者、無學者によらず、たとへ万

人倫訓蒙圖彙 一

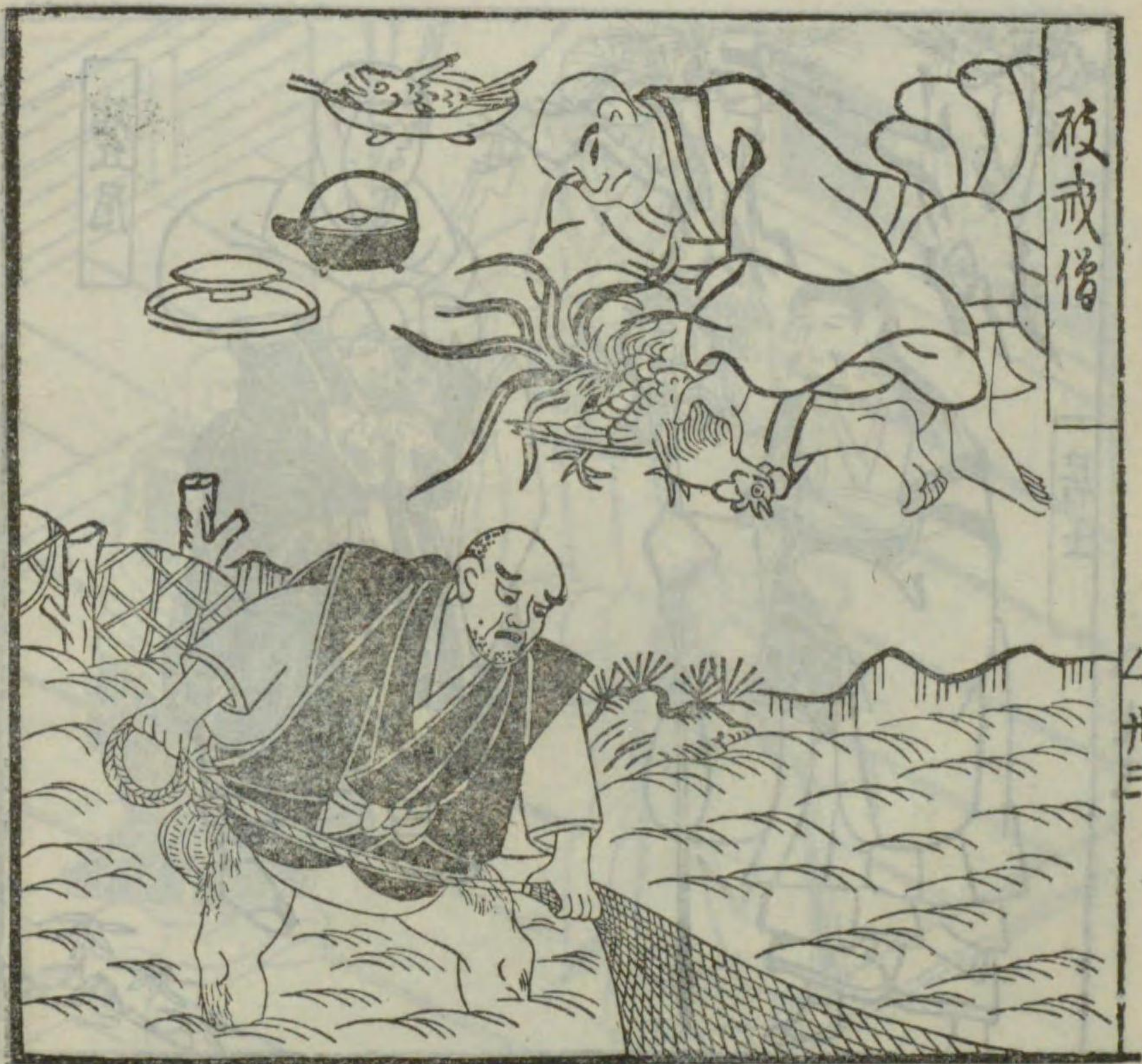


比丘尼

居士

四五  
ナニ

卷の書をよみしるといへども、不道第一の邪見を生ずるたぐひ、又は悪としるといへども煩惱至盛のたぐひ、信施をうけて魚鳥酒淫の料となす。是永劫うかむ事なき無障の罪人也。  
【妻帯】僧の法に妻子をたづさゆる法とは別に有事なし。末世に至りて佛法衰微の相よりおこれり。



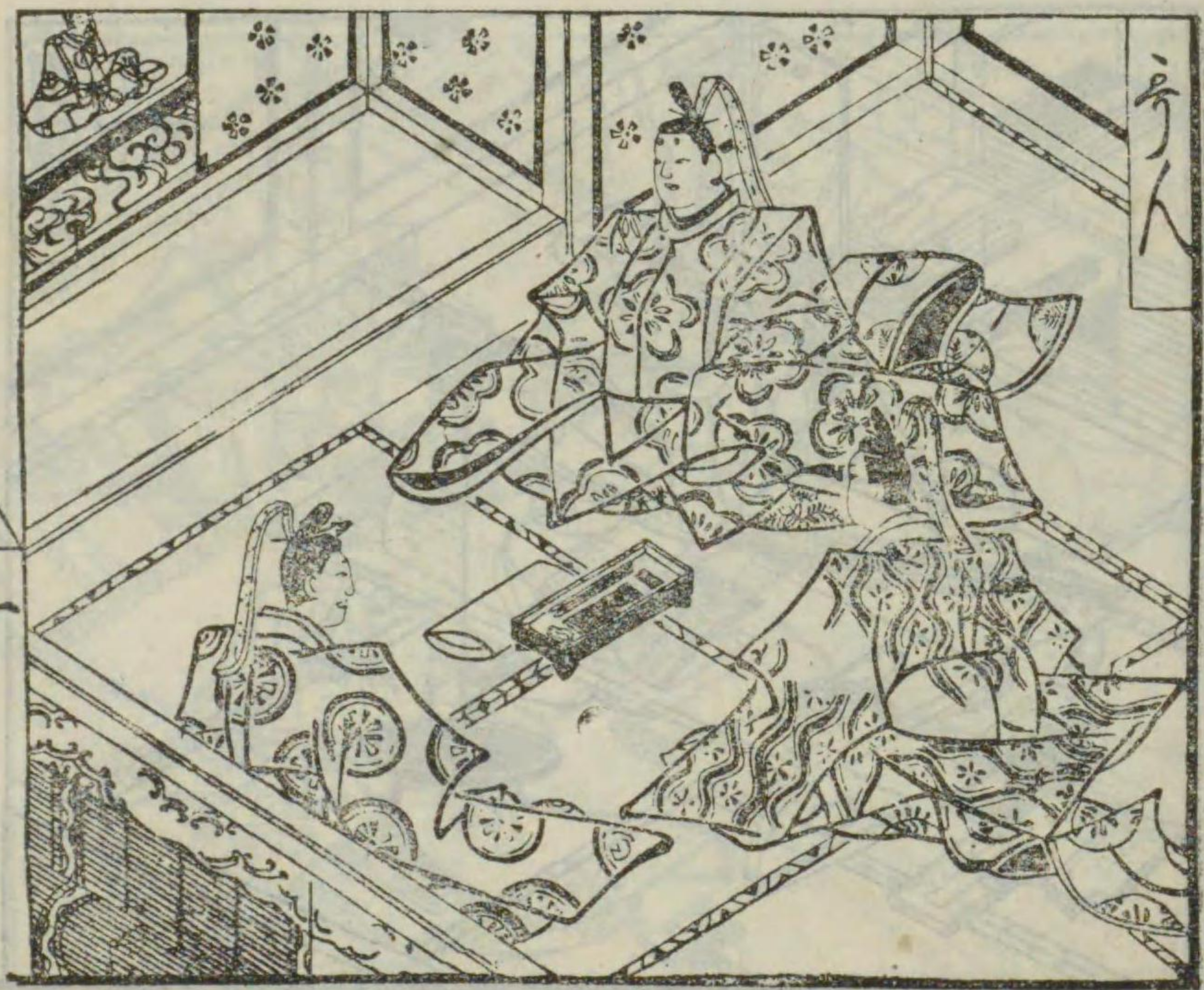
【山伏】修験道ともいふ。役小角是をはじめ。此人類に少き角のかたちあり。此人身に草木の葉を着。口に五穀を斷。苦修練行して孔雀明王の呪をと見え。大行の人なるゆへに役の行者といふなり。



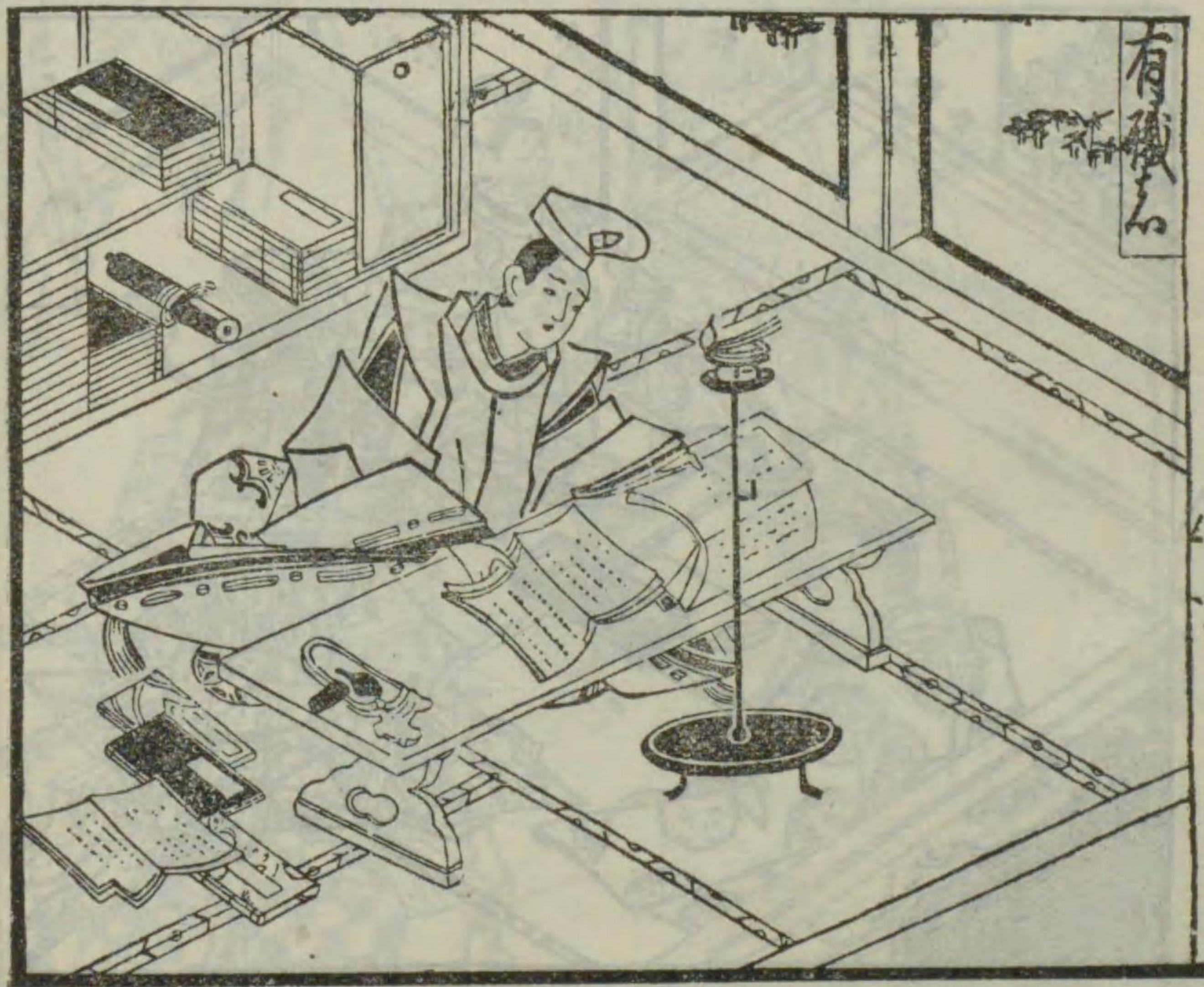
所作入 人倫訓蒙圖彙 二

能藝部 次第不同

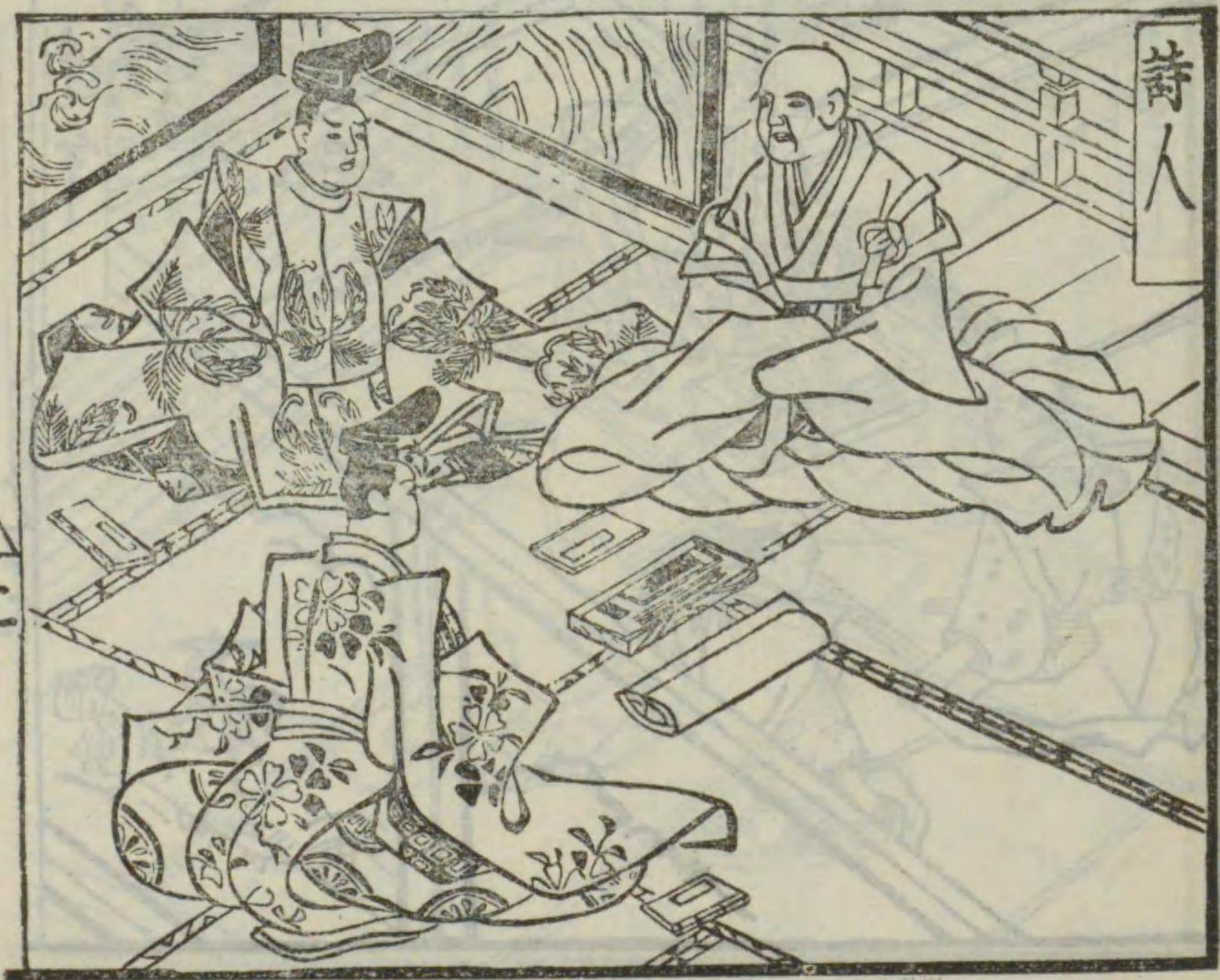
【哥人】和哥は此國の風俗として神代よりおこれり。假名の三十一字をつらねて佛神の感應にもあづかり、目にみえぬ鬼をもかたぶくる事哥に過たるものなし。鬼神人物大に和の理をもて日本を和國とも號せり。和哥に六義有、風賦比興雅頌これ也。又長哥、短哥、旋頭、混本、折句、沓冠、誹諧等の姿有。神祇、釋教、戀、無常、天地、山川、草木、鳥獸等のうへにいたるまでも、こゝろを種として



つらねずといふ事なく、物にたいして情を述  
る器也。【有職者】本朝におゐて諸道の製法  
あり、此法をあきらめしる人を有職の人とい  
ふ。第一上天子の法式より、下百官の品にい  
たつてさまざまの式あり。家々の傳説を古實  
と號し、代々の例記を記録と稱して和國の重  
寶とし給へり。【詩人】詩は唐土よりおこれ  
り。此ゆへに唐哥ともいふ也。和哥に同じく  
六義ありて、句を八句になし、字は五言七言  
にならぶ。凡法式は詩學大成等の書にしるし。  
其外韻字は略韻、三重韻等みな詩法の良材な  
り。



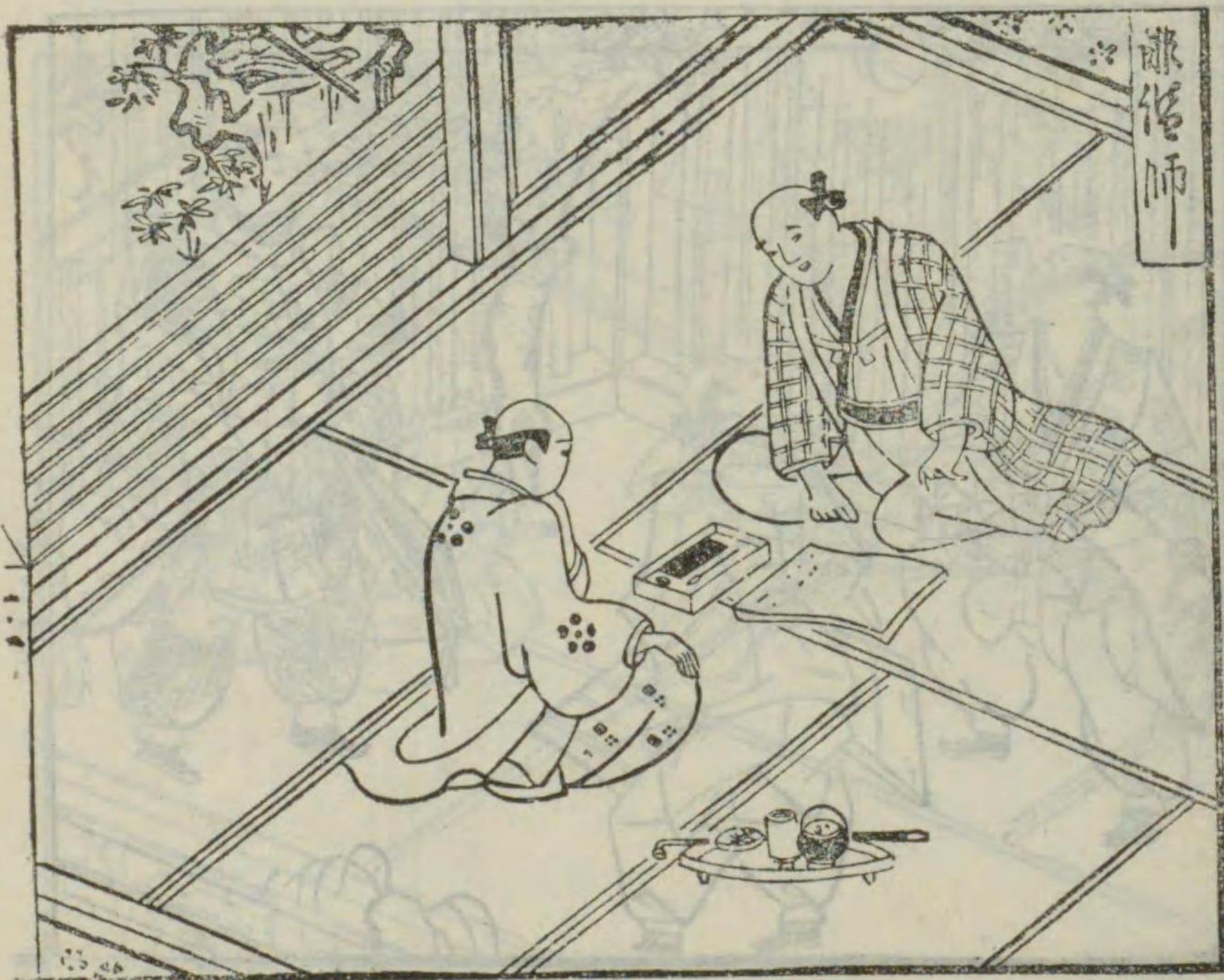
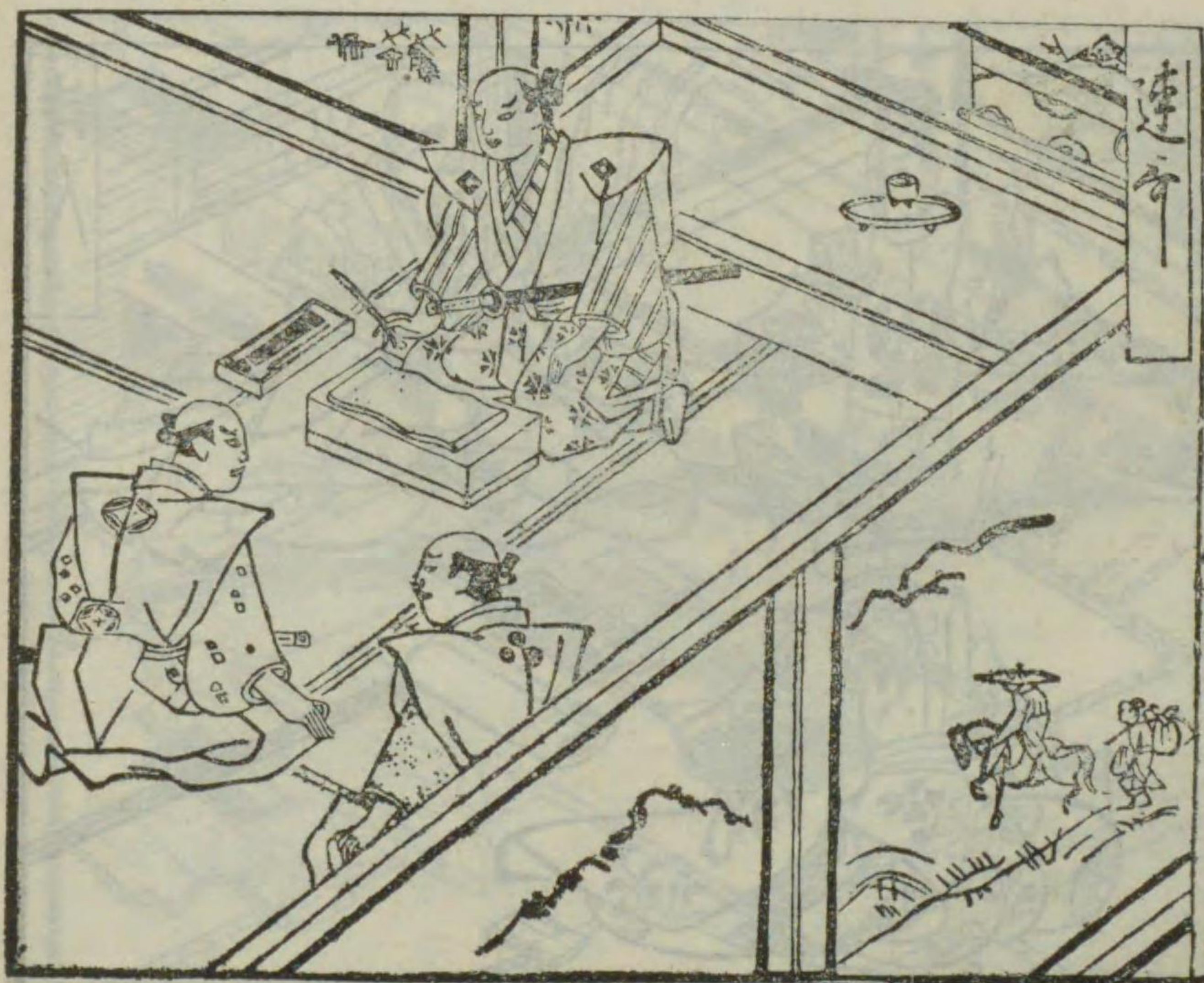
【連哥師】連哥はむかしよりあつて久しき事  
なり。日本武尊にひはりつくばをすぎてい  
くよかねつる」との給はせけるを、燭をとる  
人其するをつぎし、是連哥の始也とかや。定  
家、家隆等の句あまたあり。然ども百韻の法  
式をたて、さかんにひろまる事は宗祇法師牡丹  
花にはしまれり。中比東山殿の代にいたつ  
て此道盛にして連哥の新式定めり。それより  
して代々つたはり、慶長の比昌琢入道其名高  
く、其子孫添削の家として花本と號す。【俳諧  
師】是も哥和の一躰にて古今集にも俳諧哥あ  
り。然ども連哥のごとく百韻の法式を立て、



盛にひろまる事は逍遙軒貞徳にはじまれり。其式をかきたる書をはなひ草と號す。雖屋立圃が作也。其流を汲で棟梁する者を黠者と號す。近比大坂に住する西山宗因、元は昌琢が門人として連哥の流をくむといへどもこれにすぎて一風をなせり。其弟子おほくして又其風おとし。

【鞠】上古天竺に曇王といふ大外道あり。盤古大王の太子是を射殺して頭をはね其首を鞠と名付て八人の童子にけさしむ、是始也。日本におゐては用明大皇の御時よりはじまれり。公家のもてあそびとしてさまざまの法あり。

り。其傳をつげる家を飛鳥井御子左といふ。又賀茂の神官松下一家一流の傳あり。冠のかけをは鞠の家飛鳥井より印をえてかけらるゝゆへ諸家残らず此家の門弟なり。裝束の高下、桔梗袴、紫末濃等の印あり。かゝりは松、楓、柳、櫻、かゝりの造様は横箒、堅箒のわかちあり、木をもつてかゝりを造る事は他家には許さず。鞠師は新町通六角トル丁竹之屋左近、室町通四條下ル丁竹庵、丸太町烏丸矢野常之、二條通富小路植虎や廣昌。大坂は道修谷。江戸京橋南貳丁めかめや六左衛門、石町十間棚松や又左衛門、同所竹屋勘兵衛、淺草加や町。



【神道者】日本は神國なれば神道をもて國家を治る法あり。本朝欽明天皇の御代に佛法わたりてより神道おとろへて傳學者まれなり。神書數百ありといへども入鹿が逆心の比滅せしとかや。其後天武天皇の皇子一品舍人親王日本紀を製作あり、此中神代の二卷、本朝の明記たり。今唯一神道と號する是根元の神道なり。兩部習合といふ物は佛井をもつて神の垂跡と立る也。【學者】世俗學者と稱するは儒者をいふなり。孔子の掟を守て仁義禮智信の五常より五論の道ををしへ、諸の儒教をしへ、または詩經、老壯の道をも人の乞にしたが



五四

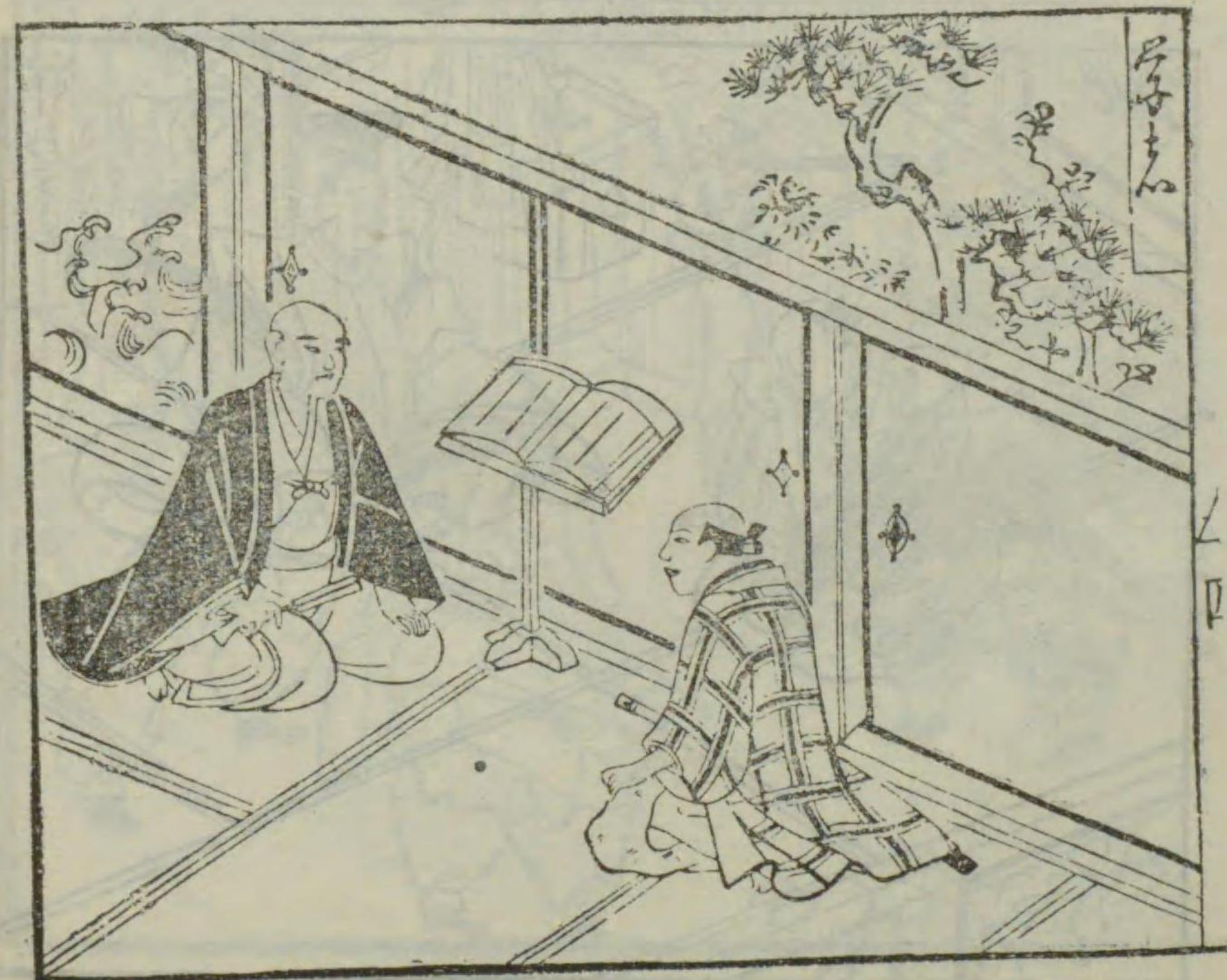
ひて釋し教ゆる世間出世の名師也。醫は醫學者、哥は哥學者、それらの師有なり。【儒】儒は應神帝の御時阿直伎、王仁等論語孝經を持來して百濟國よる渡るこれ日本にて儒のはじめとかや。【筆道者】唐土の蒼頡鳥の足跡をみて字をつくりしより代々寶となれり。字畫筆勢のあやとりにつみて種々のすがたあり。唐土におゐては晋王羲子をはじめ、歷代の名人あり。日本におゐては弘法をはじめ佐理、道風、橋逸勢等の名筆家々書傳あり。近代十二點といふ事出來たり。【醫師】醫は神農よりは生まれり。師匠なく勿然として草木の味を



五五

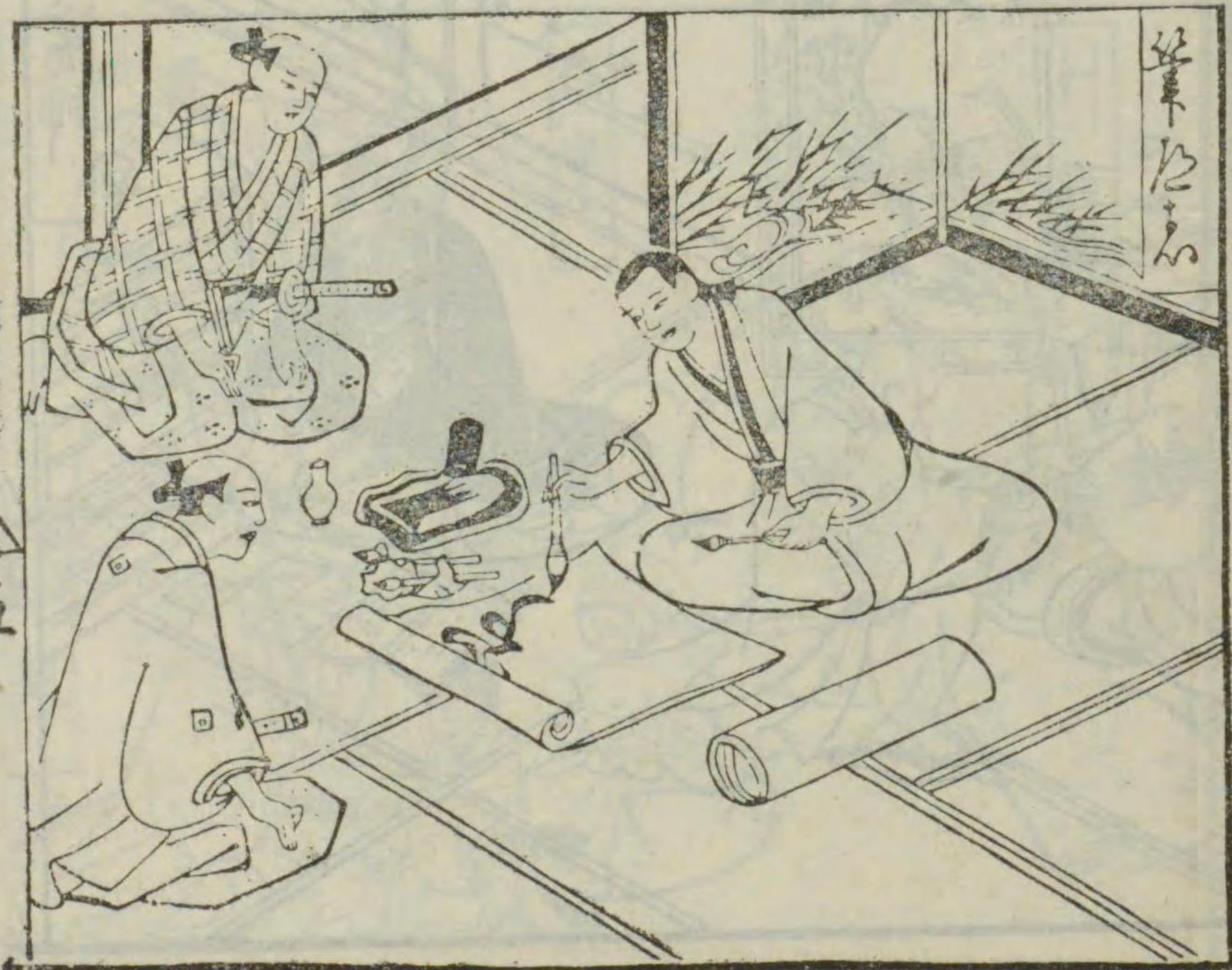


しり、八百餘種をなめて五臟六腑に通ずる事をさとりて藥種をばじむ。是醫の祖師なり。日本におゐては神代の時少彦名命万病を療治する事、針灸のみちをもはじめ給ふ也。此ゆへに日本にては少彦名命を醫祖神とす。西洞院五條の天神是也。此神の藥方おほく白朮を用給ふ也。國土の五穀を守り給ふゆへに節分に彼社にをゐて白朮をうるも神代の遺風ぞかし。【針師】十四經を考て浮沈和瀉の術あり。打針、捻針、管針等品々の流あり、天子の針師をば針博士と號す。【目醫師】眼は人身第一の所なり。天性の氣血の虛弱によりてさまざま



五六

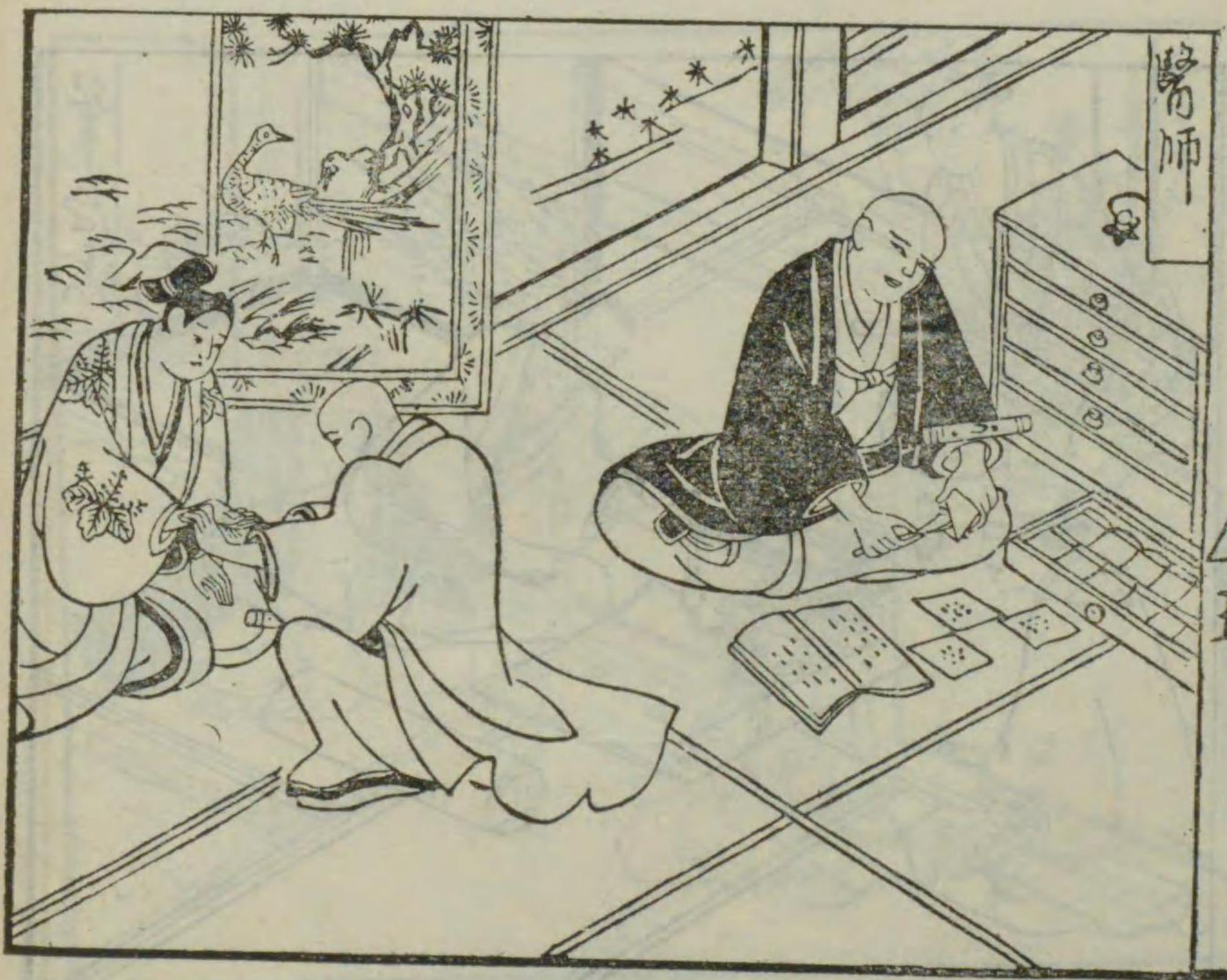
まの眼病あり。最大切の事なり。【按摩】醫書にをゐて保養の部に此事あり。氣血を通養する補の第一。【小兒醫師】産前産後等いつれも一家の別傳あり。諸醫の中にむつかしき第一とす。言語かなはざれば陰陽をわかち、青黄赤白黒の五つをかながへ藥を用口の傳あることなり。【齒醫師】本朝にをゐて青陽の初に齒堅の祝是齒を養生をことふくのはじめなり。金康をもつて齒醫の家とす。此家に屠蘇白散の法つたはりてあり。【外科】外相に出る腫物を療するゆへに外科と號す。外科回春唐土の粹書也。【金瘡】手負其外一切の疵最詮



五七

要の法なり。此人躰大氣にして物に動ぜざるをよしとす。小氣にして臆したるは本人よりさきに散亂す。是金瘡の小品也。【諸禮者】小笠原家の記録、是武家の禮式として庶人にいたるの禮法なり。是を智人を諸禮者といひ、其式法を躰方といふなり。此事將軍義滿の御代より始めり。

【箒者】箒勤の道は万法にわたつてなくてかなはず、貴賤僧俗誰かこれをすつべきや。天地五運の行道も箒勤を考て是をしり、高山深淵をもいたらずしてしるは是箒勤の徳なり。十露盤は吉田七兵衛こしらゑしとかや。むか

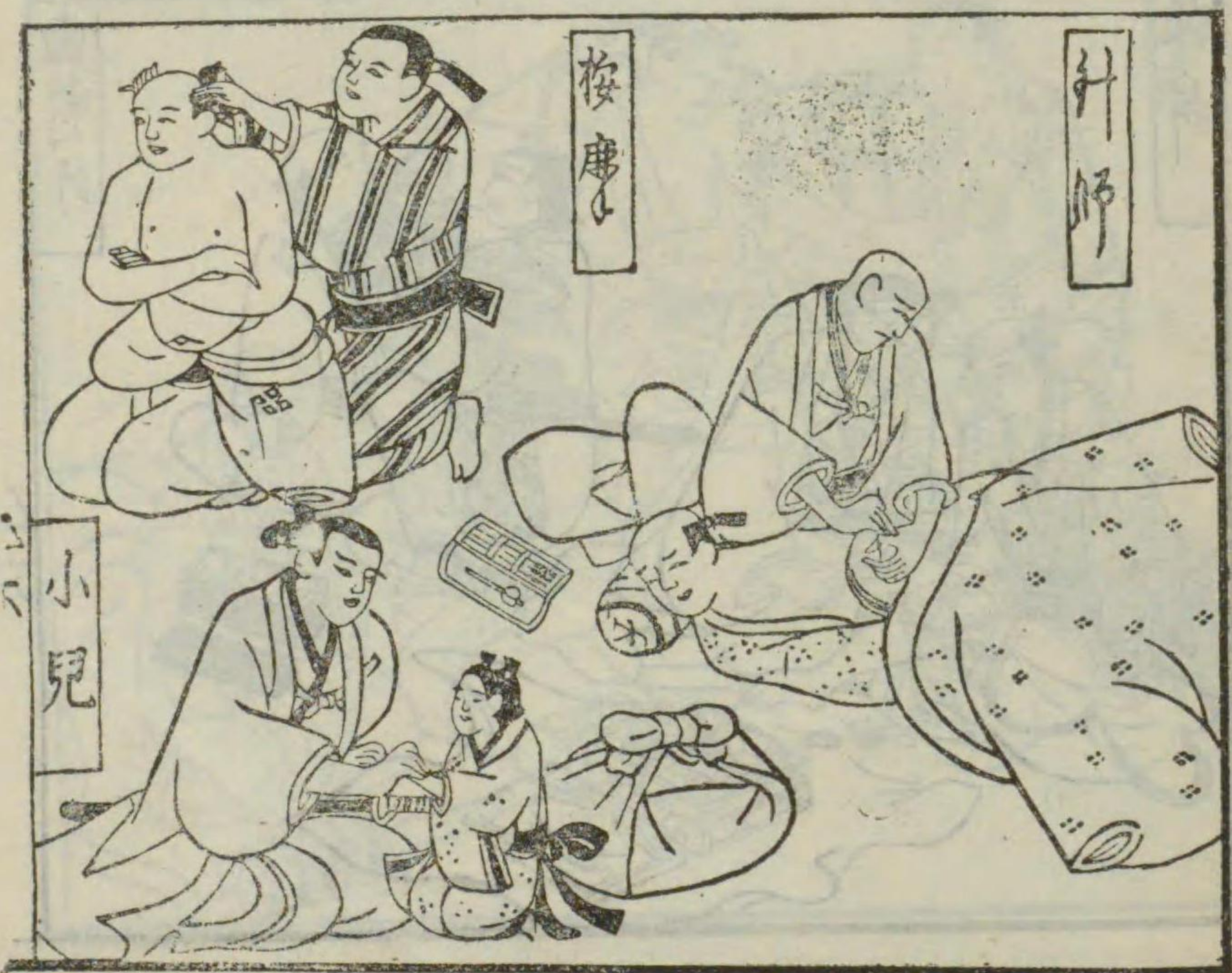


五八

しは箒木ばかりなり。十露盤師所々に住す。

【弓】弓智是を射禮といふ。唐土の弓執は楊由を始として其外武勇に長する人弓を握ぬはなきゆへ、武士をさして弓執とはいふなり。

日本にては雪荷印齋等是中古の弓知、往昔鎮西の爲朝能登守教經等弓に名高き人也。又近世三十三間堂をとをして始て是が長たる者を天下矢數といふ。比は慶長十一年正月十九日淺岡平兵衛といふ者、通矢五十一本なり。抑此堂は後白川院の御建立にて間行六十四間、縁のはゞ七尺三寸、軒裏升形まで高さ一丈四尺八分、升形のはゞ一尺三寸五分なり。南の



五九

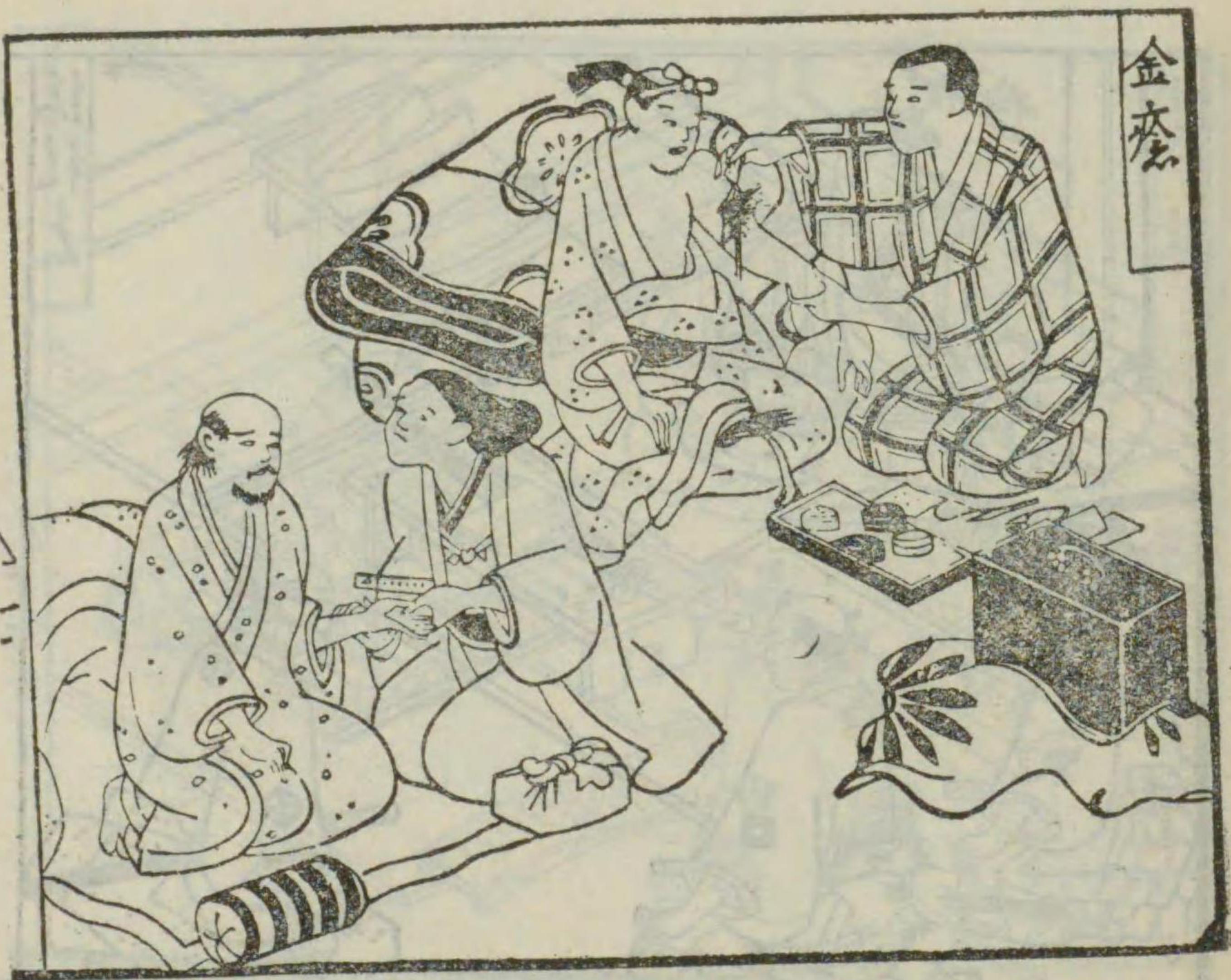
縁のはづれ七尺九寸置て、北にむかひて射通す。是當世無双の勢兵なり。寛文九年五月二日に尾州星野勘左衛門通矢八千、惣矢一万五百四十二本、今は紀州和佐大八郎天下通矢八千百三十三本、惣矢一万三千五十三本なり。

【馬乗】乗馬法是を乗形といふ。馬は武士第一の重寶、高山もたやすく上り、大河も自在にわたす、是皆俊馬の徳也。馬は陽畜なり、よつて氣さかんにして心すなほなりといへどもあしざまに乗入ぬればさまざま曲出る也。其品分れて百曲あり。其外軍馬平馬の乗やう駒をしるれ曲を直す事、其法式あつてむかしよ

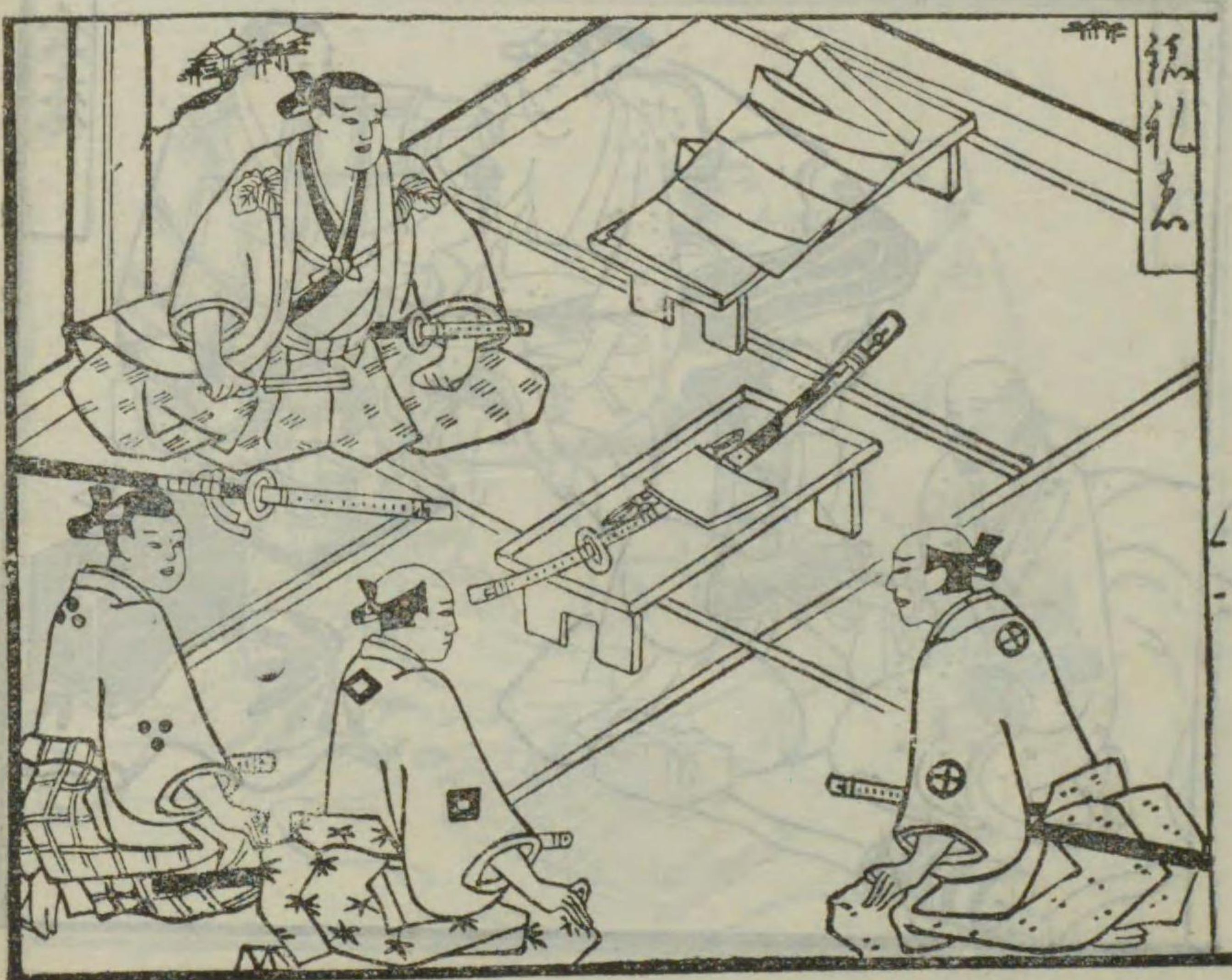


り八乗流あり、中古に大坪の一流あつて今につつたへて武の要道なり。

【鑓遣】鑓は其はじめをしらず、鬼神も鑓を持物となし、四天王も鑓をもてり。されば武用の第一鑓をもつてす。軍中におゐて敵をくだくに鑓下の高名とて是手柄の第一也。凡鑓に品々あり、寸鑓十文字、鎗鑓、管鑓等流々の傳有て香取、落合、堤、神道、塚原などの名有。長刀はむかしより武士は女房も是をつかいければ諸書に此事をのせたり。鑓一流を極ぬれば長刀は其中にこもれり。【太刀遣】是を兵法者といふ。男子第一の道にして學すし

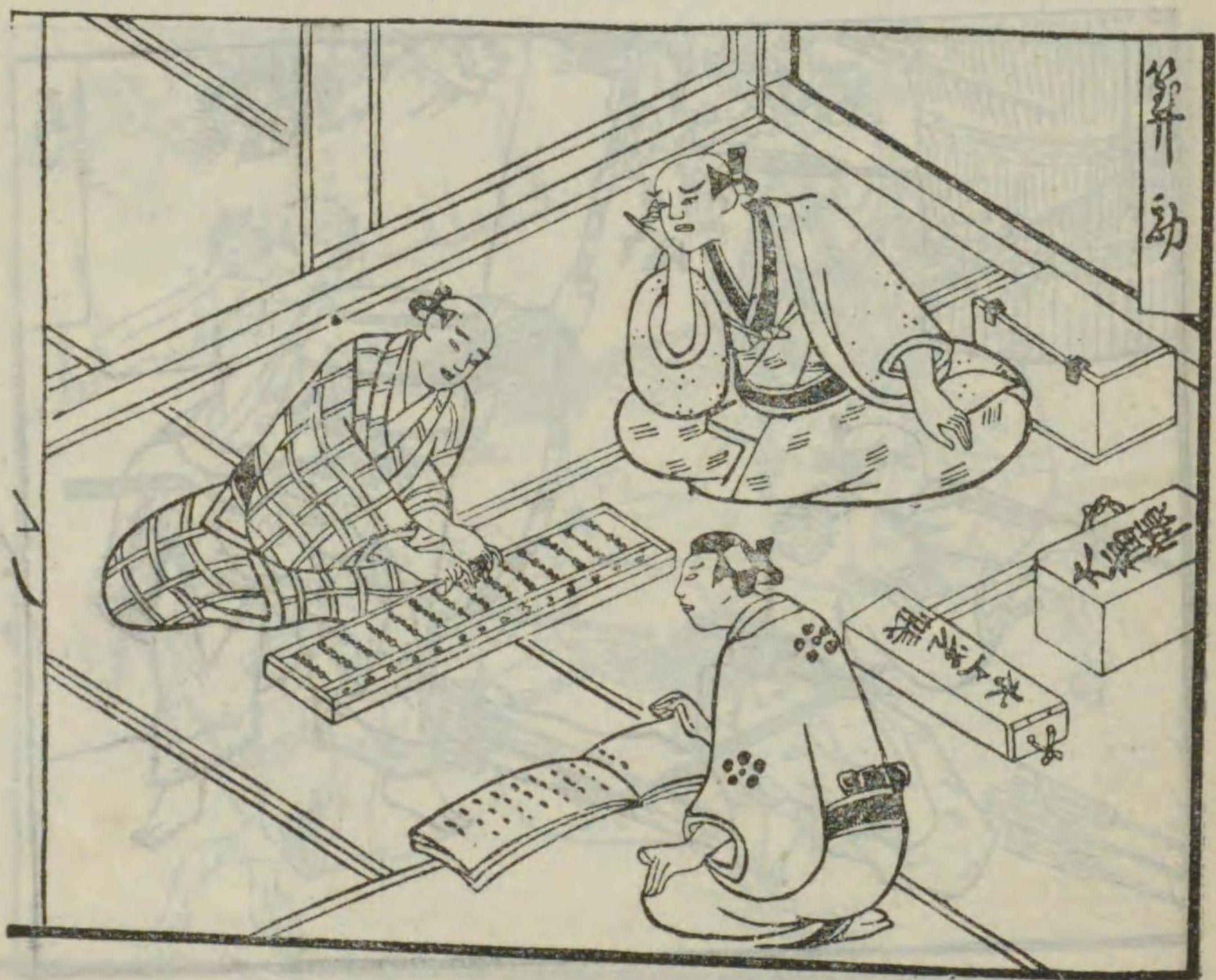


ては有べからず。諸流數多あり、戸田流、神道流、神影流、柳生流などさま／＼あり。むかしは回國修行の兵法者あつて盛に是を教弘めしが、やゝもすれば諸流と威勢をあらそひ仕合喧嘩の中立となりけるゆへ此事停止なり。今靜謐御代なれば其家ならぬ外民間にをゐてはしらぬこそよけれ。【鎌遣】中世奈良の寶藏院といふ僧あり。是鎌遣鑓をつかふゆへに世俗鎌寶藏院と稱す。むかしより有事也。其源たしかならず。短き物をもつて長きに勝。是兵法人身の大事はやわざのいたりなり。【居合】あひは太刀討の根元なり。兵法といふ

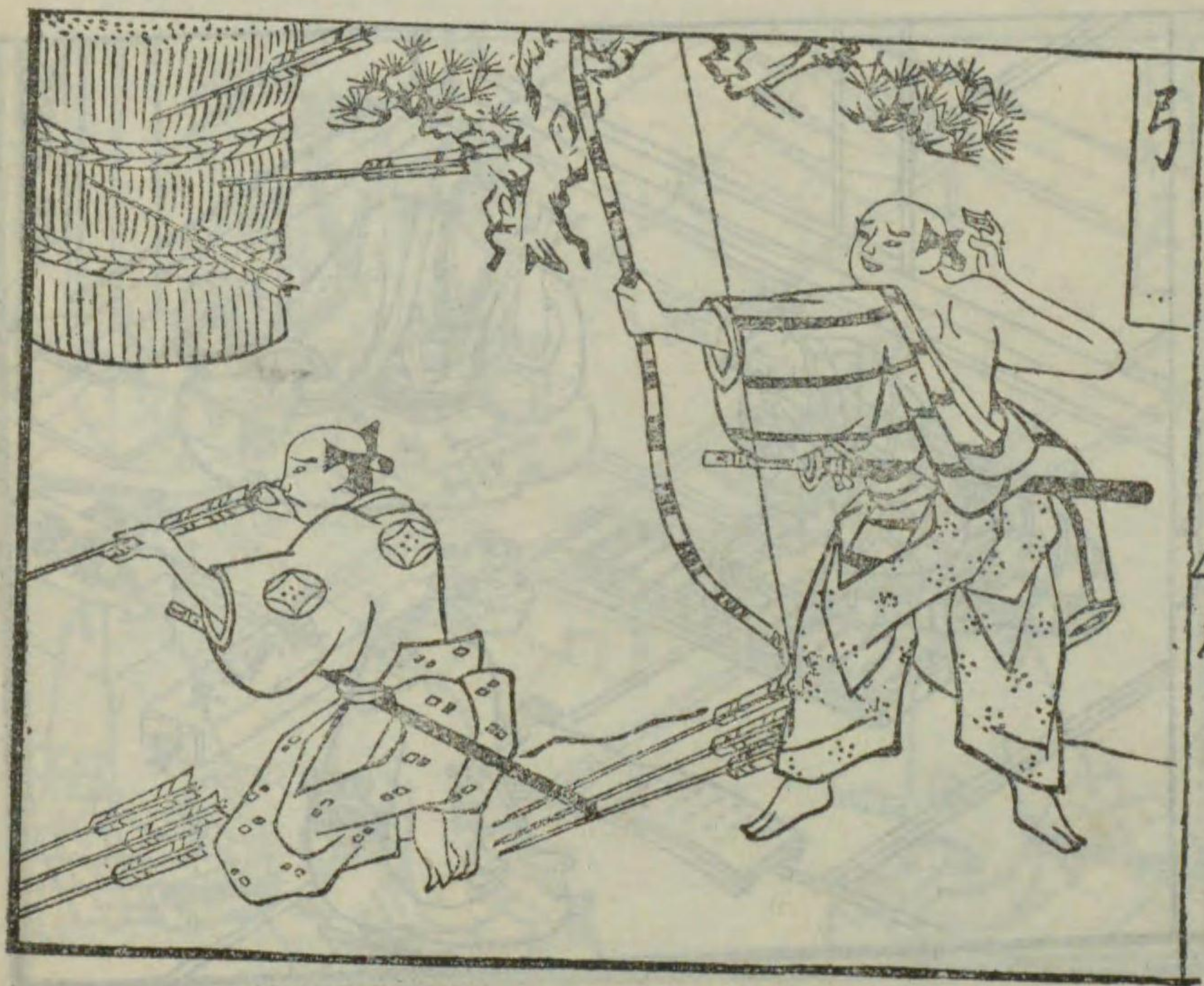


は敵に向て太刀をあはするは腰より抜出しての上也。拔ずして兵法有べからず。然ば拔を第一とす。長短の打物によつて拔やう品々有。又は所の廣狹地形の高下と座したると立たるとあり。敵に其色をさとらせず、柄に手をかくるより抜いだす遲速によつて勝負の二道ここにあれば、いかでか學ずしてあらんや。諸流多き中に關口流其名高し。

【鐵炮】鐵炮は高麗國よりはじまれるとかや。日本におゐては文祿の比世にあまねく流布せり。稻富一夢齊といふ者此道の宗匠として其名高し。其後大筒、小筒等の法わかれたり。



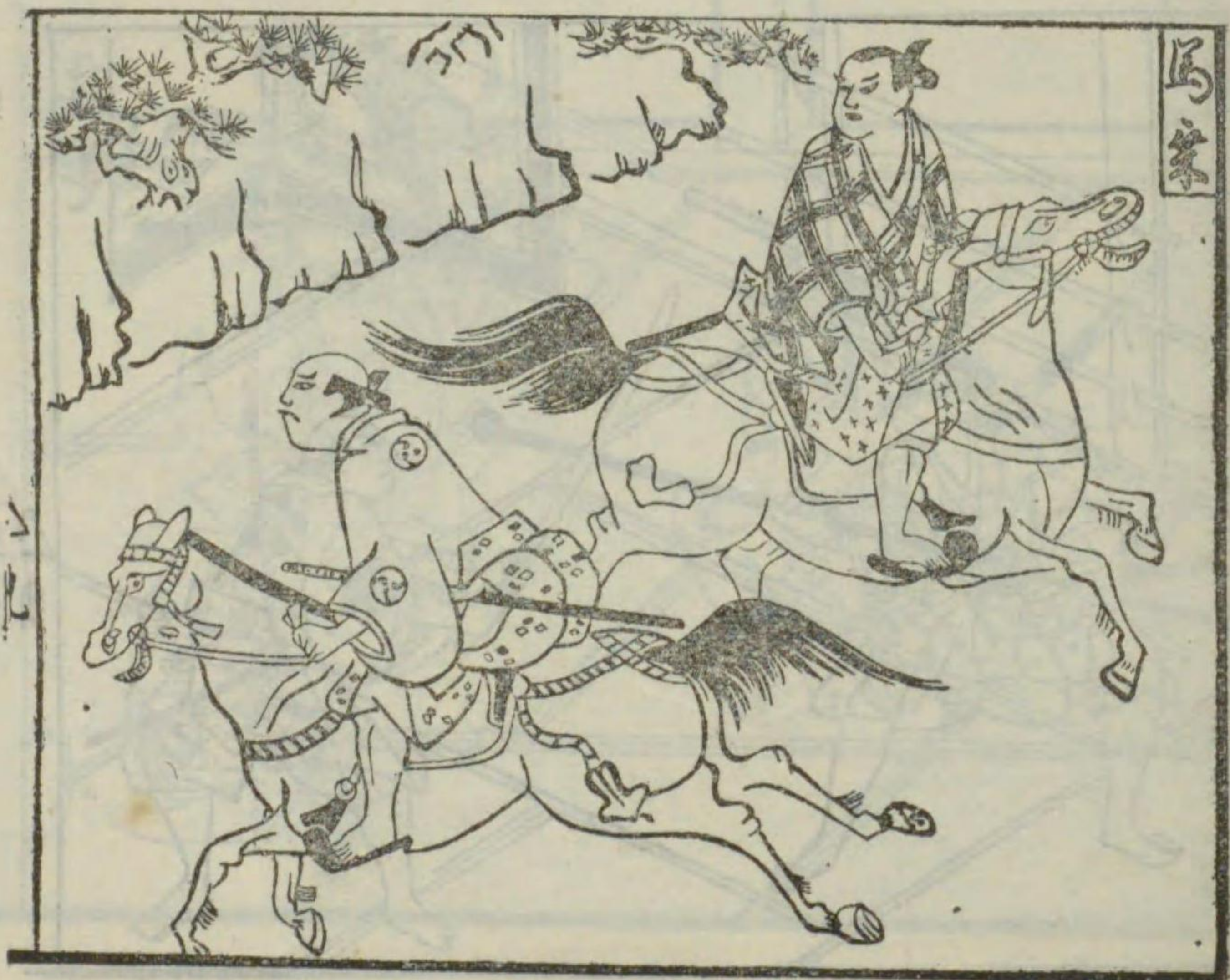
誠に大敵をくだくの軍器なり。【馬醫】馬醫を白樂といふは馬は白樂星のつかさとする所なり。唐士におゐて孫陽といふ人、馬の万病をさとり針灸薬の道をはじめ。黄帝の師となりて病馬の論をなす、このゆへに馬師皇ともいひ、白樂ともいふなり。【軍法者】軍法は七書其外武備志にくはし。圍幕のうちにあるがら敵の強弱をしり、天地寒温五運五行のことはり、時節の變をもつて相尅相生をはかりて諸卒をつかひ、夜討忍びの秘術、かけひきの軍配をなすに實に神のごとくにして利有を軍法者の第一とす。侍の上最知べき道也。【茶



六四

湯者】むかしより有事なれども法式品々ありて、數寄と號してより數寄屋園等の茶亭をしつらひ、路次入草木の植やう、料理鹽梅の品にいたるまでこまやかにわかれしは利休をもつて中興とし、古田織部、小堀遠江流品々あり。柔和敬節をもつてもとす。人倫のまじはり、行儀をしるべきの一助、實に益有樂にこそ。

【庭造】筑山又は假山ともいふ。むかしより有て久しきもてあそひなり。夢窓國師自然の數寄にして此人の流あり。西山の西方寺の庭、夢窓國師の作、よつて是をまなぶ也。庭作に

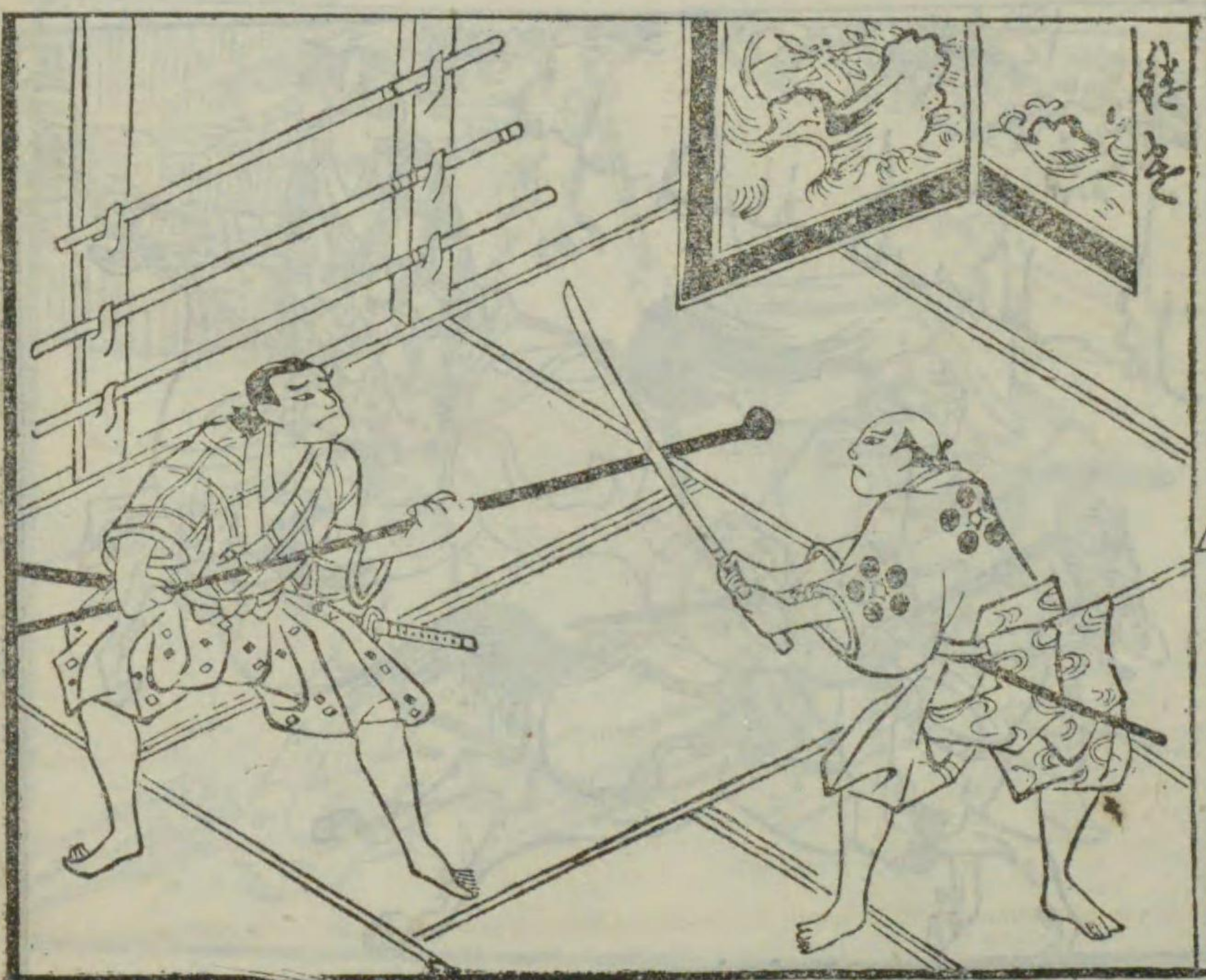


六五

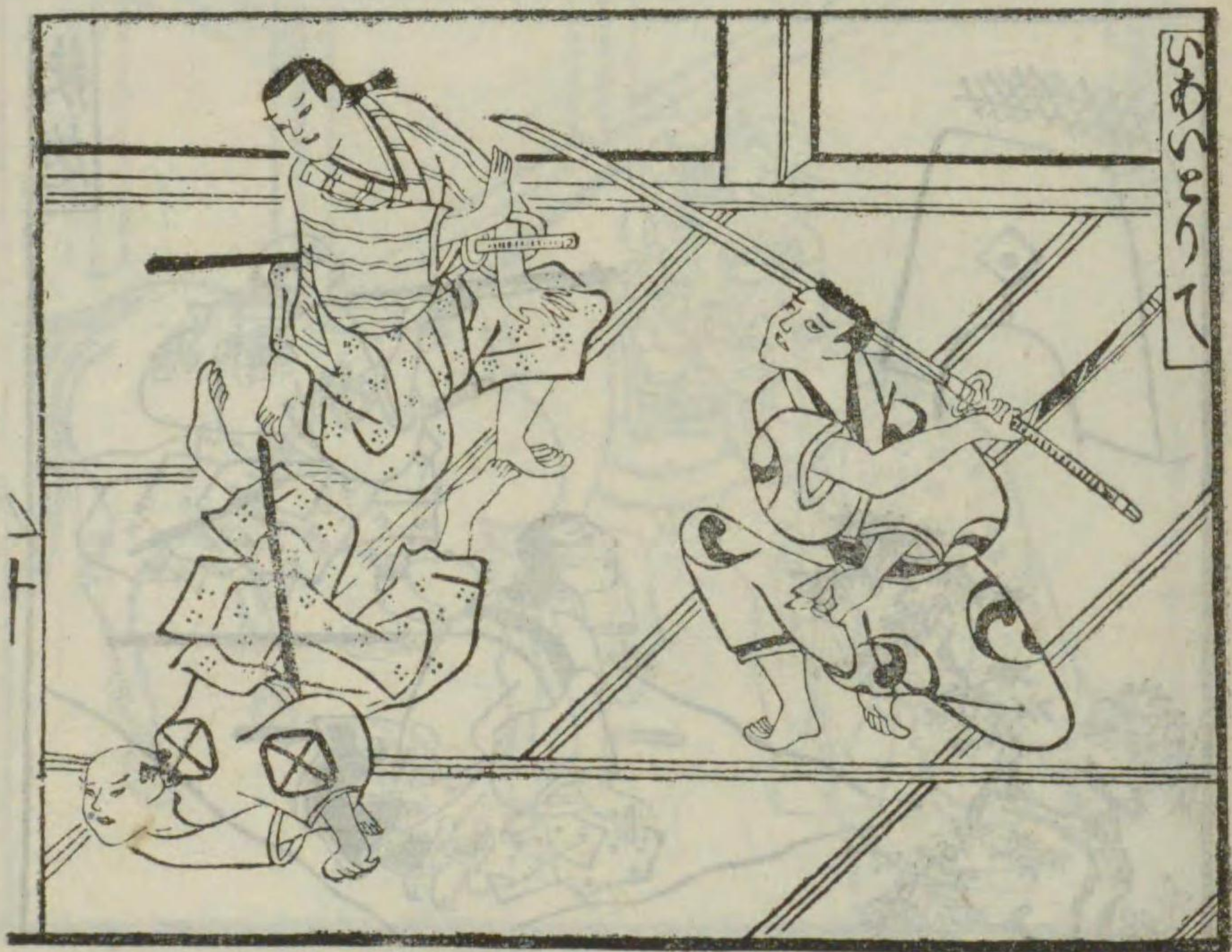
法式あり。四天王石、座禪石、根からみ、見付石置やうに口傳あり。寺社在家の作やう、口傳屋敷のうち山河たくわへ、福貴をうるの義あり。いづれの石も面をいぬいへむけ、水はきも同前なり。筑山芝山峯平作なり。

【立花】池坊を宗匠とす。頂法寺、六角堂の別當也。代々相續して一家をたつる。毎年七月七日二星に手向るの立花門弟相双て是を立る。洛中の貴賤群をなして是をみるなり。法式は花傳書有。近世に又立花の事あまたあり。【圍碁】周公旦の作也。日本に來る事は吉備大臣歸朝のとき持來せり。諸の仙人もてあそび

ものとす。盤の面は世界を表し、三百六十の目は年月日數、九目の星は九曜星、石の黒白なるは晝夜を表するなり。碁局作法、高サ六寸、長サ一尺四寸、廣サ一尺三寸八分、一目のあい七分、當世碁所洛陽京極通冷泉通上ル丁寂光寺の内本因坊、盤を造る所は二條通麩屋町の西久右衛門、四條通堀川筋、大坂天満天神の裏門。石は川原町通三條下ル二丁目に有。江戸盤作所、南傳馬町乗物町新兩替町。【將碁】周武帝詔あつて臣下王褒につくらせしむ。是軍法の備也。今世に流布するを小將碁といふ。其外中將碁、大將碁の法あり。碁に



六六



六七

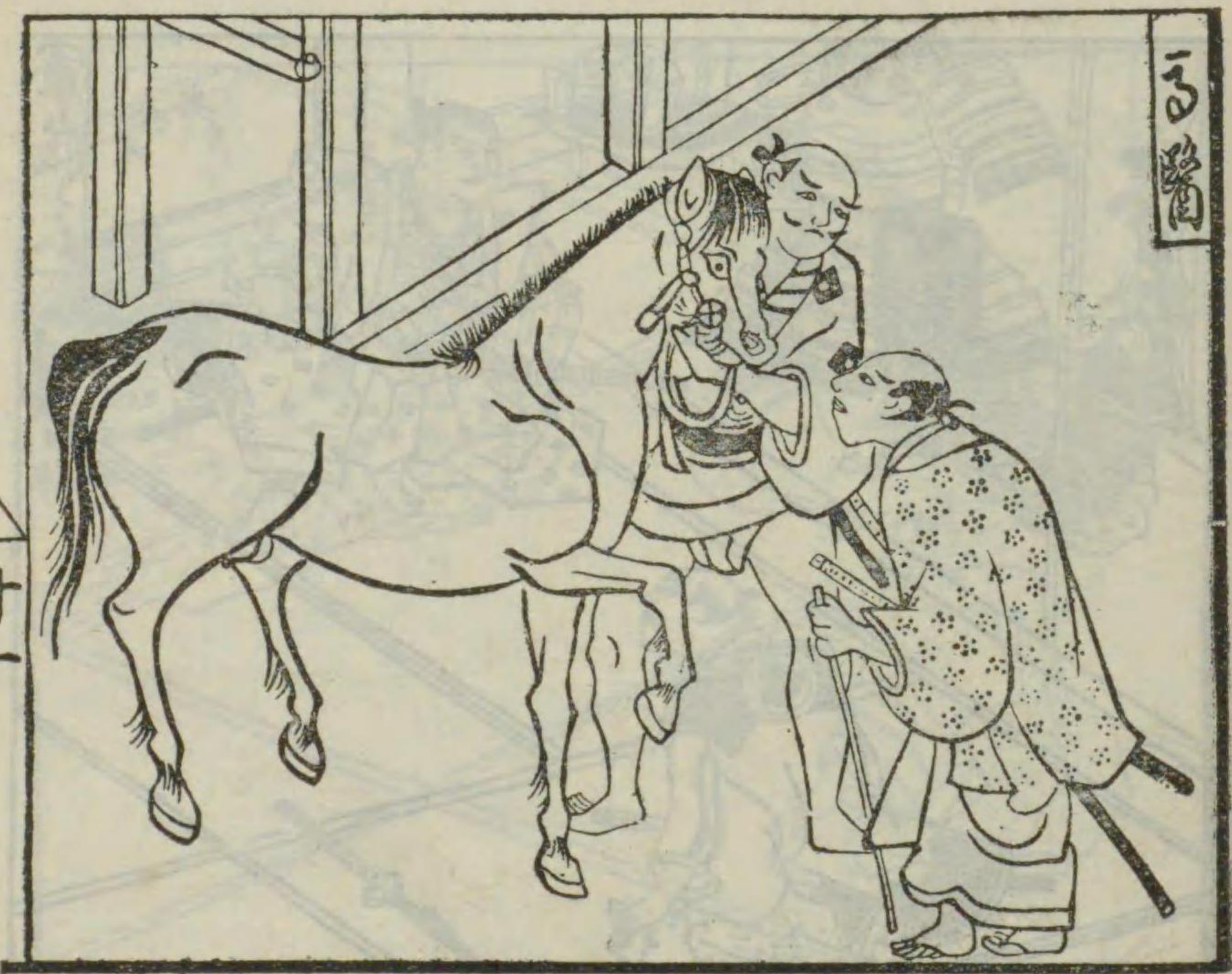
同じく吉備公の持來也。當世將碁の粹は廣庭中務、其外鑑や十兵へ、其名聞ゆる碁をつくるは碁盤一家にあり。

【双五六】阿育王の作、又は異朝の子建作とも。日本へは天監年中に渡る。盤は四季を表し、厚四寸八方に表してひろさ八寸。十二月に當て長さ一尺二寸、十二の目をもり、天地人の三さいにかたどり、よこ三段にわけ陰陽の義になぞらへて内外の二陣をなす。一月を司どりて黑白卅の石あり。日月を表して二ツのさいあり。須彌の三十三天に表して筒の竹を三寸三分に切、とかくに官女のもてあそび



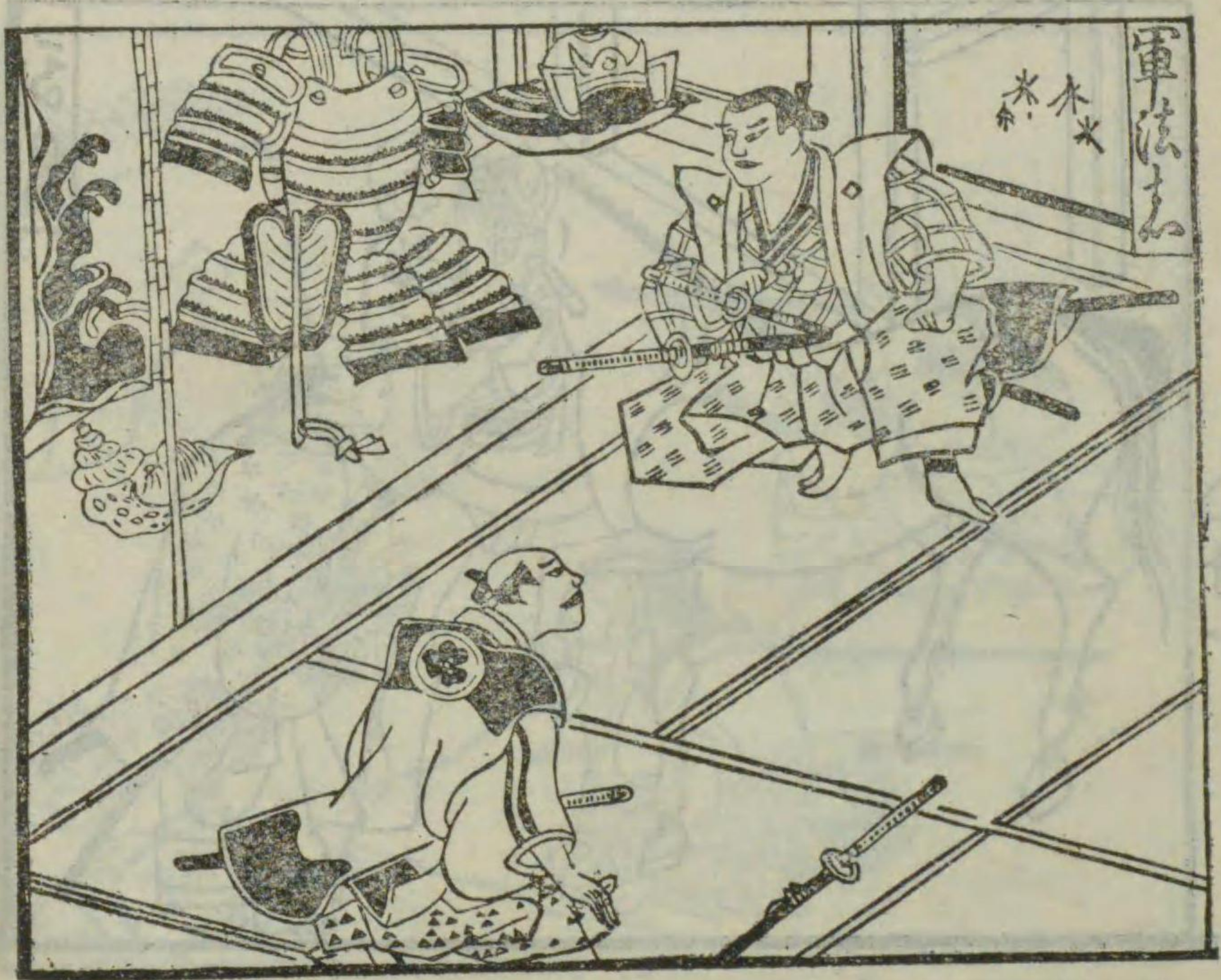
銃炮

ものなり。源氏わかなにもあるじの尼公くと目をこい給ふなり。【香嗅】香の徳有事佛神も感應まし、人をして優美ならしめ、清淨潔白の徳あり。傳聞、赤梅檀、蘭奢待はめじ日本にてもてあそひし柴舟、美吉野、初音、白雪等諸の名香あり。よく嗅智人を香嗅と號す。【目利】万の器、墨跡畫圖によつてそれくの目利、是重寶の人なり。道にころざす人は學べきは目利なり。當世の目利、劍は本阿彌光叔、同光碩、植原自仙、本阿彌三郎兵へ其外あり。古筆は、了因、了珉、谷中江庵寺之内ふや了仲、本江御弓町畠山牛庵其外有。墨

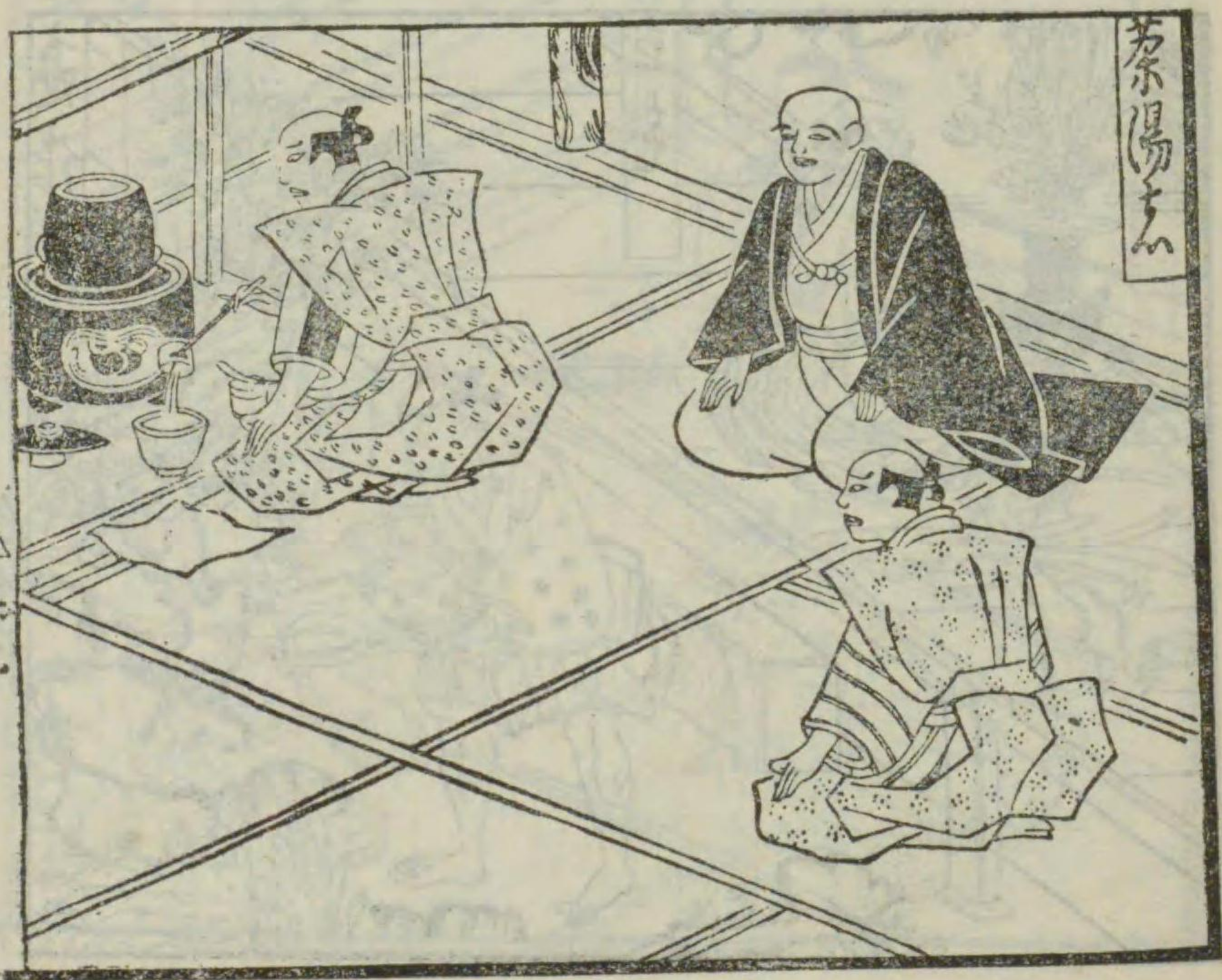


目利

跡は玉屋甲斐武藤十右衛門、品川東海寺春澤、繪は弓削屋半兵衛、諸器物は大文字や市兵衛、福田權左衛門、石野長右衛門、大和屋十右衛門、諸道具江戸京橋南へ一丁目片倉道悦、兼房町岡本重右衛門。【舞樂】樂人唐土よりは生まれり。樂調妙なる事佛神を感せしめ、人倫を和心をすましむるの法要なり。すべて一切の樂器をとる役人を伶人ともいへり。諸流有て京樂、奈良樂等の家をたつるなり。天王寺にあり。【簫】唐土の椽王の作也。日本にては聖德太子よりつたはる。樂器の第一として日本におゐて公卿のもてあそびさまくの樂



の調子あり、是を譜といふ。當世星造、松原通富の小路東へ入丁山本藤右衛門。【琴】琴は伏羲の作る所なり。二十五絃あり。是を瑟といふ。絃多少あり。大は五十絃あり。日本にては天照太神天岩戸にこもり給ふとき、天下闇となりしかばいだし奉らんとて万の神岩戸の前にして神樂をそらし給ふとて弓六張をならべて其絃をかきならし給ふ。これ<sup>わん</sup>和琴のはじめなりとかや。和琴は樂器の中にしては我國に出来しゆへ第一の座に着するなり。是を琴といふ。又は七絃あり、今世にもてあそぶ十三絃の琴の調あり、是をつくし琴といふ。





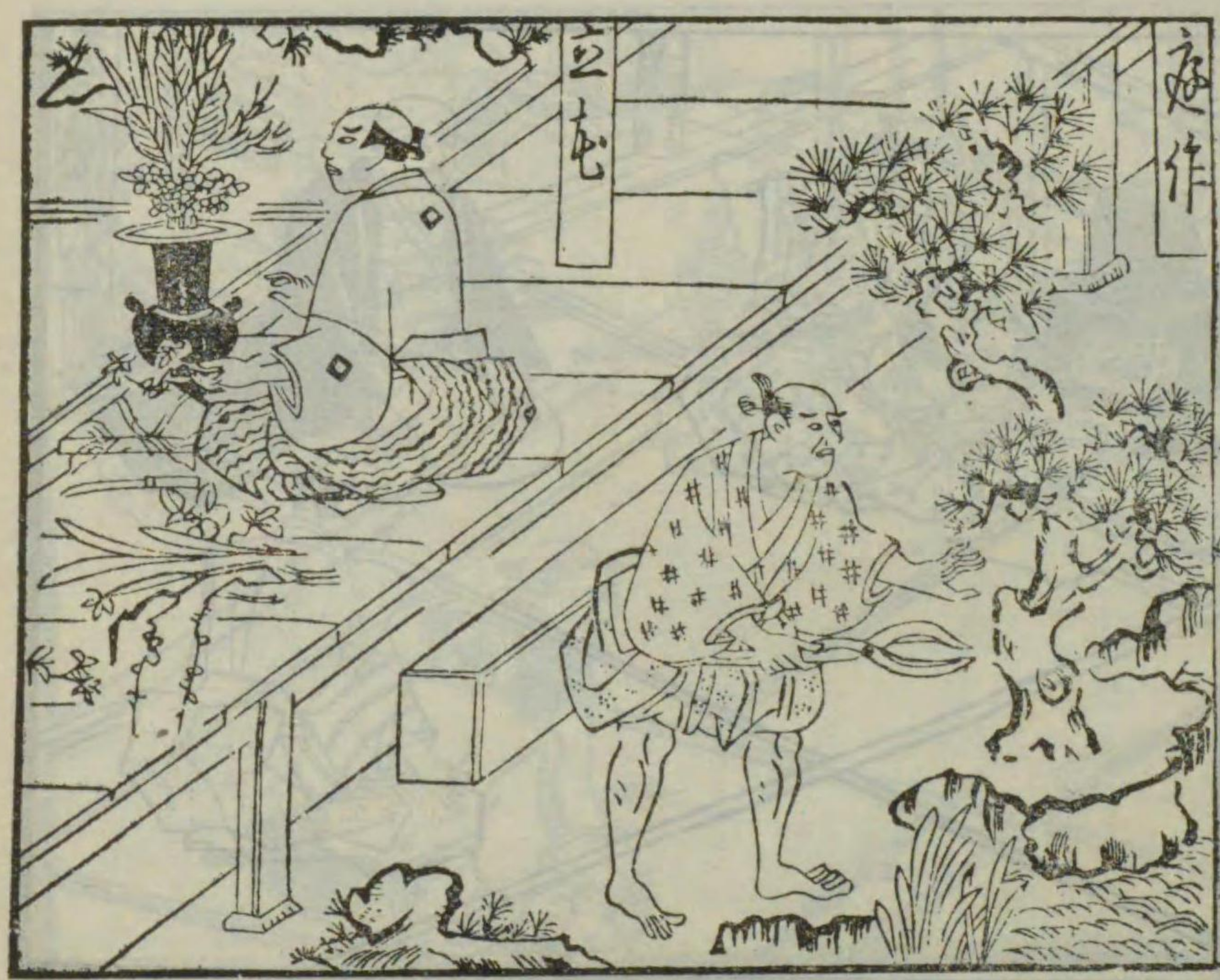
今様小哥哥さまのせすといふ事なく、琴の手を組といふなり。思ふに三味線にならひて組とはいふならん。

【琵琶】琵琶は伏羲の妹女媧子の作にて、魔王の股を表して作れり。佛道におゐて妙音井を祖とす。日本へわたる事は嘉祥三年三月に掃部頭貞敏入唐して持來せり。中世禪師生佛といふ盲目に源平の物語を作りて教けるより、生佛それにふしを付て琵琶をかきならしけり。今にたえず。是を琵琶法師ともいへり。

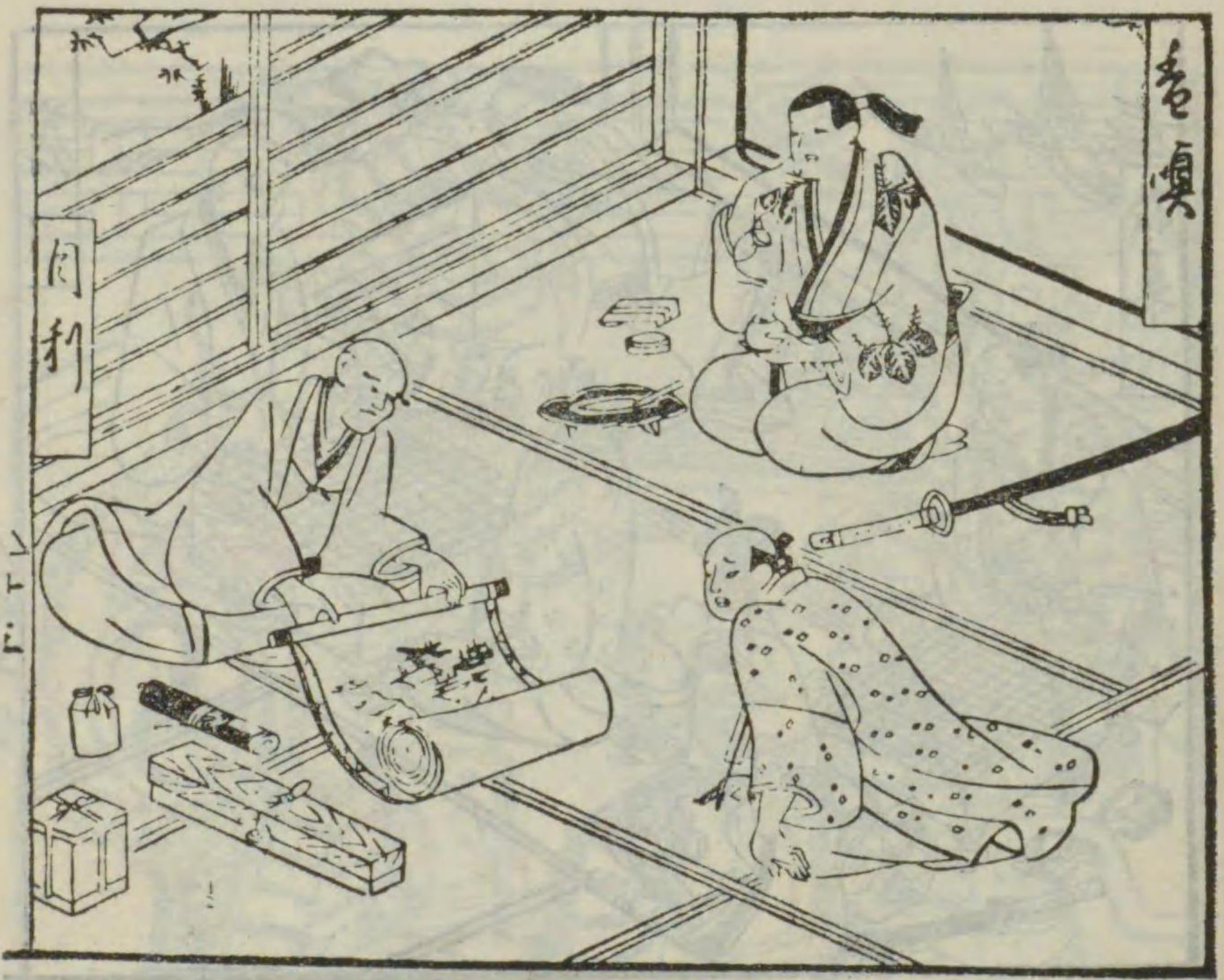
【箴角策】琵琶と同作なり。日本にては高麗國の惠慈といふ僧に聖徳太子のならひ給ひし

なり。此僧は太子佛學の御師匠のため太唐の天子よりわたす人也。

【笛】異朝の令公といふ人松竹林を通しとき鳳凰のこゑを聞てこれをつくるとなり。簫（せう）のふえ、くだの數多少あり。【能】能といふ事むかしより有といへども其傳記たしかならず。百一代後小松院の御宇鹿苑院相國公の代に觀世、世阿彌といふ者公方家の能大夫として盛に是をもてあそび一家をたて、觀世流あり。今にいたつて第一也。觀世より今春保生わかれ、今春より金剛座わかれて是を四座といふ。猿樂といふ事は神代猿田彦の餘流の

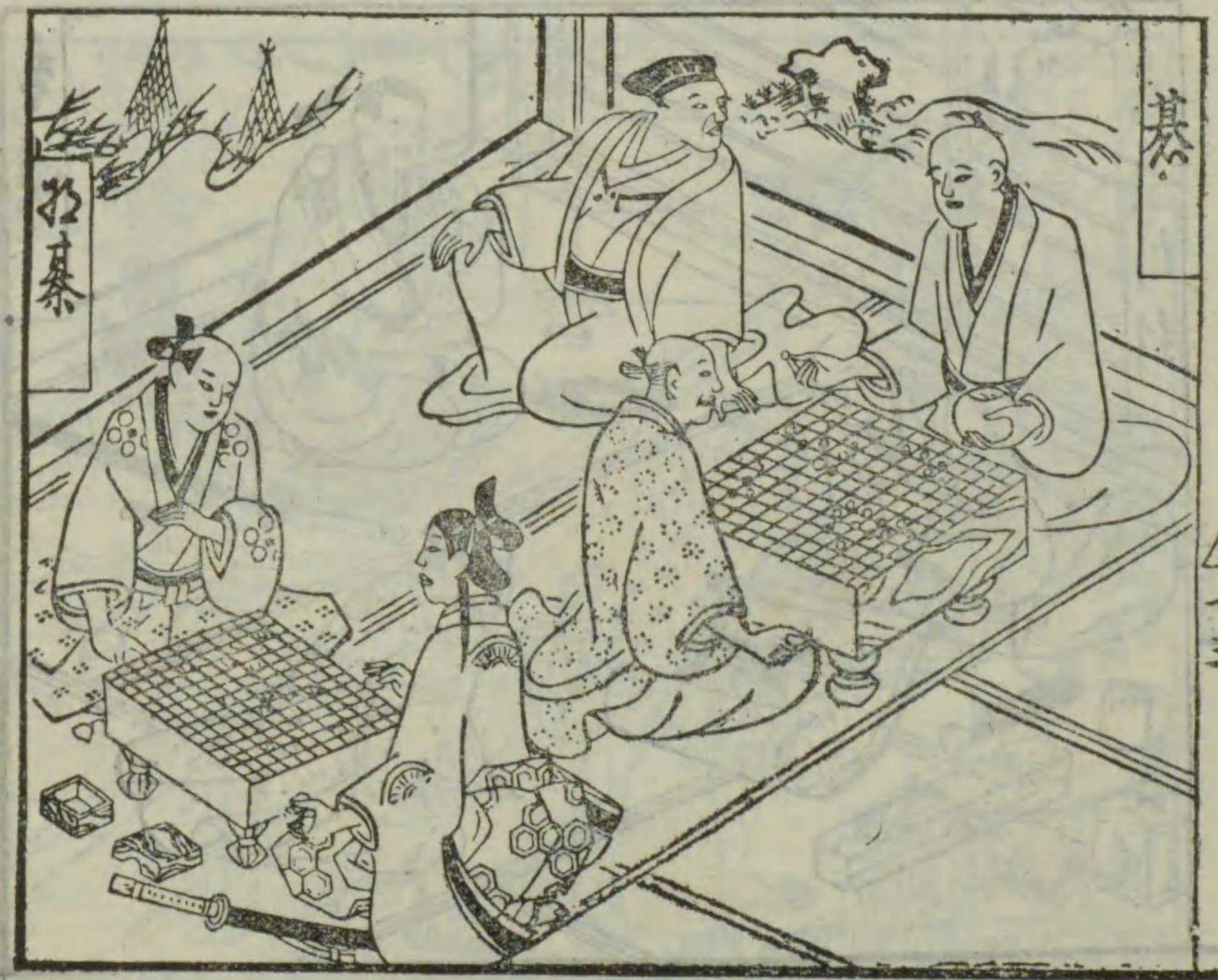


七二



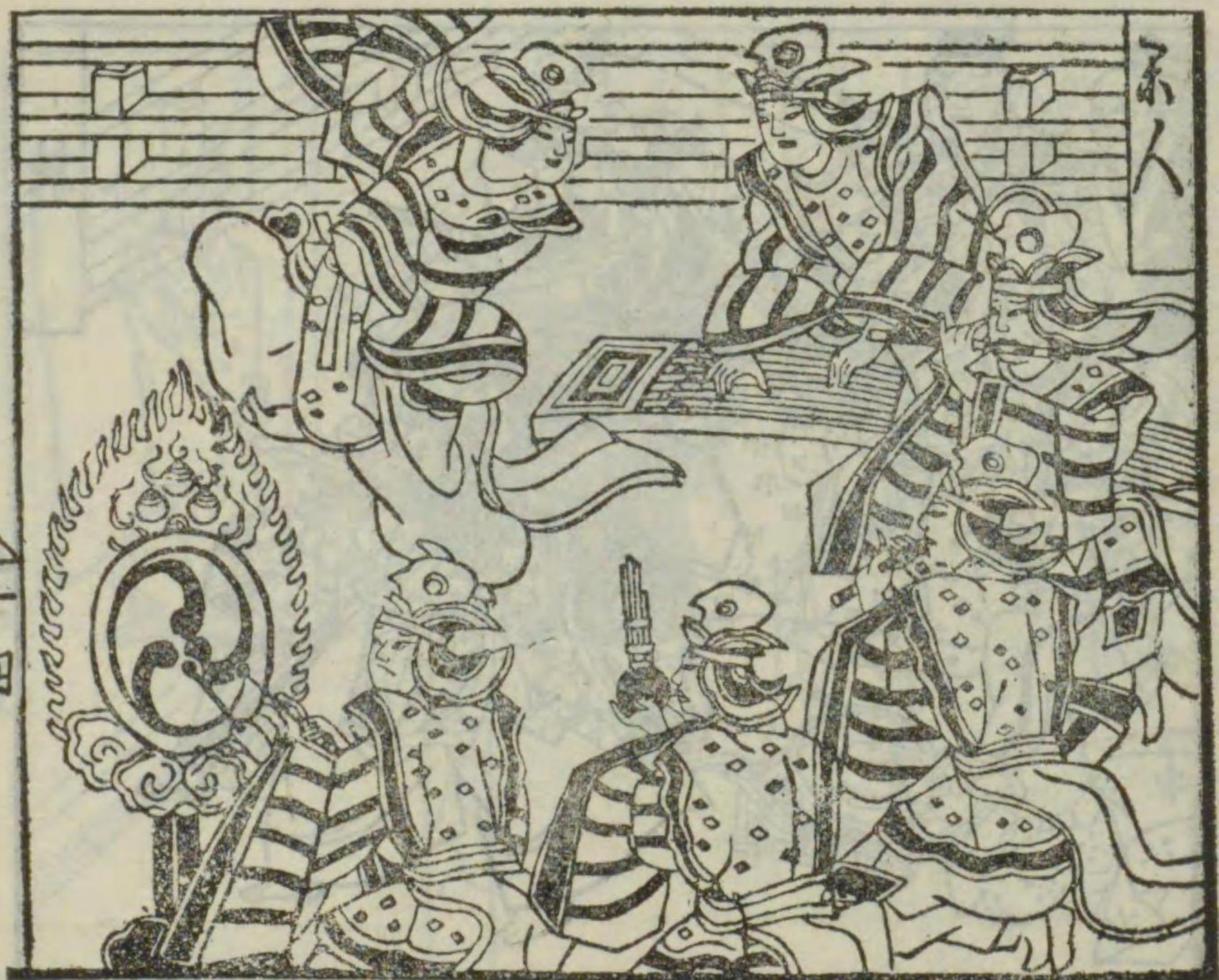
七三

いひなりとかや。【地謡】謡は日本の遊興の隨一なり。作者多くあつて神祇、釋教、戀、無常、唐土、日本の古事、古哥、古詩の意すべて士農工商のことわざ、幽玄鬼神のことにいたるまでつくさずといふ事なく、詞を和、和語を以てつゞり、枕詞たくみに、詞の縁を第一とせり。神事、祝言の場、遊宴の座敷におゐてこれをもてあそばずといふ事なし。國家泰平の調子、爵をさり、老を若やぐの功能有て誠にめでたき様なり。【笛】横笛と號す。唐土の東波居士池中の龍吟を聞て汀の竹をきりて八ツの穴をあけて吹しとかや。穴を哥口といふ



七四

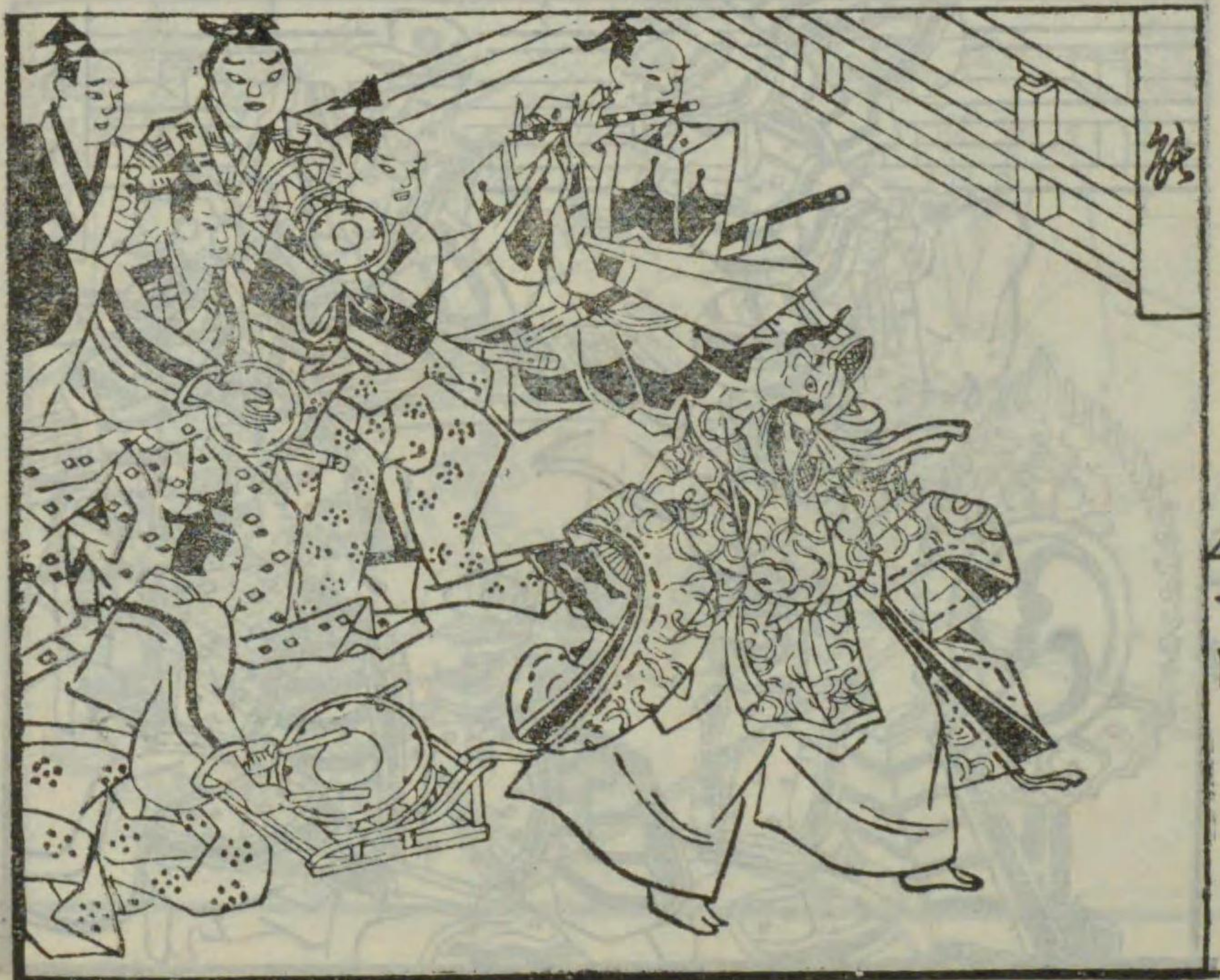
は和國にての名なり。五調子におゐて一穴づつに各名あり。竹は漢竹を上とす。高麗笛是をこまふえと稱じてむかしよりもあそぶところなり。當世笛は森田庄兵衛、春日市右衛門、一噌いら右衛門、庄田與兵衛、其外略之。【鞞】鞞に大小有、小を小鞞と稱じて大の上に座する、秦の穆王の作也。二面の皮は天地をかたどり、花形は星を表し、調絲は五行五常をかたどり、筒は須彌山を表す。大鞞は陽にして呂也。小鞞は陰にして律也。これ陰陽和合の器なり。當時小鞞打は觀世宗兵衛、保生新九郎、大藏長右衛門、幸野清五郎、大鞞は葛



七五



野市郎兵衛、鞍師二條玉屋町烏丸六角下ル  
丁、大坂は堺筋かはら丁。【太鞍】太鞍のはじ  
まりは釋尊の御時より時の太鞍をうつよりは  
じまれり。其事下にみえたり。枹は陰陽を表  
す、當時打手觀世左吉、今春又次郎。太鞍は  
鞍屋にあり。【狂言】人として笑を催すためな  
れば法外俳優の事なり。【舞】むかし源平の軍  
人事の盛衰を作てふしをつくる、是を座して  
かたるをも舞といひ、又仕形をなすをも舞と  
稱するなり。舞に兩流あり。越前の幸若、洛  
陽の大柏流なり。近世女舞ありて天冠を戴  
水干に大口を着し、拍子をなす左右は男にし



七六  
ノ下

て、大紋に烏帽子を着して脇と稱す。當世幸  
若八九郎、女舞笠屋新勝、大柏柏木なり。【一  
節切】尺八より作出すものなり。尺八の略器  
なり。さま／＼の手あり。委は洞肅記にみえ  
たり。當時吹手は相國寺の内原田是齋、寺町  
通三條上ル丁今西一音。【尺八】其長一尺八寸  
のゆへに尺八と號す。楊貴妃の哀音を表すと  
かや。玄宗帝の作なり。唐土の僧普化和尙是  
を愛せらる。今虛毛僧は此末流なり。【料理】  
料理を藝として身を立るを料理人とも、庖丁  
人とも號す。其者を召抱るはいふに及ず、貴  
賤の人弁知べき道也。定家卿諸藝多き中に、

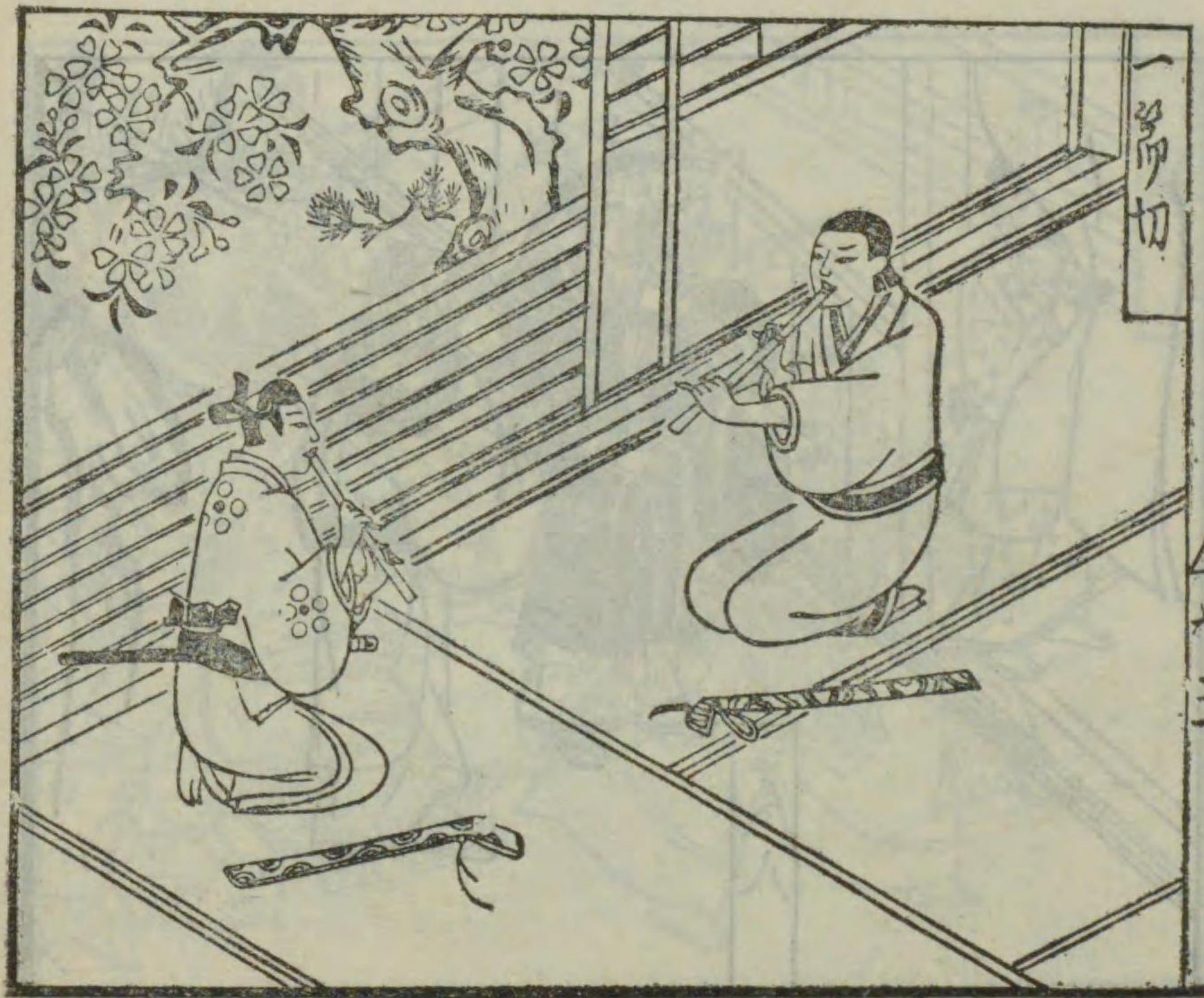


七七  
ノ上

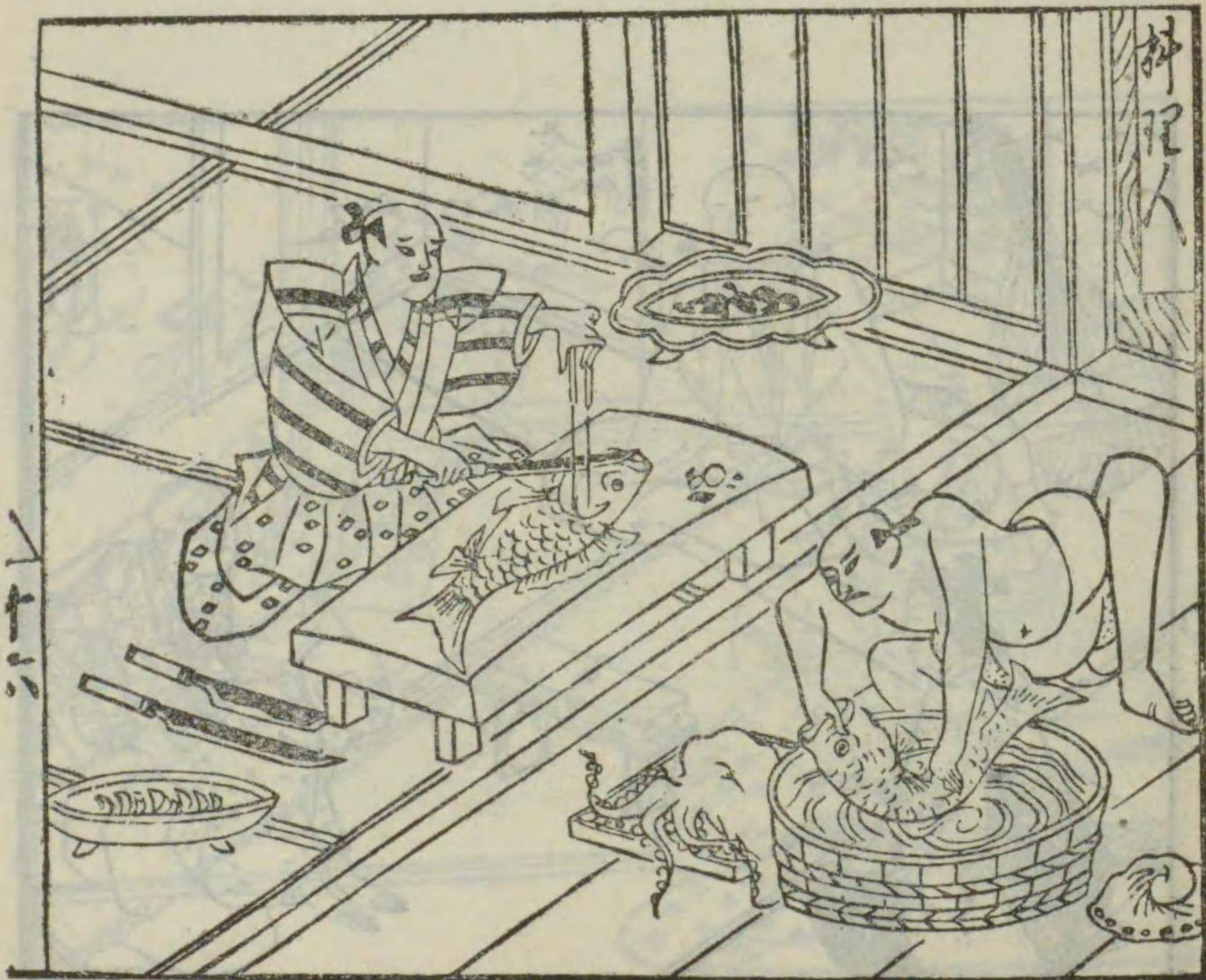
此道に長じ給ひければ、末の世に至るまで此一流あり。凡有生の第一は命をもつて本とす、然に命は食にあり、此ゆへに人間第一の樂は食を元とす。よつて温寒冷熱の五味の品々を分ずしては其味を愛するによしなかるべし。

【水練】武要の一藝なれば武士のみがくべき事なり。諸民におるても男子のうへには川越の難義なきにしもあらざればこゝろかくべし。

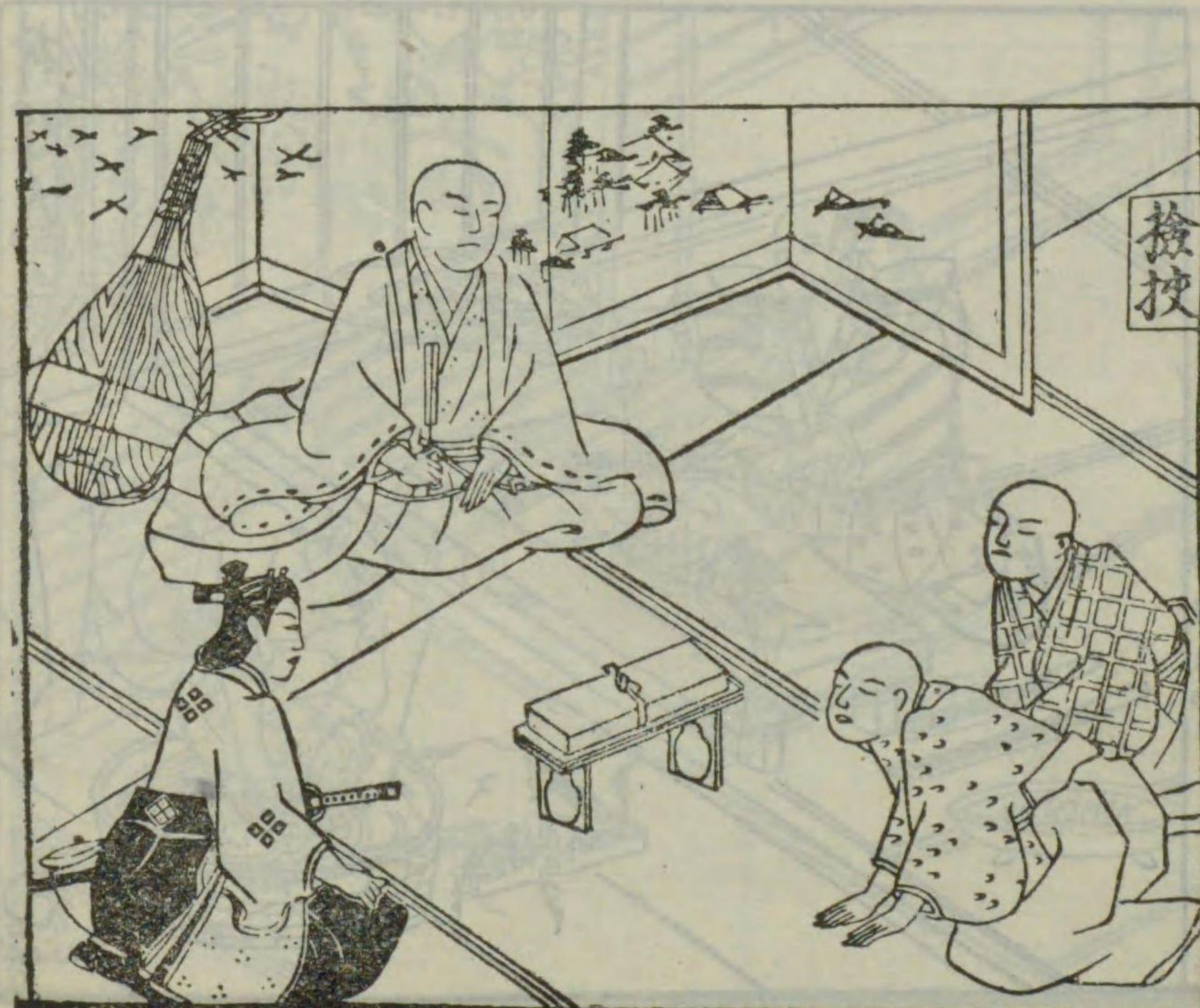
【座頭】初心、打掛、四分、勾當、檢校何も官なり。行長平家物語作教へしは生佛といふ座頭なり。誠に高位にまじわるものなれば心直すなにありたきもの也。聞傳へしは逢坂の蟬丸



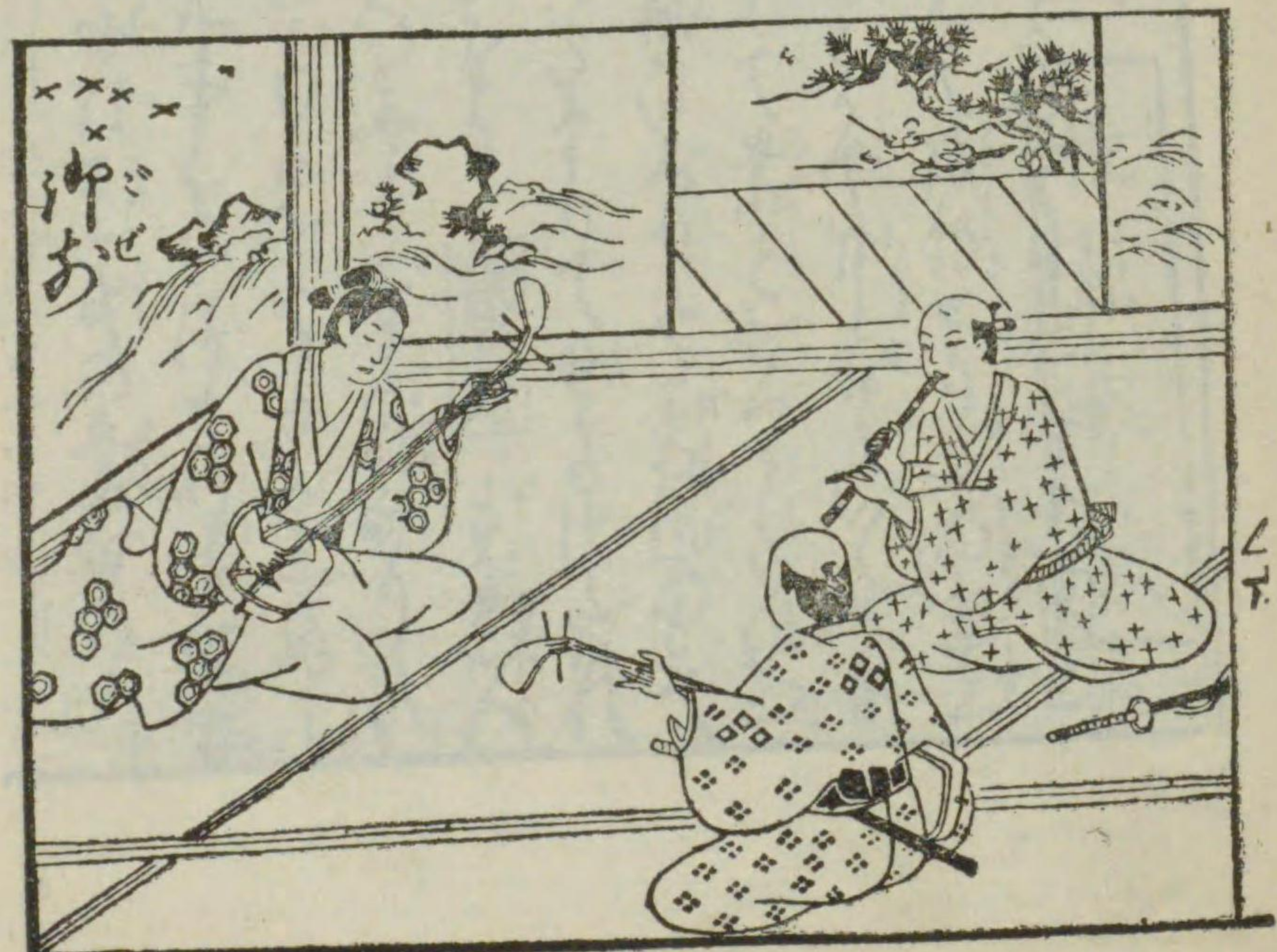
又は景清日向勾當といひしとかや、初官より段々の官あり。石塔二月十六日、涼み六月十九日なり。檢校入用凡四拾貫目餘なり。



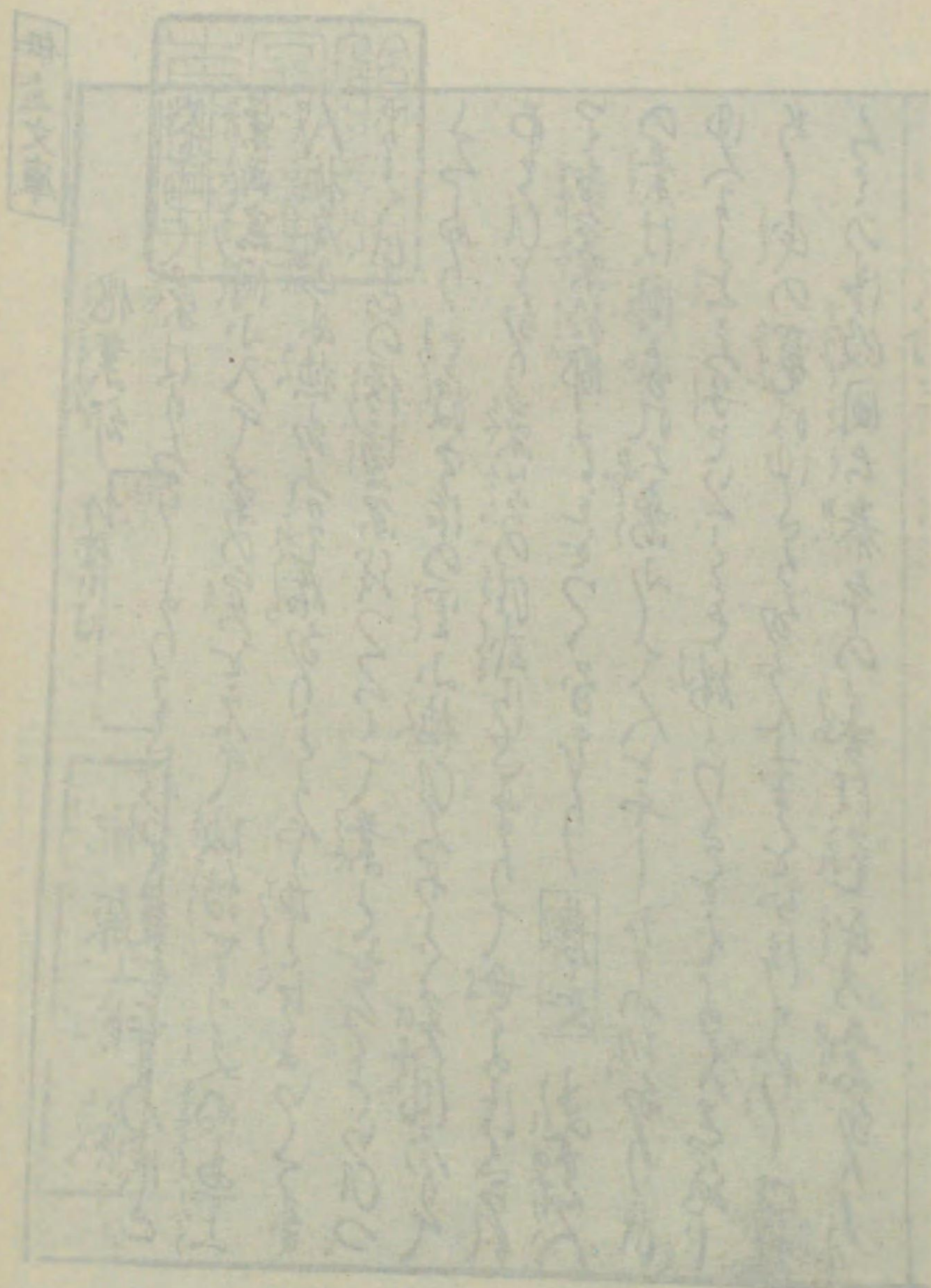
光孝天皇御子雨夜の前にはじまる  
といふせつあり。これもれきくのおくかた  
へも出入又はいとけなき娘子に琴三尾線をお  
しへ侍れば、みもちきやしやにありたきもの  
なり。



【御前】光孝天皇の御子雨夜の前にはじまる  
といふせつあり。これもれきくのおくかた  
へも出入又はいとけなき娘子に琴三尾線をお  
しへ侍れば、みもちきやしやにありたきもの  
なり。







所作入  
由來入

人倫訓蒙圖彙 三

作業部 次第不同

【茶師】茶はもろこしよりわたれり。建仁寺の開山さいまい茶西宋國に入て茶の實をえて歸朝せり。又明惠上人梅尾山に植給ふ、是始なりとかや。中古にいたるまで此山の僧坊茶をつくりて業とせりといひつたへたり。其後宇治の里に植ひろめて美風みふうのもてあそびとなり、茶會の法式さだまりて、世につたはれり。煎茶都鄙に是をつくるなり。【農夫】夫農人の業は國家の大要にして人をやしなふ功なり、此ゆへに上天子といへども賤かわさをばよくしろしめし、民の籠かごのゆたかならん事をおぼしめし、御めぐみの御政國土泰平の基は是民の業なり。

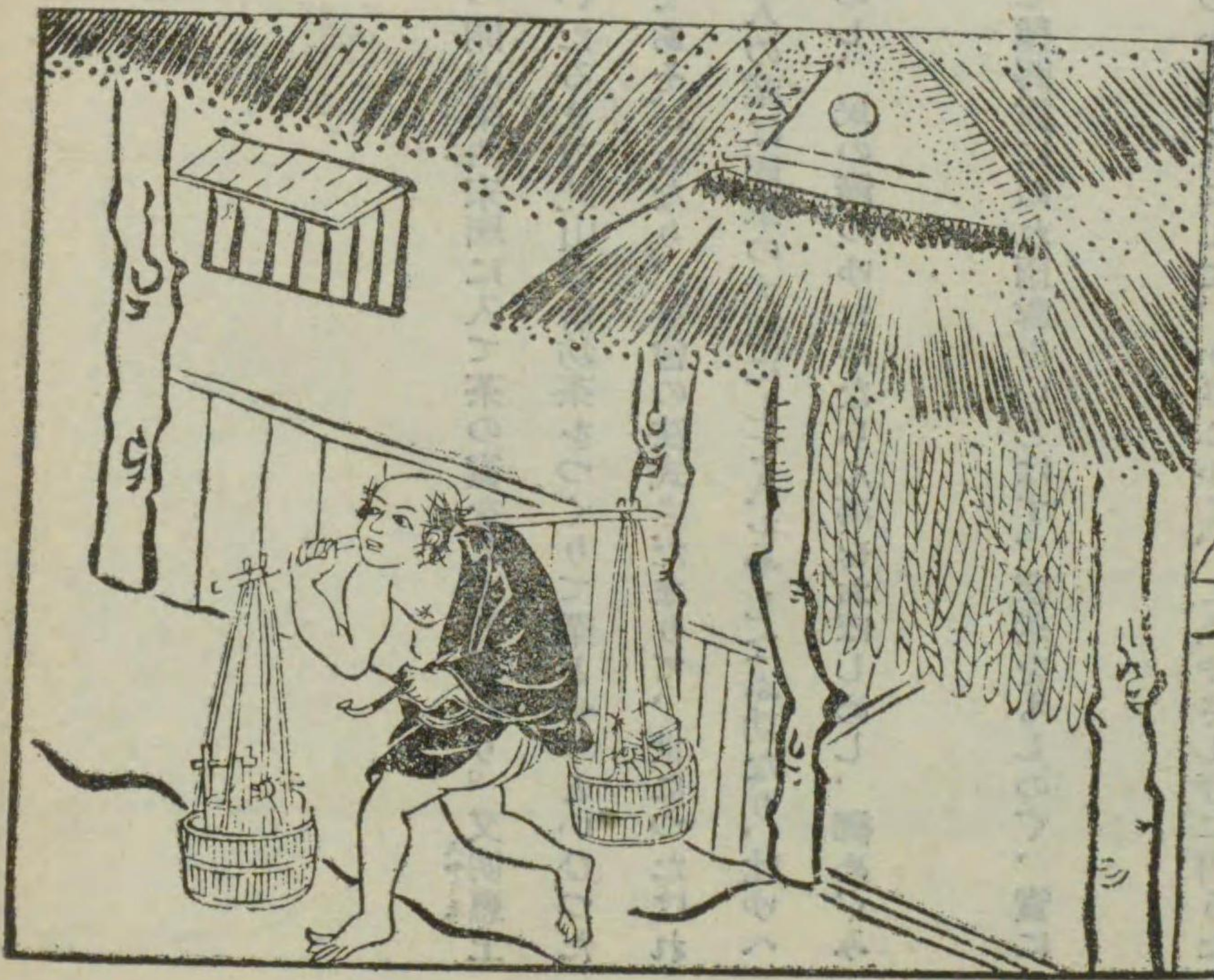
【種蒔】農夫のことわざ春植て秋納あきま、田がへし種蒔露にぬれ雨雪をいとはず、寒暑をもしのぐ、實にくるしきことわざ也。

【田植】女の業なり、小乙女さをとこといふは若き女のかねぐろにして、かさふかく、こゑやさしげに田うた

とてうたふ一ふしの、都にはぢず、やさしくも、しのばしくもみゆるをいふなるらん。

【耕】耕作は盤古大王の御子にはじまるとも、又天竺の融農にはじまるともいへり。是則毘沙門天王化身也とかや。田の守護天は毘沙門天也。此天のいます國土は毎日白米の降所なり。又米を菩薩といふは、種の時は文殊、苗の時は地藏、稲は虚空蔵并、穂になる時は普賢、飯の時は觀世音并なりと。云々

【稻播】白引、ひるは田をかり、いねこきのかせぎをいだし、夜るはうす引なり。うす引うたとて一風あるをうたふ也。

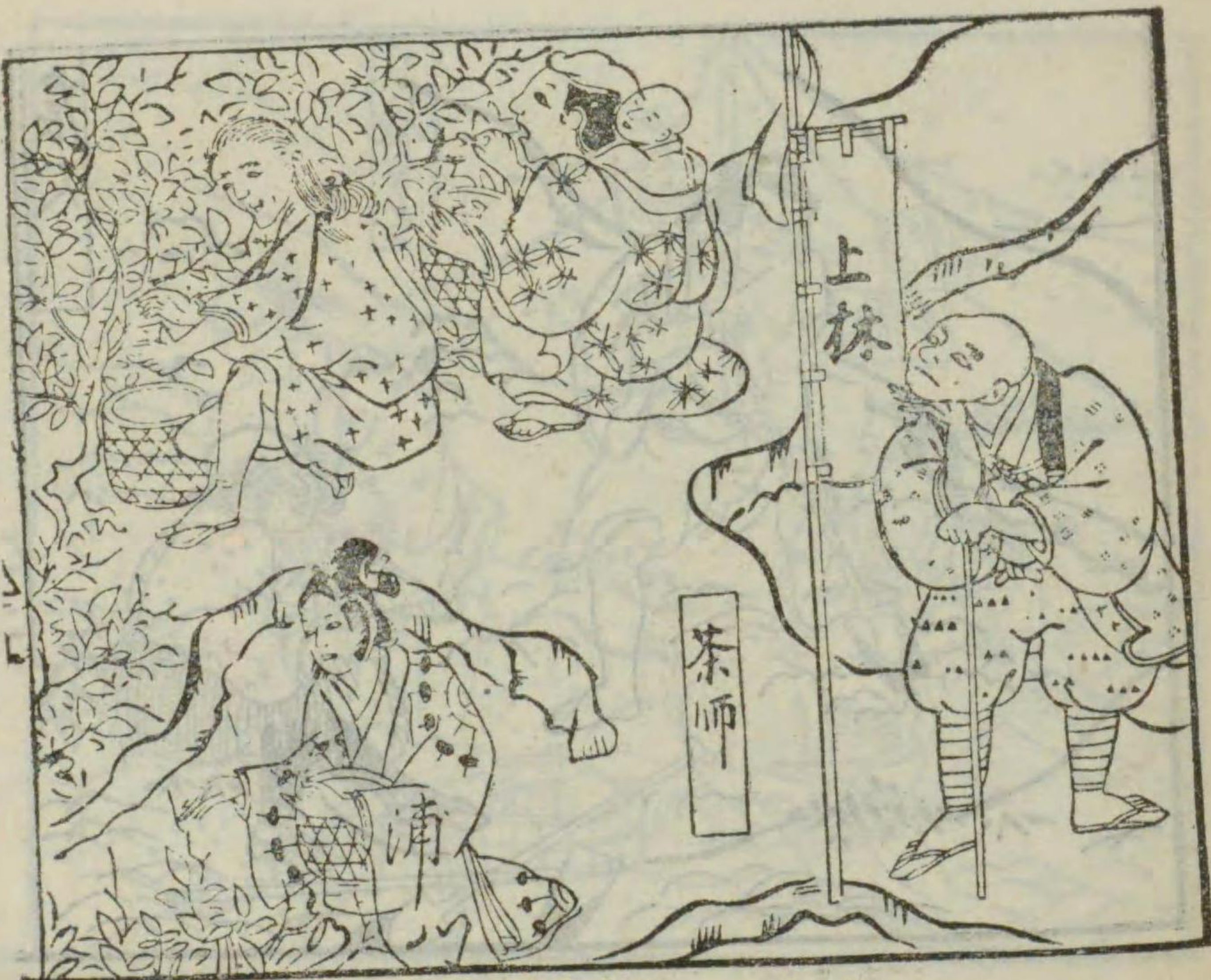


八六

【牛飼】草刈、牛馬の食物なり。草刈童は笛を吹といふ事ありて、三路の草刈笛などいひつたへたり。樵は哥をうたふ、樵哥牧笛とも詩に作れり。

【樵夫】大原、靜原、高雄より柴をかつぎ出る。八瀬、市原、二ノ瀬、鞍馬などより黒木を馬に負出る。夫山へ行ば、女は市に出るなり。其外山里より箸木、楊枝木ををきりいだすなり。

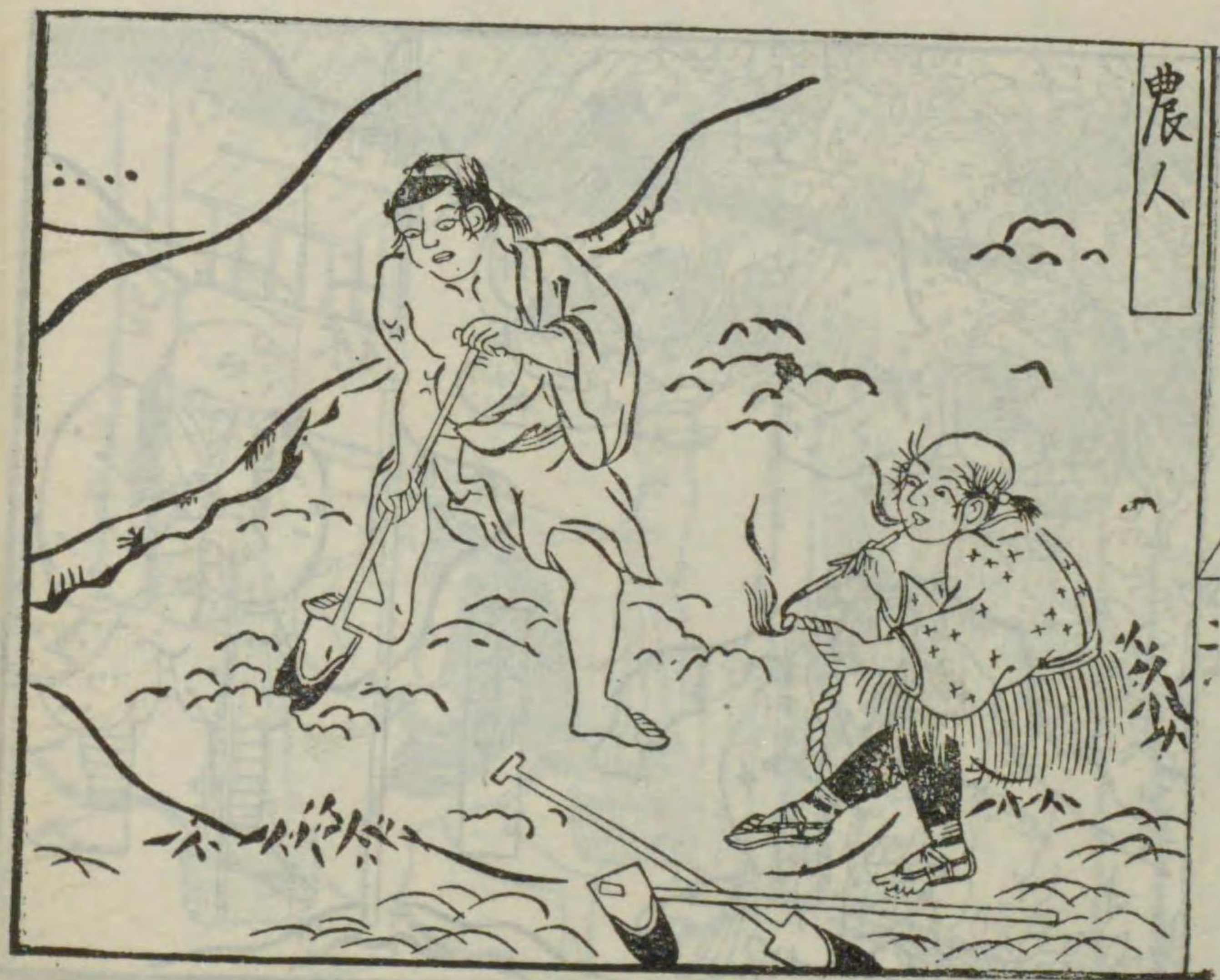
【柴賣女】薪とる賤なり。爪木とは手にて折ほどの薪なり。眞柴かるとも、爪木とるとも哥によめり。都の邊山里より薪をいだす。わ



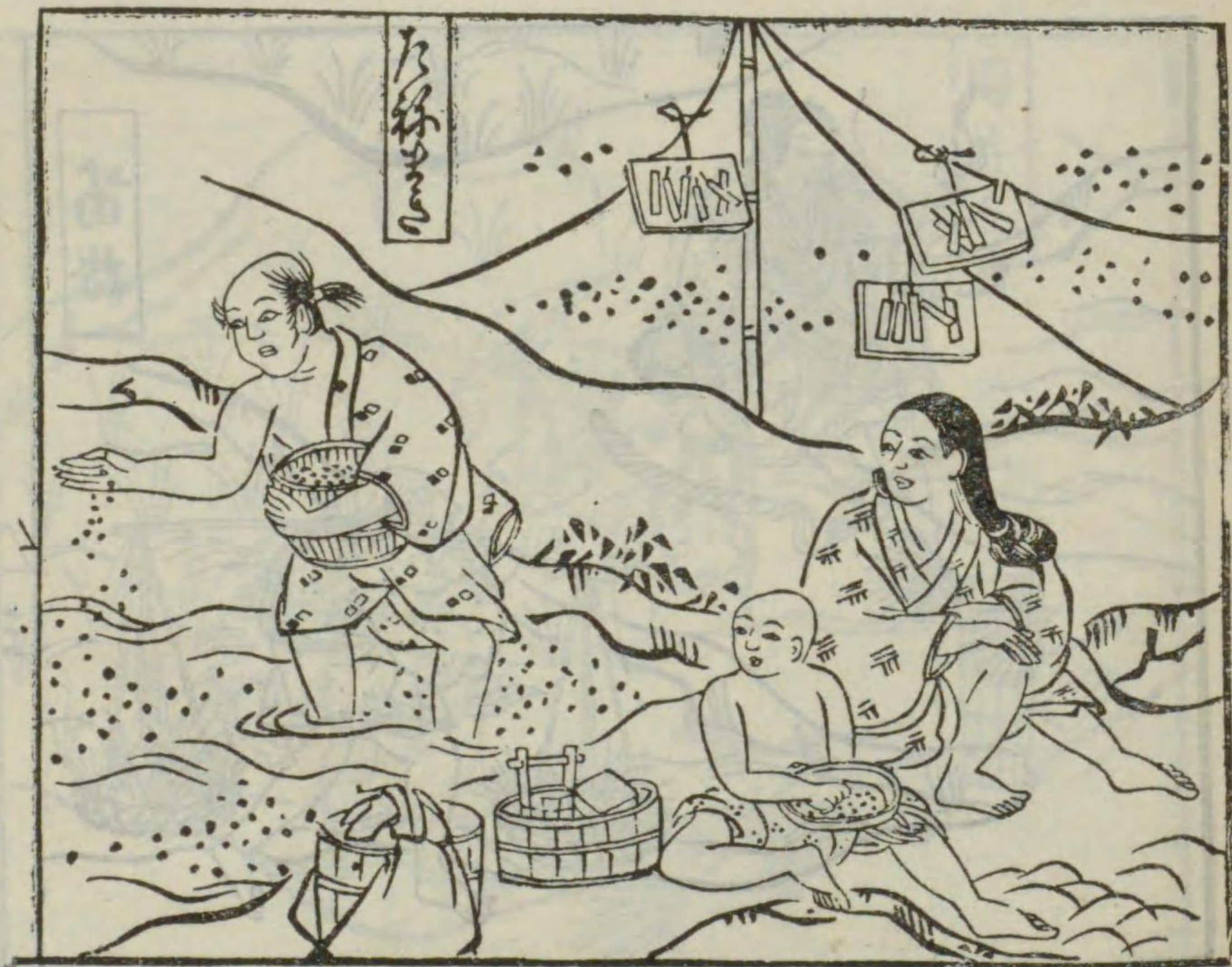
八七



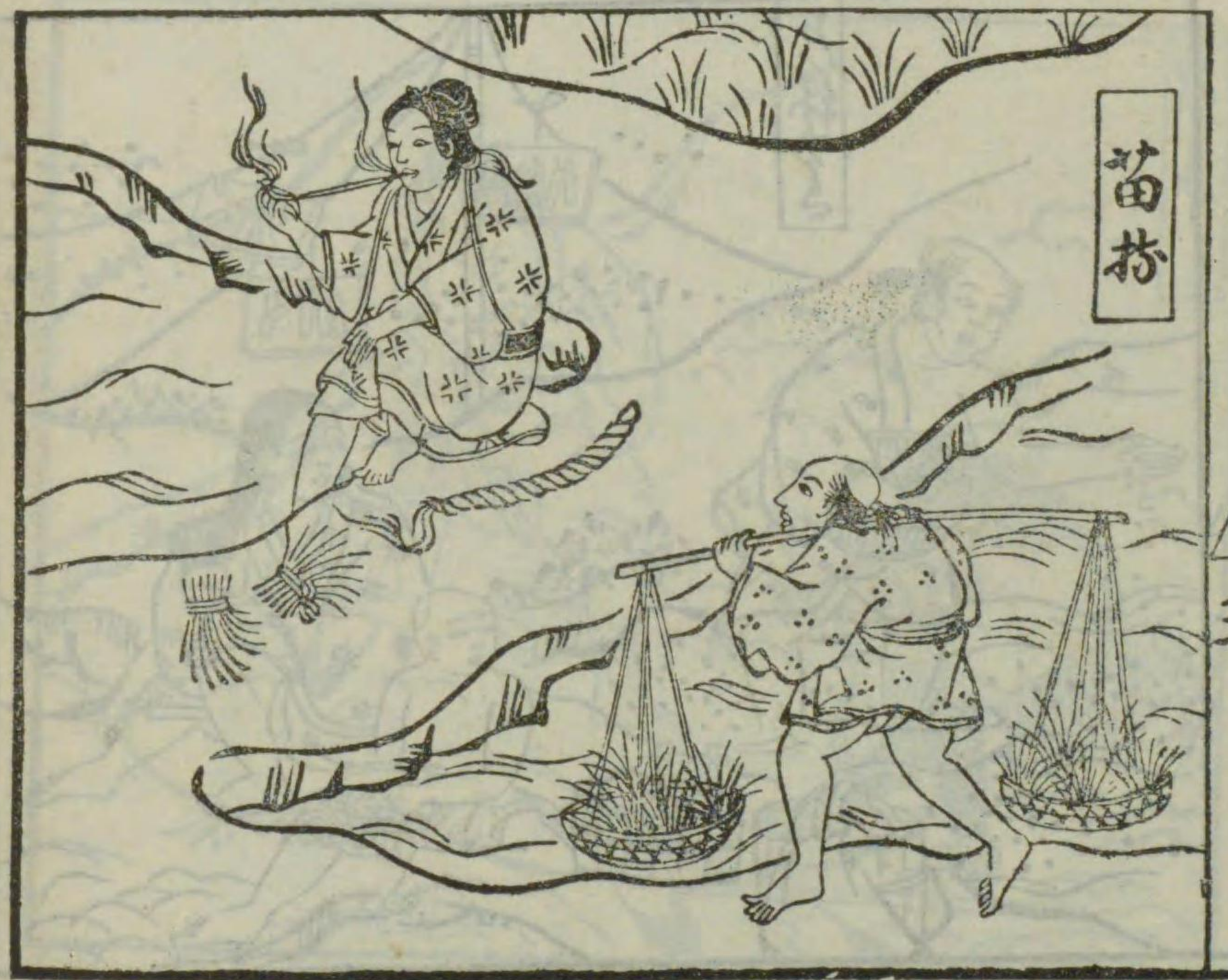
きて大原木とて名にたかし。此里より出る柴  
うる女の白き帯に白脚半して、かいてのあれ  
ばかつきたる柴を後ざまよりみするなり。む  
かし平家運かたふきて後、女院大原のおくに  
すみ給ふ。其下女ども此所に住居しが世わた  
るよすがなふして、柴をうりけるが、さすが  
おもてを恥て、うしろむきてみせける、其遣  
風なりとかや。最殊勝の因縁なり。



【杣人】山彦のこゑならでおとする物なし、  
岩もる水に濁をしのぐよすがならで、人家も  
なき所を住家となし、見上るもはかりなく、  
見おろすも底ふかき數百丈峯をわけ、猿猴な



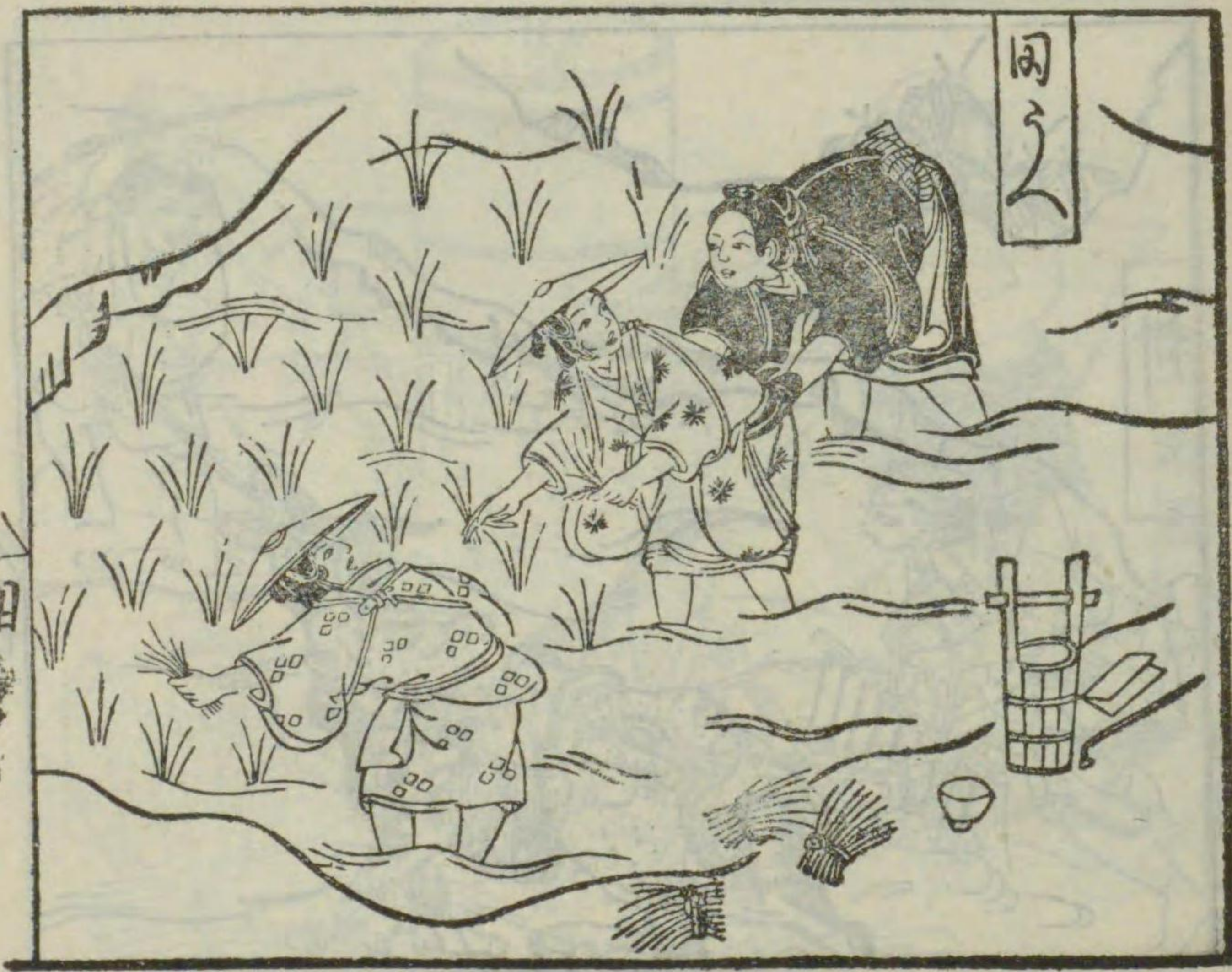
らずして梢をつたふ業、危をわすれ身をかへりみざるも、世わたるほどくるしきはなかるべし。



九〇

【筏師】奥山より伐くだして川水にうかふるを組合せてこれに乗、竿さしくだすを筏師といふ也。都鄙にこれ有中にも、嵯峨の大井川の筏哥によめり。

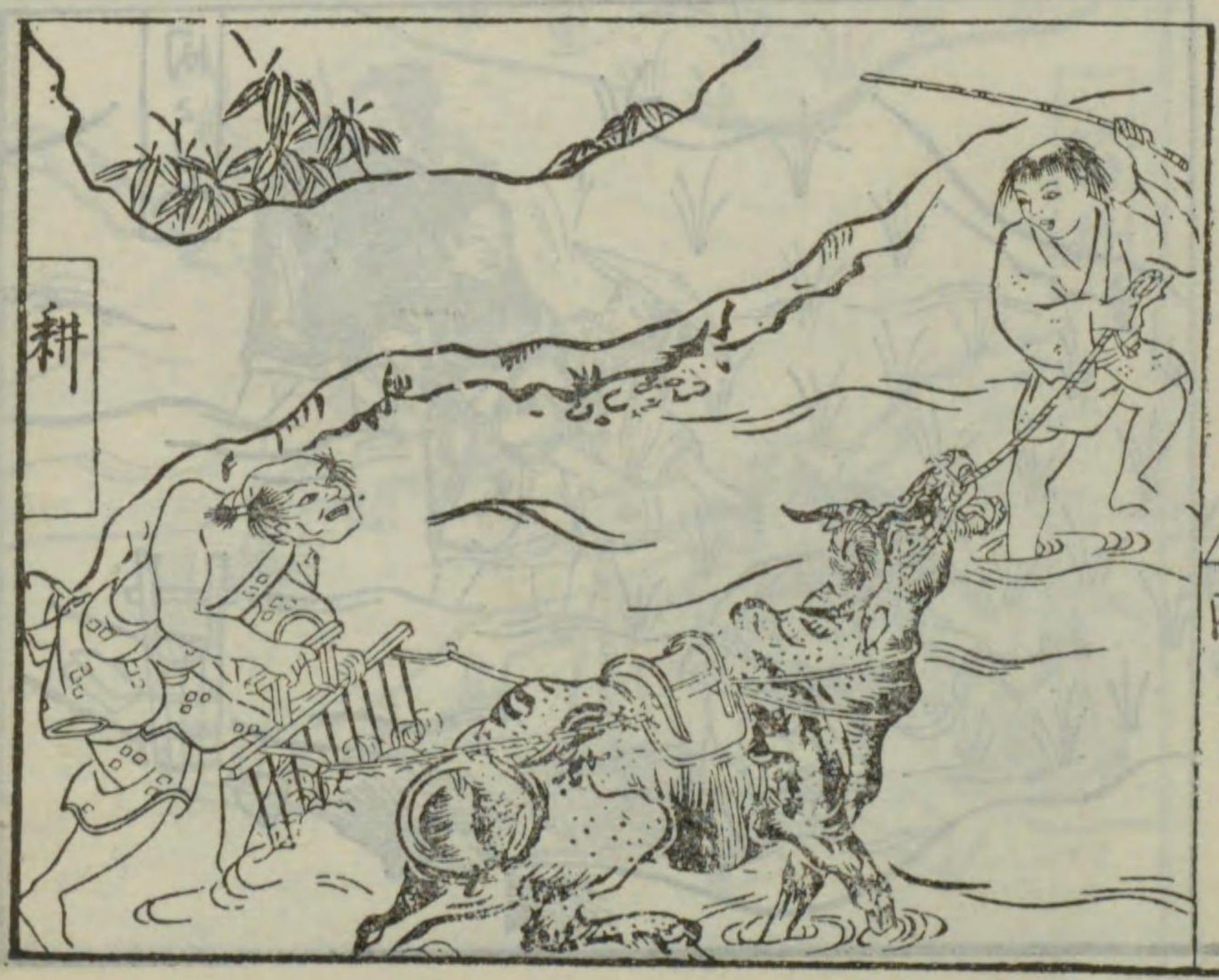
【鹽焼】汐汲、汐水は女の業としてこれ汲也。同じ海邊の者なれば魚とる海人になぞらへ汐汲海人ともいへり。汐は海にて汲、薪は山にもとめてこれを焼ゆへ、薪とる老夫を鹽木のおきなともいへり。誠に鹽やくありさま、みるに



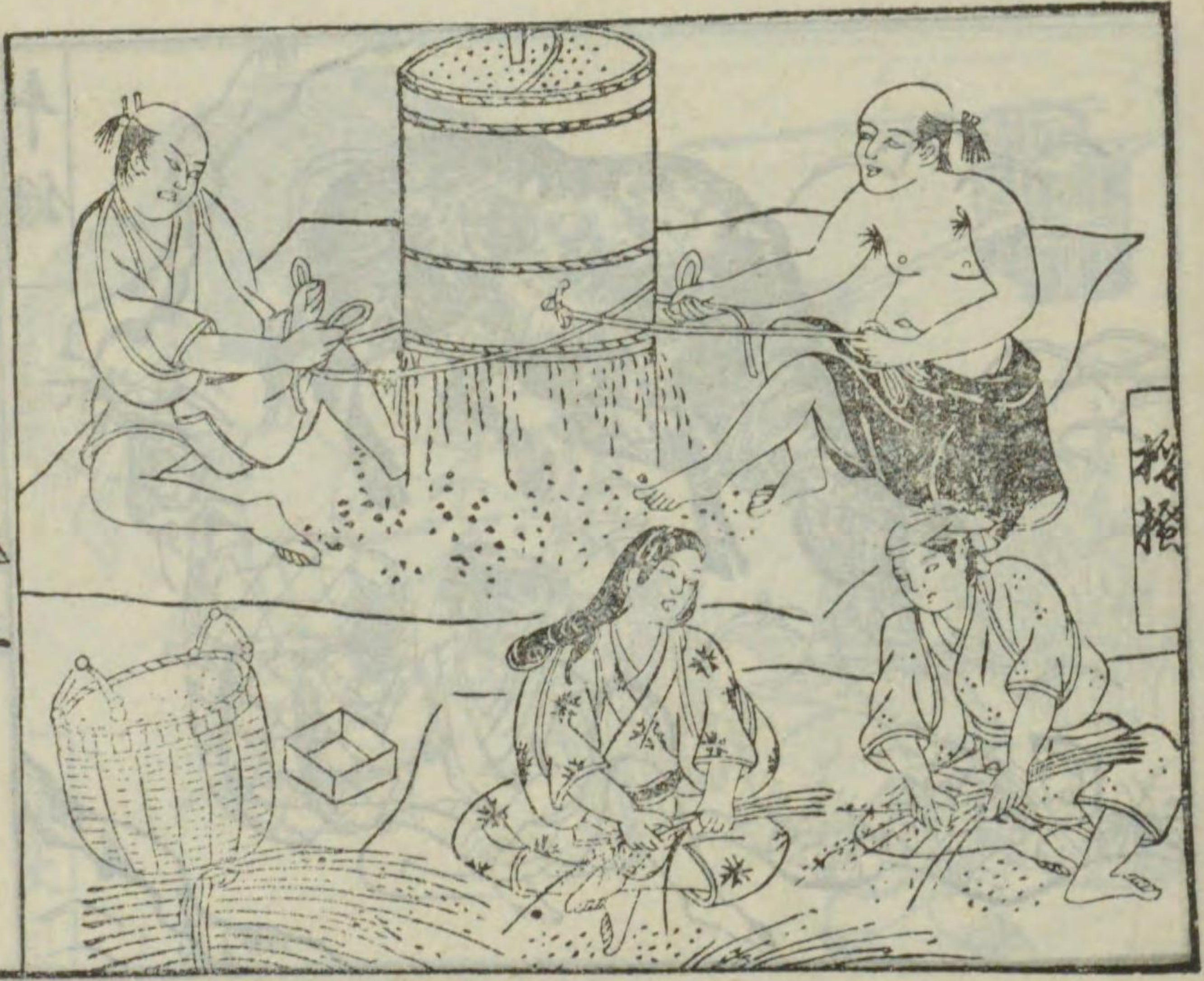
九一

くるしき業なり。人家はなれたる海邊にて焼ぬれば、朝夕に立のぼるけふりの風にしたがひてさまざまの風情をなすは、又くらべみんものなきゆへ、しほ屋の煙とてこれをあひし、哥人もこれをめで、和哥には詠するぞかし。

【渡守】 瀬田にまはればやすく陸路あれども、急旅人はこれに乗る。古哥に「ものゝふの矢橋の舟はやくともいそがばまはれせたの長はし」舟渡にさまざまあり。所の主の役義なれば領内におゐて、橋のかけられぬ川には、渡守に扶持とらせて船を造てこれをわたすな

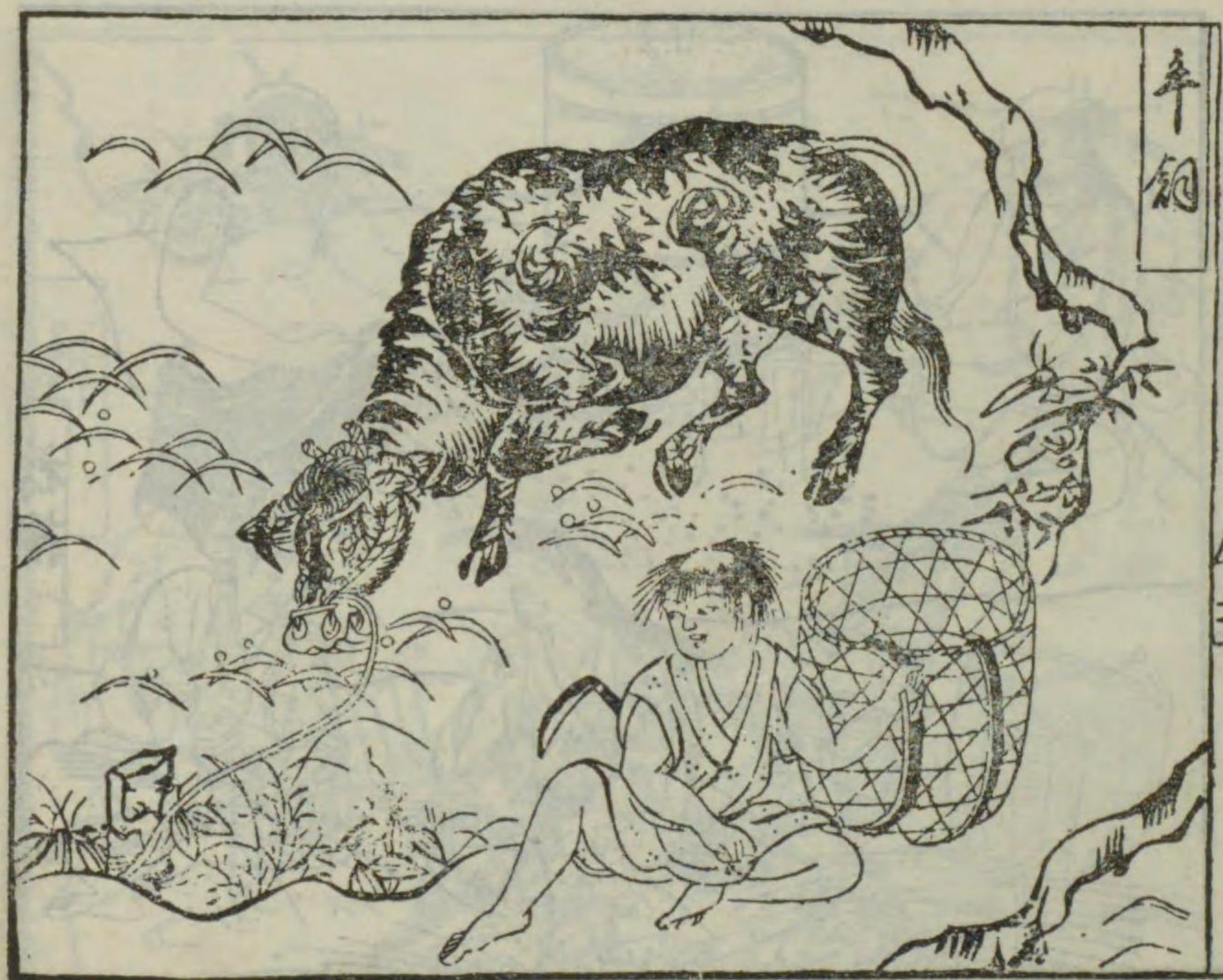


九二



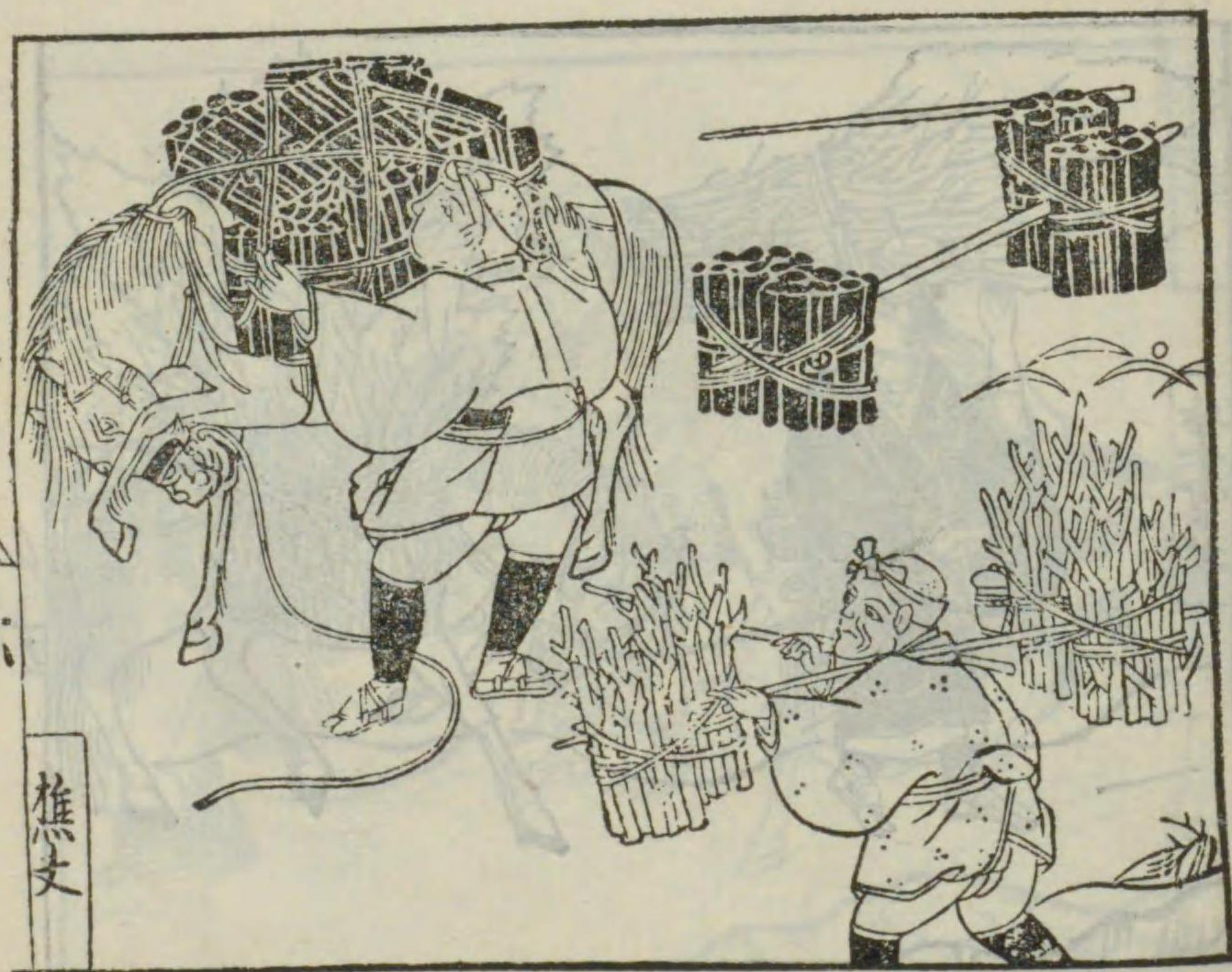
九三

り。然るに案内不知の旅人渡し場にさしかり、此渡しは錢を取にやと思ふけしきあれば、偽て錢を取所あり。これ大なる誤としらず、欲に天命をしらぬはいとほかなきためしなり。  
【石賣女】所の法にて、一日に一駄の外はゆるさすとかや。



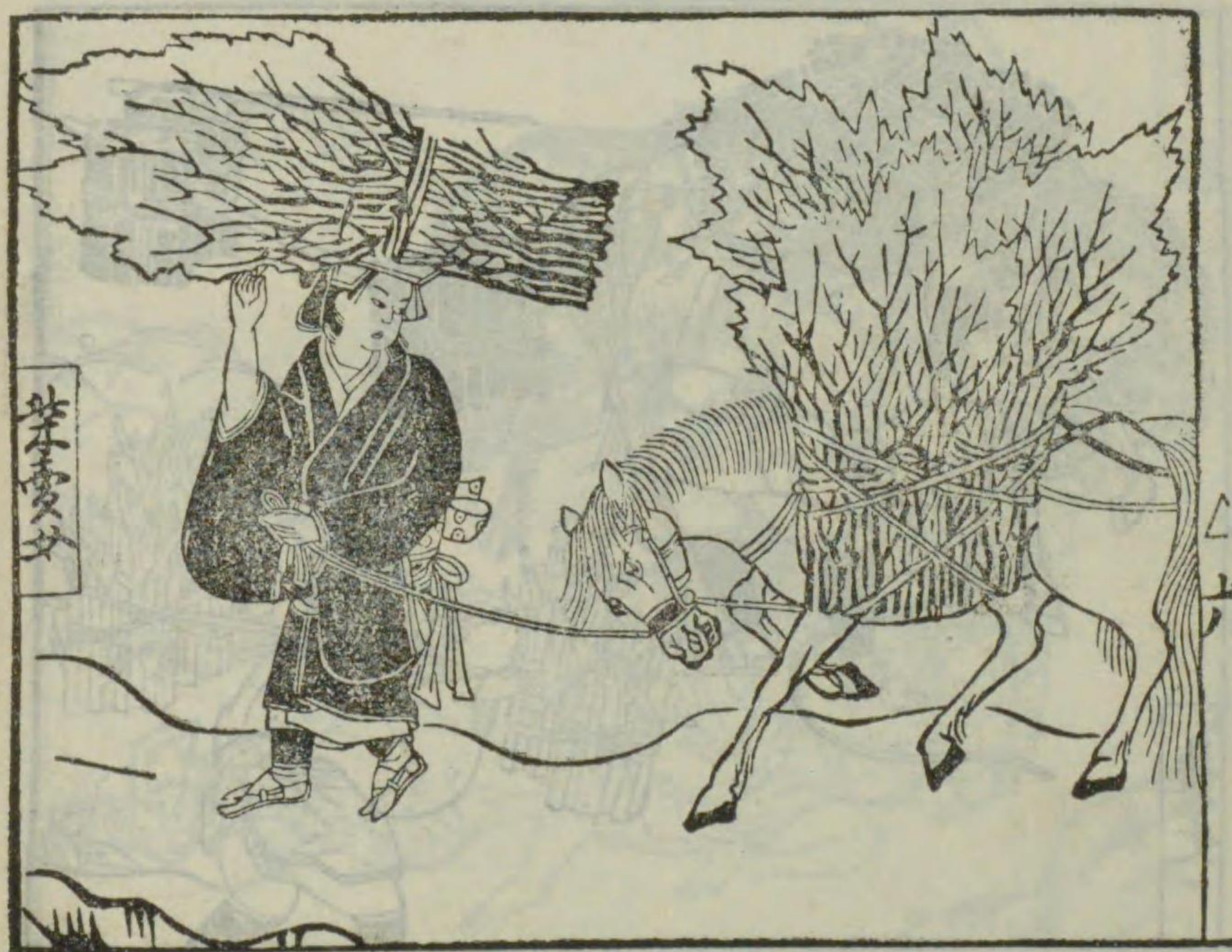
九四  
△五

【伏見下り船】伏見より大坂にくたる道、行程十三里を只一夜に寝て行は最やすきなり。上り船は時により風によりて遅速の事あり。此船は京角藏是を領するなり。船頭はいづく



九五

も同じけれど、風俗かさ高にして我まゝなり。三十石のほり一人貳匁、馬一駄四匁なり。今いせといふ船、一番は伏見を五ツニ出す、船ちん一匁又は百文、時により高下あり。三十石の下り船は淀よりくだす。是は四ツより九ツまであり、船ちん五分、時により高下あり。



柴賣女

【蟹人】海人の業、夫船をさせば女は水底に入る。魚をとり、貝をとり、其外海藻をもとるなり。海人のいさり火といふは、船にともすかゞり、たぐ繩といふはこしにつけて海に入事あり。其繩をうごかせば引あぐる事あり、これをいへり。皆和哥にも是を詠す。まこと



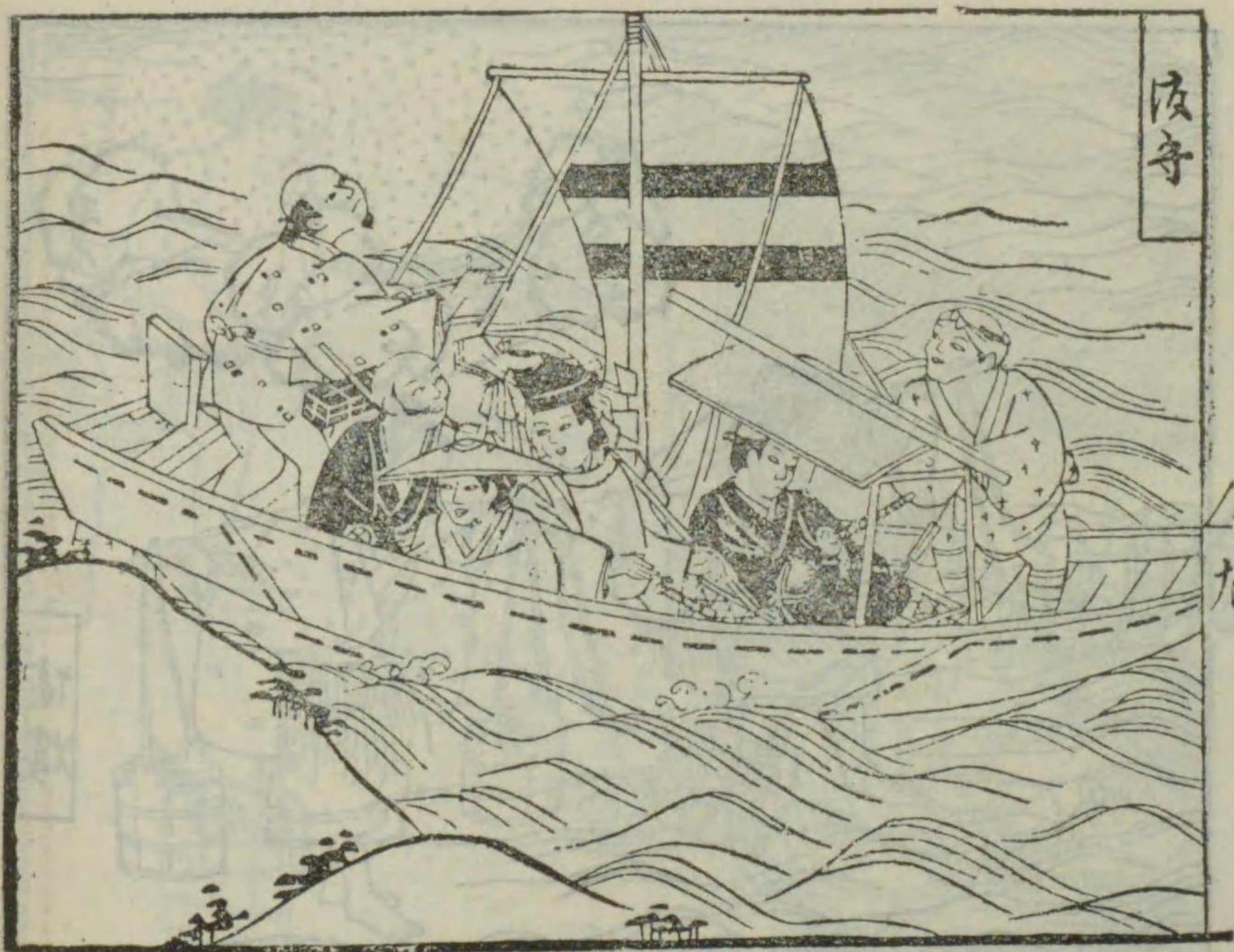
石賣女





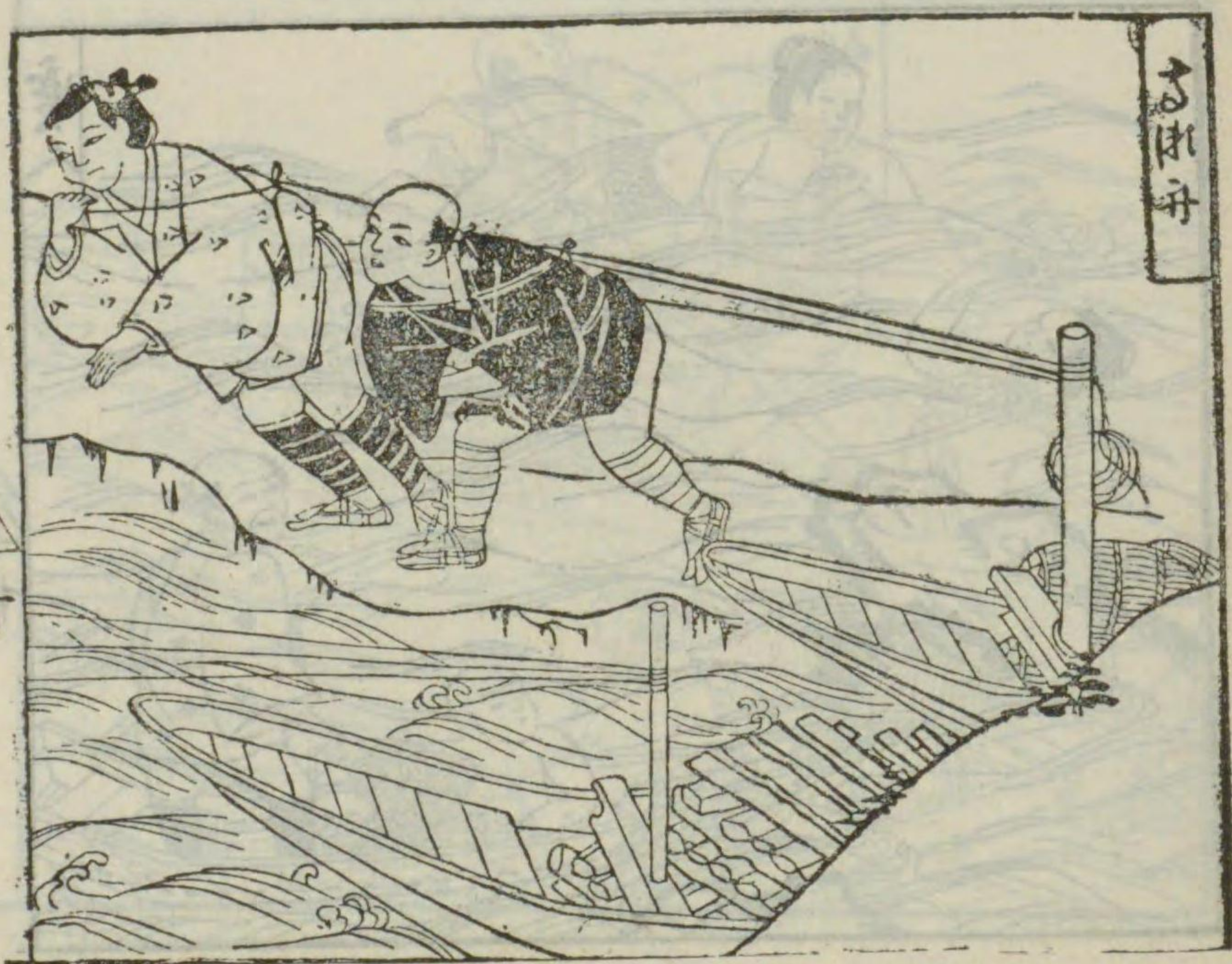
かみしとなり。

【鯨船】船のありさま、箆をたて船をかざり、漁人さまざま出立して四人乗の船十二艘を一組と云、其中一人くじらつきあり、これを管指といふ。突を守といふ。或は一番につくを一のもり、二を二の守といふなり。互に手がらをあらそひ、勝負をなすなり。



くじら舟

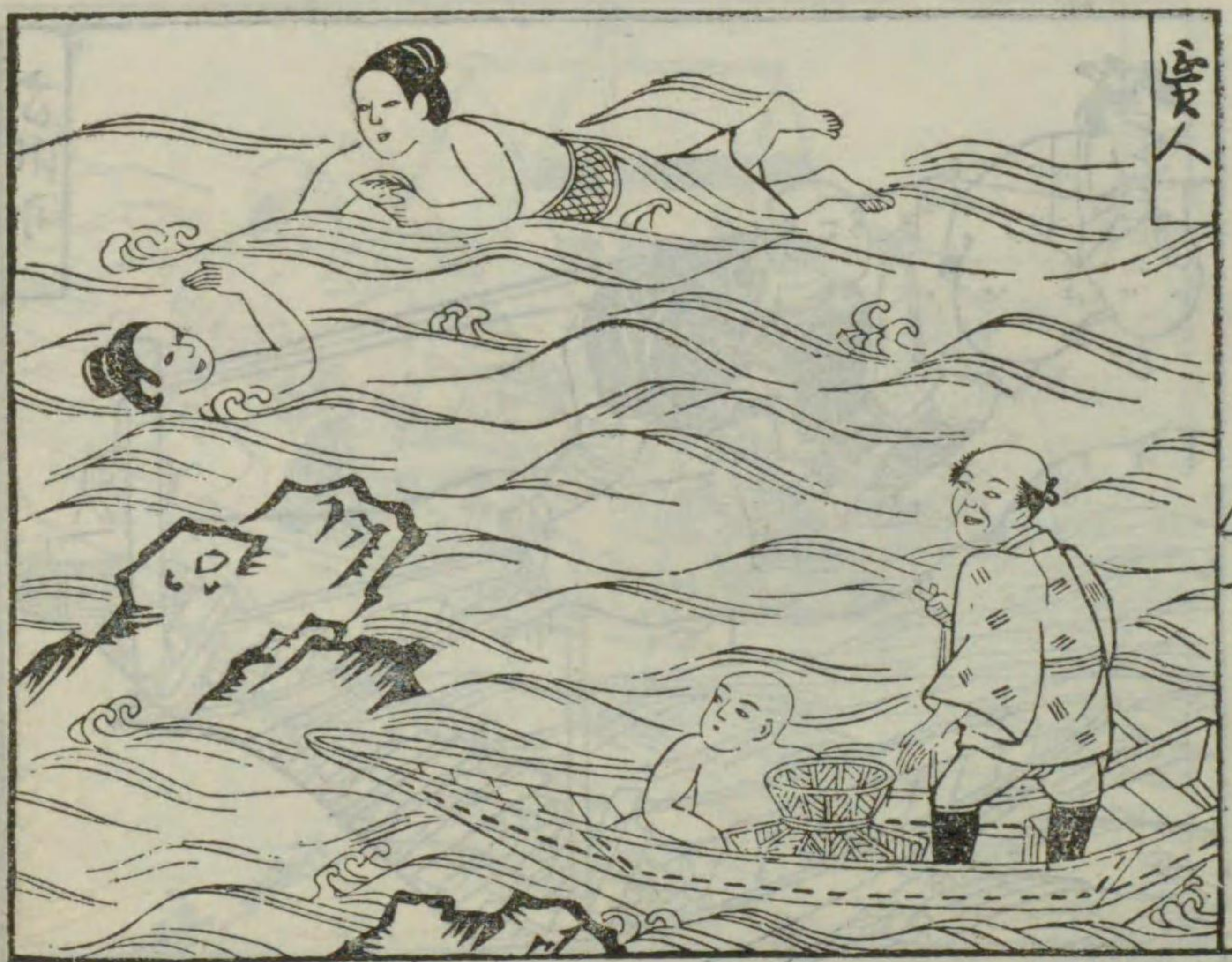
【獵師】狩人もいへり。鹿を追獵師山をみずといへり。まことに身をたつるわざとて、若干の罪をなすは人界のならひぞかし。ある



鹿舟

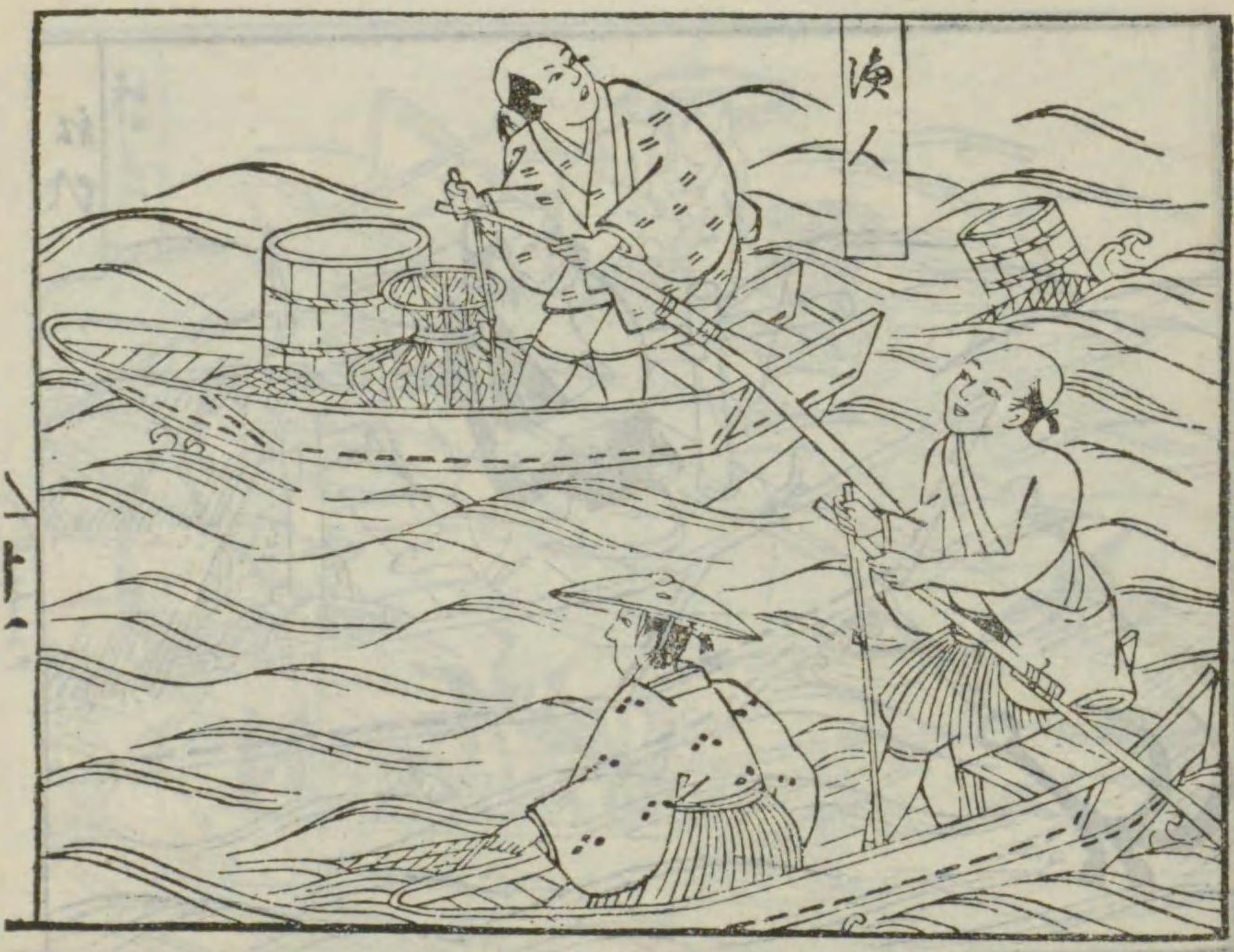


が中に狩人のわざは殺生をことゝすれば、そのむくひ何とてのがれんや。一切の有生はみなこれ世々の親類なれども、惠眼くらければ見しる事なし。晝夜に業をつくり、野にふし山を家とす。まことになげくべし。かなしむべし。



105

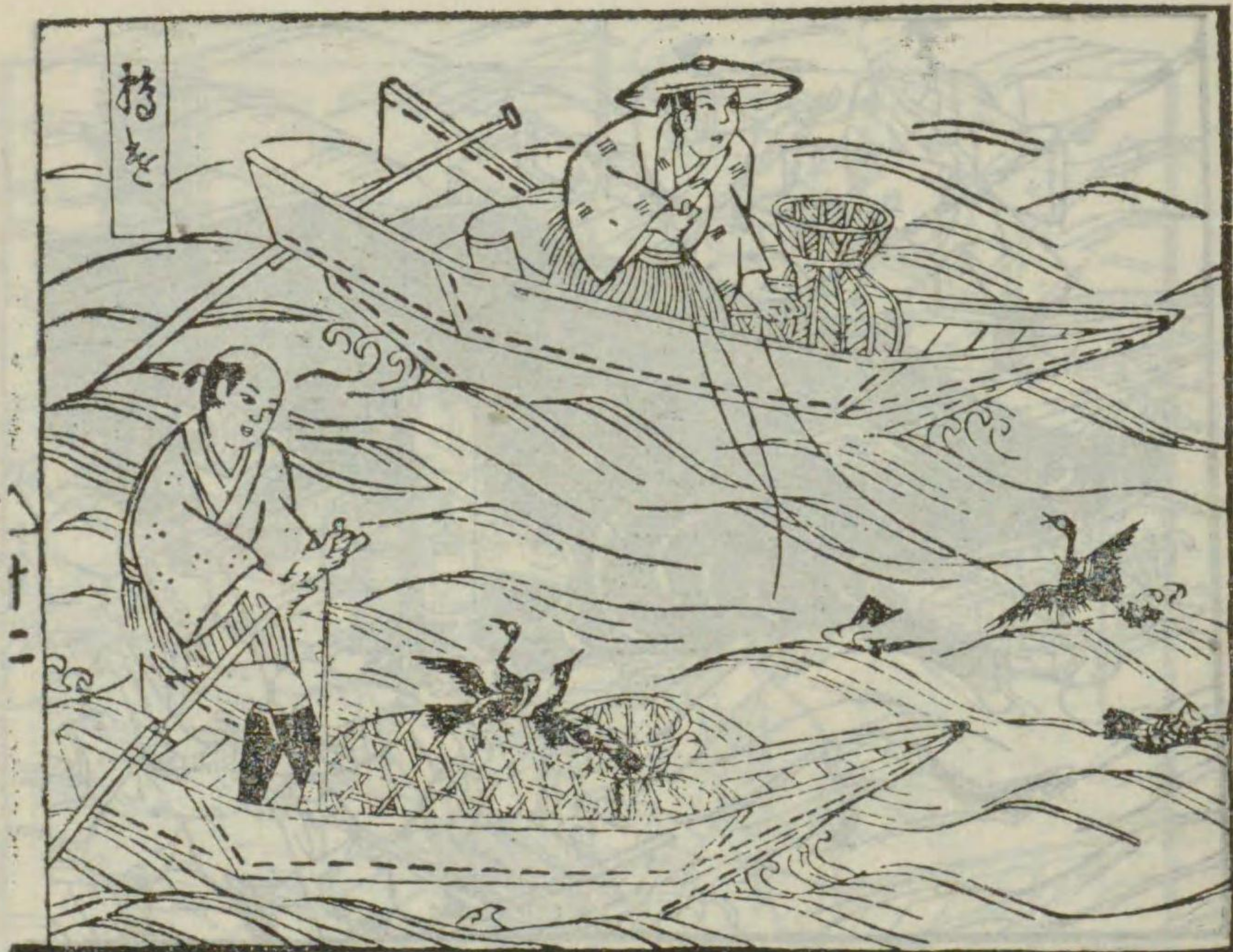
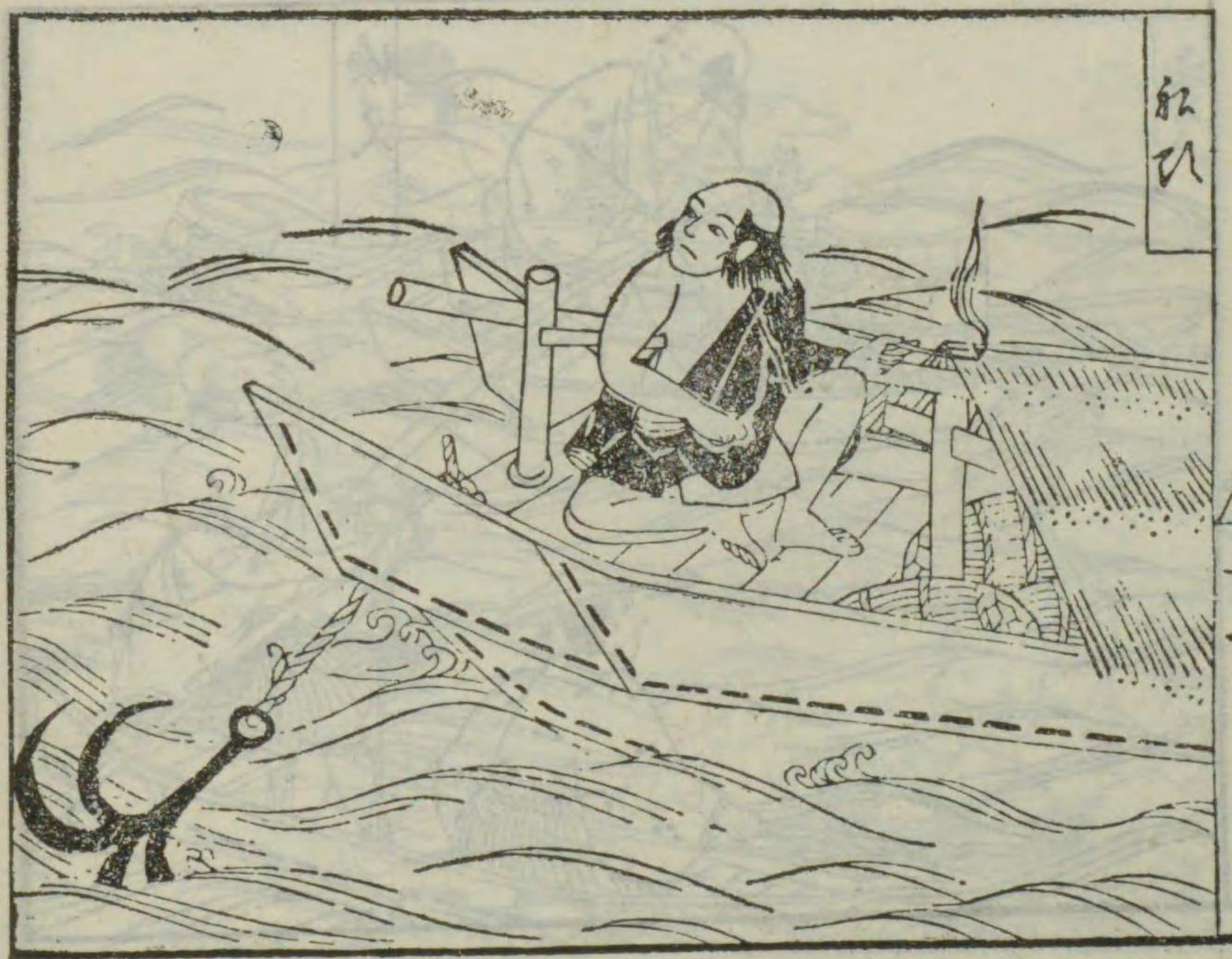
【田舎】 田舎にまはり、足踏火油燭の  
【綿師】 農夫の業としてこれをなす、桑を植  
て蠶をやしなひ、つるにそれを煮ころしてわ  
たをなすなり。此作業おほく殺生なるゆへに、  
戒律の僧は綿類を身にまとはれず、是佛のい  
ましめ也。

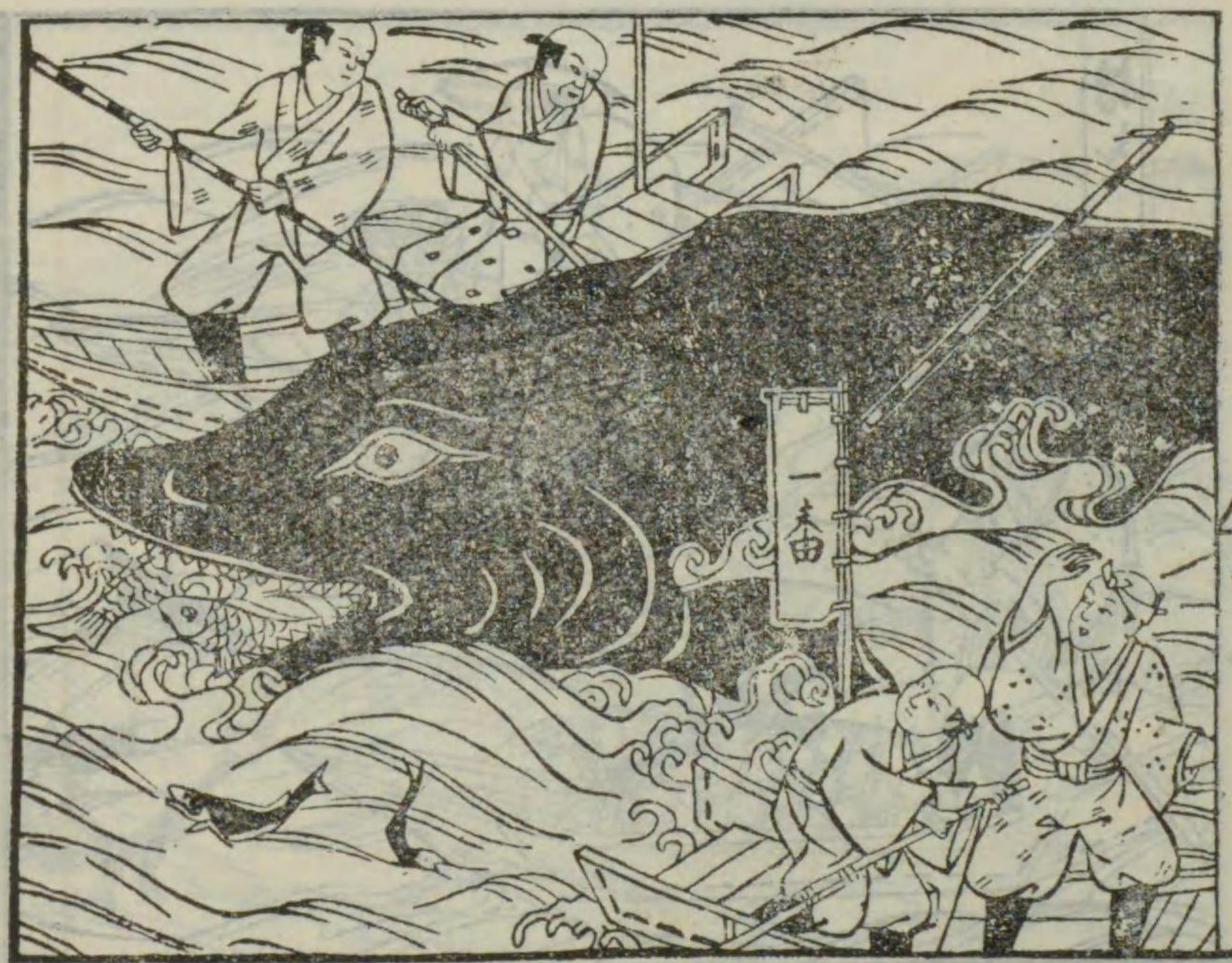


104

【炭焼】あやしの山賤の業をも、こゝろをつ  
けて觀ずれば、心を延るたよりなり。槇立山  
のおく、檜原のかけ、岩のかけ道たとくし  
く、谷ふかき木の間より立のぼりたるけふり  
のありさま、世にたくひなきは炭がまの風情  
なり。かさねの衣はうすけれども、冬の寒さ  
をよろこぶは炭やく翁の心、世わたるたづき  
程かなしきはなかるべし。

【円座】唐土にはじまれり。弘法大師歸朝の  
のち、讃州にてこれををしへつくらせ給ひし  
かば、彼國の名物となりて、さぬきゑんざを  
といふ。





【蕙打】釋尊鹿野園にして御法を説せ給ふとき、草葉を座とし給ふ。これ草蕙のはじめとかや。山陵のわざとしてこれをつくる。都へもち出てこれを賣、つねに商所は堀川通の上高倉通三條上ル丁其外はしづくにあり。

【土器師】むかし賀陽親王作はじめ給ふとかや。此御子細工に妙なるよし古物語にしるせり。都は嵯峨、簀枝、深草里につくる。大内にさぐる時は烏帽子装束してまいるなり。

江戸浅草竹町作手彌左衛門誠に上古よりの器物なり。

【瓦師】唐土の堯帝の御代にはじまれり。京



は三十三間の南門の前、深草の瓦町、江戸淺草、大坂は天神橋筋にこれを作るなり。

【焼物師】土器の焼物、茶碗、茶入、花入、壺、皿等其品おほし。肥前の唐津はじめとして、都におりても所々にあり。御室、晋羽、御井池、粟田口等にあり、是を陶人と號す。陶とよませたり。

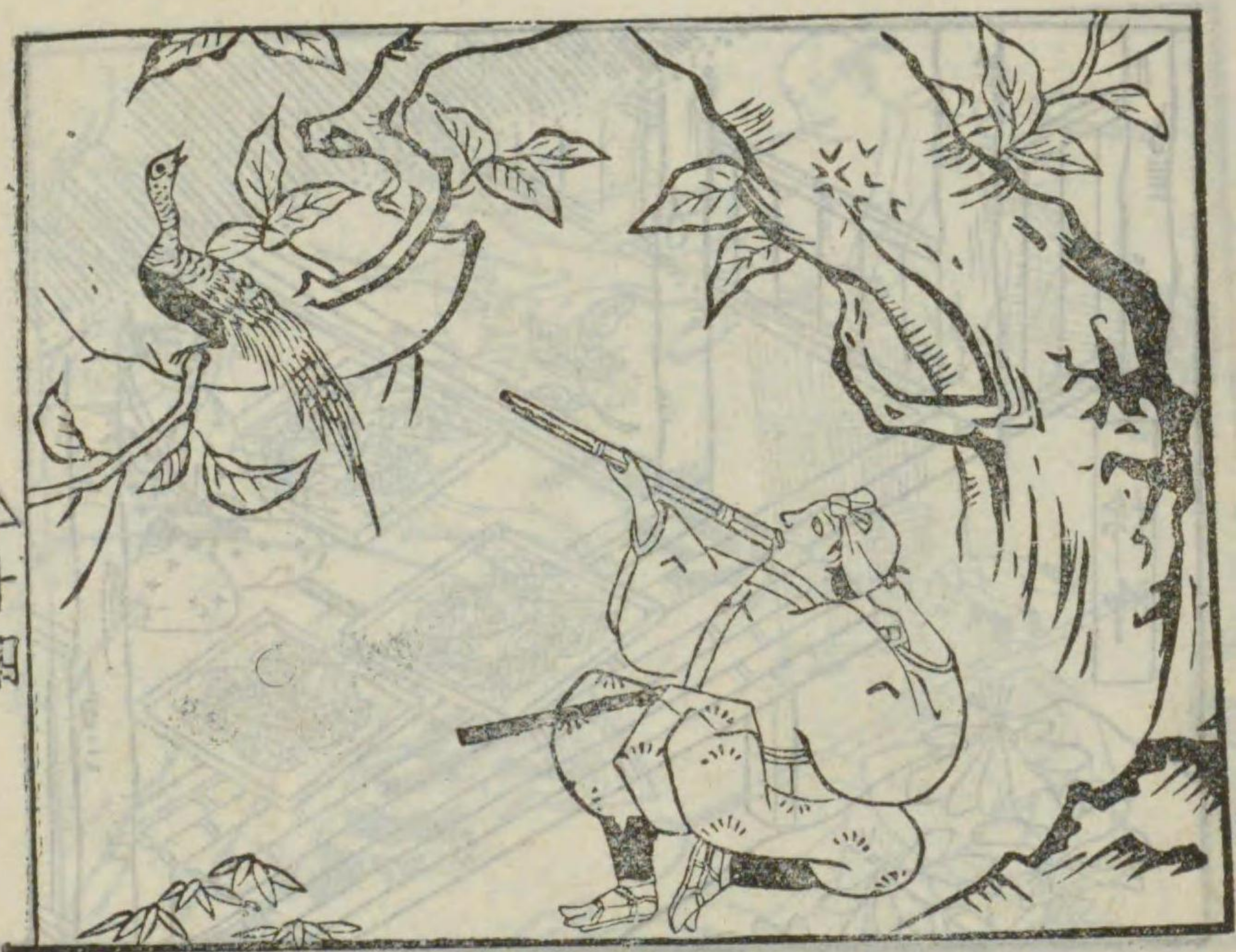
【火桶作】火鉢、火桶は奈良御門の御時にはじまれるとかや。栴火桶といふは俊成卿の作なり。大佛の邊、深草のさとに作る。老人の抱て寝ものなり。俳諧發句「だいてねてもはだはゆるさぬ火桶かな」哥書に桐火おけとい



ふものあり、定家作といふ。

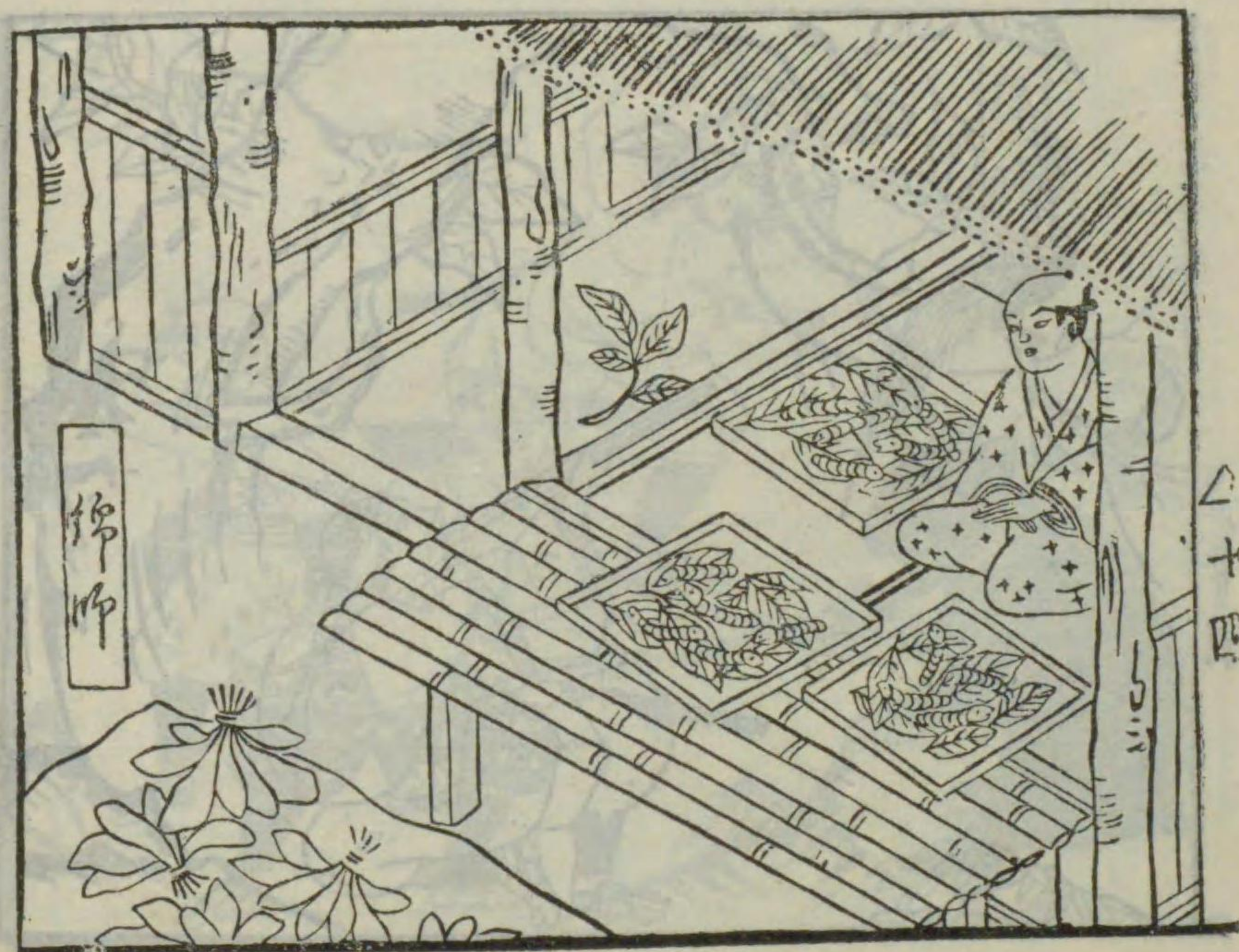
【臥座打】上敷、疊表などこれも民家の業として都にいだす。丹波近江にこれを造る。備後につくるは分て名物なり。繪延は都におりてこれを造る也。其外夷中よりもいだすなり。

【占師】筭置とも、傳聞周易は伏羲にはじまり、これよりおこつて斷易三世相の法なり、日本にしては賀茂の保憲天文道に達せし其流なりとも、又は伯道上人より安陪晴明相傳すともいへり。都には所々に名人あり。俗語に手占見通しなどよて信仰する也。伊勢近江讚岐などに此なかれあつて諸國に出る也。中に



もかるゆき成は、道のかたはら門のすみになら  
づくまりあて、下輩の男女を相する也。判の  
占五音調子の占品々あるとかや。

（以下は非常に小さい文字で書かれた説明文）



二二二  
二二四

綿巾

炭燈



二二三

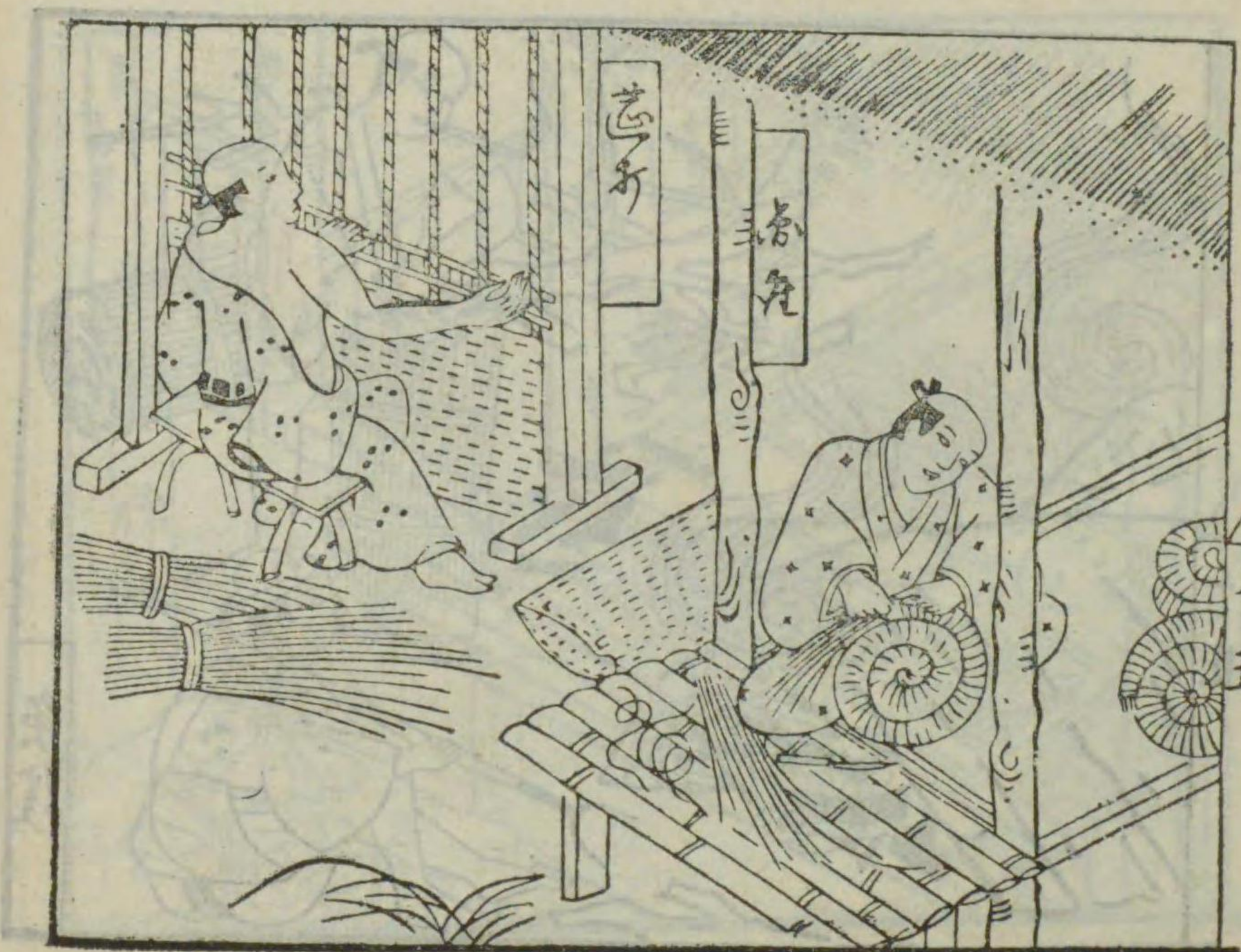
【石伐】道具に矢土龍、玄能などいふものあり、  
鐵にて是をつくる。むかし下野國那須野原の殺生石を玄能禪師一句をしめし持念あれ  
ば、悪靈石を分て出しより、石割を玄能と號す。  
都の北白川の里は石を伐いたして業とす。溝石、柱の束石などは、女のわざとして馬につけて京に出るなり。町にて石伐住所は寺町通上るあり。大坂は横堀にあり。大坂石は御

影山の名石なり。

【漆掻】漆はよしのを名物とす。其外諸國にあり。是も山賤の業として木を植てこれをとるなり。

【葛根堀】葛は吉野、葛名物なり。

【蕨根堀】わらびの粉にこれをもちゆる。いづれも賤がわざなり。



二四

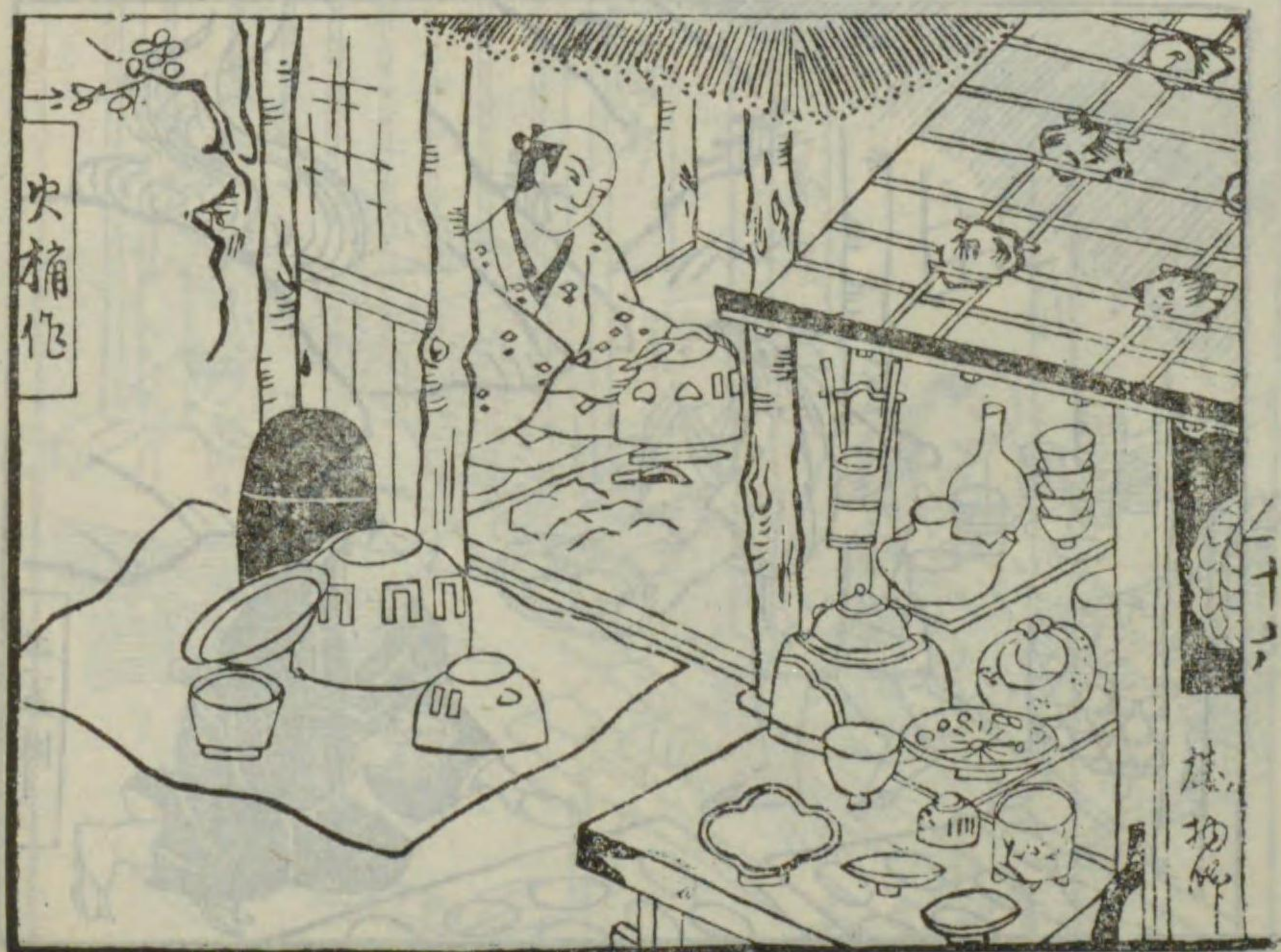
【車遣】鳥羽白川の車借と古語にあり。大津、伏見、京川原町の北、同三條の下にあり。江戸芝ニあり。するが三ヶ所ならでは外にはな



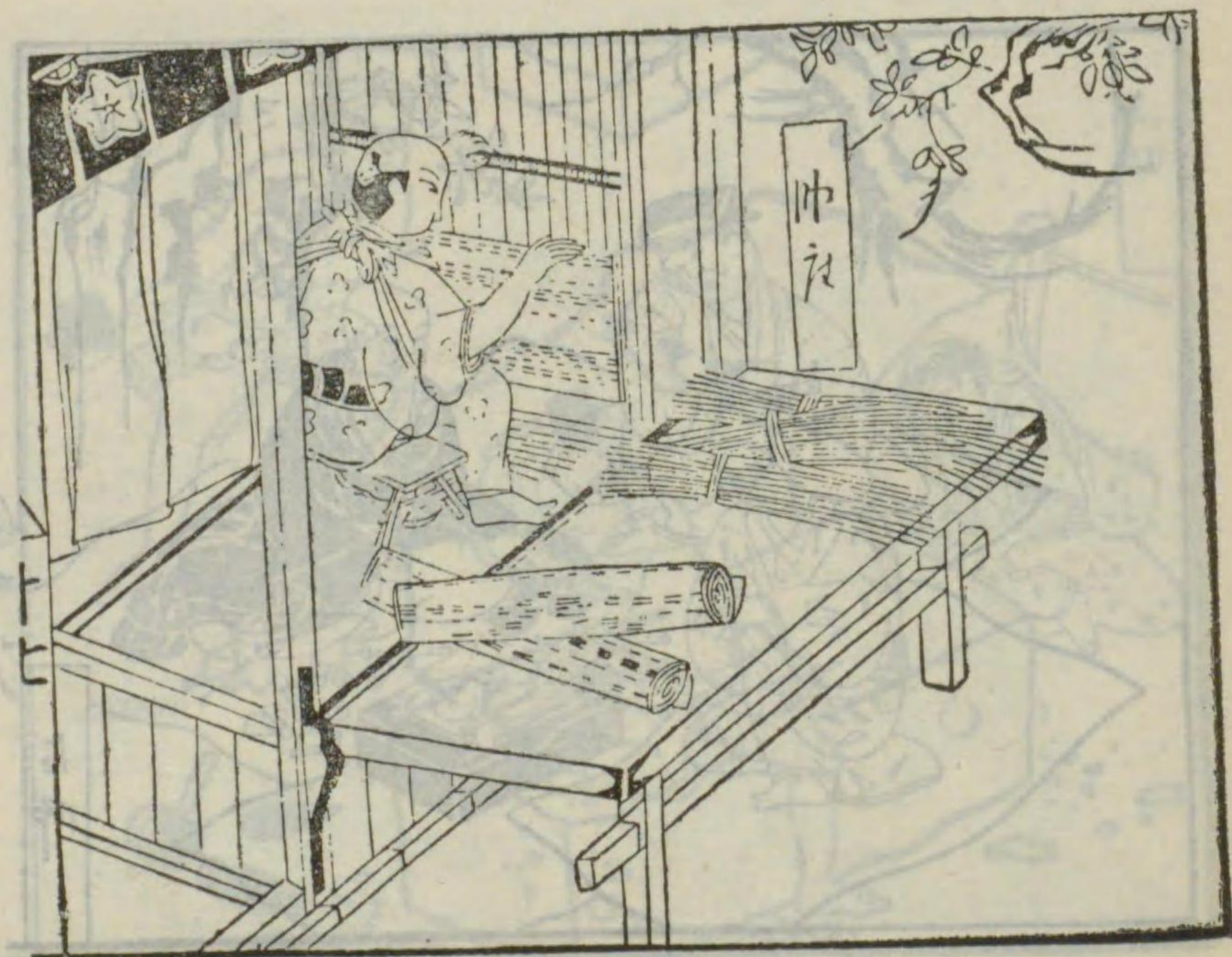
二五

し。土石万物にいたりて載すといふ事なし。天帝は飛車に乗じて世界を飛行し給ふともあり。唐土には三皇の御車よりあるとかや。日本にしては仁徳天皇大原野、行幸にめされしとかや。是は止事なき御車、其かたちをうつして今は物を運の器とす。

【挺者】普請の場又は大石大木を引動す役人也。鴟口をもつて打立て引事もあり。是によつて鴟者といふは鴟口者といふ事ならし。



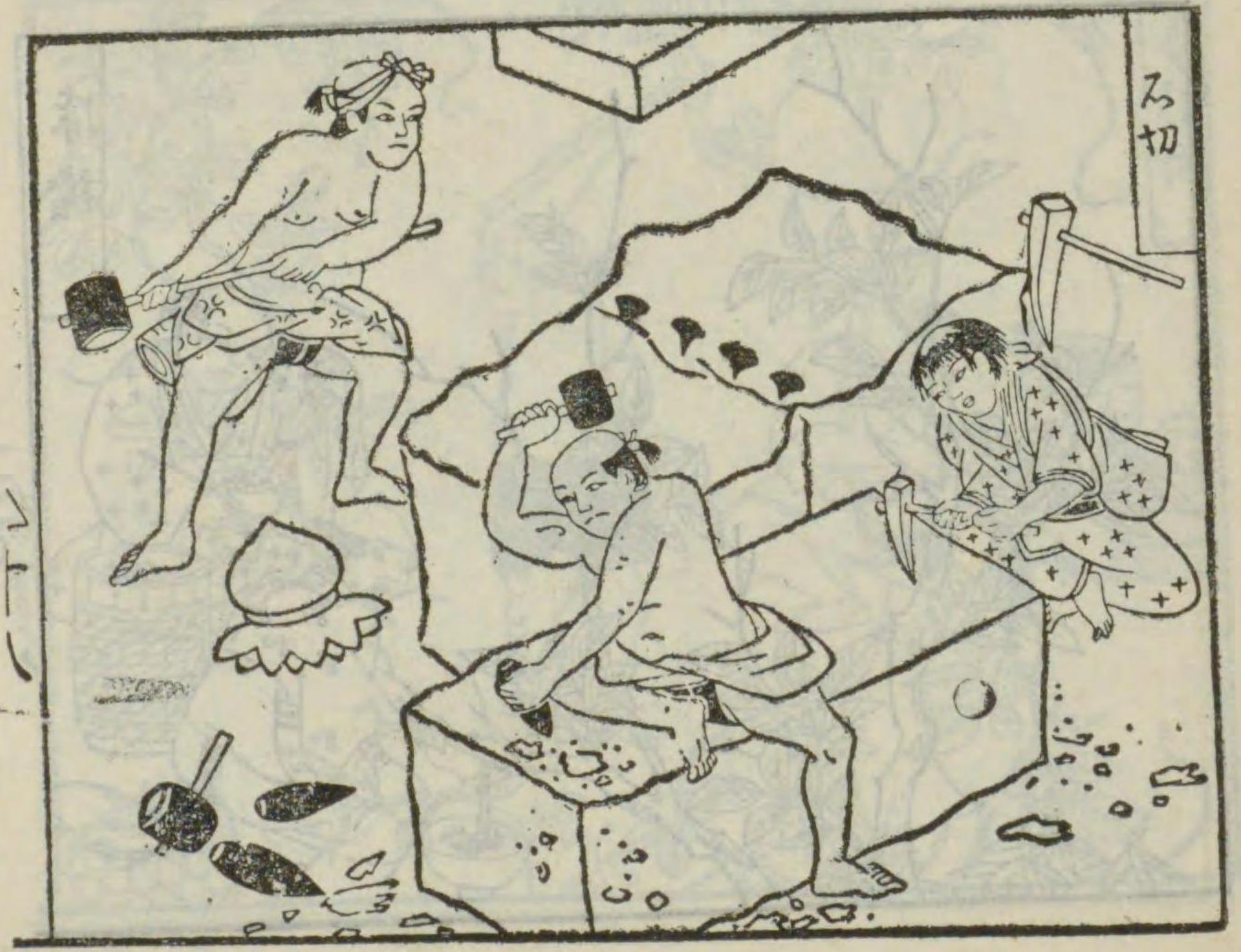
【木遣】大木大石を引に力をつけ、勢をかけていさむるの役人なり。今は石筑もこれをなす



なり。あいなこのなかのつなはやさぬかと。あふ  
 ぎをあげてまねきしはめさむる心ちぞする。  
 【乳子買】子を生じて思案有をば里につかは  
 すはむかしよりのならひ成べし。然ともいづ  
 くに里子をあづかるとさためがたきは此事  
 也。然るを乳を持たる女、里子とりたいのそ  
 みなれば、其者の肝煎にたのむ。其肝煎を乳  
 子買といふ也。折節入口の當なければ、則彼乳  
 有女を引つれて、何所をさすともなく町々  
 にて「ちごかをう」とわめきめぐる也。かや  
 うの女幾人もありく事なれども、それくの  
 機縁ありて子をやしなふ、誠に廣きは都のう

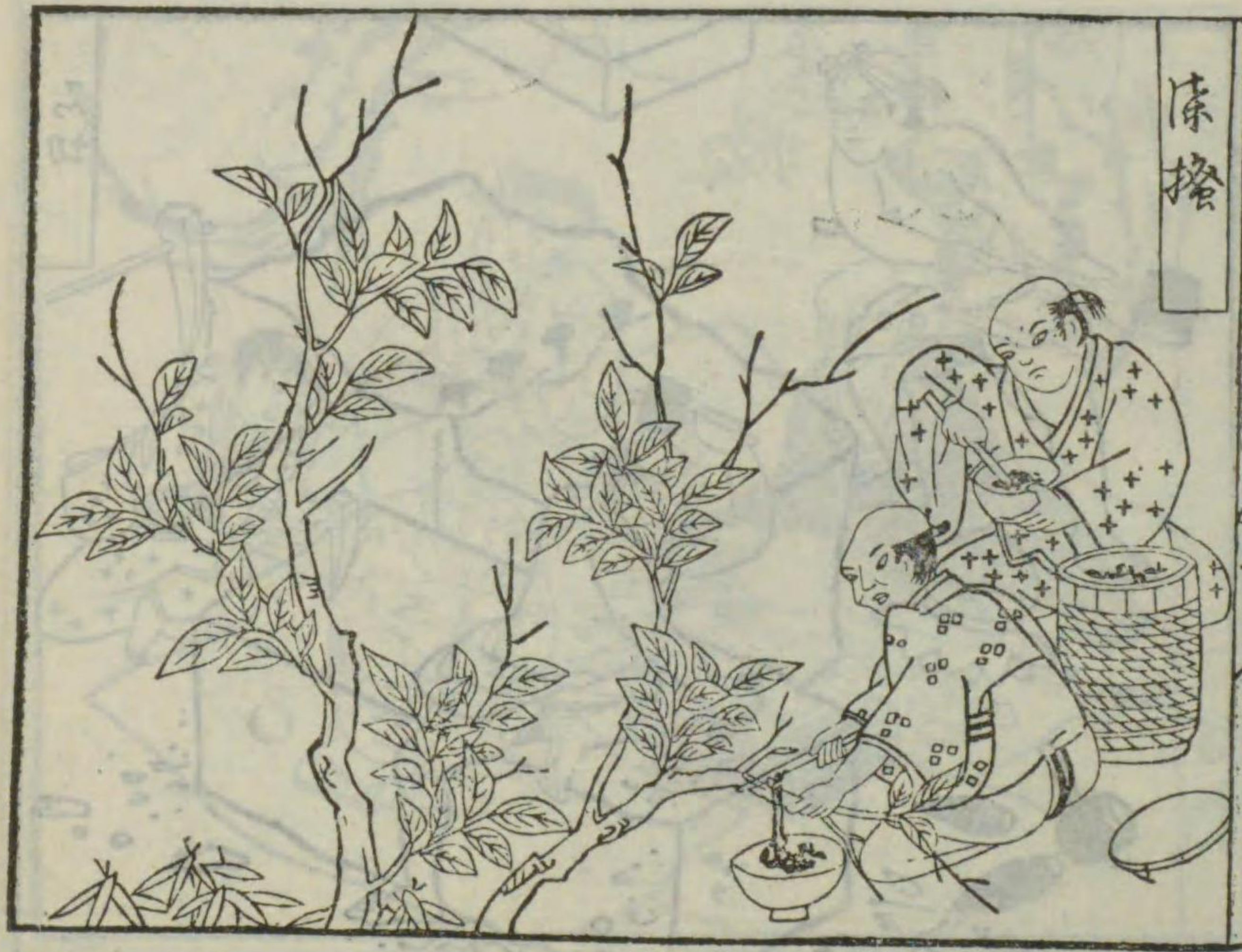


ちぞかし。





【紙屑買】女の作業として、ふくろをかたにかけて、洛中洛外をめぐり、諸の紙ぎれ、反古のやぶれ、かみとさへ名のつくものなれば、浄不浄をえらはず買ありきて直し屋へうる也。



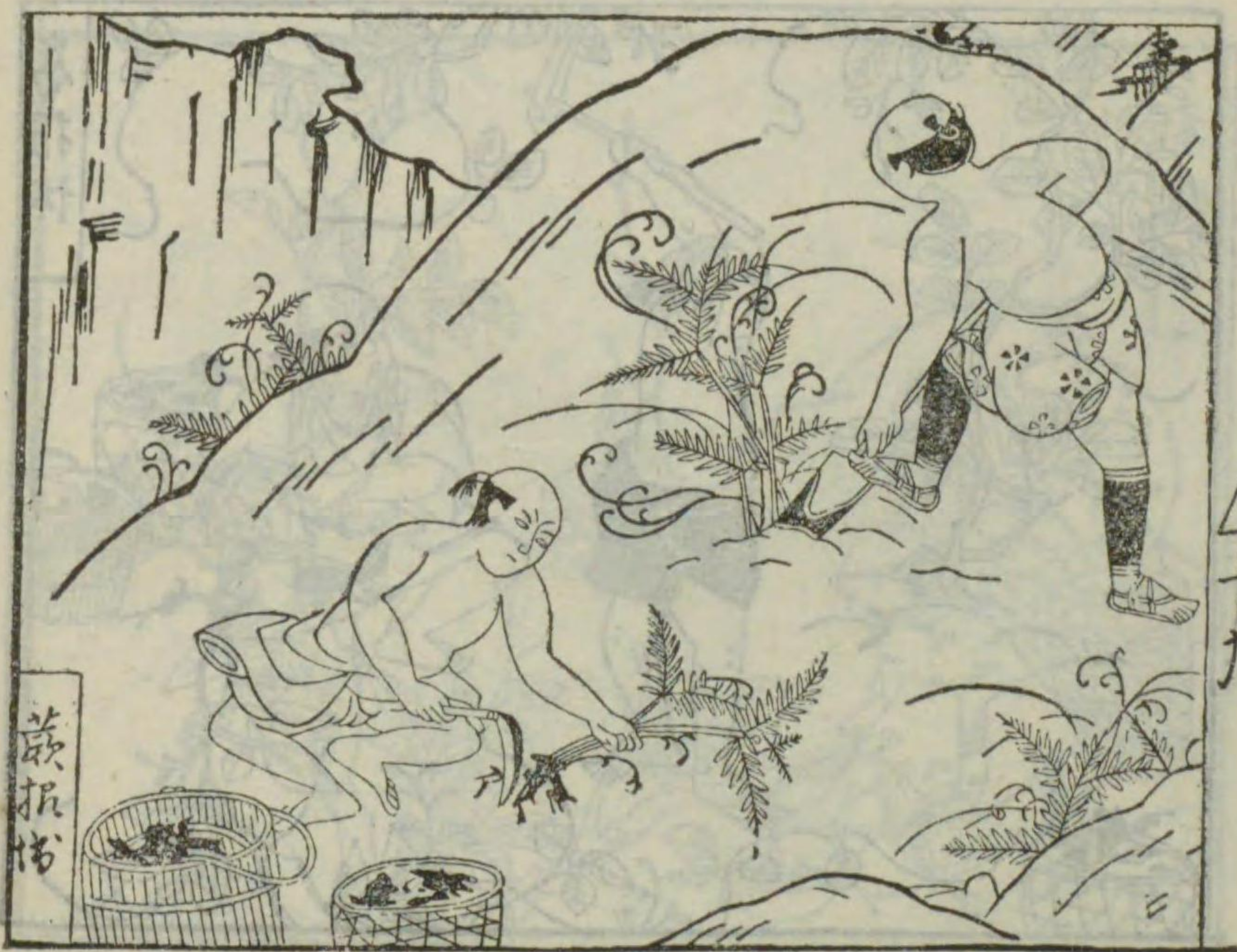
床捨

【砂土賣】瘦牛に繩袋をかけて土をもち、砂をもちて賣に出る。一人して何疋もひくゆへに往還の人に障をなし、人に瞋意をもやさし、聊遠慮なくしてうき世をわたるは此牛牽ぞか



高担持

し。六尺五寸の升にはかりて、砂十三匁、砂利三十匁、土二十五匁、大やう是也、然ども道の遠近によりて高下有とかや。



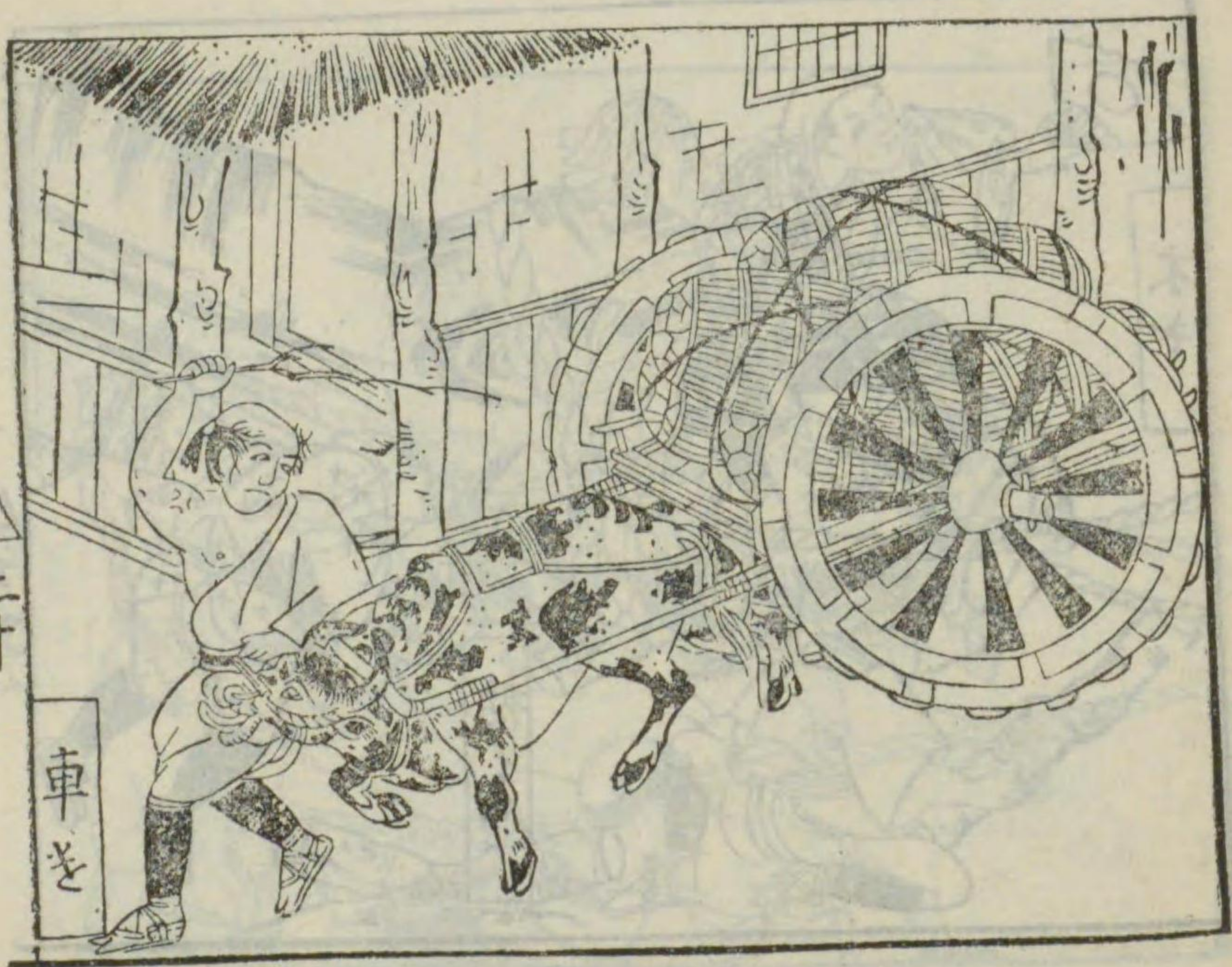
一三三

蕨掘り

【魚荷持】丹後若狭より京に上るは負て來る。

大坂より西南の魚を、大坂につきしを京に上すは、籠に入れて夜通に走來る、澆山切なる事なり。籠壹つ四分にて幾籠も荷なり。

【飛脚】江戸大坂をはじめ所々への飛脚有て、所をさだめて通ふもあり、又何所成ともやとひ次第に行もあり。江戸六日切荷物壹貫目ニ付六匁、二駄負壹貫目ニ付三匁五分、伊勢へ



一三三

車ぎ



